
『真 公開処刑』

強者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『真 公開処刑』

【Nコード】

N1394X

【作者名】

強者

【あらすじ】

傀儡師 哀川 京介の過去の物語

ジャニスとの出会いまでを再現

始まり

『真 公開処刑』

傀儡師「哀川 京介」の過去の物語

原作、「公開処刑」をリメイク版

「傀儡」「監禁」の物語の主人公の過去物語

「楽園」を更に遡る話である・・・

人間に興味を持ち人間に失望する男「哀川 京介」の人間性と謎が見えてくる・・・

全ての初まりはここにあった・・・

尚、この作品は「傀儡」「監禁」「楽園」の関連作品となります。お時間のある方、興味のある方はそちらの作品をお読みになっていたけると幸いです

この作品は作者の体験談を含め、主人公を「哀川 京介」として書いております

真 公開処刑 第一章 「裏切り」

「このままではつまらない人生を歩んで終わりや・・・

まともに生きていた所で稼げる金なんて決まっている・・・

飛びぬける為には普通の事をやっていたのではあかん・・・」

京介が人生の岐路にぶち当たった時に浮かんだ言葉はこの言葉だった・・・

小さな会社を一人でまわし、どうにもならない葛藤の中毎日を送っていた・・・

そんな中、得意先のところである男に出会った

その男の名は「中川 栄太」この男のとの出会いによって京介の人生は大きく変わったのだった・・・

得意先の社長が親密に話をしている・・・

アイツはワシよりも客の懐に入っている・・・

必ず理由があるはずや・・

京介は中川を食事に誘った

『どづも・・哀川います・・何さんとお呼びしたらいいですかね
？』

中川は憂さ臭そうな京介に警戒の眼差しを向けた

『中川ですが・・・』

『中川さんですね、私はじつじつものです』

名刺を差し出した・・・

『社長さんなんですね?』

『社長言つてもあだ名みたいなもんですわ、ワシと事務員しかおりませんでね』

『いやいや、このご時世で会社を経営してる言つのは立派ですわ』

そういい、中川は名刺を差し出した

「取締役 常務 中川 栄太」

「常務ね・・・」

二人は食事に向かった

そこで交わされたか会話は、京介の予測の通りの会話であった

オーナーの心臓をがっしりと掴んでいる・・・

様は弱みと切実な儲けの部分に付随した話だった

『哀川さんの顧客言いつのはどのくらいありますっ？』

『うちは・・・まだ小さいもんで・・・20軒くらいの客しかしてませ
ん』

『20・・・ええ金になりますやん』

『そうですか？で・・・どないな方法で？』

『それは言われへんですわ』

『……でしようね……で……どうしたら教えて貰えますか?』

『うちから商品を取ってもらえますか?』

『まあ……それはええですけど……』

『数字を見せてくれたら……教えますわ……』

「なるほど・・・銭を突っ込めちゆうことか・・・」

『分かりました、ほんだら、三か月以内に納得出来るように』

個人事業を始めて2年が過ぎた時の事だった

その後、がむしゃらに働き寝る間も惜しんだ

その努力の成果もあり、中川に認められ、いつの日か従業員を雇うようになっていた・・・

京介は一人のある従業員を可愛がっていた

そいつの名は「鈴木 守」と言った

鈴木は生真面目ではあるが、要領が悪く言われたことしか出来ないようなゴミ社員だった

だが鈴木は人柄が大変良く忠誠心がとても強い人材だった

そこが唯一のいい所と京介は感じていた

京介はを営業や接待に鈴木を連れまわし営業の基本を教えた

京介の会社の景気は鰻上りで日に何百万もの現金が入ってきていた

京介は、危ない橋を渡って手に入れた金の有り難味など感じることも無く

ただのあぶく銭、いつ無くなってもおかしくない……

ならば、金の力に物を言わせやりたい放題やり傲慢な男になり、人間の心理を追及しようと思ひ始めていた

鈴木には金を力を教え、金で人は簡単に動くと言う事実を教え込んだ

鈴木的身なりも時計やら財布やら高価なものを大量に与え、人は見た目でも判断すると言う事を教えた

だが、今考えるとそれは、全て無駄になると当時は気が付いてなかった

ただ偉そうにし、全てを理解し、そこに満足していた自分がいた

そんなある時　鈴木と畑山と言う従業員も悪知恵を付け始めてきた

業務以外にもアルバイトまがいの仕事をやり私腹を肥やし始めたのだった

京介としては分かっていたが、自分でお金を生み出す面白さを体感させる必要があると判断し目を伏せた

鈴木にも、行く末は独立してもらい、そして金を稼がせて吸い上げる……

そう考えていた

だが、その甘さが仇となった……

それから1年間後、事件が起きた……

京介自宅……

「7:30」

早朝に何度もなる携帯電話……

3台持つてる携帯が一気に鳴った・

「なんや・・・こんな時間に・・・妙やな・・・」

電話を出てみると・・・最悪の事態だった

警察がらみの事件・・・

とっさに押収されたらヤバイ物の移動の手段を考た

使いえる女を利用し、京介以外の名で部屋を直ぐに借り見つかって不味いものは全てそこに隠した

だが、事は簡単に収まらず、誰かが責任を取らないと事は收拾付かない状況になってしまった

その時の京介のはその業界では全国的にも有名だった・・・

関連のある組の総長から通達が来た・・・

「哀川・・・止めて来いや・・・お前が入っている間に全て綺麗にしといたるわ・・・」

「なんで・・・ワシがいかなあきませんか？」

「お前・・・誰に向かって言うтонねん？」

京介は考えた・・・

不本意ではあったが・・・

このままでは中川を始め、総長にまで被害が及ぶ・・・今回の現場はワシの現場・・・

ワシが責任を取るのが一番ベストかもしれない

この事件の発端は、京介の会社の従業員が小銭を稼ぐために犯した罪でもあった・・・

従業員の「畑中」が逮捕され、これ以上被害を広げる訳にはいけない・・・

「しゃーないのお……」

哀川 京介は今回の一連の事件を納める為に、警察に一度身を委ねる事にした……

o

「裏切り」 2

警察に身を委ねてから京介は恩師と総本部を守るために口を閉ざした・・

義理はないが・・出てから面倒なのはごめんだ・・

そう感じていた

留置される間、私選弁護士を呼び、留置所内から外の世界へ色々と指示を出し、世の中におきる筈だった大きな事件を全て沈ませるよ
うに努めた

弁護士

『哀川さん、他に何か伝える事は？』

『オヤジ（総長）に銭は渡したか？』

『はい』

『ほんだら、直ぐ出してくれと伝えてくれ』

『はい』

『全部、上手い事絵は書いたと伝えてくれ、それで分かるはずや』

『分かりました』

その5日後、京介は釈放となった

警察署を出る時、担当刑事が言った

『哀川、お前が黒幕なのは分かっている、だが今回はネタが上がらなかつただけだ』

『おやおや・・・予測で物事言つたら・・・あかんですわ・・・刑事さん』

『・・・どうせすぐ戻ってくるだろう、次はこんなもんじゃ済まな

いぞ』

『はいはい、ほな さいなら』

京介のまわした金は総本部に渡り、警察の意図まで変えた・

末端の刑事は思い通りの捜査が出来ずに終止符を打たれた事に苛立ちを感じているようだった

「1」苦勞さん・・・ニヤリ」

京介は地元へ戻った

予測より早い釈放に周囲の連中は驚きを隠せない様子だった

だが・・・全てが京介の思惑通りでは無かった・・・

総本部の連中は京介の事を信じている事はなかった・・・

その時はそんな事にも気付かずに京介は新しい会社を設立させた

鈴木を代表にし、会社を構成

元の会社はそのまま残り、京介は地下へ潜るようなスタイルを取った

鈴木を影武者とし、裏で全て絵を描く・・・

そうして会社の存続と金を生み出す手法を取ったのだ

最初は上手くいっていた

数ヶ月経つと総本部の連中が京介の動きを察し手を回し始めた

鈴木を代表としている為、100%京介の思惑通りには進むことなく

京介の知らぬところで、総本部の手は鈴木に回り始めたのである

鈴木は、日に日に直行直帰が増え会社に出勤してこなくなった

また業績も落ちる一方

違和感を感じた京介は知り合いの「栗田 真一」に調査を依頼した

飲み屋、交友関係を調査し、

地元のヤクザに気づかれないように調査した

地元のヤクザは総本部と繋がりがあある……

こちらの動きがバレると面倒な事になる

そう感じていた・

栗田の調査により、真相はそこまで大きなものではなく回りくどい手法を取っている事が分かった

「辻谷め・・・面倒なことしやがるやんけ・・・」

「辻谷」とは総本部の総長の名・・・

言わば世間では組長と呼ばれる存在だった

辻谷の指示で誰が動き誰が鈴木を取り込もうとしているかが分かった・・・

だが・・・現状は動く訳にはいかない・・・

鈴木の意思を確かめる事にした

数日後、営業で出ている鈴木を会社に戻るよう指示した

「プルルル」

『はい お疲れ様です』

『お、今どじやっ..』

『今、客先を出た所です』

『そうか、今から会社に戻れ話がある』

『今日は無理ですね お客さんとアポがこれからあります』

『ほんま べいせ (密の名)』

『えっと・・・？朝日産業です』

『ほんまに仕事なんか？大事な話やねん・・嘘やったら しばきや
』』

『本当です 信じて下さい』

『まあ、いい信じたる・・終わったら必ず連絡して来い分かったか
』？』

『はい 分かりました』

信じるわけは無かったが、ここは相手の優先順位を見極めよう・・

人は信用なら無いもの・・・鈴木動きを知るためにも必要不可欠と判断した

夜中 23:00過ぎに鈴木から連絡が入った

「天国にあなた」（京介着信音）

『はい、お疲れさん』

『社長、終わりましたので今から帰りますが・・・』

『明日の朝一で会社に出勤して来い分かったな？』

『はい』

鈴木からの電話はこの程度で終わらせた

恐らく、この会話も全て総本部に筒抜けである……そう感じていた

だが、それは京介の戦略でもあった

翌日

鈴木は早々に出社してきた

『おはようございます』

『おはよう』

『社長 早めに出たいんですが・・時間掛かりますか？』

『なんや 仕事か？ 昨日、話があるから時間空けると言ったよな？』

『そつなんですけど・・・』

鈴木が何を急いでるかは分かっているので行かせない事にした

『お前・・・何か隠してることあるんちゃうか？』

『えっ・・・何も無いですが・・・』

『己 自分で言った方が身のためだぞ・・・』

数分間 黙っていたあと・・・

『実は・・・会社を辞めたいんですけど・・・』

『お前、代表やねんで・・簡単に「はい、そうですね」「、と言っわけにはいかんやろ それにそんな大事な話を、言われてするもんかいな?』

『・・・』

『お前・・・辻谷の指示で動いてるらしいな・・・どっ言っつもらいちゃ
』?』

『・・・』

『辻谷からの指示を「青山」から受け取っている構図やろ?』

『・・・』

「青山」とは「辻谷一派」の北部担当の元締めであった・・・

「京介」と「青山」は対等な立場、違うのは年齢くらいなものであ
った

青山は辻谷とも年齢が近く、京介より信用されているようではあった

『おどれ・・・黙秘か?』

鈴木は完全黙秘・・・

自分の背後には「青山」「辻谷」が居る、京介など恐くない・・・

鈴木はそう思っていた

『お前、勘違いするなよ・・・あいつ等にとってお前はただの捨て駒や、ワシを落としたくても落ちひんから内部破壊をしようとして、お前を利用してるだけや・・・あいつ等信用したら、お前終わりやで・・・』

『そんなの社長に関係無いじゃないですか・・・』

鈴木は切れて反抗的な態度で出てきた

『はあ？なんて？』
『己、殺されたいみたいやな』

胸ぐらを掴み首を絞める京介……

『ほんまに抜けて後悔せんか？どうなってもしらんで！』

『辞めさせてください!!--』

『・・・分かった・・・給料は日割り計算してだす。歩合はカットや分かったか!!--』

鈴木は小便を漏らしながらガタガタ震えていた・・・

『はい・・・お願いします。辞めさせてください・・・もう社長には
ついていきません・・・』

「もう……ついていけない……だと……?」

鈴木だけでも、まともな道を歩かせ再起をはかり、デカイ男にしてやるうと思いやってきたのに……

弱い人間は、強きもの大きな物には巻かれやすく

そこにあるつもりの本人の意思などありはしない・・・

ただ操られるだけ・・・

「このアホも終わりやな・・・」

『分かった・・・ほな、行けや・・・後悔するぞ・・・お前』

『しません！お世話になりました！後日、会社の物は郵送します』

そう言い漏らした小便を必死に拭いとり鈴木は会社を去った・・・

「さて・・・どうするかな・・・」

京介は辻谷、青山、鈴木の連携を少し脅威に感じていた

「……俺が狙われる立場になるとはな……フフ……傑作やないか……一人で罪を被ってきたこの代償は高くつくで……一人……一人……地獄を見せたる……」

だが、早々動く訳にもいかない……

一人の方が身軽だが・・・誰か協力者が必要だ・・・

そう思い、暫くの間様子を見る事にした・・・

それから数日後・・・

鈴木は自分で名刺を作り、京介の客をいつきに周り始めた

京介の予測通りの展開であった

鈴木、程度の男が京介のテリトリーを歩いたところで売り上げなんて上がる訳が無い・・・

今までの歴史を舐めて貰っては困る・・・

すると一本の電話が入った

電話の相手は京介の顧客だった・

『今日、鈴木君、来たよ 何？クビにしたんだって？』

実際、解雇にした訳では無く、本人の意思で辞めたと言う事を客に伝えた、

だが、客の話によると、鈴木はこう言っていた

「給料を何ヶ月も貰えない上、暴力が酷かった、それに耐えられなかった」

『そつでつか・・・月に40万の給料では賅っているうちに入らんと言ふ事ぢやいますか?』

『じゃあ・・・嘘か?』

『好きなように思ったらええんぢやいますか(笑) うち払っておりますさかい(笑) でっ、取引したんですか?』

『まさか、哀川ちゃんを裏切るつもりないだろ（笑）』

『……おれ……』

実際の顧客は京介に心臓を掴まれているようなもの、鈴木がそれを
ひっくり返すのは困難な業・・・

それだけ、オーナーの命を抑えるのは困難タマだと言つ事に気付いてな
い・・・

「青いな・・・鈴木・・・」

更に数ヶ月・

突然、見た事のない電話番号からの電話・
・
・

『もしもし・・・』

『貴様、哀川だな』

『違う、哀川様だ、「様」を忘れとるぞ、クズ』

『何だどこの糞野郎！！今のうちだけだぞ！いい気になっているの
は』

『そーか、分かった分かった、用件はそれだけか？』

『糞野郎！ぶっ殺してやるからな！！』

『寝言は寝て語れアホ、そして「様」を付け忘れた事を死んで詫びるクズ』

そう言い電話を切った・・・

ただの脅迫電話だろうとそう考えていたのが誤算であった・・・

o

「裏切り」 3

その後、京介の周りでは妙な出来事が起こった

個人的な付き合いのある女性や知り合いに京介を愚弄するメールや電話が複数の人間に行われた

内容的には実に幼稚でくだらないものだったが、毎日のようにそれが行われると流石に受けると側としては黙ってはられない・・・

それ程、しつこいものであった・

直接、本人に言うのではなく、敢えて周りからデマを流し、評判を落とす・・・

それは個人的なものだけではなく、顧客まで行われた

「・・・幼稚な手を使ってくれな・・・だが、ここは辛抱や・・・
怒りのエネルギーを貯めるんや・・・人間良くも悪くも噂をされる
方がマシってな・・・ニヤリ・・・」

会社の内部破壊に始まり、セコイ手法でジワジワと首を絞める・・・

これは間違いなく「辻谷」の手法、今までにも何回も見してきた手法であった

「ワシに手の内を見せておいて、同じ手法を使った事を後悔するが
いい・・・」

京介はじつと耐える事にした

「犯人は分かっている・・・辻谷の指示で鈴木と畑山が起こした仕事だ・・・」

くだらない噂で離れていくような奴は最初から居ないのと同じ、様は自分に必要のない人間である

そう判断していた

数日後、県外の仕事に出掛け帰りが20時になった時だった

見慣れない番号からの着信が入った

「・・・また・・・連中か・・・しつじいのう・・・」

そう思い電話に出た

『誰？』

「ミレ」

『ワシ？そんな奴は知らん』

『ワシや』

電話を切った

すると直ぐに再び電話が鳴った

「シン。」

『なんぢなんぢ？』

『おどね・・・ふんけるなよ・・・言わすべー！リニア...！』

『喧しいのう・・・誰やねんっ』

『ワッちゃ・・・辻谷ちゃ』

総長からの直接の電話だった

『ご無沙汰してます・・・すみません、最近変な電話が多いもんで知らない番号何で用心したんですわ』

『・・・変な電話ってなんやねん？』

「己の指示やるがボケ！」

『頭の悪い連中が、なんやかんややってるんですわ』

『ほーう……そら……難儀やな』

『全くですわ』

『まあ、そんなのはどうでもええねん、お前今どこや?』

『高速ですわ』

『今、戻りやる?』

『ええ、そうです』

『お前の家は・・・マンションの9階ちゃん？』

『・・・よう知ってはりますね』

『お前の動きは丸見えやからのっ』

『ほー．．．恐いですな』

『一つ聞いておく、お前警察にどこまで唄った？』

『何も唄ってませんか』

『信用できんな．．．特にお前はな．．．』

『ホンマですって、何のためにワシは入ってきたんですか？』

『中に入ると気持ちも変わるもんや・・・』

『その辺のクズと一緒にしないでくれますか！ワシは何も唄ってません！』

『そうか・・・今のうちだけやで・・・そんなん言ってるんわ』

『いつまでも言い続けますわ、ワシは辻谷社長（皆、呼んでいる）を裏切つてません』

『まあええわ・・・道中・・・気を付けて帰りーや・・・人は何時、何処で死ぬかは分からんからな・・・』

『・・・分かりました・・・』

電話は切れた・・・

「気味の悪い電話やな・・・」

そう思い高速を降りた

自宅マンションへ向かう最中、何となく嫌な予感がした・・・

「もしや・・・」

車を停めた

車内にある雑誌を手に取った

「何も無いよりはマシやろ・・・」

京介はベルトを緩め雑誌を腹と背中に入れ込んだ

「武器は・・・」

トランクを開け、工具箱を漁った

「こんなんでええやろ」

モンキーSPAを鞆に放り込んだ

マンションに向かった

・ ・ ・ ・ ・

「ブオォーン・・・キキーツ」

マンションの駐車場に着いた時、時刻は22:30を過ぎていた

車を降り、辺りを見渡した

「ここで襲ってきてもおかしくない・・・マンションのはセキュリティロックが完備されている・・・この時間で居ないと言つ事は・・・考えすぎやったか・・・」

マンションの裏口に行きセキュリティを解除した

「ガー・・・」

自動ドアが開いた

エレベーターへ向かう薄暗い通路の先に見知らぬ男が二人・・・

「・・・中か・・・糞がつ！」

急いで出口へ向かうとその先には3人の男が立っていた・・・

『逃げてても無駄やで・・・哀川・・・』

『・・・』

「やるしかねえな・・・」

『オラー！』

振り向きざまに鞆を振り回した

二人組のうちの一人の頭部に当たった

すかさずもう一人の方に蹴りを喰らわせようとした瞬間

外の連中がマンション内に入ってきて、哀川を押さえつけた

『この野郎・調子に乗りなや!』

身動きが出来なくなるまで5人に殴られ続けた

その後、体を縛り付けられ車のトランクへ放り込まれた

「づづづづ」

それから車が何時間走ったかは分からない・・・

・
・
・

気が付いたときは、眩しいくらいのライトとニヤニヤしている辻谷の顔が見えた

「体が動かない・・・」

自分の体を見るとロープで椅子に固定されていた

「・・・監禁されたか・・・終いやな・・・」

『哀川・・・ようやく気が付いたか・・・』

『JJJは・・・』

『お前が知る必要はないな・・・』

『そう・・・でっか・・・』

『お前・・・何処まで唄ったんや?』

『何も唄ってませんがな・・・』

『ほう・・・』

「バキッ」

「ボコッ」

それから辻谷は永遠と京介を殴り続けた・・・

臉には血が入り視界も薄れ・・・

痛みを徐々に感じなくなっていた

「まさか・・・こんな形で終わるとはな・・・俺の人生は実に・・・傑作や・・・」

殴られている最中・・・

京介の携帯が数回鳴っていた

「天国にあなたさ」

『喧しい携帯やな!』

辻谷は京介の携帯を無理やり取り出した

『おい、田村、始末せえや・・・』

辻谷は田村という舎弟頭に拳銃を渡した

京介の携帯が再度鳴った

ディスプレイを見る辻谷・・・

徐に電話に出ていた・・・

田村はニヤニヤしながら銃口を京介の額に付けた

『悪く思つなよ・・・』

「
力子
」

「
・
・
・
」

『最後の言葉は・・・？』

「完全に終わりやな・・・悪いな・・・皆・・・」

『殺れや・・・』

『待てー！！！』

辻谷は大声で叫んでいた・・・

o

「裏切り」 4

辻谷は大声で叫んだ・・・

『おい・・・哀川・・・なんでお前に「有本」から電話が入るんや・・・』

『・・・』

辻谷は京介の元に来た

『コラッ！答えんかい！』

「バキッ！」

携帯を京介の頭部に叩きつけた

『このガキ・・・有本に話しとったわ・・・』

辻谷の怒りは京介ではなく舎弟たちへ向かった

「オラッ！」

舎弟数名に暴力を振るっていた・・・

数十分後・・・

有本は監禁されていた部屋に来た

「ガチャ・・・」

『大丈夫か！！哀川！』

『あり・・・もとさん・・・』

有本は急いでロープを外した

『大丈夫か？』

『ええ・・・何とか・・・』

『有本・・・コイツは中でチンコロしてんねんで・・・今ここでケジメ取らさんと・・・全員パクラれるで』

『辻谷・・・哀川はそんな男ちゃうわ』

『ほーう・・・何でそんな事が分かる？』

『ワシには分かんねん』

『そんなん理由にならんわ！』

辻谷は有本の胸ぐらを掴んだ

『放せや・・・辻谷・・・』

『オラッ！』

更に辻谷は首を締めあげた

『なんや・・・ワシに矛先向けるんか・・・やっ
たろうやうないか』

部屋の中は緊迫した空気が流れた

「スチャ・・・」

田中が有本に対し銃口を向けた

『・・・なんのつもりや・・・ワレエ・・・あのガキヤ・・・ワシのタマ取るつもりか？あん？辻谷・・・』

辻谷は真っ赤な顔をし胸ぐらを放した

『おのれ・・・糞ガキヤ！余計なことしなや！』

田村は辻谷に半殺しにされていた

「お・・・オヤジ・・・すみません・・・」

『ワシちゃう！有本に謝らんかい！』

『あ．．有本社長．．．すみません．．．でした．．．』

有本は田村の所に行きしやがみこんだ

『親．．守るうとしたんやろ？』

『す．．．すみません．．．』

『辻谷……もうええわ……哀川……連れて帰るで……ええな』

『……そいつにはまだ用があんねん……お前かて……ホンマは聞きたい事があるやろ！』

有本は哀川を見た

『まあな……』

『せやから・・ただ帰す訳にはいかん』

『哀川・・ワシが付いたるで、辻谷と話せえや』

『は・・はい・・』

・
・
・
「辻谷」、「有本」の関係は仲間でありながら、敵でもある

哀川はこの世界に入る切欠となった中川の紹介である男を会っていた

その時に「有本」とも会っていた

辻谷が率いる組織のグループ会社の社長として「有本」は挨拶してきた

中川の配慮で自分を飛ばし、直で付き合いをした方が良いと言われ有本の傘下に入った

有本の下で売上（上納金）をどんどん上げてくる哀川は辻谷の目にも止まっていたのが現状だった

実際は、中川も辻元も哀川に危険性を感じていたのは本音だった

売りがあがる＝危険性が高まる

名が売れる＝逮捕の確立が高くなる

そう言う構図だった

そこで辻谷は直径傘下ではなく、敢えて一枚かませる、有本傘下へ
哀川を置いたのが現状だった

有本は言わば責任者と言っても過言ではなかった

有本を消す訳にはいかない・・

だが、哀川なら消えても大丈夫・・

そう言う構図だった

哀川はそんな構図は読んでいたが いつの日かコイツらも纏めて喰
い尽してやる……

そう言う気持ちで傘下に入っていたのだった……

・
・
・
・
・

有本は京介を抱え立ち上がった

『で……どうで話し合ひなむ？』

『……銀座でも行くつか……』

『じいじ……血だらけやで』

『ええやないか……アルコールは消毒になるさかいのじい』

『だとよ……哀川』

『……は……』

京介は組員からタオルを受け取りかるく顔を擦った

「真つ赤ちゃん・・・相当・・・血・・・出とるな・・・」

血だらけのワイシャツをその場で脱ぎ棄てて素肌にジャツケト姿になった

「色々と・・・問題になるよりええやろ・・・」

辻谷、有本、京介、その他数名で銀座の街へ出る事になった・・・

o

「裏切り」 5

銀座の夜の街へ連れ出された

辻谷が通っている店をへと連れ出された

辻谷はママを呼んだ・

影でこそこそ話をしていた

その姿を見て有本は溜息を付いた

『哀川・・・これからお前の横にNO1が付く、言葉に気をつける
よ・・・』

『はい』

辻谷が戻ってくると全員が席に付いた

有本の言うとおり、店のNO1の女が哀川の横に付いた

そして哀川の隣には辻谷が座った

『おい、コイツは哀川言うねん、ワシんとこの兵隊やよろしくな』

『哀川さんよろしくお願ひします』

女はにこやかな笑顔で挨拶をしてきた

『どつとも・・・』

『哀川さん何で、ジャケットの中何も着てないんですか』

『しなは・・・』

京介が話そうとすると辻谷が言った

『ワシがコイツのシャツを血だらけにしたからのう、ガハハハ・
なあ哀川？』

『はあ・・・』

「お前は中学生か？」と思いながらも様子を見た

『やだあ、本当？哀川さん』

京介は辻谷の顔を見た

余計な事を言えば、またコイツの怒りをかうだけだ・・・

辻谷は言ってやった感あふれる顔をしていた

『辻谷社長はそんな事をする方では無いですよ、ちとコケてシャツ破れてもったんですわ・・・』

『なーんだ（笑）』

この帰しを聞いて辻谷は京介の肩をパンパンと叩いた

『飲めや・・・哀川』

ブランデーを差し出した

『ご馳走になります・・・』

「トクトクトク・・・」

ブランデーはグラス一杯に注がれた

『消毒しとけ』

『・・・はい・・・』

何処で発火するか分からない男、辻谷・・・

ここは従っておくのが得策である・・・

その後、辻谷は席を移動し有本と何やら密談を始めた

『ねえ、哀川さん、本当は辻元社長にやられたんじゃないの?』

見透かすような笑いで女は言った

「この公衆便所が・・・調子に乗るなよ・・・」

『ほんまにコケたんですわ』

『ふーん……』

その数時間後、店を出た

その後、六本木へタクシーへ向かい宴は続いた

何処にいつても辻谷が店に行くとヒイキ扱いされているようだった

数分後、銀座の女が店に現れた

これも辻元の指示であろう……京介はそう感じた

案の定、女は京介の隣に座った

『なんや？お前来たんか？』

わざとらしく辻谷は言った

『哀川さんに会いたくて！』

『気づいけーや・・・そいつは遊び人やで・・・ニヤリ』

『そうなの？哀川さん？』

『ん？まあね・・・女』公衆便所としか思っていないからね』

一瞬、女の顔が怒りの形相になりつつもあつたが・・・

『そう言う女としか遊んでないんですね（笑）可哀想。フッフ』

「所詮、お前もただの女だろ・・・」

『まあね、その方が楽でいいですからね　ハハハ』

『・・・』

女は無言だった

数分後・

『そろそろ帰ろつや、辻谷』

有本が言った

辻谷は金銀財宝が散りばめられた腕時計で時刻を見ていた

『そやな、その前に・・・哀川・・・ちとこつち来いや』

『はい』

辻谷の隣に京介は座った

『はい・・・』

『哀川・・・今回は・・・いや、今日は大目にみたる・・・有本に感謝しいや・・・』

『はい・・・』

『それとな・・・』

『はい』

『お前の行動は丸見えや……下手な芝居したら次は命は無いと思え……』

『社長・勘弁してくださいな、ワシは唄ってもいませんし、今後
も社長のお役に立ちたいと思ってますわ』

『フン……お前のような奴が一番信用ならんねや……』

有本が来た

『もう、ええやないか・辻谷』

『有本、コイツの監視をキツチリしとくんやな・・・コイツは狂犬や・・・いつ飼い主に噛みつくか分からんで・・・』

『そないな事ある訳ないがな、なっ哀川？』

『ええ・・・社長』

『・・・いいか、哀川・・・これからやで・・・これから・・・クックック・・・』

そう言うとタクシーに乗り込みさっさとその場を立ち去った

『あれ・・・どう言う意味ですかね？』

『さあな・・・でも、辻谷を敵に回すと面倒な事が多い、用心しろ
や』

『はい・・・』

その後、有本も消えた・・・

京介はタクシーを捕まえ乗り込むと、銀座の女もタクシーに乗り込

んで来た

『なんやねん・・・お前』

『送っていきますよ』

『いや・・・ほんだらワシが先に送ったるわ』

『・・・それじゃ・・・困るんです・・・』

『・・・』

なるほど・・・そう言う事か・・・

京介は都内のホテルへとタクシーを走らせた・・・

o

タクシーが走る数分間、京介は一切話しかける事は無かった

辻谷は、一字一句の対話、などを詳しく聞いてくる慎重ぶりである・

仕事の現場で、ジュースなど奢られた、何処の銘柄で何を飲んだか？

また、その相手は何を飲んでいたのか？

そこまで聞いてくる慎重ぶり、下手に言葉は交わさない方が良い・

この銀座の公衆便所は低の悪い美人局みたいなものだ・

そう考えていた

「ブーン……キキッ」

『お客さん、着きましたよ』

『おおきに、おっちゃん、この子送ったってや』

そう言い一万円を差し出した

一万円を差し出す行為も大事であった、金に躊躇しない所を女に見せないといけないと言う事からだった

絶対に何らかのレポートが辻谷に入る

恐らく、どこに宿泊しているかも知るために送られた作員だと考えていた……

宿泊先が分かれば、この便所も帰る意味がある、

ならば、このまま帰ってもらおう、と言う事だった

すると、女はその一万を取り上げ、自分が5000円をタクシーの運転手に渡し車を降りてきた

「面倒な女やな・・・どこまで指示が出とんねん・・・」

『何？君もここに用事があるのか？』

『・・・』

ロビーの中央まで行くと女は付いてきた

『何やねん？』

『部屋まで送ります』

『いらん』

「カツカツカツ・・・」

「スタスタスタ・・・」

「ピタ・・・」

『何？・・・社長の指示かいな？』

『いえ・・・』

『ほんだら、何のためにや？』

『その言の事、聞かないでください・・・』

『あっそのし』

京介はくるりと回り、正面玄関へと向かった

『どこに行くんですか？』

『飲みなおしや、お前も来い』

『あっ！はい』

出口に止まるタクシーに乗った

『おっちゃん、麻布十番』

『はい、畏まりました』

銀座の女は身構えていたのが解れたのか話しかけてきた

『ねえ』

『何？』

『そのまま行くの?』

京介は上半身裸にジャケットだった・

『まあ、ええやろ(笑)』

・
・
・
・
・

BARに入った

酒を飲んで行くうちに女は、勝手に色々話し始めた

店での不満やら、辻谷達が来た時はどうだ、などと興味のない話ばかりだった

『そうなんや、あんたもしんどいのう・・・』

まずは相手に合わせて会話を引き出す・・・

酒のペースが速くなり、酔いもまわる・・・

当然、トイレへの回数も増える・・・

『自分の意思とそぐわない事もあるわな・・・でも、あんた、頑張るの分かるわ』

『あんたじゃない!』

『名前は？』

『覚えてないの？』

『ハハハ、嘘や、「レイ」さんだろ？』

『覚えててくれたんだ！』

『当たり前やないか、ワシは美人は忘れないたちでな・・・ニヤリ』

『うわぁ・・・！（笑）でも少し嬉しいかな』

『で、今日は何でワシに?』

『それは聞かない約束でしょ』

そんな約束した覚えは無いが・・・

『ほんだら・・・どぎっしい・・・SEXしようじゃないか・・・ニヤリ』

『えっ・・・それは・・・そうしたいなら・・・』

『はあっ……』

京介は大きな溜息を付いた

『お前、そんな安い女なん？』

『安たって……仕方のない事もあるのよ!』

『仕方のない事ね……辻谷やな?』

『違うわね！……ママね……』

『なるほどね……』

レイはそう言つとフラフラしながらトイレへ立った

その際に京介は睡眠薬を酒の中に混入した

「ポチャン・・・」

数分後、レイはその酒を飲みテーブルにうなだれた・・・

「銀座も質が落ちたのう・・・」

レイをそのまま放置してホテルへと戻った

o

「裏切り」 7

翌日 AM 10:00

「天国にあなたが一番近い島」

京介は携帯が鳴っていたのには気づいていたが、電話に出なかった

基本、午前中の電話には出る事が無い

京介を知るものは余程の事が無い限り、皆、午前には電話をよこす事は無い

何度も鳴るしつこい着信音に京介の苛立ちは極限へ達した

携帯を手を取った

『喧しぞ！ポケエ！』

• • •

『お前・・・誰に向かって言ってるねん!』

電話の主は「辻谷」であった

『あつ?・・・お前、誰・・・ああ・・・社長、おはようございます』

京介はようやく目を覚ました

『昨日はどつやっただ？』

『大変美味しいお酒をご馳走になりましたすんませんでした』

『そっぢじゃないわ』

『……』

『女』

『女・・・ああ・・・あの銀座の？』

『そしせ、今、そこにおるんせろっ？変わねせ』

『居てませんが』

『嘘、言いなせ』

『社長、聞いてくださいな、あの女とあの後、一軒飲みに行っただすわ』

『おっ』

『飲んだ量が多かったのか・・・奴には荷が重過ぎたのか分かりませんが、潰れて寝てもうたんですわ』

『ほう・・・そんでどうした？』

『ほかしですわ』

『置いてきたんか？』

『はい、不味かったですかね？』

『・・・そうか、そうか、悪かったな穴埋めしたるさかい今から大至急事務所に来いや』

『社長が穴埋めする必要は無いですよん』

『ええから、来い言つとんねん・・・』

『分かりました』

電話を切った

敢えてけん制した

「荷が重すぎた」という言葉に辻谷は反抗的な態度を認識していたはず……」

少し恐いが、面白い事になりそうだ……そう感じていた

シャワーを浴び、ロビーへ出るとそこには、「田村」が待っていた

『哀川!』

京介は田村をシカトしチェックアウトの手続きを始めた

『おい！哀川！』

フロントで京介の方を掴む田村・・・

『離せや・・・殺すぞ・・・ガキが』

『な・・・なな・・・なんだお前！その態度は！』

『静かにせんかい、他のお客様の迷惑やないか・・・アホ』

『・・・』

田村はいそいそと玄関へ出た

その後、田村の運転する車のに乗り辻谷の居る事務所へと向かった

事務所に入ると、中には「有本」がおり、京介を呼んだ

『じつちや』

「有さん来とつたんや・・・」

馬鹿でかい、部屋へ通されると、京介がパクられた時に、名前のあがった連中が数名いた

『哀川、お前唄ってないやんな？』

『ええ、勿論、誰一人の名前語ってませんわ』

『よし、信じよう』

有本はそう言いニヤリと笑った

『それでだ……中での状況を教えて欲しいんや、この中に名前の

あがったものがおるか？』

『ええ、おりますね』

『誰や？』

京介は数名の名を上げた

『ど、どうしたんや？』

『知らんと言いつけましたわ』

『ホンマかあ！』

辻谷は大声をあげ、ガラス製の灰皿をいきなり投げつけてきた

「ジュン」

灰皿は京介の真横を通り壁へと激突して割れた

「ガシヤーン」

『ホンマです、中ではこんな話がありました・・・』

辻谷の灰皿は、ただのアクションである・・・京介はそう読んでいた
為、淡々と留置所内の取り調べの内容を語り始めた

』と、言う訳で、飛び火はまず、あり得ません、あるとしたら・・・
』

』あるとしたらなんや?』

』うちの元従業員ですわ、守ってやった事を何とも思わず逆恨みしているようですからね・・・』

「お前の子飼いをしている人間は裏切り者の可能性があるんだぞ・
・辻谷」

そう言う意味合いだった

『ほんだら、そいつら言わせなあかな・・・』

有本の目が鋭くなった

『 確証はありませんがね、ワシ以外にももう一人逮捕になってます
やん、可能性の比率で言ったらの話ですわ・・・ 』

『 辻谷 』

有本は辻谷を見た

『フンツ、そんな小物知るか、もし、そいつが唄っているとしたら、それは哀川お前の責任や、お前が何とかせえや』

『ええ・・・ニヤリ・・・その言葉を聞いて安心しましたわ・・・
キツチリ落し前付けさせますわ・・・』

『・・・』

その後くだらない会議は数時間続いた

• • • •

o

「裏切り」 8

『哀川、今日帰るんか？』

『ええ、そうそうゆっくりもしてられませんからね』

『どーせ、女の所やる？』

辻谷が言った

『違いますよ、社長、集金ですわ』

『そうかそうか、ほんだら直ぐ戻った方がええわな、おい、哀川を
駅まで送ってやれ』

『すみません、集金したらすぐ送りますよって』

『そやな、集金したらすぐ電話をよこせ』

『はい・・・』

『辻谷、ワシが送ってくわ、帰り道やしな』

『そうかそうか、ほんたら頼むな』

有本と外へ出た

有本の運転手が真っ白なベンツで待機していた

『お疲れ様です』

運転席の男が後部ドアを開けた

「ボタン、ボタン」

『社長・・・完全にワシは疑われるみたいだが・・・ほんま唄ってま
せんで』

『わかつとるがな・・・ホレ』

有本はずっしりとした紙袋を渡してきた

『なんですか？』

『見たら分かるかな』

封筒を覗くと札束が入っていた

『この銭は何に使えばよろしいのですか？』

『治療費や・・・相当・・・やられたやろ・・・クックック』

『ほんま・・・殺されるかと思いましたわ』

『貸しな・・・』

『えっ?』

『ワシ等の世界は誰も信じてはいけない・・・、でもな・・・自分が、「コイツ」と思った人間は信じてやってもええか・・・とワシは思うねん』

『・・・そうですね・・・』

『ワシの事も信じたらあかんで・・・』

『何ですか?』

『その油断が・・・隙となる場合もある、ワシも窮地に追い込まれたらお前を裏切らんとは言えん』

『社長になら裏切られても許せますわ(笑)』

『フツ・・・お前もアホやのう』

『親が親ですから・・・ニヤリ』

有本は嬉しそうな顔をしていた

本当は自分の兵隊、稼ぎ頭を失うのが困るだけだろう・・・

京介はそう感じていた

だが、この心地よい言葉に徐々に安堵を感じていた

『金いらんですわ』

『ええか、親が渡しとんねん』

『せやかて・・・』

『お前も出てきたばかりや、金はあるに越した事無いやろ』

『おめきに・・・』

東京駅に着いた

「ボタン」

「ウイイイ」

有本はパワーウィンドウを開けた

『集金したらワシに連絡しろ、ワシから辻本に渡すさかい』

『はい』

『お前もその方がええやろ　ニヤリ』

『ですね　（笑）』

白いベンツはあっという間に都会の街へと消えて行った

「さて・・・戻るまえに・・・」

「栗田 真一」(真 公開処刑 — 2話参照)へ電話を入れた

「プルルル・・・」

『ワシや』

『何処、行つとんたん？急に居なくなるから心配したで』

『ちと・・・親孝行にな・・・で、調査の具合はどない？』

『色々分かったで・・・へへへ』

『今から戻るさかい迎えに来て欲しいんやけど、ええか？』

『おう、で、何処におんねん』

『東京や』

『お前・・・関東生まれやったか？』

『フッ・・・親言つても、色んな親があるもんや・・・（笑）』

京介は地元を目指して新幹線に乗った

2時間半後

京介は栗田とおちあい、酒を飲みながら話をした

『お前がおらんようになったとたん、知ってたかのように「鈴木」と「畑中」が動き出してな・・それも何か関係あるんかい?』

『・・・なるほど・・そういう事か・・辻谷め・・』

消しそこねた代償は高くついたな・・地獄を見せてやる・・

その後、鈴木、畑中の動きを聞いた

二人は「青山」の支配下に着き、京介のテリトリーを荒らしまくっていた

青山とは、辻谷の舎弟分の一人、歳の頃は40代後半といった所だった

青山は辻谷の指示のもと、鈴木、畑中を使い、テリトリーへの侵略とプライベートでの行き場など、あらゆる場所への嫌がらせ行為を始めたいた

『ほんま・・・あいつらシヤレならんで・・・京介』

『せやな・・・けど・・・今、動く訳にはいかん・・・』

『好きにせとくんか?』

『ふるいせ・・・』

『ふんふん』

『そうや・・・いらん人間をふるいにかける・・・今は死んだふりで
もしといて・・・潰す相手を見極める・・・』

『しんぼつ出来るんか？お前に？』

『出来るさ・・・奴等が油断し時に、キツチリ・・・落としたるわ・・・』

『出来るんか？』

『・・・既にプランは組んである・・・それに・・・今動く・・・不味いねん』

『大変やな・・・お前等の世界も』

『そんな事無いけどな・・・』

二人は、店を出て別れた・・・

今すぐ動くと、辻谷の思いつば・集金するまでは何も仕掛けて来ないだろうが、その後、再び何ならかの嫌がらせや妨害工作をするだろう・・・

相手の裏をかくには、ここは死んだふりをするのが一番良い・・・

自分が表に出て来ないとなれば、鈴木、畑中の存在価値は無くなる

仕事が取れる二人ではない

何れ、青山も辻谷もサジを投げるに違いない・

その境目を狙うのがベストである・そう考えた

「少し・遊んでやるか・」

o

「裏切り」 9

京介は地元に戻り、栗田の話聞き、あまり人に目の触れる場所へ
出向かないようにした

京介が辻谷に拉致された事も、地元へ戻った事も、

「青山、鈴木、畑中」は知っている事だろう・・・

そして、「こう思って貰わないといけない・・・

「反撃が出来る訳が無い、俺達には辻谷が付いている・・・」

そこへ持っていくためには、潜る必要がある、

すなわち、死んだふりを最低一年近くは続けなければ行けない・
・

「しかし・・・難儀なプランや・・・だが、辛抱してこそ、遣り甲斐があるちゅうもんや・・・ここ一年は適当に遊びながら潜るしか無さそうやな・・・」

京介はその後、辻谷との約束の集金を済ませ、有本へ現金を宅急便で送った

送金額、1200万円

有本は現金を受け取ると直ぐに連絡してきた

『哀川、お前、自分の取り分は取ったんか？』

『有本社長から前金で頂きましたからね、その分は上乘せしておきました』

『よけいな事しなや!』

翌日現金が、京介の裏口座に振り込まれていた

名義人は全く知らない名前で金額は300万程だった

207

折り返し、礼の電話を入れると、有本が言った

「いつか、そのはした金でも役に立つ時がある、使わずに置いてけばええ」

本当に自分を心配してくれている・・・

例え、裏切られる事があるとしても、いつか必ず恩返しをしなければいけない・・・そう感じた

・
・
・
・
・

それから1年の歳月が過ぎた・・・

・

1年の間、「青山」の直下のもと、「鈴木、畑中」は京介の妨害工
作を辞める事は無かった

京介の会社の直販への営業は繰り返され、寝返るものも多少いたの
は事実だった

また、京介の個人的な付き合いのある人間達への妨害工作は続いた

京介を愚弄する内容文のメールや電話が多数行われ続けた

特に女性関係には手広く行われていたようだった・・・

物的証拠や証言を元に、京介は1年間の沈黙を破る時が来た・・・

ある晩・・・

京介は「栗田」ともう一人の親友「橋田」を呼び付けた

栗田と橋田は、京介の待つ、あるカフェへと来た

『パ
ラ
ノ
イ
ア
P
a
r
a
n
o
i
a

カ
フ
エ
C
a
f
e
』

「カラン・・」

『おっ、おっ、おっ』

京介の声に二人は席に着いた

『ブラック頼んどいたで』

『サンキュ』

3人はコーヒーを飲みながら話を始めた

『そろそろ・・・始めんで・・・』

『何を初めんねん？』

理解しきれていない、橋田が言った

『……処刑や……ニヤリ』

『何？……面白ろそうな話しやな……京ちゃん……ニヤリ』

『栗田、その後、奴等の環境はどんな感じや？』

『取り合えず、金魚のフンみたいに青山に付いて回っているみたいやな』

『まあ、賢明やろな・・・一人になると危険が増えるからな・・・ニヤニヤ・・・』

『ワシ等も何か協力できる事あるか?』

『特に無い、ただ、一緒に飲んで歩く事くらいやな(笑)』

『今まで通りでいいって事やな?』

『いや、違う、今回は最初からターゲットが決まっている、それは女では無くて、男であると言う事と、それが処刑と言う事だ』

『恐いのう(笑)』

『機は熟した・・・』

京介はまずは「鈴木」に照準を合わせていた

『人生・・・いや・・・生きている事を後悔してもらおう・・・』

栗田のデータによると、以前まで住んでいた場所には住んでいない
との事

会社を退社と同時に引き払ったようだった

そこまで細かいデータは集まっておらず、青山が主導として行う会社の張りこみ

鈴木が通う、飲み屋などに網を張ることにした

すると、直ぐに情報が入ってきた

鈴木の行動パターンは昔から単純で読みやすい

飲み屋なんて一度行き始めると、そこにしか行かないような習性だった為である

「やはり・・・ここか・・・まずは飲み屋から情報を引き出すか・・・」

その飲み屋の名は「クルーゼ」

鈴木のも元彼女が働いていると言っ情報だった

女の名は「のり」

「この女を使い、鈴木をジワジワ締め遊んでやるか……」

219

その数日後

京介、栗田、橋田の3人で「クルーゼ」のドアを開けた……

o

「裏切り」 10

店に入ると直ぐにBOX席へ通された

『ここはVIPはないのか?』

京介が聞くと、ボーイは御座いますと言いVIPルームへと案内された

雑魚席ではインパクトに欠ける・・・

何事も値が高い方が印象に強いと言うプランであった

VIPルームに女が3人入ってきた

その中に狙いを定めていた「のりこ」がいた

のりこは直ぐに京介に気づいたようだが、敢えて素知らぬふりをしてきた

栗田の役目は「のりこ」を口説き落とす事であった

初日は何も揺さぶりを掛ける事無く、まずは顔合わせという形で済ませた

その後、栗田の単独プレーでのりこに迫り、鈴木の情報を入手する

京介では警戒される、鈴木は絶対に京介の事に付いてのりこにも語っている・・・

故に、栗田の投入が必要であった

栗田本人もやる気を出しており、女を落とすとは任せておけと豪語していた

顔合わせから10日後・

栗田は連続で「クルーゼ」へ通い「のりこ」を口説き落とすようだった

栗田から情報が入ったとの知らせに落ちあつた

『京介・鈴木は独立して青年実業家気取りらしいで（笑）』

『クツクツク・・・笑けんなあ・・・』

『住んでるところを聞き出そうとしたんやけど・・・教えへんかったわ・・・どうするっ。』

『そうか・・・他に方法を考えるか・・・』

栗田は住家以外の情報を伝えてきた

『なんかな・・・鈴木にお前が店に来た事を伝えたらしいんだ、そうしたらこんな風に言ったらしいで・・・』

『ほう・・・なんて?』

『「京介? ああ・・・あの馬鹿ね、まだ生きてたの? 過去の人だよア
イツは最低最悪のクズだよ」 と言つてたらしいで(笑) お前、
最低最悪やつて(爆)』

『最低最悪・・・ね・・・では、その最低最悪を体験してもらつしかな
ないな・・・』

数週間、栗田からの情報を元に鈴木の行きそうな場所を偵察・・・

鈴木は大のパチンコ好き・・・情報にあつたパチンコ屋を偵察・・・

・
鈴木の車が駐車場にあった

「「「」も簡単に見つかるとはな・・・」

店内に入ると直ぐに鈴木を発見・・・

しつこく打つタイプなので辞めるまで待つのはかなりの時間がかか
ると思ひ時間を空け数回外で鈴木車をチェック

店内貼りこみで逃がしてしまっただけは全てのプランが崩れるというも
の・・

「暇人が・・閉店まで打つ気やな・・」

京介は数台持っていた車の中で鈴木に所有を知られていないを車で
待機するため

鈴木は京介に気づかずに帰宅

「自宅へご案内ってな・・・ニヤリ」

パチンコ屋から10分位の場所に住家があった

その日はそれで終了

「1111ね・・・ニヤリ」

それから数週間、鈴木の行動パターンをリサーチ

調査を進めていると、どうやら仕事はせずにパチンコ三昧……

「さてと……行動パターンは把握した。まずは、細かい嫌がらせをするか……」

京介は綿密なプランが組まれていた

小物にいきなり大きな衝撃を与えると、直ぐに青山、辻本が出てくる可能性がある

故に細かく姑息な手口を行う事にした

深夜に鈴木の家に行き、車のワイパーゴムを片方（運転席）だけ剥ぎ取ってきた

3日後、調査に行くとワイパーゴムは新調

フロントのワイパーゴム両方と後ろのワイパーゴムを剥ぎ取り・・・

「自分でやってても笑けんなあ・・・クツクツク」

だが、天気が良い日続いせいか発見は遅れているようだった・・・

「なんや・・・鈍感なやつちな・・・」

給油口をこじ開け砂糖を大量に投入・・・更にタイヤのナットを全緩め・・・

「我ながら、無邪気に遊ぶ子供心を忘れていないのは可愛らしな・・・

クックック」

鈴木は何があっても警察に通報する事は出来ない・・・

「青山」と「辻本」が人生に絡む以上、京介のようにはなりたくない・・・

そう思っているのは分かっていた

翌日、パチンコ屋に行くと鈴木の手は無かったが、店内に鈴木の手はあった

見慣れない軽自動車に何度か行き来する姿を監視

鈴木の愛車はその後、エンジンが焼き付き修理工場へ入ったのだろ
う……

一緒に住んでる女を調査……

「全然、普通の女だな……のりこと同棲しているのではないんやな
・まあ、元カノと言ってたしな……」

それから数日後……処刑劇の序曲が始まる事になる……

鈴木はそんな事も知らずに、パチンコに勝てば、「クルーゼ」へ飲みに行ったりしていたようだった

「精々楽しんでおけや・・・鈴木・・・ニヤリ」

。

「裏切り」 11

更に鈴木の行動パターンを探ってみると

「青山」から命令を受けた仕事をこなし、仕事のない時はパチンコをしている

青山自身も鈴木の能力無さに嫌気が差しいるころだろう・

だが、勢いで立ててしまった会社は潰す訳にはいかない

腐っても裏方の人間、役に立つ時はある、そう踏んでいたに違いない

京介はそう睨んでいた

個人事業と称し会社名記載の名刺を持って歩いているのを栗田から
入手して分かった

鈴木をダミーとした会社では表向きは鈴木が代表をしていた

実際は鈴木自身で仕事を取る事は無く

発注数は『0（ゼロ）』の状態、実状毎日パチンコ三昧と言う生活
である事が分かった

また、青山が付いている分、大きな顔をしているようだったが

実状、辻谷の舎弟には相手にされていない状態のようだった

青山の誤算は「京介」の「死んだふり」であった

関東から戻った際、何らかの反撃をしてくと踏んでいたようだった

仕掛けられた嫌がらせや妨害行為に完全無視で来るとは思っていない
かったのだった

「哀川め・・・二度と日のあたる場所へ出れんようにしたるわ・・・」

青山は京介を目の敵にしているようだった・・・

京介が潜っている間に行われた行為は幼稚なものから行き過ぎの物が多々あった

狂言を使い、京介の知人達（男女）への悪質な電話・メール多数

窃盗（会社の金300万 時計2つ 総額 500万）

裏業界、飲み屋での愚弄行為

京介の身内への脅迫メール・電話

京介の愛車への悪戯行為^{アストロ}

これらの行為は正直大したことはなかったが、京介としては

「切欠が些細なものなら、些細な所から全てを潰してやるまでだ・
」

そう考えていた

京介は鈴木を通うパチンコ屋に行った・・・。

鈴木は恐怖の大王が近づくのを知らずに必死にパチスロを打っていた

鈴木の後後に立ち・・・後頭部の髪を掴み

『ガンッ! ! ! ! !』

パチスロに思いっきりぶつけた・

『痛てえー なんだこの野・・・ろ・・・』

『久しぶりやのう・・・鈴木』

鈴木の髪を掴んだままホールの外へ引きづり出した

『しゃ……社長……お久しぶりです……』

『久しぶりやのう……元気そうやのう……鈴木……』

『……』

・
・
鈴木の顔は青ざめ、足がガクガク震るわせ汗をダラダラかき始めた・

『お前・・・仕事、何しとねん？ パチプロか？ 打ち子か？』

『今まで通り・・・やってますよ・・・今日はたまたまパチンコしてたんです、人を待たせてるのでもう帰ります・・・。』

『ほおう・・・毎日ここに来て誰、待たせてんねん？ 同棲してる女か？ あっ？』

更にしどろもどろになる鈴木・・・

終始、周りを気にして落ち着かない様子

『人待たせてるわりには、随分夢中になってパチスロしてたな（笑）
？』

すると鈴木はガクガク震えながら

目に涙を溜め反論してきた

『うっ……うっせえよ……もう……お前にとやかく言われる筋台
いはねえよ……』

その声はあまりにも小さく蚊の鳴くような声だった

『はあ？　なんて？　誰に言ってるねん・・・コラッ？』

『・・・』

下を俯き無言の鈴木・・・

京介は鈴木のを掴み、顔を近寄せ

『もう一回聞く・誰に言ってるねん？コラ』

鈴木は即座に地べたに這いつくばり

土下座をして泣きながら謝罪してきた

『すみませんでした！すみませんでした×10！』

『意味……分からんなあ……鈴木……』

『勘弁してください』

『なあ……ここ一年近く色々な事が起きたんやけどなあ……みーんなお前の仕業らしいなあ？』

『えっ！そ……それは……』

『だから信じるなってゆーたやる・・・アイツらを・・・』

京介は、今までの妨害工作などは全て鈴木の仕事だと言つ事を辻谷の舎弟分から聞いたと吹き込んだ

鈴木は口に手を当てガタガタ震えるばかり・・・

「完全にバレている・・・」

『鈴木・・・ワシを敵に回して何がしたいねん？』

『自分じゃないです・・・』

『じゃあ誰や?』

『・・・』

『ほな、確認取つてもええんやな?もう分かってんねんで・・・知ら
きるつもりやったら死ぬ気で来いや・・・クズが・・・』

『いや・・・その・・・全部・・・自分って訳では・・・畑中さんと一緒にやりました・・・』

「分かっていた答えではあるが、こつもアツサリと仲間を裏切る奴とは・・・」

『畑中なあ・・・そんなの知ってるわ』

土下座をして地べたに這いつくばる鈴木の頭に足を乗せた

『何の為に・・・関係無い奴等まで巻き込んだんや？ 直接来たらええやないかあ・・・』

『すみませんでした！すみませんでした！』

『答えになってないやないか・・・』

頭を数回踏みつけ、地面に顔を押し付けてやった

「ジャリ・・・ジャリジャリ・・・」

『じゅじゅ』

髪を掴み顔を上げると

鈴木顔には鼻水で涙でこびり付いただろう、小さな小石や土が付いてた

『取り合えず……これは友人の分や……』

腹に思いっきり蹴りを喰らわせた

「ドスッ！」

『おっおっおっ……』

『じゃ……社長……本当に……すみませんでした……』

『分かった、分かった・・・言葉としてわな・・・でも、分かるよなワシがどーゆー奴か・・・』

『すみません！すみません！助けて下さい！』

『お前、携帯出せや』

『ど・・・どっしょですか・・・』

『お前に質問権はねーんだよ』

「バキイイ」

顔面にエルボースマシュ

『ウゴオオー』

鈴木がふっ飛んだ好きに馬乗りに携帯を取りあげた

『な！何するんですか！』

更に顔面に蹴り．．

『・・・ニヤリ・・・』

「ボクウ！」

「発信履歴」

「着信履歴」

「発信メール」

「着信メール」

「電話帳」

京介のニヤリとした顔を見ると鈴木は震えながらも携帯を返してくれと訴えてきた

『お前・・・青山、畑中だけでは気が済まず、辻谷にも電話しとるんやな・・・』

『・・・』

『ワシの女連中にも電話したりメールしたりしてるな・・・これは
お前自身でやったんちゃうんか?』

『そ・・・それは・・・畑中さんと・・・』

『完全に認めたな・・・』

『ち・・・違つんです社長!』

『悪いな・・・ワシはもうお前の社長ぢゃつねん・・・ニヤヤッ』

京介は車道を見た

「……………」

するとそこには10tトラックが走ってきた

トラックが通り過ぎる瞬間、携帯を路面に放り投げた

「ポイツ」

「ガ……………！バキバキツ…」

トラックは何事も無かったのようになり過ぎていった…

『あゝあ…踏まれちゃったね（笑）』

『……………』

『鈴木・・・今後あまり調子に乗っているようだったら・・・携帯の
ようにしたるからな・・・』

『助けてください！助けてください！』

『お前・・・自分のやった事・・・よく考えるんやな・・・』

一端許すフリをしながら、もう一発腹に蹴りを食らわせた

『消える・・・』

「ウゲエエエ・・・」

「ボクウ！」

鈴木は悲鳴を上げながら消え去った・・

「鈴木・・・お前はただの始まりでしかない・・・だが、一番最初に地獄を見るのはお前や・・・」

o

「裏切り」 12

畑中・・・こいつが鈴木をたぶらかし全てを狂わせた根源であるのは分かっていた

畑中に関しては豚箱に入ったので多少は懲りているだろう・・・そう思い鈴木をメインに考えていたのだが

どうやら、一年の歳月が経ち、刃向うべき人間を見誤ったのである
う・・・

ならば、分からせるまで・・・そう京介は考えた

畑中は以前、京介が準備してやったアパートにまだ住んでいた

どつ言うつ神経かは知らないが、先を読めない思考にガツカリした

「こつも簡単に見つかるこつまらんな・・・」

・ 外で部屋の様子をうかがっていると 鈴木の女の軽自動車があつた・

「ゴミ2人が集まり廃品回収の会議でもしてるのか？」

そんな事を思いつつも、軽自動車のワイパーゴムを剥がした

「そろそろ、気づけよなカス・・・」

その日も軽いジャブで帰った

畑中の不在時を狙いアパートへ向かった

部屋の前には物置があり鍵がかかっていなかった

「ガパツ」

物置内は工具、車の部品、衣類などがしまっていた

取り合えず衣類は燃えるゴミにだしてやり

残りの物には『放尿』の大サービスを行う事にした

3日間連続で放尿してやり、さすがに3日目は尿の臭いが漂っていた

工具類も錆びて使いものにならない・・・

「どうせ大した仕事もないやろから調度ええやろ・・・」

その数日後、畑中へ処刑を実行することにした

畑中が出かけるのを確認

畑中に知られていない車で尾行

狭い道を通ってある場所に向かっているようであった

「この道は帰りもここを通るな・・・ニヤリ」

これ以上の尾行は必要ない、そう考えその場で待機した

行き先はどうせ、鈴木を通うパチンコ屋であろう・・・そう予測した

馬鹿が二人揃って馬鹿会議でもしているのだろう・・・

「そんなものは全てが無意味であると言っ事を教えてやる・・・お前等雑魚に始まり・・・ゆくゆくは・・・全てに対して後悔を味わってもらおう・・・」

待つこと・・・2時間

目の前から畑中のラウンドクルーザーが狭い道を走ってきた

車一台がやっと通る事が可能な道・・・

ランクルのようなデカイ車では相手が下がるしか道を通る事が出来ない・・・

「来たな・・・ニヤリ」

「ブルルン」

京介は畑中が走ってきた道を反対から侵入した

畑中は道をゆずるような常識は持ち合わせていない

車のデカさに物を言わせどんと進んできた

「キキーン」

「ピタッ」

道をゆずるフリをして止めた

すると畑中はさも当然科かのような顔をして前進

ランクルが近づいてきたのと同時に再度前進・

畑中は慌てふためきクラクションを鳴らしてきた

「ニヤリ」

避ける事も無く道の中央を走る京介・

もう、どちらかが避けないとぶつかるといつ時、畑中はハンドルをきり道路から脱落

道路の片方は川 片方は田

畑中の車は前方から田に突っ込んで行った

結構勢いで突っ込んで行き、落ちた後はまたもやクラクションがなりっぱなしだった

その後、車を停めた

『おい、大丈夫か？』

『てめえ・・・何処見て運転している・・・あっ・・・』

『あん？なんて？』

『しゃ・・・社長・・・』

『はあ？誰だてめえ』

『お前・・・後悔するぞ！俺達にこんなことしてただで済むと思っ
ているのか？』

『よう言うわ、お前が勝手に田んぼへ落ちたんやんないか？ワシは
なんもしてへんぞ』

『しるせえー』

『仕方ないのう・・・』

車の中で吠える畑中の元へ行つた

『なんや・・畑中やないか・・ニヤニヤ』

『わ・・ワザとらしいんだよ』

『そつか・・よつ・・言われるわ・・』

「バキッ」

渾身の拳を畑中の顔面に食らわした

畑中はシートベルトのせいで隣まで吹っ飛ぶ事は無く反動で戻ってきた

そこを髪を掴みハンドルへ何度も何度も強打した

「ガン ゴン バキ」

『いいか畑中、次・・ワシの目の前に現れた時はホンマに殺すからな・・分かったか?』

「・・・」

『返事せんかい!』

再度顔をハンドルへ叩き付けた

『ふ・ふみまへんでした・』

口の中が切れ歯も折れまともな日本語が言えないようであった

『何言ってるかわからん、日本語勉強しなせや』

頭を起こさせ再度顔を殴りその場を去った

「これで終わ리と思うなよ・・・畑中・・・」

その後畑中の実家に電話を掛けた

あること無いことを因縁付け狂言を吹き込み

更に畑中の実家への地域へ情報を操作した

自営業で商売をやってる畑中の家は根も葉もない情報操作に客足が途絶え経済状況が困難に陥った

そして周辺の地域では

「畑中さんの息子さんが悪い事をして逮捕になった」

と皆が騒ぎ立てた

畑中本人は音信不通になり、家族も商売を廃業し雲隠れした

継続的な処刑ではなく、一気にとどめをさす手法を畑中では組んでいた

「畑中はこの程度で許してやる・・・」

逮捕歴のある畑中など辻谷に取ってはどつどつでもコマメであらうと予測していたからだった

「天国にあなた」
（京介着信音）

『もしもし・・・』

電話の相手は「栗田」であった

『どうした？』

『おもしろい情報が入ったで・・・』

『すぐ向かっ』

「・・・ッ」

京介は栗田のもとへと向かった

o

「裏切り」 13

栗田と合流した・・

『京介・・この間、クルーゼに一時の話だがな・・・』

栗田はニヤニヤしながら話をしてきた

先日、栗田がクルーゼに一人で飲みに行った時、店が終わった後、アフターで他の店に飲みに行った話であった

のりこは鈴木に起きた出来事も知らずに、栗田に気に入られようと鈴木の情報を通してきた

その話の中身は、殆どが京介を愚弄する内容であった

また、アフターで飲みに行った先のマスターも話しに入り込み鈴木を青年実業家として祭り上げたと言う内容であった

『ほう・・・そない事言うてんねや・・・関係のないゴミに鉄槌をくだすのは可哀想だが・・・女だと言えワシは容赦はせん・・・』

『そう来ると思ったで！協力したるわ！でっどないなプランや？』

『女や・・・女を使う・・・』

『誰使うねん？』

『小林 真矢（原作：京子）・・・や・・・』

（）FC小説：京子参照

『誰やねん、そいつ』

『ただのデリヘルや・・・コイツはワシにゴッソリなでな・・・ワシの命令には必ず従う・・・』

『なんか面白ろそうなプランやな・・・』

『心に入り込んで中から壊したるわ・・・その程度でのりこは十分やろ・・・鈴木と関わるとロクな事が無いと言う事を体で感じて貰おうやないか・・・』

「小林 真矢」投入で、「のりこ」の軽い口を封じると同時に

小物と大物の見分けの付け方を教えようと考えた

翌日、京介は「小林 真矢」を呼びだした

『真矢、お前・・・デリ辞めてお水やれや・・・』

『えっ？やっぱり嫌だよね・・・この仕事・・・』

『まあな・・・知り合いの店を紹介するから、デリ辞めて夜やれや』

『本当？そこまで私を想ってくれているなんて思わなかった・・・
ありがとう・・・京ちゃん』

『ああ・・・これ以上、お前の体を他の男に触られるのなんて・・・耐
えきれん・・・』

『ごめんね・・・本当に今まで我慢させてごめんなさい・・・もう辞め
るから』

翌日早速、真矢はデリヘルを辞めた・・・

「スナック 「クルーゼ」か・・・」

京介はクルーゼのオーナーを調べ上げた

すると、昔からの悪友が店のオーナーである事が分かった・・・

間接的に金を握らせ、真矢の潜入に成功させることが出来た

真矢はまともな仕事で働くのは久しぶりだと喜んでいた

大好きな京介の申し出で、風俗から足を洗えた事に憂いすら感じていた・・・

1週間もすると仕事にも慣れてきたようで、店内の事を話し始めて

きた

「真矢」には「のりこ」や「鈴木」の話は一切せず、ただ足を洗わせたと言っイメージで進ませていた

ただ予め、鈴木の写真だけは何度か見せていた

『真矢、コイツが店に来たら要注意や・・・』

『ヤバいっすわ』

『うちの元従業員でな・・・手癖が悪いねん』

『女癖？』

『それもそうやし、それ以外もや・・・騙されないようにしろや、万が一何か嫌がらせをされた時は言って来い助けに行く・・・』

『うん！心強い！』

「ニヤリ・・・」

真矢は自分に都合のよいように解釈したようだった

一ヶ月がたとうとした時、真矢からの報告・

鈴木は真矢の事は知らない・

真矢はのりこからせ年実業家として紹介された

鈴木は自分は今までに沢山の苦労したが、その結果もみのり、自営業として全国展開していると豪語

話しは鈴木の話で盛り上がっている最中、のりこが言った

『あっ！そう言えば、哀川とか言う人店に来たよ』

『いつだ？』

『一ヶ月くらい前かな・・・それからは来てないけど』

『アイツ、最近また調子に乗ってるみたいだから・・・』

『私 あの人の嫌い、あの目がキモイ、最悪！死ねば良いのに』

『あんな奴、いつか殺してやるよ』

二人の会話を黙って聞いている真矢・・・

『あれ？真矢ちゃん、どうしたの？静かだね？』

『さっきから言ってる、哀川さんって京介さんの事かなあ〜って・

』

『知ってるの？』

鈴木とのりこの顔は一瞬たじろいだように見えた

『・・・うん・・・多分・・・同一人物だと思うけど・・・』

鈴木は顔はひきつっていた

『ねえ、哀川って今、仕事何してるの？』

『最近、会ってないから分かんない・・・』

二人の会話を黙って聞く鈴木・・・

『・・・』

『あいつムカつくよね（笑）』

『そうかな？私は別にムカつかないけど・・・』

仕事中に真矢は悔しいと言い連絡が入った

『ねえ、何かあったの？』

『いや、恐らく妬んでいるんやろ』

『べつしてっ』

『ワシがあまりにも男前やからな・・・顔も生き方もな』

『そっか・・そうだね、また愚痴言ったら報告するね、じゃ、戻るね』

「ピッ」

その後 店が終わった後、3人で飲みに行った

鈴木とのりに付いていった真矢から報告が入った

店の名は以前、栗田から聞いた、のりことアフターで行った店だった

そこでの会話は栗田の時と同様、京介の愚弄がメインだった

「天国にあなた」（京着信音）

『もおお！ムカつく京ちゃんの悪口ばかり聞かされる（怒）』

『そうか・・・言わせとけ・・・天罰は下す』

『天罰？』

『そうや・・・お前に辛い思いをさせやがったのりこと鈴木は、ただでは済まさん・・・』

『う……うん……でもやり過ぎないでね……京ちゃん……怖いから……』

『アホ！自分の女が嫌な思いをしてるのに笑ってられるか！』

『嬉しいいい　京ちゃん出来ることがあったら言うてー！』

『ニヤリ……ああ……折角、一からやり直しているのに、そんな
思いをさせてごめんな……ワシが悪いんや、お前は申し訳なく思っ
』

『彼氏を守るのは彼女の役目だもん、出来る事があったら言ってね』

『分かった、その後の報告の方頼むな』

『はい!』

『真矢、のりこの携帯番号とアドレス、出来れば自宅と家族構成を聞き出してくれ・・・』

『うん 任せて!』

真矢は京介の役に立っているという実感がした

俗な商売から足を洗わせてくれ、自分を大事に想ってくれている・・・

何としても、指示は達成しようと考えた

数日後

真矢からのメール

『「のりこ」の詳細』

本名：川島 のり子

年齢：26歳

携帯番号：090 - xxxxx-xxxxx

メールアドレス：~@xx~.jp

住所：〇〇市〇〇号

性格：自己中心的

交友関係：栗田、鈴木（客）と交際中とのこと

「プルルル」

『はい！メール見た？』

『感謝する』

『取り合えず会いたい』

『真矢も！』

京介は真矢を呼びだした

数十分後

『ごめんなさい 待った？』

『いや そうでもないで』

いつもなら1分遅れると1分事にピントを炸裂させてだが・・・今回だけは許した

『真矢、今回はありがとう。ほんまに愛を感じるよ』

『そんなあゝ京ちゃんの為なら何でもするもん』

食事をしながら次なるプランを話しました。

『近いうちに店に栗田と一緒に行く、そしてお前とのり子を指名』

『えっ？来るの？』

『そうや・・・ニヤリ』

『それも・・・作戦なの？』

『ああ、そうや・・・何でも始まりが大事やる・・・オープニングやで・
・真矢』

『よく分かんないけど 分かった』

『今回の活躍に何のご褒美が欲しいか？』

『・・・』

真矢は真っ赤な顔をしていた

どうせエロイ事を考えてるに決まってると思います

向かいに座る、真矢の股の間に足を突っ込んだ

小声で

『きゃっ・・・まずいよ・・・京ちゃん、見られちゃう・・・』

『だから、どうした・・・ニヤリ』

その後、真矢をホテルに連れ込み、体を満たしてやった

・

・

・

数日後、栗田にプランを伝えた

『えげつないないなーお前（笑）』

『なんでやねん、そんな事無いがな、終盤にはお前にも活躍してもらいたいんだが・・・どうや?』

『何したらええねん』

『偽善者や・・・ニヤリ』

『まんまやな』

栗田の承諾を得て、次なるパートナー「橋田」に連絡

橋田を使いもう一つのプランを進行

少し回りくどく、面倒なプランではあったが、最後に向けての基礎は大事だと考えていた

その後、真矢からの入手した情報により「のり子」の自宅の場所を特定

「貧乏臭いアパートやな・・・」

携帯電話を数台用意した

「ニヤリ」

のり子に組まれたプランなど知ることも無く

鈴木は何事も無かったように店を変えてパチンコ三昧だった

鈴木も小物なりにセキュリティを張り

青山に、「哀川 京介」が動き出したと伝え

辻谷の使いパシリを招き、体制を固めていた

「鈴木・ワシから見たらゴミが増えただけ、被害者増えるだけや・
・ニヤリ」

今後、のり子、鈴木には奇想天外な出来事が待ち受ける事になって
いた・・・

。

「裏切り」 14

後日、栗田と「クルーゼ」へ向かった

店内に入ると店は暇で、ほぼ貸しきり状態だった

「栗田、女、全員集めようや」

「そやな・・・ニヤリ」

栗田は暇そうにしている女を全て席に着けさせた

のり子は京介の登場に少し引きつり笑いをしているようだった・・・

真矢は、京介の傍へ近寄ってきた

「ニッコ」

「・・・」

プランを理解して無い真矢は時としてウザい奴だと感じた瞬間でもあった

京介は真矢のみならず、のり子以外の女の笑顔で話を続けた

栗田はのり子、6割、他者4割で話をしておくよう指示

のり子は最初は笑顔で話を聞いていたが、次第に暇そうな顔をしていた

するとのり子は京介に話しかけてきた

『あのお・・・哀川さん・・・』

『なんだい？』

『実は昔から哀川さん知ってるんですけど・・・ 前回、話し出来なかつたから言えなかつただけど・・・私の事、分かります？』

「かかったな・・・公衆便所が・・・ニヤリ」

『覚えてるで！綺麗になつたな、のり子ちゃん』

『えええ 本当ですか！のり子嬉しい！凄く変わりましたね！京介さん』

「簡単な女や・・・」

『そうかい（笑）色々あったからね・・・今は大人しいもんやで・・・
（苦笑）』

『ねえー私は？私は？綺麗じゃないの？』

真矢は酔うと本当にくどい女だった

小声で・・・

『殺すぞ・・・』

真矢は、あつと言つ間に静まり返り作戦進行・・・

その日は、変わった『哀川 京介』を見せに行くのが目的だった

鈴木は自分の汚点は言わない男・

前回の遭遇は話していないと踏んでのプランだった

皆で盛り上がり普通の客を装い店を去った

・
・
・
・
・

その数日後、栗田はのり子を口説き落とし体をいただいと報告が入った

『大したこと無い体やったで・・・SEXも下手だしあんなのいらねーな』

『まあ、そう言いなや（笑）繋いでおいてくれ・・・せめて2週間
は』

『それじゃ、次は中出しで後はほかしやな（爆）』

『おうおう、出しとけ中でも何でも』

栗田を使い、のり子プランは進行

その後、真矢を使って手にいれた

のり子のデータ を使い第二プランを進行・・・

知り合いの出会い系サイトに登録

架空請求のプログラマーに依頼し、特殊プログラムの作成

毎日数十回と言うメールと電話がのり子へ行われるようにした

「狂言」には「狂言で返す」

「口は災いのもの・・・と言う事を精神で学んだな・・・」

数日後

のり子は真矢に相談してきた

『最近、変なメールとか電話が多くて恐いの・・・どうしてかな？』

『メアドと番号変えたら?』

『取りあえずメアド変える・・・』

とても不安げだったと真矢から報告が入ったが、これは物語の始まりの合図のようなものだった

のり子は水商売・・・メアドや電話番号を変えるのは商売上あまりしたくない事であろう・・・

いちいち変更したと何名もの客に教えるのは困難なもの安堵を与えるために

2日空ける事によって・・・

メアド変更を「友人」「客」に知らせると計算していた

メアドを知ってる人間が多ければ多いほど隠れ蓑になる

3日目・・・

『真矢ちゃん、メール来なかったよ。誰かが悪戯してたんだね、ムカつくマジ最悪だよ』

『本当だよね・・・』

のり子が出勤している時間に真矢へメール

「のり子は出勤しているか？」

「うん」

「携帯の件は？」

「ここ3日間は何もなかったって喜んでいた」

「了解」

のり子が仕事をしている間にメール送信の指令

仕事の合間に携帯を見て絶句していたと報告があった

再度、のり子は新たにメアドを変更、

再び、新しい「のり子」メアドが真矢から着信・

当然、新アドレスへも同じ内容のメールが送信された

数は今までの倍の数をセッティングされていた

携帯恐怖症に陥れる

閉店後・

『もう、やだ！やだ！携帯怖い！携帯怖い！』

店内で泣き叫んでいると報告メール

それから、のり子は対人恐怖症になり店を休むようになった

数日開け真矢へ電話・・・

『今日、のり子来てる?』

『来てないよ、少しやりすぎたんじゃない?』

『じゃ、已、誰に物言つてんねん?』

『あっ、し、し、めんなさい・・・』

『お前じと消すぞ・・・じゃ』

『えっ?のりちゃん殺す・・・の・・・?・・・ですか』

『アホかお前？近い事があるかもな・・・お前もそうされたいみたいやな・・・ええで、ついでや・・・』

『じゅめんさいX10』

『まあいい、のり子を慰めて励ましてやれ、そして店に出勤させる、分かったか？』

『はい・・・分かりました 言う通りにします』

『お前は言われたとおりにだけ動いていけばええねん』

『・・・はい・・・』

それから10日後

メモリー着信、メモリー受信の端末設定を行っていたようではあったが、そんな端末セキュリティなど容易いものであった

のり子は電話番号、メールアドレスを事件から5回変えていた

4回目までは連日のメール電話の嵐を食らわし、5回目の変更で終了としていた

「安堵」を与えて何事も無い日々だったん戻ってもらおう事に・・・

数日後・・・

のり子の出勤を真矢に確認し

京介は橋田と共にクルーゼへ行つた

o

「裏切り」 15

橋田と共にクルーゼへ・・

直ぐに、真矢とのり子が着いた・・

指名もしてないのに図々しい連中だと感じながらも取り合えず乾杯

『あれ？今日は栗田さんは一緒じゃないんですか？』

のり子は聞いてきた

『栗田は今日は忙しいみたいやで、ワシらだけごめんやで』

『いえ、じゃあカンパイ』

「鈴木の前では、京介を悪く言い、本人の前では何も知らないふりをする・・・

実に当り前な行動だが、相当ジャブが効いているようだな・・・のり子・・・ニヤリ」

見た目はとても楽しい感じに見える飲みの中でも、のり子の目付きは尋常ではなかった

時折何かに脅える眼差しを店に客が入る度にオドオドしているようだった

『のりちゃん、どないしたん？何か元気無いで美人が台無しや』

『そんな事ないですよぉ〜！のり子は元気ですよ！』

『そうか・・・それならええねんけどな・・・』

一方 橋田は次の作戦に移行した

真矢と話しをさせ口説かせるプランだった

このまま京介に張り付かれるとプランの妨げになるのも、一つの理由だった

酔っぱらうとウザい女が嫌いと言う事と飽きたので調度良いミニゲームみたいな感じに考えていた

『あの・・・哀川さん・・・いいですか?』

のり子が話しかけてきた

『どうしたん?』

『哀川さんはインターネット系は得意ですか?』

『プログラム系の事なら多少は分かるけど』

『出会い系とかはやったことあります?』

『そんなんやらんでも出会いは沢山あるでな（笑）何？興味あるんかい？』

『いえ・・・興味は無いけど・・・困っている事があって・・・』

『ほう・・・ワシで良かったら話し聞かせて』

『お願いします』

予め、真矢に、「京ちゃんそう言うのの対処法に詳しいから相談してみたなら？」と言うように仕込み済みだった

分かりきった話をのり子から聞きいた・・・

『そうか・・・それは酷いな・・・不安やったやろ、誰かに恨まれてる事・・・無いんか?』

『恨まれる?・・・そんなの無いと思うけど・・・』

『そうか・・・それなら意味分からんよなあ・・・』

『毎日のようにメール来るし、電話もガンガン鳴るんです、メアドや番号変えても来るんですよ・・・』

『可哀想に・・・』

のり子は涙を浮かべた

『あれ？そう言えば、のりちゃん、うちの元従業員の鈴木とまだ付き合いあるの？』

『えっ？鈴木さん・あああ、携帯が壊れたとかでいったん連絡合ったけど・・それからは・・どうしてですか？』

『携帯壊れた？』

『車で踏みつけてしまったとかで・・』

「トラックに踏みつけられたんやろが・・クックック」

『それから連絡は？』

『無いですけど・・・何かあるんですか？』

『・・・他の飲み屋でのりちゃんは自分の女だって言ってたらしいから、それで何か揉めたのかね（笑）何？彼氏なん？』

『違いますよ〜昔、付き合ってたけど今はただのお客さんです』

『お』

『お客さん？店には来るんだね』

のり子は『シマッタ』と言う顔をしながら誤魔化してきた

『気づけや、アイツ、今、「ヤ」の付く自由業の奴らとつるんでるからな・・確か・・ネット系の仕事をやってるらしいよ・・』

『ネットですか？メールとか？』

『よく分かんないけど・・そうじゃないかな・・』

『もしかして鈴木さん・・？かな犯人・・』

『何か揉めた？』

『前に飲みに来た時に凄く誘われて断ったら、怒って帰っちゃった事があるんですよ・・ムカツク・・そう言えば哀川さんの事を凄く

悪く言っていました・・・』

単純であり得ない答えに誘導され、思い込む辺りは単細胞の特徴・・・

現時点で恐怖や不安に駆られているのり子にはドンピシャな答えを用意する事で簡単に壊れるものもある・・・

京介の思惑通りの展開だった

『俺の事？まあ、いいよ言わせておけば、あいつ嘘ばっかついてるから、その内メッキも剥がれるやろ』

『えっ？どんな嘘ですか』

『会社のオーナーで青年実業家とか言ってたかいたかい？』

『違うんですか？』

『毎日パチンコしてるでアイツ（笑）借金もぎょうさんあってな、一ヶ月くらい前にワシお金貸してくれって電話来たよ』

『ええ？・・・本当ですか・・・？』

『あと、のりちゃんを誘ってたって話しやけど・・・知ってるかも
知れんけど・・・アイツ女と同棲してるで』

『最悪・・・』

『酒飲むと誰でもいいからヤリタイという奴やったから、元カノな
ら簡単と思われたやる（笑）』

『絶対 アイツだ犯人！！』

『まあまあ穏やかに・・・俺からキツチリゆうーといたるわ（笑）』

『アイツ許せない・・・殺したい・・・』

『女の子がそんな言ったらあかんで・・・それに美人さんが台無しやで・・・ワシに任せろや・・・ニヤリ』

『私、哀川さんを誤解してました。鈴木さんの言う事を信じちゃってて・・・』

『えーよ（笑）人はちゃんと本人と話さないと分からない事も多いでな・・・』

『ですね・・・』

次のプランへ移行するために、京介はさりげなく、栗田にメールを送信した・・・

橋田もプランを進行していた・・・

『京ちゃん、マジ真矢、可愛いやん！本気になっていいか？』

橋田はニヤニヤしながら言ってきた

『そうか？真矢、橋田は最高に良い奴や付き合えば？（笑）』

『・・・』

真矢は自分が試されてると思った・・・

『どんな風にいい人なんですか？』

『この世にこんないい奴がいるのか？と思いつくくらいや』

『そつなんだ・・・どうしようかな・・・』

真矢は京介を横目で見ながら言っていたようだが、敢えて京介は無視をした

「カリーン」

『...』

栗田の登場・・・のり子のケアが役割だった

何重にも重ねたプラン・・・に信じると言う信憑性が増す事だろう・・・

京介はのり子の席の隣を開けた

『のりこ〜！会いたかったでえー！』

『今日は忙しかったんじゃないんですか？』

『お前に会いたくて放り投げてきたわ』

『やあだあー栗田さんったら』

不安の原因が明確になり、心を許し、体を許している栗田の登場は
実に効果的・・・

そう考えていた

更に『黒田 聡（原作、友人？）』へメールを送信・・・

黒田とは、京介の舎弟分で、無所属（組）の人間であった

過去に京介と揉めたことがあり、自ら脱退、それからというものの、
己を「哀川組」と言い舎弟分をしているような男だった

京介は、黒田を影武者や危ない橋を渡る時によく起用していた、表の商売としては用途は無いが、

裏稼業なら黒田程信用のおける人間はいなかった・

15分後、黒田到着・

『じつちや』

『どーも初めまして』

『紹介するわ、コイツは黒ちゃんやよろしくな』

『座れ座れ』

「持ってきたか？」

「ええ・・・例のXドラックですよね」

黒田は薬マニアでよく自作で薬を作っては他人で試すと言う遊びをやっていた

飲みはどんどん盛り上がり、真矢を始め、のり子と他のホステス達も酔ってきているようだった

京介、栗田は素面のまま

橋田はホロ酔いを設定

手筈通り、黒田は動き始めた

『おっグラスに酒入って無いじゃん・・俺作ってやるよ・・』

『あっ！すみません、私が作ります』

『いいからいいから、休んでおいてよ』

『じゃ、お願いします』

何気ない会話の中プランに入った

何名かのグラスを持ち水割りを作り始めた

作り終わるとグラスを戻した・・・

のり子、真矢のグラスに「？ドリンク」を混入させていた

数分後、メールを見るふりをしながら、黒田の携帯を鳴らす京介

「ピピピピ」

『ちよっとすみません』

席を離れ電話で会話をしているふりをする黒田・

『・・・はい・・・あつすみません　すぐ行きます。』

席に戻ってきた

『京介さんすみません。仕事入ったので帰っていいですか？』

『仕事かぁ・・・しゃーないなあ・・・（笑）ほな気を付けてな・・・ニヤリ』

『ええ・・・ニヤリ』

栗田と橋田には事前に伝えていた

栗田はグラスを持ち

『のりこ〜乾杯やあ〜』

『ワシ等もやあ〜』

そして全員で一気・・・。

一時間後

『おう！お前等 今日はまだまだ飲むで！』

『おおおお！』

栗田、橋田、真矢、のり子は声を上げた

『今日は俺の行きつけにするか！』

『行きたい！行きたい！』

真矢はここぞとばかり京介に密着してきた

真矢を振り払い、行きつけのパブに電話・

「プルルル・」

『ワシや』

『まいどどーもー』

『店、暇か？』

『お客様さん……0……です。お待ちしてます（笑）』

『そうか・・ほんだから今日は貸切にしてな・・』

『いや・・それはあ・・』

『会計いつもの3倍払うがな・・人数は5人や・・お前入れて6人か』

『かしこまりました』

金に物を言わせまたとはいえ、パブ屋など他愛も無い金額・・

プラン優先で考えると安いものだった

『貸切にしたで！皆、行こうぜ！』

栗田が隣に来た

『作戦成功やな・・（笑）』

『今日でのり子とも切れるな』

『ああ、肩の荷がおりるよ（笑）』

橋田が次の指示を聞きにきた

『俺はどうしたらいい？』

『とにかく酒を飲ませろ』

『簡単やな』、*（ ）』

『じゃあ 行くか・・・』

5人で行きつけのパブ屋「141」へ向かった

o

「裏切り」 16

パブ「141」に着いた

「ドガッ」

ドアを蹴りながら店内に入った

『まいどです。京介ちゃん。貸切ありがとうございます』

『（、、*）ニコッ・・・馴れ馴れしいんじゃアホ』

『すみません。調子に乗りました』

『余計な事、語らんで・・・さっさと酒もって来いや・・・』

「141」のマスターはイソイソと酒の準備を始めた

狭いBOX席に座った

向かい合わせに三人、二人で座る事にした

配列にも意味があった

京介、のり子、栗田

向かいは

真矢、橋田

のり子は真矢よりは酒が弱い・・

「?ドラック」の効果効き、目が虚ろになり、左右に揺れている
感じだった

「黒ちゃん・・効き過ぎやで・・・」

そうも思ったが、公衆便所に情けは無用と感じエスカレータープラン
を実行する事に・・

一方、橋田は、真矢に「金」をチラつかせると言う、いやらしい作
戦に移行

『真矢、好きなもん何でもござるわ、今後はワシの女になれや』

『えー。今日会ったばかりだしそう言うのは・・・』

京介に助けの眼差しの真矢・・・

当然シカトの京介・・・

『お待たせいたしました』

マスターは酒を運んできた

『遅せーよアホ！早くしろ！』

『ええ、ただいま・・・ニヤリ』

意味不明な笑顔で自分の分の酒も持ってきて皆で乾杯

6人で再スタート・・・。

乾杯の音頭で再び、エンジンの掛かる皆に、のり子も無理矢理乗ってきた・・・

目が虚ろになりながらも、はしゃぐのり子・・・

栗田に目配せをした

『のり子、大丈夫か？眠いんか？』

『んなわけないじゃん！飲むよ〜』

『ほな・・・一気やなあ（、、*）』

京介の一声で全員で一気

それから全員、早いペースで酒を進めた・・・

・
・
・

完全に眠そうな真矢を見て京介が声を掛けた

『真矢・・・もう限界か・・・橋田が可哀想やろが・・・』

『もう・・・無理・・・限界だよ・・・京ちゃん・・・』

『ほな・・・帰れ・・・』

『・・・』

『京ちゃん、ワシが真矢、送ってくるわ、また戻ってくる』

『悪いな・・・橋田・・・真矢・・・そうしろ分かったか？』

『えっ・・・でも・・・のりちゃんは？』

プラン通り栗田は・・・

『のりは俺と帰るもんなあー』

『づん！』

『京介ちゃんが そうしろって言うなら・・・』

『早く消えろ』

『何よ・・・消えろって・・・』

『何や？・・・』

『なんでも・・・ありません・・・』

真矢は不満そうな顔をしながら橋田と店を出た

一方、マスターは調子に乗り飲み過ぎたせいかただのエロオヤジと化していた

『いやあ〜、のり子ちゃんセクシーだよねえ〜』

『おっ！良い事言っねー！マスター！』

食いつく栗田

『のりちゃん人気者やなあ〜』

馬鹿な酔っぱらいをおだてる京介

『やあだあ〜もう〜照れるじゃーん』

照れて調子に乗る、のり子横目で見ながら、マスターの近くに移動する京介・・・

カラオケを頼むフリをしながら・・・

『マスター、のり子、タイプ？』

『いっすね〜やりたいですね〜（笑）』

『その願い・・・叶えたるわぁ・・・酒をどんどん飲ませーや・・・ニヤリ』

『いや 冗談ですよ！冗談！！』

『ええって、ええって、やったらよろしいやん・・・』

『またまた・・・京介ちゃんったら』

そう言いながらも・・・のり子に酒をガンガン飲ませるマスター

次第にのり子は酒に漬れ眠り始めた・・・

黒田の用意した「？ドリンク」の効果が強かった

『さてと・・・実行開始やな・・・ほんま時間取らせやがって・・・このブスが・・・』

のり子の顔に軽く張り手を食らわした

「パンッ」

「んん・・・」

のり子は声を上げるも深い眠りに落ちていた

「効き過ぎると言いつくらい効いてるわ・・・黒・・・ニヤリ」

「ガラン」

ドアの開く音と共に橋田が現れた

『ほんまにただ帰してきたで・・・これで良かったんか？』

『シヨンボリしとったやろ？』

『うん』

『優しくしてやったか？』

『おう・・・キスして乳揉んできたで』

『 やっても良かったのに（笑） まあ・・・順調やな 』

『 マスター！ポラロイドカメラある？ 』

『 ありますけどフィルムが・・・ 』

『 これで買って来いや・・・ 』

栗田が金を渡すとマスターは急いで買いに出かけた

マスターは・・・何かが起きる・・・そう感じていた

「京介ちゃんがあのノリと言う事は・・・ニヤリ」

数分後

使いパシリのマスターは息を切らしながら戻ってきた

『京介ちゃん、お待たせ！はあはあ』

『水でも飲んで落ち着けや・・・なあ・・・主役！』

『えっ？主役？またまたあー（笑）』

『おい、京介、どないするつもりや？』

『栗田、飛び入り出演者や・・・』

『マスター、のり子、絶対に起きひらから取りあえず下着姿にさせてくれ・・・』

『やばいよー それは・・・不味いつしょ??』

『ほんま 大丈夫やから・・・多分・・・記憶も無いと思うから』

『飲んで記憶を飛ばすタイプ?』

『そんなところや(笑)』

『じゃあ、試しにキスしてみえていいですか?(笑)』

『なんでやねん・・・まあ、好きなようにせーや(笑)』

マスターはインインとのり子に近寄り唇を奪った

「ブチュウ……ペロペロ……」

振り返り……」ニヤリ

『はよ、脱がせろや』

『起きるなよ〜起きるよ〜』

そう呟きながらのり子の服を抜かせ下着姿にした

『マスター、アソコの臭いかどうか嗅いでみたら？（爆）』

栗田がそう言つと

『俺・・・臭いフェチなんですよ』

京介はのり子に近寄り大股開かせた

そしてクロツチをチエツク。

『店長！股に顔突っ込んでやらな失礼やる』

『いやあ〜不味いよー大丈夫？大丈夫？』

マスターは股ぐらに顔を当てて・・・一言・・・

『酸っぱいですね・・・』

『ほら 早く脱がしてやらな あかんやろ（笑）』

『不味いよ〜』

と・・・言いつつも全裸にさせられるのり子・・・

店長の股間は今にもはち切れそうになっていた

『お前も裸になれや（笑）』

橋田がそう言つとマスターは

『えっ？俺も？・・・分かりました、やらせていただきます。m（
——）mペコリ』

『ワシは約束を守る男・・・マスター』

マスターはのり子の股間をジロジロ見た上で「ベロンベロン」舐めまわしていた

『ああータマンネ』

マスターは自分の「物」に唾液をタツプリ付けてのり子の前に仁王
立ちした・・・

o

「裏切り」 完結

のり子の下半身の前に仁王立ちのマスター……

マスターの一物も仁王立ちしていた

「じゅる……」

唾液を掌にだし、一物に塗りたくった……

マスターは完全に己の世界に入り見物者がいるのを忘れるくらい
のり子の体に夢中になった

一物をを割れ目にそって上下運動を始めた

『おうわあゝ滑るゝ、滑るゝ入っちゃうよあゝ』

一人で盛り上がるマスターを京介はじっと見ていた

「やはりこいつも本能には勝てないか・・・」

マスターは自分の体を焦らしながら、簡単に挿入はせず、上下に何度もこすり付けていた

『あああああ・・・限界かなあ・・・』

マスター・・・振り向いて一言・・・

『大丈夫かな？バレないかな？』

『ニヤリ、大丈夫、大丈夫バレへんて（笑）』

『よし！』

マスターはのり子の両足を開脚させ一物を宛がった・・・

『ヌルン・・・ズボツ!!』

『あああ・・・気持ちいい』

『あああ
いいいい・・・タマンネ』

根元まで挿入し乳を掴みベロンベロン舐め回すマスター

その姿は尋常ではなかったが、反面とても滑稽に見えた

『店長!どっ?いい?』

『最高だよー京介ちゃん・・・ああああ』

『そうかそれは良かったな』

携帯のカメラを起動・・・

「カシャ!カシャ!」

『ちよつとあ そ・それは・不味いんじゃ・あぁあ』

そう言いながらも一物はのり子の中をかき乱していた

その姿は、流石、年の功、「匠の業」であった

「これでこいつが口を割ることはないだろう・・・」

『あぁあ〜イキそうだあー もうダメダ〜』

挿入してから10分、マスターは絶頂を迎えようとしていた

『はよ、イケや・・・』

『顔でいいかなあ？はあはあ』

『中に出せや・・・』

『えっ？中に？』

『NGって言ったか？』

『まあ！いいよね！』

マスターの腰使いが激しくなり、のり子の体はBOX席のテーブルで上下に激しく揺れた

『くくくく・・・くくくく・・・』

腰をプルプルと震わせながらのり子の中に放出したようだった

『気持ち良かったあゝ 中はイイねー』

のり子の股間からは意気のいいマスター汁が流れ出ていた

『マスター、のり子には黙っててやる安心しろ』

『はい、お願いします、そして又やりたいです』

『取りあえず、その汚物みたいな汚い股間綺麗にしてやってや（笑）』

『畏まりました』

マスター店のおしぼりを数枚持ってきて、股ぐらにしゃがみ込んだ

股間をジロジロ見ながら股間を拭いていた

『マスター、パンティー記念に取っつけ、それが再度合体の有効子ケツトだ』

『分かりました。ニヤリ』

その後、以前寝たままの、のり子をかっぎタクシーに乗り込んだ

帰る場所は・・・当然のり子の部屋

更なる打撃を与えて「のり子」への処刑を終了することになっていた

『運転手さん

町のコンビニ分かります?』

『はい』

『じゃあ・・・そこに取りあえず寄って・・・』

後部座席に配置は

京介・のり子・栗田

そして前の席には橋田だった

タクシーの中でも眠り続けるのり子・・・

タクシーはコンビニに着いた

『いいですか？』

『ええよ、悪いね』

『いえいえ』

『橋田、悪いがタバコとお茶2本こつてきてや』

『おつ』

「ボタン」

橋田がコンビニの中に入っていった

『栗田、ロイツの片足持ってや』

栗田は無言でのり子の右足を自分の膝の上に乗せた

『ごっちはわしが・・・』

のり子の左足は京介の膝の上に乗せられた

『買ってきたで』

「バタン」

買い物袋を受け取り一言・・・

『運ちゃん、寄り道させて悪かったね・・・はい・・・お茶』

『いやいや、すみま……』

運転手は振り向き お茶を手にしようとした瞬間固まっていた

パツクリ開いて穴まで見える、のり子の地獄絵図が目飛び込んでいた……

『あ……あの……お客様……丸見えなんです……』

以前……睡眠中の、のり子……

『あ？見えちゃった？ ごめんやで（笑）汚くて！ さあ行って！』

タクシードライバーはその後、ルームミラーでのり子の顔を眺めていた

『お待たせいたしました』

タクシーがのり子の部屋の前に着いた

『運ちゃん悪かったな、汚いもの見せて、釣りはいらんで』

『いやあくすみません（笑）』

運転手はニヤニヤしながらその場を去った

『どじするん？』

『中に入るがな』

のり子の鞆をから鍵を取り出した

「ガサゴソ・・・あった」

「カチカチ・・・カゴン」

部屋に入いった

『京介大丈夫か？』

橋田が少し心配げに言った

『アホ、この状態で外に置いておくほうが危険やるが・・・』

『確かに・・・(爆)』

部屋に入ると、脱いだ服は脱ぎっぱなし洗濯物は山積み

部屋の中はゴミ臭いと汚物臭いが漂っていた

『栗田、橋田、こいつを全裸しておいて』

『ウケるし（笑）』

その間に京介はのり子の洗濯物をチェック・・・

「汚ったねーな・・・」

ブラジャーは汗臭く、パンティーはガッチリとオリモノが付着していた

トイレを開けると、三角ボックスが閉まらないほどのナプキンが突っ込まれているようだった

「身なりだけ綺麗にしても、所詮、この程度か・・・公衆便所らしいな」

部屋に戻ると二人はのり子を全裸にさせた後、興味がないらしく煙草を吸いながら雑談をしていた

『さて、起きないみたいやから次のプランと行くか』

『なにすんねん？』

『まあ見とけや（笑）』

まず、のり子のへ部屋にある飲み物は全て処分し

買ってきたお茶1本のみ残す、

そのお茶を半分捨て、その中に放尿・・・

特性『京ティー』を作り上げた

『次は・・・』

洗濯場に行き未洗濯パンティを持ってきて

のクロッチ部分をお湯で少し濡らし始めた

枚数は全部で6枚

お湯で柔らかくなったオリモノを指でこね

のり子の顔に擦り付けた

「ぬちゃ・・・ズリリ・・・」

鼻や唇を中心に何度も擦りつけた

のり子は時として渋い顔をしてはいたが起きることはなかった

その後、顔だけではなく体にも拭いつけた

そして未洗濯の山を身体にぶっ掛けて部屋を後にした

『あーおもろかった』

『せやろ』

『しかしオリモノ捏ねるとはやるな(爆)』

『指が今でも臭いそうや(爆)』

・ こうして、殆ど遊びのようなのり子への教育的処刑が終了された・

o

真 公開処刑 第二章 「悲劇」

のり子への教育も終わり次なるプランを発動させる準備に入った

のり子のような邪魔くさい女は下系の制裁が一番効果的・・・

ベロンベロンマスターも一発抜けて良かったであろう・・・

そう感じていた

雑魚女（のり子）へ費やしていた時間の間も鈴木 of 監視活動は行われていた

先日、「クルーゼ」に現れた「黒田 聡」事、別名「？」が行っていたのだった

黒田の報告によると、鈴木動きは、あまり表だったものではなかったようだった

辻谷の舎弟と青山を盾にし、用心しながら行動しているようであった

この二つの後ろ盾を使いながら、京介の顧客を訪問して歩く・

勿論、仕事に繋がることはあまりなかったようだが、

ここで奴らの狙いは「顧客」や「金」ではないと言ったことを京介は読んでいた

「動いているぞ」と言う意思表示を見せたいのだろうと判断した

時折、顧客から入るタレこみにはこの様な事を鈴木が言っていたと聞かされた

『哀川、最近来てますか？』

『最近見ないね・・・』

『気を付けたほうがいいですよ、アイツやばい連中に目付けられますからね（笑）』

敢えて、客先でこのような事を言う辺りが実に愚かである・・・

「鈴木・・・お前はいつまで経っても小物やな・・・」

鈴木を引き金に根元まで辿り着く処刑が幕を開けようとしていた

数日後・・・

鈴木はある作戦を実行し始めた・・・

それはとても幼稚ではあったが、多数を巻き添えにする打撃となっ

た・
・

「これは鈴木の家でない」

京介は即座にそう感じた

・
・
・
・
・

鈴木は京介によく連れて行かれたキャバクラに現れた

その中のメンツに「青山」（鈴木の子会社の親玉）がいた

キャバクラの黒服は京介の会社の従業員と判断しフリーパス

店自体はともルールも厳しく、サングラスNG、暴力団風の方はお断りという店だ

青山はガタイも大きくどう見ても暴力団風なのだが、京介の客と見なし入店させたのだった

キャバクラ

「ギャラリーフェイク」 VIPルーム

『おい、鈴木、哀川の指名している女は分かるか?』

『はい、分かります』

『そいつを指名しろ』

『分かりました』

青山は京介の指名するキャバ嬢を指名した

『じんばんわ（*、*） ユリア（源氏名）です』

『ユリアちゃんって言うのか・・・君、可愛いね・・・』

何気ない会話をしばらく始めが、一時間もすると青山が行動に出てきた・・・

『ユリアちゃん、最近、「哀川 京介」、見かけるかい？』

『いえ来てませんが、京介さんのお知り合いの方ですか？』

『そつだよ、知り合いなんだ・・・ニヤリ・・・』

『そ．．．そうですね、今度一緒に来てくださいね』

『それは無理だな．．．』

『どうしてですか？』

『あの野郎は．．．裏切りものだからね．．．君の事も裏切っていると思うよ．．．クッククク．．．』

『ええー信じられない、とっても優しい人ですよ』

『それがアイツの手口やねん・・・』

『でも・・・ユリアには優しいけど・・・』

『哀川が言ってたんやけど・・・君はこつこついう事もOKなんだよね？』

ユリアのスカートの中に手を入れてきた

『きゃッ！ちょっと！辞めてください！いやだ！』

『喧しい口やな』

「パーン」

ユリアの頬に一発ビンタをかまし更に胸を揉みはじめた

店のボーイがVIPルームの小窓から見て数人が入り込みユリアを
青山から引き離れた

『お客様！そういう店じゃありません！』

『なんやとコラッ！』

青山は大きな声を出しながら店内で大暴れした

『哀川の紹介で来たんじゃ！』

ボーイ達に囲まれ揉み合いになった

鈴木、青山は抵抗しながらも店の内部を破壊し店を後にした・・・

・

・

・

「天国にあなたが一番近い島」
（京着）

『はい』

『 哀川さん困りますよ！変な人紹介しないでくださいよ！』

『 はあ？誰も紹介などしてへんで』

『 店が大変な事になりましたよ・・・』

『 何がやねん？』

『鈴木さんがお客を連れてきて、そのお客さんが大暴れして店を滅茶苦茶にしていったんです・・・』

『鈴木？あいつはうちの会社1年以上も前に辞めて今は付き合い無いです・・・』

『えっ？そうなんですか・・・うわぁ・・・困ったなぁ』

キャバクラの店長は困り果てた声で言っていた

『客と来たって言ってたな・・・どんな奴と来た？』

『体が大きくて、そうですね・・・声も大きかったですね・・・』

『名前は？』

『確か、青山さんと言っていましたね・・・ちなみに指名はユリアちゃんでした』

『青山か・・・アイツならやりかねんな・・・』

『ユリアちゃんも顔を叩かれてスカートの中に手を入れられたと泣いていました』

なるほど・・・あくまでも、周りから攻めて来るといふことが・・・

直接攻撃ではなく、周りを巻き込みながら相手の動きを狭めていく

怒りの矛先はすべて「京介が原因である」という風にかけていく

「辻谷らしいプランや・・・」

『店の修理代金とケジメはキッチリつけたるさかい、ちと時間くれ
や』

『お願いします・・・あと、店の方も出禁としますので・・・』

『近いうちの連絡する・・・』

「ピッ」

その数分後、キャバ嬢「ユリア」から連絡が入った

京介は青山達の会話や行動を事細かく聞き出した

ユリアは泣きながら京介を信じると連呼していた

『そうか・・・恐い思いさせて悪かったな・・・』

『うづん・・・もういいの・・・でも、あの人達なんなの？従業員じゃないの？』

『アイツらは、ただの愚民だ・・・ワシが鉄槌を下してやる・・・心配するな、そのうちSEXしてやるから』

『えっ・・・あ・・・うん・・・』

電話を切った

「この程度で、ワシを本気にさせようってか？・・・甘いな・・・青山・・・お前はもう既にこちらの術中じゃ・・・ニヤリ・・・」

・

青山は翌日、関東入りし、辻谷に自慢げに昨日の出来事を話した

その話を辻谷は大笑いしながら聞いていた

この話は全て「有本」が教えてくれた

青山の関東入りで有本も辻谷に呼ばれその場にいたと言っことだった

「哀川の評判はガタ落ちですわ！ガッハツハ」

「今頃、震えて逃げる準備しとるな、アイツ」

「ガッハッハ」

『だとよ、哀川、お前大丈夫か？』

『何がですの？』

『マイシムハコトコトナ...』

『まあ、直接何をされたわけでもないのだから(笑)』

『まあ、気を付けるこちやな...』

『はい、おおきに...』

•

有本は京介の「親」みたいなもの、どこまで信用していいのかわかりはしない・・・

だが、こうして内部の情報を時として教えてくれていた

京介にとっては害はない、人物であった・・・

o

「悲劇」 2

一方、青山が関東入りした後の鈴木の動きと言うものは

ほぼ毎日パチンコ状態であった

青山と共に関東入りしてしまった、辻谷部隊、

辻谷、青山の考えとしては、これくらいやれば、暫くの間は「哀川」
はおとなしくしているだろう・・・そう考え双方で関東入りしたのだ
ろう・・・そう京介は読んでいた

鈴木は監視役がいなくなり好き放大に動いているのだろう・・・

「今が・・・チャンスやな・・・」

京介は鈴木に対し、第一プランを発動することにした

鈴木は行動を監視することにした

数日後、鈴木はいつも着て歩いているボーダーシャツではなく、ス
ーツを着て車に乗り込んでいた

「ほう・・・今日は仕事か・・・」

鈴木の向かう先の顧客などたかが知れている

京介は鈴木に向かう方向だけを確認し、車を取り換えに行った

「ブーン・・・」

・ ・ ・ ・ ・

「キキッ」

駐車場に並ぶ数台の車

鈴木がすぐ気が付くように、トヨタ車の車に乗り込んだ

「気付いてくれよ・・・鈴木・・・ニヤリ」

「キュルルル・・・ブウン」

京介は携帯を取り出した

「プルルル・・・プルル」

『もしもし』

『どうも、哀川です』

『しばらくだね』

『すみませんでした、実はお聞きしたいことがありますねん』

『なんだい？』

『今日、そちらに鈴木から連絡入りませんでした？』

『あ・・ああ・・来るとか言ってたけど・・まさか、それに合わせて来るとか辞めてくれよ・・困るよ、そういうのは』

『まさか（笑）行きませんがな』

『じゃあなんなんだ？』

『いやあ・・最近、よくない噂を聞くもんで、変な商材を出して来たら注意して欲しいと思いましてね・・』

『そうなのか、それは一体なんなんだ？』

『見れば分かりますがな・・・』

『わ・・・分かった・・・気をつけるよ』

電話を切った

「やはり、あそこか・・・」

京介は高速に乗り、客の店へと向かった

「ブオオ……………」

「アツム」

『もしもし』

「黒ちゃん（黒田 聡、通称 友人？）、ワシや」

「どうも、どうしました？」

「プランを発動させる、いつでも動ける準備だけはしておいてくれ」

「今回も面白そうなプランですか？」

「少し危険やけど、まあおもしろいんちゃう（笑）やるやる？」

「ミレ」

「またな
」

「はい」

「まあ、そういふことは
」

「勿論です・・ニヤリ」

「ヤリ・・・さて、この辺でええやる」

京介は高速道路を下りて、一般道を走り始めた

鈴木は高速代をケチる男、従業員時代は、「タイムイズマネー」と教えてもなかなか言うことをきかなかった

当然、今回も「行き返り」は下道を走るに違いなし・・・そう睨んでいた

スピードを落とし、ゆっくりと客先へ向かった

数分後、

客先の近くで数十分時間を潰し、車を再度走らせた

すると、京介の予測通り、鈴木車が客先から出てきた

京介は鈴木に気付かぬふりをしながらすれ違った

「鈴木は必ず尾行してくる」

そう睨んでいた

鈴木は車がすれ違う時に咄嗟に気付き、シートに深く体を沈め、手で顔が見えないようにガードしていた

ルームミラーで見ると、遠ざかっていく、鈴木の方はウィンカーを点け、路肩に入り Uターンをして京介の後をついてきた

「フツツ・・・青山に手柄を褒めてもらいたいと言ったところか?・・・ニヤリ」

先程まで鈴木が居た、客先へ車を入れた

鈴木は当然、自分が行った先、故、気になって仕方がない……

現在、何食わぬ顔で客先へ現れる京介が気になる

隙あらば、何か良いネタを掴み、辻谷、青山へ情報流し仕返しを企てたい……

そう考えるに決まっている……

京介の予測は絵で描いたように的中した

「どれ・・・期待に込めてやるか・・・」

鈴木が存在に全く気付かないふりをしながら、客先の店内へ向かうふりをした

建物の中を抜け、裏口から店の外へ出て駐車場の車の陰に身を隠した

453

鈴木は京介のとは距離を置き、暫くすると車を降りて辺りを見渡していた

携帯を取り出し、誰かに電話をしながら京介の車へと近づき始めた

鈴木に気付かれぬよう京介は自分の車の近くへ移動

鈴木の電話の音が聞こえてきた

『ええ、いませんね。鍵ですか？』

「ガチャガチャ」

ドアノブに手をかけて確認していた

『閉まっていますね・・・どうしますか窓でも割りますか?』

「何・・・帰りが大変やないか・・・させてたまるか」

突然、鈴木の前に現れた

『なんや・・・鈴木やないか、誰と会議や・・・？』

鈴木は慌てて携帯を切った

『お前、ワシの車に何か様でもあんのか？次、おつたら殺す言つたよな・・・ギロリ・・・』

鈴木は何も言わずに・・・猛ダツシュ！！

「そう来たか・・・」

鈴木は自分の車に乗り込もうとして鍵をポケットからだそうとしていた

だが、慌て過ぎているために、鍵を地面へ落下・

鈴木は京介に 確保

『おい、何、逃げとんねん、お前の電話の会話、全部聞こえてたで・
・（笑）』

『うっ……うるせーよ！ おめーなんかもう恐くねーんだよ！』

『ほう……今は恐くないね……前は恐かったんか……クツクツク……』

『う……うるせえ！』

鈴木は京介の肩を突き飛ばしてきた

「ドカッ！」

『コラ……何やらしとんねん……骨、ヒビいったわ……』

『うっ……うっ……うるせえー!!』

鈴木はいきなり殴りかかってきた

『うおおお……!!』

京介はパンチをかわし、腕を押さえた……

『ニヤリ……でっ?次はどうするつもりや?』

『放せ！はなっ・・・』

「バギヤ！」

鈴木の髪を掴み運転席の窓に激突させた

『なかなか頑丈やな・・・お前の車の窓・・・』

「ガン！！ガン！！」

鈴木はなすがまま窓ガラスに数回叩きつけられていた

『お前、窓ガラス割る言うてたな・・・もう一回いくぞ・・・』

そう言い力いっぱい鈴木のを髪を掴み、窓へぶつけようとする

『じゃ！社長・・・待ってください・・・』

『待てへん・・・』

「バギヤ！」

少し力を緩めガラスへ直撃

髪を放すと鈴木は地べたへ這いつくばった

顔中、血だらけになり、前歯が折れていた

顔もとへしゃがみ込み・

『鈴木・・今なら許してやる・・いい加減目を覚ましたらどうや？
青山や辻谷が本気でお前を抱えるとでも思っているのか？』

『・・・』

『お前等、この間、キャバクラで色々やらかしたみたいやな・・あれはワシへの嫌がらせのつもりか?』

『自分は知りません・・・関係ありません・・』

『それが・・答えと言つことか・・』

倒れている鈴木の髪を掴み引きづり車のドアへ強打

「バゴオン！」

「あがああーあがああー」

『言つたよな？次、おうたら殺すつてな・・・覚悟・・・出来とるんやろねな・・・？ワザワザ・・・尾行までしてきて・・・ほんま 命知らずや・・・』

『あがぁー あがぁー』

『青山の指示か？』

『・・・』

『もう一発・・・欲しいか？』

『青山さんかどうか言えませんが関連です・・・』

『青山かどうかは言えない？それは青山言ってるようなもんやで・・・』
鈴木・・・』

『本当に勘弁してください！すみませんでした』

「またか・・・」

都合が悪くなると平謝り・・・

そこにあるのは本心ではなく、その場を何とか切り抜けよう・・・

何とか助かりたいと言つ意思のみ・・

こんなくだらない人間に育ててしまったのか・・・

虚しさを感じる瞬間だった

『お前・・ほんま、情けない奴やな・・・』

京介はタバコを取り出し、火を点けようとした・・・

すると鈴木はこれ見よがしに起き上がり京介を両手で突き飛ばし、地面に倒した

「ズサア・・・」

『ええ根性しとるやないか・・・』

鈴木はこの隙しかないと判断した

急いで車に乗りドアを開けたままバックで急発進

「ギユウウウウウ……」

「なんや……アイツ……どんだけ必死やねん」

鈴木は慌てるように車の体制を整え一目散に消え去った

「甘いな・・・その甘さが仇となる・・・ワシならひき殺してから逃げるな・・・」

その数分後・・・

京介の携帯が鳴った

『天国にあなたが一番近い島』 (京着)

「なんや・・・この番号・・・」

見慣れない携帯番号が表示されていた

『誰?』

『コラッ? 哀川! 己、何さらしとんねん?』

『はあ？どちらさん？何ゆつてますの？意味分からんし・・・』

『青山じゃ！・・・』

『青山？知らんなあ・・・そんな雑魚』

『ええ度胸やなあ・・・貴様・・・』

『おつ、言われます……ニヤリ』

電話の主は青山だった・

鈴木が今起きたことを直ぐに青山へ報告していたのだった・

「クッククク……予定通りの展開や……」

o

「悲劇」 3

青山の脅しと思われる電話・・・

全て京介の思惑通りの展開であった

鈴木密告により、親玉の矛先が完全に自分へ向く・・・

最初からここが狙いであった

『お前・・・舐めとんか？』
『コラ』

『もしかして、辻谷さんとこの青山さんでっか？』

『そつや！お前、分かつとってゆーとるやろお？あお』

『いやーすみません。分かりませんでした・・・それで何のようですか？』

『お前、うちの若いもんに 手だしたな？覚悟はあるんやろな？』

『若いもん？誰の事言つてはりますの？・・・あつ！もしかして、まさかあんな役立たず使つてる訳ぢやいますやんねえ？』

『なんやとコラ！』

『あんな小物、使いパツシリにもならんですわ（笑）えっホンマですの？』

『度胸だけは褒めたるわ・・・小物でもな、お前よりマシや』

『そうでっか』

『お前は、弱い奴にしか強く無いもんなあ？』

『言ってる意味がわかりませんが・・・鈴木の場合でっか？』

『他に何があんねん！』

『ああ、いわせましたよ。ワシの車に悪戯しようとしてましたからね・・注意しただけですわ・・教育ですわ』

『教育やと？コラッ・・己も教育しなおした方がええんちゃか？』

『そうでつか、まあ、鈴木程度の人間など困うとろくな目にあいませんよ・・奴は裏切り者ですからね・・ニヤリ』

『裏切りもんはお前やろが！鈴木はお前に酷い目に合わされたと泣いてたわ、お前をどうしても許せないとな』

『そつでつか、それで?』

『おのれ・・・的掛けたるからな・・・覚悟せいや』

『言わせ貰いますけど、ワシは迷惑掛けるような事はしてへんし、むしろ今回の事件に対して一人で責任を取ったはずですがね・・・』

『誰がそんなことを信じる?鈴木が全部話してくれたわ、お前の本音も何もかもをな』

『青山さんに誤解を去れるのは残念ですわ、鈴木のお車に乗らないほうがイイですよ・・・あいつ嘘付きですから、現に今日の行動も青山さんの指示で動いていると口割ってますからね(笑)』

『嘘ばかり並べよって・・・この糞ガキヤー 殺すぞ!!!』

『ほんまですわ、鈴木に聞いたらよろしいですわ』

青山は完全に頭に血が上っていた

電話を切った後、必ず、辻谷に報告するだろう・・・

それを聞いた、辻谷は青山に「哀川」を「完全に潰せ、理に適わないときは殺せ」と指示することだろう・・・

そうなって貰わないと面白くない・・・

いつまでも鈴木クラスで遊んでいても末端への処刑は終結を向かえない・・・

青山は脅迫と思える言葉を騒ぎ立て一方的に電話を切った・・・

「さてと・・・これで歯車が回り始めるな・・・」

だが、辻谷からの指示が出るとなれば、流石に・・・多少のセキユリ
ティは張らないと不味い・・・

辻谷や青山が動く前に、京介は大事ものは手の届かない場所へと移
行した

そして、今後の流れで「栗田」「橋田」の投入は本人たちの生死に
関わりかねないと判断し

プランから外すことにした・・・

数日後

京介は考えてた・

何故、社会的責任を取った上に的にされるか・・。

完全に中で（留置所）うたって来ていると思われているのはなぜか・

自分が逮捕された後、その地区での事件は一件も発見されていない

だが、同じような事件が他県で勃発していたの事実

その件には一切関わってはいないが、詳しく調べてみると、辻谷一派の人間が数名逮捕されていることがわかった

辻谷はその逮捕劇は哀川のチンコロが原因であると踏んでいると言
う事だった

また、なぜ、そう思い込んだのかと言うと、原因は鈴木にあった

鈴木は自分が哀川の後釜に着きたいと考えていたことが分かった

この情報は全て「黒田 聡(?)」が調べ上げていた

「しかし・・・随分と都合の良いことばかり考えたものだな・・・
鈴木・・・」

「・・・」

「もう少し・・・あの雑魚で遊んでやるか・・・ニヤリ」

鈴木の潜むアパートへ向かった

鈴木的所有する車はないが部屋の電気がついていた

？が調べ上げたデータを取り出した

「090 - - xxxxx - xxxxx」ね・・・ニヤリ

鈴木と同棲する女の携帯に電話を入れた

「プルルル・・・プルル」

『はい・・・もしもし・・・』

女は見たことのない番号に不信感を抱いているようだった

『もしもし、佐藤 直子さんですよね？』

『そうですね・・・お宅は誰ですか？』

『直子さんは・・・鈴木 さんの彼女だよね？』

『あっ・・・はい・・・そうですけど・・・』

『鈴木さんね・・・お金返してくれないんだよねえ・・・この間、その件で話し合ったら、あんたで払うって・・・言ってるんねんけど・・・それでよかったよね?』

『私で?どういう意味ですか?』

『あんたが身体で払うんや・・・分かるやろ?』

『えっ?えっ? 聞いてない!そんなの知りません!絶対に嫌です
『!』

『あ・・・そう・・・でも、今から迎えに行くから・・・』

『困ります！ 私、関係無いです！嫌です！嫌です！うわあああああ
あん（泣）』

これは女を追い出すための策だった

直接、鈴木に打撃を食らわすのに、このブスは邪魔だと判断したのと

これ以上、被害を拡大させないためでもあった

『姉ちゃん・・・彼氏があんたで払う言うとんねん、シツカリ股使っ

て働いてもらおうで・・・』

『いやあ・・・、なんでなんで私がこんな目に合わなきゃいけないの・・・!』

『ほんま・・・可哀想やな・・・でも、すぐに慣れるって・・・今日取りあえず、基礎を教え込んだるわ・・・ヒッヒッ』

『お願いです助けてください!お願いします!』

『そんな言われてもなあ・・・』

『今ある、お金全部渡しますから！それで許してください！』

直子は何とか自分だけでも助かろうと必死だった・・・

「所詮、人の信用などこの程度・・・」

そう思いながら直子に提案した

『あなた・・・鈴木の件に関わりたく無かったら今すぐに消えな・・・』

『消えるって・・・どう言う事ですか？』

『そこにおるんやったら、拉致つて風呂に沈めるだけや・・・、それが嫌なら・・・その場から消えて二度と鈴木の前に現れんことやな・・・』

『はい！はい！そうします！』

『・・・誰かにこの事、言ったら地の果てまで探し出すからな・・・』

『絶対に誰にも言いません！お願いです信じてください！』

『信用ねえ・・・』

『お願いします！』

『ほんだら・・・電話を切ったら直ぐにここを出ていくと誓え』

『誓います』

『今後、一切 鈴木とは連絡を取らないと・・・』

『誓います』

『分かった、少しは信用してやる・・・部屋の鍵は置いていけ・・・
その方があなたのためや・・・』

『は・・・はい、そうします！ありがとうございます！すぐに出て行

きます！絶対誰にも言いません・・・（泣）』

『約束・・・守るようにな・・・ワシは物覚えと行動力がとても良いからのう・・・気・・・つけや・・・』

『は・・・はい』

直子は受話器をガタガタと震わせながら荷物をまとめているような音を出していた

『ちなみに・・・直子さんは鈴木の仕事知ってはります？』

『社長だっっていうのは聞いてますけど・・・仕事の中身はしりません・
』

『そうか・・・まあ 知らんほうがええやろな』

『・・・はい』

『じゃあ、30分以内に出て行け・・・分かったな?』

『はい』

『下手な小細工したら直ぐ分るからな・・・』

『は・・・はい』

『どこに行こうか・・・お前の居場所なんかこっちはすぐ分かる、下手うつなよ・・・』

『・・・はい・・・私は助かるんですよね？お願いします、お願いします』

『ああ、こちらの言つとおりにしてくれてさえいればな・・・約束は守る。だからあんたも頼むな・・・』

『はい！』

直子は豚が泣くような声で泣きながら必死で約束を守ると言い電話を切った

外で監視していると、直子は慌てふためいて紙袋を沢山持ち、車に荷物を積み込んでいた

そして怯えるような顔で部屋から失踪した・

o

「悲劇」 4

直子の離脱を確認

ポンコツの軽自動車は凄い勢いで走り去っていった

「仮に拉致つてもあの程度の顔じゃ、便所にもならんかったな・・・」

鈴木と直子の愛の巣へ向かった

部屋の前に行くとドアに鍵がささっていた

「直子、顔に似合わずええ子やないか・・・」

「ガチャ・・・」

土足で上り込んだ・・・

居間に行くと、テーブルの上に、懐かしいものが置いてあった

「これは・・・いつの間にか無くなっていったロレックスやないか・・・
こいつやったんか・・・飲み屋のねーちゃんの部屋に置いてきたと
ばかり思い込んでいたわ・・・」

その他に、いつの間にか無くなっていったブランド品やシルバーアクセサリーなど大量に出てきた・・・

「・・・こいつは乞食か・・・どれもこれも、もう興味のないもん
やからええけど・・・コイツには常識と言うものを教えてやらなあか

んな・・・」

「そうじゃ・・・ニヤリ」

京介は部屋の合鍵を持ち外で待機することにした

数十分後

鈴木は何も知らずに帰宅・・

・ 部屋の電気が消えていることに違和感を感じたのか首を傾げていた・

その後、室内に入り電話をしている様子だった

予め、カーテンを開けて出てきたので中が丸見えだった

何度架けても、直子が出ない様子だった・・

「打ち合わせ通りやな・・・クッククック」

鈴木は携帯を片手に外へ出てきた

『どこ行ったんだーアイツー（直子）腹減ったなー』

そう呟くと車に乗り込み再び外出・

「腹減った・・・か・・・弁当でも買いに行ったか・・・？」

再度、部屋へ訪問・・・

「ここから一番近いコンビニで計算すると、戻りまで合わせて正味15分ってとこやな」

居間に入るとテーブルの上に現金が置いてあった

「パチンコで勝ったのか・・・」

数えてみると金額は「10万円」あった

「取合えず、これは没収やな、残り490万円分は体で返してもら
うか・・・」

鈴木は京介の会社をやめる数日前、京介の現金、高価なブランド品、
金品などを無断で持ち出していた

更に辺りを見ると、鈴木のセカンドバッグ・・・

「カチャカチャ」

「免許証があるやんけ・・・不携帯でいったんか・・・」

何かに使える可能性あり踏み、免許証も没収した

時計を見ると間もなく、15分が経とうとしていた・・・

部屋を出て、ドアに鍵を閉めた・・・

「カチッ」

「オンボロロロロ」

鈴木の車が戻ってきた

鈴木は視覚に身を隠し監視・

鈴木は口笛を吹きながら何食わぬ顔で帰ってきた、その手にはコンビニ弁当の袋がぶら下がっていた

「ニヤリ・・・」

鈴木はテーブルの上から無くなった現金にも気付かずに弁当を食べ始めた

数分間、監視を続けると弁当を食い終わり、携帯で何度も電話やメールを繰り返しているようだった

その後、現金が無くなったのに気付いたのか、あちこちを何かを探している様子だった

玄関まで行き、部屋に入ってきて、どう動いたのか？など室内をうろつろとし、その後、車の中を探している様子だった

「10万くらいでセコイ奴や、お前はワシからどんだけ持っていったんねん・・・」

鈴木は頭をぐしゃぐしゃと掻きながら部屋へもどり酒を飲み始めた

鈴木はこう思うことであろう・・・

突然、失踪した直子が金を持って行ったのかもしれない・・・

・
・
原理的に多少強引ではあるが、この馬鹿にはこの位の思考しかない

取りあえず現場を離れ次のプランへと進むことにした

深夜3時

・

・

・

鈴木の部屋の明かりは消えていた

車もある、恐らくふて寝をしたのだろう

そう踏んだ

現場には京介だけではなく、「黒田 聡（？）も居た」

『黒ちゃん、今からゲームや』

『面白そうですね』

『取りあえず、いきなりやけど始めるで』

『ブ・ラジャー！！！！』

『・・・』

『ワシがお前の携帯を鳴らす、そうしたらここに、あそこにこれを投げ込め』

その時に渡したのは鉄アレイ（2?）だった

『京介さんは隠れててください』

『頼むで』

一分後・・・

『ガシャーン ガシャーン』

鈴木の車の窓、部屋の窓がいきなり割れた

黒田は猛ダツシユで消え去った・・・

『うわああ なんだああー』

鈴木は慌てて部屋の電気を点けていた

更に監視を続けたかったが、近所の兼ね合いもあると考え、その晩は離脱した

どんな事があるうと、鈴木は警察に通報などは出来ない・

もし、通報でもしたならば、色々根掘り葉掘り聞きだされる・

これには理由があった

京介が、辻谷からの命令で豚箱に入ってきたときに、同時に鈴木には共犯の疑いがかかっていた

これ以上、被害を拡大させないためと、

鈴木は根性が入っていないので信用性に欠けるといふ理由から地方へ身を隠すように指示していた

鈴木の実家や当時住んでいた所は警察よりガサ入れや張り込みなどをされる始末だった

もし、万が一、鈴木がパクられでもしたら、何ヶ月もぶち込まれることになる・・・いや・・・数年間かもしれない・・・

そこを回避するためでもあった

通報したら自分がやばい状況下になる、青山、辻谷からも切り捨てられる・・・ 京介に狙われたときに盾が無くなる

このような図式で京介は分析していた

現場から去る途中、鈴木の声が聞こえた

『うわあああー！！なんだこりゃー！！』

車の窓ガラスを見て騒いでた・・・

「鈴木・安心しろ、今日のは挨拶やこんなのは処刑ではない・・・
ニヤリ」

京介と黒田は車に乗り込んだ

『しかし、面白い事考えつきますね（笑）』

『アホ、こんな挨拶や、これからが奴の根性の見せどころや・・・
』

『根性ねえ・・・立ち向かってくると思いませんか？』

『来なかったら仕向けるんや・・・嫌でも、処刑台には上ってもら
う・・・』

『クックック！マジ楽しいですね』

『そうやる、今後、もっと楽しくなるさかい・・・最後まで頼むで』

『ブ・ラジャー！』

「・・・」

黒田の「了解」の返事にも慣れ始めてきた・・・

数日後、行動開始

鈴木のアパートへ黒田を偵察に向かわせた

「天国にあーなた」（京着）

『どや？』

『マジウケます（笑）窓ガラスは段ボールを貼りガムテープ補修を
していますよ』

『車はあるか?』

『無いですね・・・出かけているんですかね?』

『どうか・・・じゃあ、プラン通り頼む』

『ブ・ラジャー!』

『・・・もう・・・ええし・・・お前、スーツだろうな?』

『はい』

『在不在を確認や、訪販のふりして訪ねる』

『ブ・ラジ・・・分かりました』

「ピンポーンX2」

「コンコン コンコン」

黒田が玄関先へ回っている間に部屋の裏窓から遠目で観察してみると、部屋の中には人影が見えた

「おるやんけ・・・鈴木・・・ニヤリ」

鈴木は警戒していたのだろう、居留守を使って出てこなかった

突然、前触れもなく失踪した、最愛の不細工彼女

鉄アレイの攻撃

警戒しない方がおかしいと言う事だ・・・そう感じた

「少しは学びと言つものがあるよつやな・・・」

その後も観察していると

黒田が玄関を離れ裏手に周るとカーテンの陰からこっそり鈴木が覗

き込んでいた

黒田は気づかぬフリをして他の部屋を周るフリをしながら徐々にアパートを離れた

京介と黒田の合流・・・

『いやあ、ウケますねアイツ、カーテンの隙間から見てる姿はまるで貞子かよ?と思いましたよ』

『ほう（笑）恐怖心を植え付けに行つて、お前が恐怖を味わうとは・ヤルやんけ、鈴木のお癖に』

『そうですね（笑）あのゴミとびつするんですか?』

『もつと精神世界に入り込み・・・壊す・・・それだけだ（笑）』

『今回は又ルイですね（笑）』

『小物やかな（笑）それより青山や・・・アイツをキツチリ落とす
で・・・』

『あ・・・青山にもですか？』

黒田は元々、「裏社会」で生きてきた男、青山、辻谷、有本の存在
は十分に知っていた

『青山を嵌めるのは至難の業では無いですか？』

『・・・確かに・・・一歩間違えるとこちらがヤバイからな・・・』

『どうするんですか？』

『現在、鈴木とのり子は切れてる・・・そつだな？』

『・・・はい』

『青山と鈴木信頼関係も少し気ままずくなり始めている』

『例の逃走事件の時のチンコロですか？』

『そつや、青山に多少狂言を吹き込んでおいたからのつ』

『ウケる』

『そこがポイントや』

『流石!どうやるんですか?』

『・・・今から考える・・・』

黒田は大爆笑していた

・

・

・

数分後・・・「ニヤリ」

『取りあえず、今夜、襲撃や・アイツには安堵など必要無い、追
い詰める』

『ニヤリ』

『これを準備しておけ』

京介はメモ用紙を切り、サラサラと何かを書き渡した

『何に使うんですか？』

『ええから、こうとけや、なるべく小さめの物だ』

『ブ・ラジャー！』

「・・・」

「夜1時過ぎ鈴木の自宅」

黒田に用意させたものは『小さいスイカ』であった

よく道端で販売している物を昼間のうちの購入

小さめのスイカであれば投げやすい・・

前回の（鉄アレイ）件もあるので、あまり接近戦での勝負は避けたいと思ってる事だった

『逃走のスタンバイはOKか？』

『勿論です』

二人でスイカを抱えて部屋の裏窓へ行き・・・

段ボールで囲われた窓へ向かいスイカをドンドン投げ込んだ

『バゴツ！ ボゴツ！ガシャーン！』

『うわぁぁー！なんだ！このスイカ！！』

部屋の中から聞こえる鈴木 of 奇声

即座に逃走！

『京介さん、何故？スイカなんですか』

『理由を知りたいか？』

『是非！』

『ベランダ側は車の駐車場や、万が一窓が割れなくても車に当り、
住人たちの迷惑にもなる』

『部屋に居ずらくなる・・・と言う事ですね』

『この前、部屋を見渡した時に裏窓側にＴＶ・コンポ・ＰＣなど家電が置いてあった、そこにスイカを落下させ、その水分で家電を一網打尽にすると言う技だ』

『 凄え・・・ 』

『 それと・・・夏はやっぱりスイカやる 』

『 ですね！ 』

『 勿論、これは挨拶の追加分や、本番はこれからや 』

『 恐いわ・・・（笑） 』

『 お前に言われたないわ（笑） 』

鈴木への自宅への必要以上なまでの攻撃には意味があった

いつまでもここに住まわれていたのでは次のプランに支障が出ると
言うところだった

ここに住みづらくなる事によって、鈴木は居場所が無くなる・・・

そして金のない鈴木には、逃げ場は—か所になる・・・そう踏んでいたのである・・・

鈴木には更なる試練が待ち受けていた・・・

o

「悲劇」 完結

鈴木へ夏の風物詩、夏の醍醐味を味あわせることに成功し

そして次なるプランを遂行させることにした

鈴木に少しの安堵を与えるため1日の休息を与えた

鈴木の不細工彼女「直子」へ電話をした

「プルルルル・・・プルルル」

「プルルル・・・ブススス・・・」

20回以上コールしたらブスが出た

『はい・・・』

『あー悪いね電話して・・・』

『私、もう関係無いですから困ります・・・』

『申し訳ない・・・聞きたいことがあるんや答えてくれる・・・ね?』

ここで断れば自分に被害が及ぶであろうと不細工彼女は感じるだろうと考えていた

断るわけにはいかない状況を作り出していた

『・・・はい・・・』

『鈴木からの連絡は？』

『ありました』

『で？どうしたん？』

『着信拒否にしていますから出てません・・・』

『そうか・・鈴木からこちらに電話が入り、ワシに払う金をあんたが持ち出して逃げたから金が払えない、今あいつを探してるから待ってくれ・・・と言ってたが・・それは本当か？』

『そんなの嘘です！私は知りません！私も沢山貸してますし返して貰ってないです・・うわああああん（泣）』

直子は泣きながら自分が無関係であることを訴え続けていた

『じゃあ・・鈴木 of 嘘なんやな？』

『信じてください！！お願いします！！本当です』

『信じていいんやな？嘘やったら・・・分かるな？』

『はい、本当です。絶対に絶対に本当です』

『信じてやるから、一つ力貸してくれへんか？』

『なんですか？・・・私に出来ることなら・・・』

『鈴木に電話をして聞いて欲しいんや・・・』

『何を聞けばいいんですか？』

『部屋に、いきなり・・・ヤクザみたいな人が現れて、「鈴木！居るか！出てこんかい！」と大声を上げられ、ドアをガンガン叩かれ恐くて逃げた・・・とな・・・』

『・・・分かりました』

『その他は余計な事は言わん事や・・・じゃないと・・・直子さん・・・分かるな？』

『分かりました、絶対言うとおりにします。これが最後にしてください！もうあんな奴とは関わりたくないです』

『言うねえ〜（笑）まあ、分かった約束したる。その代わり言った通りにせんかったら・・・ホンマにあんたの体を使って金、返し

てもらいながらね・・・総額1000万や』

『い・・・1000万ですか？』

『そうだよ。あんた払ってくれる？そんなら今まで通りの生活に戻れるぞ。』

『無理です・・・』

『だよねえ？だったら言う通りにしいや・・・』

『・・・はい』

直子は京介は命令通り鈴木に電話をした

直子から報告の電話が一度入った

直子の話しによると・・・

鈴木はお金なんか借りてないし部屋の金も盗まれた。

車も部屋もメチャクチャにされどうしていいか分からない。

多分、犯人は「辻谷一派」か「哀川 京介」しかいない・・・。

でもどっちにも対抗するころが出来ない・・・

どうしたらいいんだ助けてくれ・・・。

と言ってきた

そこで直子は『警察は駄目なの？』と聞くと

『仕事上・・・不味いんだ・・・』

と返答

『自分が教えられてなかった事が沢山でてきて信用できない』

と言い電話を切ったと報告が入った

その後、直子に知られた番号の携帯は破棄。

直子は元通りのただの『ブス』に戻った・・・

鈴木 of 困惑を更に奥底を沈めた上に、本音を聞く・・・

これが後に続く処刑劇に繋がるものになる・・

鈴木の使用はこの程度ではない・・・

青山を墮とすためには鈴木はキーマンでもある・・・

鈴木には更に欲望と金、作られたチャンスを用意していた

だが、相手は青山、一筋縄ではいかない・・・

腐っても辻谷一派、最大のセキュリティで望まざる負えなかった

その後、鈴木は青山が関東から戻ると今までのおかしな状況を伝えた

何一つ決定打がないため、青山自身も、犯人は哀川であると断定しかねていた

話を聞く限り、一人で出来ることではない・・・

今の哀川に手を貸す人間がいるとも考えづらい・・・

濃厚だが、万が一別の組と繋がっているとしたら下手に手を出せない

鈴木程度、どうなっても構わないが、会社の代表でやらせている以上、失うわけにはいかない駒の一人でもあった・・・

青山はもし、自分へ矛先が向いたときは辻谷が加勢してくれる・
そう踏んでいた

商売の邪魔をさせない為にも、万が一面倒な事件に鈴木が巻き込ま
れないためにも

事務所兼自宅として、招き入れる形となった

完全に京介の思惑通りの展開であった

鈴木は住んでいたアパートを引き払い、車を軽自動車に乗り換え

影のオーナー青山の会社へ潜伏しした

完全なる子飼に鈴木はなった

一方青山は一箇所に滞在せず動き回り

事務所兼住まいにはほんの数日間しか滞在しない

鈴木に取っては家賃がかからない最高の暮らしでもあった

京介はそこに狙いを付けていた・・・

青山の動きを注意深く調査することにした

鈴木は青山と一緒に仕事をし

不在の時はパチンコ三昧・・・

「根っからの怠け癖が付いているような・・鈴木・・人間として生きる価値すら見えんお前のような奴を人間失格と言っんや・・」

鈴木は青山が不在になると、いつも通りパチンコに行き、勝てば飲みでで、青年実業家を気取っているようだった

鈴木は「のり子」とは切れうえに複数のキャバクラから出禁を喰らってしまったているので

安いスナックへよく足を運んでいた

だが、鈴木足を運んでいたスナックも京介の息のかかった店で、店のオーナー兼ママは京介に情報を流してきていた

ママの話によると鈴木は狂言を言い放題であった

「自分は今まで哀川の立場は全て自分の物になった」

「あの糞野郎は既に死んだも同然」

と吠えていたと言う事だった

『いいの？哀川さん・・・言いたい放題よ』

『負け犬ほどよく吠えるもんや・・・今に格の違いが分かる・・・』

『だといいんだけど・・・』

次第に鈴木はスナックの若い女にはまり、飲みに行く回数が増えていった

「先に黒ちゃんを動かすことにするか・・・」

黒田の顔や存在は青山も鈴木も知らない・・・

ここが最大のポイントでもあった

数日後・

黒田を呼び出した・

『プラン手順を伝える・・・』

『はい』

『お前は鈴木に人の紹介と言いアポを取り仕事を依頼したいと話を

『す
る』

『はい』

『青山が戻る前に、鈴木に仕事を振り、実績を上げさせる』

『勿体ない・・・(笑)』

『鈴木の実績として青山はカウントする』

『でしゅね・・・』

『そうになると、ようやく鈴木も仕事を取れるようになった、社会的に機能できていると判断するやろ、そうなれば、青山は鈴木を信頼し始める』

『はい』

『この地域は鈴木をTOPとし、自分は全国展開に力を入れると思うだろ・・・』

『面白そうですねー！やりましょー！』

『下手うつたら・・・お前、辻谷に監禁されんで』

『えっ？その時は京介さんが助けてくれますよね？』

『？・・・おおお・・・当たり前やないか（笑）大丈夫や、そんな事にはならんようプランを組む・・・』

『ブ・ラジャー』

『だから・・・まあ、ええちゆうねん・・・それ・・・』

・ ・ ・ ・ ・

「プラン」の全貌はこうだった・

先に黒田を動かしたうえで、

鈴木と京介の接触を仕掛ける

鈴木の違いと今の立場を理解してやる

尚且つ、京介は糞みたいな仕事を陰でしながら生活している

だが、今までに溜めこんだ金が有り余っていると云う事を知らせる

そのうえで、鈴木に仕事を依頼する

鈴木には領収書なしの金で支払いたいと伝える

つまり、鈴木は会社を通さなくていい金が懐に入り込む

金を動かさせ自由な金を持たせるといふ筋書きであった

564

それが頻繁になれば、鈴木に取っては大事なお客様

業界的に雑魚のやる仕事もまわしながら、鈴木に同行し監視

そして仕事が終わると即、金を支払う

人間は多少危ない仕事でも、目の前に現金を積みめば必ず動く……

鈴木のような欲で動いているような人間は容易い・

金の力を使えば、幾ら恨んでいる相手でもそれは日に日に薄れていく・

「所詮、金だ・人間の心も簡単に動く、目の色を変え、息遣いを荒くし、平然を装いながらも喉の奥から手を出すほど欲しがり求める・」

「実に人間と言うものはくだらない生き物だ・」

o

第三章 真 公開処刑 「理解者」

青山の会社の状況は決して良い方とは言えなかった

鈴木を困った事により出費が加算でいるのは事実であった、現在は辻谷のバックアップがある為やってはいけるというレベル、今回の鈴木の実績がいかに大きなものであるかが、争点でもあると京介は考えていた

実際のところ表面上は赤字の方が良い

裏社会で成り立っている会社の基本である、少しでも国に金を払う金など少なくて、私腹を肥やすのが基本である・・・だが、それは裏が回っている話である。

青山が多少売れる男でも限界はある、そこで右腕役として居る鈴木に活躍の場が訪れることになる・・・

「鈴木・・・お前の男気見せてもらおうで・・・ニヤリ」

スナツクのママから、鈴木の上面上経営する会社の電話番号を聞き出した

こちらサイドで入手した情報が正誤の確認と、一応は企業として調べのためであった

表面上はある業界の備品やコンピューターなどを売る販売店を名乗っていた

CPのログラム変更などと内容的には語っていたが、本人たちはそのような技術は持ちあわせたいない

これは、関東の連中が手がける、ある分野では即決的な判断に鈍る
体質であるとわかった

辻谷は一円単位までうるさく口を挟む男である、見積もり段階で辻
谷の言い値を計算しないと大赤字になる場合がある、京介は嫌と言
うほどその様なシーンに出くわしたことがある

最初の段階で客に用意させる金額が500万だったのが、10日後、
+150や200になるのはザラだった

故にあの凸凹コンビでは即決的な判断をしかねるだろうと判断した

数日後・・・。

黒田を呼びつけプランを始動させることにした

『今から、鈴木の人に電話して仕事を依頼してやれ、仕事の内容は先日話した通りだ』

『ブ・ラジャー』

黒田は少し緊張した顔をしながら電話をし始めた

「ブルルルル・・・クズズズズ」

『はい、「AS産業」、鈴木と申します』

鈴木が電話に出ると黒田は「ニヤリ」と笑った

『すみません、「株式会社 アイ企画」の「葛巻（黒田）」と言います、ある方の紹介でお電話してるんですが・・・お仕事の概要をお聞かせ願えないでしょうか？』

『そうでしたか、そちらさんはどのような業種ですか？』

『コンピューターの開発や備品の開発販売などを行っているんですよ』

『そうでしたか、一応、会社概要的にはこうです……』

鈴木は表向きの会社概要を伝え始めてきた

この辺のセキュリティーは青山よりも京介の会社にいた時のトークであった

『葛巻さん、お電話ではなんなんので、一度お会いして詳しい概要な
ど説明させていただけないでしょうか？』

『よろしいですか？』

『勿論良いですよ！』

『よろしくお願ひします。失礼ですが・鈴木様は社長様でしょう
か？』

『まあ・そんなところですね、共同経営してるんですよ』

『そうでしたか、では経営者と言うことですね、決定権のある方
方がこちらも色々と助かりますので』

『ご安心ください。役職的なものは付けて無いですが決定権はあり
ますので』

黒田は鈴木 of 返答に笑いを堪えるのに必死だった

京介はモニタリングしながら、鈴木 of 返答を聞いていた

『では、明日お会いできますか？』

『午後2時にウイングホテルのロビーでどうでしょう？』

『分かりました、ウイングホテル、2時ですね。』

『では、お待ちしております』

電話を切った・・・

『アポ成功ですね、次はどうするんですか？』

『この仕事を依頼しろ・・・』

「バサッ」 資料を出した

黒田は資料を眺めた

『はい・・・少し勿体無くないですか？』

『その仕事はフェイクや・・・小金を回すレベルや』

『何れ、それすら回収と言つことですね』

『当たり前やないか・・・ニヤリ』

翌日

ウイングホテル、カフェ・・・

黒田は指定の時間より数十分早めに到着していた

578

京介は変装し、カモフラージュの女を連れ黒田の座る席の近くへ待機

ここには、鈴木に席を決めさせないという小技であった

この業界、何でも先手必勝、遅れ出を取るものは貧乏くじを引くことが多いのである

鈴木到着、約束 7分位前

黒田は鈴木の様が見えると立ち上がりお辞儀をした

『お待たせしました。葛巻さん・今日、タイミング良くうちの代表をしているものが来ますので、少し待ってもらえますか?』

『それは光栄です。是非、お会いしたいですね』

『青山が来るのか・・・予定とは少し違いますがまあ大丈夫やる・・・』

京介はプランをAからBへと移行する事にした

『鈴木さんは最初からこの職種ですか？』

『私ですか？最初は違いましたが縁がありましたね、色々ありましたが現在に至るですね』

『共同経営でしたか？』

『えっ？ええ・・・まあそんな感じですね』

『そうでしたか、青年実業家なんですね』

『そんな事無いですよ（笑）前の会社が酷い所でしたので辞めて独立した感じですよ』

『そうでしたか・・・』

鈴木は京介の元で働いていた時の苦痛と思われる事を話し始めた

そこで、京介は黒田へメール送信・・・

「その会社の社長さんは今はどうされてるんですか?と聞け」

「ブ・ラジャー」

『鈴木さんも相当苦勞されたんですね・・・今、その会社の社長さんはどうされてるんですか?』

『さあ?その辺で死んでいるんじゃないですかね?』

鈴木は得意げな顔をしながら言っていた

黒田はその表情に堪えきれなく大笑いしていた

『そんなにウケましたか？』

『鈴木さんのボキャブラリーは凄いですね！流石ですね。』

『そっ　．．．そうですね？（照）』

『はい．．．つい死体を探す所でした（笑）』

『わっはっはっ〜』

鈴木の話に乗ることで二人の距離感を縮めようという策略であった

それから15分後．．．

鈴木の携帯が鳴った

「ペリリリリ・・・」

『ちよつと失礼します・・・』

鈴木は立ち上がり、喫茶店を出た

『はい！お疲れ様です。はい、カフェの方にいます』

「青山の登場か・・・久々にあのモアイ面を見てやるか・・・」

『今、うちの青山と言つものがきますので』

『はい』

数分後、現れた・・・

『いやいや、お待たせいたしましたすみません。青山言います』

『初めまして「株式会社 アイ企画」の葛巻と申します。よろしくお願いします。』

黒田は「アイ 企画」の偽造名刺を差し出した

記載してある、住所も電話番号も全て架空のもの、ただ足が付かないように根回しだけはしておいていた

『ほー、お若いに専務さんですか？・・・』

青山は黒田の役職を見て目の色を変えた

『いえいえ・・・名ばかりでして（笑）』

黒田は青山の威圧感に多少圧倒されているようだった

『社長・・・コーヒーでいいでしょうか？』

鈴木は青山が現れると殆どしゃべらなくなり、小間使いのように動いていた

「これが青山と鈴木の上下関係図か・・・」

『青山社長、今回の仕事なんですが、大まかな話は鈴木さんから伺いました、それで依頼をしたいのですが・・・』

『そうでしたか、それはありがとうございます』

『付きましては、取り合えず前金として渡して、完了後、残りを支払いと言う形が理想なんですが・・・どうでしょうか？』

『まあ、いいでしょう。本来であれば最初に全額いただくのがスタイルですが、最初ですし、そういったハッキリとした姿勢は私も嫌いではありませんので・・・ニヤッ』

どす黒い顔で青山は笑っていた

『ところで葛巻さん・・・うちの会社・・・どうやって知りました？あまり表ざった仕事はしてないものですからね・・・』

「来た・・・必ず、青山は誰の紹介かと聞いてくる・・・読み通りや・・・」

黒田は打ち合わせ通り言った

『北海道の佐藤さんからの紹介です・・・が・・・不味かったですか？』

『北海道の佐藤・・・佐藤・・・』

『昔、大変世話になったという事で、是非紹介したいと言われまして・・・』

『あー多分分かりますよ！あーアイツね！うんうん昔はよく仕事しましたよ』

「引っかかった・・・ニヤリ」

裏社会は偽名を使う人間が多く、佐藤、田中、高橋を名乗る人間は多数居る

実際、青山や辻谷関わる人間で北海道には佐藤を名乗るものはいない

だが、敢えて「佐藤」を名乗らせていた、そこには理由があった

警戒は必ずしてくる、だが、今一つ経営的に上り調子ではない青山の会社は目の前の積まれる金をどう再拝するかと言つところもみたかつたのである・・・

背に腹は代えられない・・・そこが見たかつたのである

『じゃ、分かりました。引き受けましょう、ただし現金で前金を準備してからになりますかね』

『はい、では社の方に戻り、その旨を社長に伝えますので』

『そついや、葛巻さんこの社長さん何て名前ですか？』

うっかりしていた・・・黒田の名刺を専務ではなく社長にしておくべ

きだった・・・

だが、黒田は機転を利かせた

『・・・ご存知ないかも知れませんが・・・川村と申します。』

『川村さん・・・もしかして30代後半の？』

『ご存知なんですか？』

『多分、分かりますよ・・・』

青山はフェイクの名刺の裏表を見ながらそう語っていた

『流石ですね、社長』

『いやいや、それ程でも・・・（笑）』

この業界はハツタリが90%、強気で物事を語れば、それが嘘でも本当になる世界・・・

青山は大物を気取っていた・・・

川村とは一体どこから出てきたんだ・・・そう思っていると、黒田の

向かいに座る青山の後ろの席の親父が読んでいるスポーツ新聞に大きく「川村」と書かれていた

「あれか・・・」

その視線を感じ、黒田はさりげなく振り返りニッコリしていた

「・・・」

話しもまとまり黒田は帰り支度を始めると

『葛巻さん・・・今日はお泊りですか？』

『戻ろうかなと思ってましたが・・・』

『泊まっていたらよろしいですよん、持ちますがな・・・前祝ですわ・・・』

持ちますとは「金を全部出すの意」

その言葉を聞き、すかさず京介はメールを送信した

「行って来い」

黒田着信

「(泣)」

こうして青山は黒田との距離感を深めようとしたのだった

o

黒田は次なる指示の宴への誘いにげんなりしていた

タダでさえ「青山」との接触の時間は少ない方が良いのに・

黒田はそうは思ったが、これには何かがあると感じていた

だが、一度誘いを断ってみよう・と考えた

そこには深い理由もなく、ただ行きたくないだけだった

『青山社長・一応、今日の話をつちの社長が待ち遠しくしてると
思いますので次回と言う事では駄目でしょうか？私も仕事をちゃんと
依頼してからのの方が気持ち良くお酒を飲めるかと・・・』

『堅いですな、葛巻さん』

『えっ？ええ・・・』

黒田は自分が「葛巻」だと言つ事を忘れていた

「そつだ・・・俺は今、葛巻だつたんだ・・・」

『申し訳ございません、何か粗相があつてもなんなんので・・・』

『じゃ・・・次回にしますか、お互いの為にも』

「お互いの為？・・・金を持ってきた後と言つ事が・・・」

『社長、本当にすみません』

黒田は指示を勝手に変更していた

だが、これは青山の精神を試すのには調度よかった

金に執着心があるはずなのに、その余裕を見ることができたからであつた

今は金に詰まっていない……そう言う事だな……とそう判断した

『鈴木、葛巻さんを駅までお送りしろ』

『はい』

黒田は他県から来た事になっていたのでたまたま駅まで送られるハメになった

黒田は青山の高級車に乗せられて駅まで辿り着いた

鈴木は黒田に深々頭を下げたその場を立ち去った

「……………」

「ピッピッピッ…」

「天国あなた〜一番（京着）」

『何？』

『京介さん、酷いですよー、飲みは切ないですよ』

『そうか？行けば良かったやん（笑）今、迎えに行くわ』

「キキーツ」

駅のタクシー乗り場付近に派手な外車が停まった

「ガチャ」

黒田はニヤニヤしながら車に乗り込んだ

『プランは上手いきそうな気配ですね・・・ニヤリ』

『当たり前や誰が考えたと思つてんねん・・・』

『次の展開はどうするんですか？』

『次は商談通り進めて小銭を落としてやる』

『勿体無いですね（笑）』

『まあ、そう言うな、面白い破滅劇の見物料と思えば安いもんや』

『今までも十分面白かったですけどね（笑）』

その後、後日プランは実行されることになった・

黒田は早速調査に入った・

京介のプランによると次のプラン実行は青山不在時に行う事になっていた

実行は2週間後となった・・・

青山の不在もそうだが、商談とはそういうものだと考えていた

商談は2週間も空くと、「あの話はどうなってしまったんだ・・・」
と感じ始める

上手い話でも恋愛でも焦らされる方が燃えるというものだ・・・

「「「」という事は早過ぎても遅過ぎてもいけないものだ・・・」

『黒ちゃん・・・動くで・・・ニヤシ』

『はい・・・ニヤリ』

黒田に金額を間違え多めに持つていくように指示

前金を渡し後から金額を間違えたので返金して欲しいと言う

鈴木の反応を見ながらプランを進める

「プルルルル・・・」

『はい。鈴木です』

『鈴木さん！葛巻です。今日プライベートでそちらに向かうんですけど、知り合いもいないし・・・もし宜しければお時間ありませんか？・・・仕事の話もありますので・・・』

『追加ですか？』

『ええ、うちの社長もノリ気です』

『是非！お会いしましょう！』

『はい、では着いたら連絡しますので』

『お待ちしています』

二人はおち合う事になった・・・

・

・

・

二人は食事をしに行き、その後、鈴木行きつけのスナックへ向かった

京介は黒田とスナックのママへメールを送りプランを進める手はずを取っていた

黒田へ食事の時にどちらが支払いをしたか聞いた

「葛巻さんお疲れ様、食事の支払いはどちらが行った？」

「葛巻こと私です」

「では、飲みの席は鈴木に払わせるように仕事の話をつづける」

「ブ・ラジャー」

次にママへ

「ママ、鈴木がそちらに向かった、手筈通り頼む」

「今、来ました！了解です」

黒田は仕事の話を出し惜しみしながら酒の席を楽しんでいた

すると痺れを切らした鈴木が開口を破った

『葛巻さん、そう言えば追加の仕事とか何とか言っていましたよね？』

『ああ、そうでしたね、忘れてましたよ』

『金額面でも勉強するのでは非、お願いしますよ』

鈴木は何とか仕事を上手くいかせようと必死に縋りつくようにを接

待した

大盤振る舞いした宴はA M 3時まで続いたようだった

京介はその間キャバクラで楽しい時間を過ごしていた

翌日

黒田は鈴木を呼び出し仕事の依頼を正式に決めた

そして、前金として準備していた金を渡していた

『今回は本契約分の前金だけですが・・・』

『分かりました』

鈴木はニヤニヤしながら前金を受け取っていた

鈴木は金を数え始め指が止まった・・・

『葛巻さん、少し多いですね』

『そうですか、取りあえず預かっててくださいよ、もしアレな時はまた連絡しますので』

『あっ、はい。分かりました』

『では、また連絡します・・・ニヤリ』

『はい』

黒田は鈴木と別れ京介と落ち合った

黒田を呼び出し話しを聞きいた

プラン通りに進んでるのを確認

『黒ちゃん・・・次の指示は・・・「良くない知らせ」だ』

『ブ・ラジャー!』

返答がいつもより気合が入っていた・・・

・ ・ ・ ・ ・

数日後

「プルルル・・・」

黒田は鈴木に電話を入れた

『もしもし、鈴木さん』

『どもども 葛巻さん、先日は楽しかったですね！また行きま
しょうね』

『はい・・・先日の余分に渡したお金の件ですけど』

『どうしました？』

『多く預けた事をうちの社長に言いましたら、かなり怒られまして・
・多い分は返金してもらえと・それが無理ならキャンセルし追
加も無し・・と言われまして・・大丈夫ですよね?』

『えっ?ええ・まあ 大丈夫・・ですよ・・あの・・いつまで
にお返ししたらいいですかね?』

『早急と言うことでしたが、私自身が出張で・・1週間後になり
そうなんですけど・・連絡しますね』

『わ・・分かりました・・』

用件だけを伝え電話を切った

黒田は大笑いしながら言った

『あのクズピンハネして使い込んでますね』

『予定通りやな・・・』

その日の夕方から鈴木 of 監視が再び始まった

鈴木は仕事をする事もなくパチンコに夢中になっていた

多めに受け取った金を置いておくことなく使い込んだ・・・

それをパチンコで取り返そうとしているのだろう・・・

そう睨み、次のプランを進行させた

「プルルル・・・」

京介はスナックのママに電話を入れた

『ワシや・・・』

『あら、京ちゃん、この間はごうも！鈴木さんに沢山お金を使っ
てもらったわ』

『そうか・・・実は頼みがあんなん』

『何？私に出来ること？』

『おお簡単な事や、ただ言われた通りメールをしてほしいだけや』

『誰に？』

『鈴木に決まっとるやないか』

『変なのは嫌よ』

「アハハハハ」

・

・

・

『……アハハハ』

『……怒らないでませ』

『誰に向かって言ってるんねん』

「鈴木さん、この間はご馳走様でした。実はこの間の会計なんですけど間違えて少し多めにいただいてしまいました。」

お返ししたいので今日、店に来れますか？」

送信・・・

『送ったわよ、京ちゃん』

『ご苦労・・・今度SEXしてやるからな』

『いつも口ばかり（笑）』

鈴木は知らず知らずのうちに京介の仕掛けた罠に片足を踏み込んでいた

o

黒田に次の指示として多めに渡し分の金の回収に向かわせる事にした

鈴木は前金の受け渡しの時、「AS産業」の領収書ではなく、お預り金として別会社の領収書を出してきた

会社の領収書を出していた「ソフト 鈴木」の棚番が押されていた

黒田はその辺の事には一切触れず、領収書がもらえればそれでいいとだけ伝えていた

実際の流れでは表に出さない「金」故、領収書の発行は厳禁なのがこの業界のルールであった

それでは金は払えない、仕事は依頼できないと社長から言われているよう黒田は告げ、無理矢理領収書を準備させた形であった。

その事を青山は薄々感じてはいただろうが、知っているのと知らないのでは聞かない方が知らないと言い切れるという万が一のルールでもあった。

その役目の人間がその役割の分、多少ピンハネしても文句が出ない・
・そういうものだった

集金時、鈴木はどうしても「実績」と「金」が欲しいがあまり、
いとも簡単に領収書を切っていた

その領収書を見て京介は今までも同じように複数領収書を切っていたのかもしれないと感じていた

その時会話がこうだった・・・

『葛巻さん、うちの会社では領収書は出せませんので、私の個人の会社で切りますので』

『鈴木さんは会社を経営されているんですか？』

『青山社長の所兼、自分の会社と言う感じですね』（笑）ほんと大変ですよ〜』

『そちらの業界は、何かとそういった形でトンネルを幾つも通して世に出ないようにすると聞いてましたが本当なんですね』

『まあ、私の会社方でも上手い事処理しますので安心してください』

『お願いします』

こつこつ流れだった・・・

一方、鈴木は焦っていた

青山が不在時に、葛巻との仕事を進めたままでは良かったが、偽りの金額を「青山」報告していた

「社長、葛巻さんの仕事を受けましたが、一つ問題がありました」

「何が問題やねん？」

「金額が渋られましてね、根負けして値引きをしてみました」

「ほんぽ？」

「30万程です、自分の取り分から引いてもらっていいんで」

「うーん・・・まあ、初の客やしな、今回はまあええんちゃうか、お前が埋めるんやろ？」

「・・・はい・・・」

「やばい・・・金が足りない・・・」

鈴木は葛巻から集金した金の使い込みを埋めるために考えた

・
・
「こうなったら、パチンコで何とかするしかない……」

鈴木は連日のように金を増やそうとパチンコに通っていたのが現状であった

だが、勝利の女神は鈴木には微笑むことはなかった……

「ピロリン」

鈴木は携帯を見た、スナックのママからのメールを見ていた

「あの時の会計……18万くらい取られたよな……やっぱり多め

に払っていたんだ・ラッキー・」

鈴木は直ぐにママへ返信した

「本当？少し高いとは思ってたんだけどさ（笑） 助かるよ、今、急な支払いがあつて現金は少しでもあつた方がいいから。今晚行きま
す」

スナックのママからのメールにて情報が入った

「今晚来るそうです」

「そうか、では後程会おう」

「京ちゃんも店に来るの？」

「気が向いたらな」

「鈴木さんと鉢合わせにならないように連絡しますね」

「そうしてくれ、取りあえず鈴木が店に来たら即、連絡をくれ」

「分かりました」

一週間以内に使い込んだ現金を埋めなければならない・・・

消費者金融からも全額借りている鈴木には二進も三進もいかないのが本音だったのであろう・・・

「金で人は動く、金で人は変わる、金で運命すら変わる・・・」

そういった部分をキッチリ体に教え込んでやろうと京介は思った

「カラーン」

『いらっしやいませ〜』

『やあ』

鈴木は金を回収したらさっさと店を変えるつもりでした

ここでまたぼったくられたのでは割に合わない・・・そう思っていた

『鈴木さん、取りあえず座って』

『あ……ああ……でも今日はあまり時間がないんだ』

『一杯くらいは飲めるでしょう？』

『じゃあ、一杯だけ……』

心ここに有らずな鈴木だった……

「ピシッピシッピ……」

ママは直ぐに京介にメールを打った

「鈴木さん、来ました。あまり時間がないそうです。」

「了解」

鈴木は急いでいる様な素振りで時計を何度も見ていた

数分後

・
「カラン・・・」

『いらっしゃいま・・・せ・・・お久しぶりです・・・』

ママの強張る顔を鈴木は不思議に感じた

「カッカッカッ・・・」

何となく振り向く鈴木・・・

一瞬で固まるように鈴木の動きは止まった

『しゃ・・・社長・・・お・・・お疲れ様です・・・』

『鈴木やないか・・・よう会うなあ・・・お疲れ様はいらんやろ・・・お前　うちの社員ちゃんかあ・・・』

『は・・・はあ・・・いや・・・あの・・・先日はすみませんでした・・・』

『怪我、治ったみたいやな』

『あの、あの時は青山さんの言う通りしないと自分の身が危険だったもんで・・・本当にすみませんでした』

『己の事を守るためねえ・・・まあ、水に流したるわ・・・お前もつらい立場やろっからな・・・』

『これからは二度とあのような真似はしませんので・・・』

『はっ？信用してないし、どうでもええわそんな事、ただ次はそれ
相当の覚悟をしてもらいだけや』

『は・・・はい・・・』

『隣、いいか？』

『はぁ・・・是非・・・』

ママは鈴木の豹変ぶりに驚いていた

いつも、京介の事を悪く言い、あんな奴はカスだと豪語していた姿を思い出すと笑いがこみあげてきていた

『ママ、鈴木はよく来るの?』

『はい!連日大盤振る舞いですよ!京介さんもいらしいてください』
『9』

鈴木はバツの悪そうな顔をしながら言った

『ママ、それはちょっと・・・』

『なんや、儲かってんねんなあ。そしたら、ワシも今日ご馳走なるうかな? なあ!鈴木』

『あの・・・そうしたいのは山々なんですが・・・今日は持ち合わせが
少なくて・・・その・・・』

『嘘やって！心配するな、お前に御馳走なるほど落ちぶれてないわ
(笑)』

鈴木は回収したい金も回収できず、京介が来たことにより帰るこ
も出来ずにいた

『まあ、飲めや、鈴木』

『あの、自分はお邪魔でしょうから間もなく帰りますんで・・・』

『お前、この間の事気にしてるんか？そんなんもつどうでもいいわ、
気にするな、折角久々にこうして酒を飲めるんやから、ゆっくりし
てけや』

『はあ・・・』

『お前、何かと大変なんちゃうか？』

『何がですか？』

『辻谷と青山の下と言う事や』

『まあ・・・しんどくないって言ったたらウソにはなりますね』

『そうやるなあ・・・俺の苦勞もちっとは分かったか？（笑）お前が力付けてくれたおかげでワシは樂でええわ（笑）』

『・・・自分は社長みたく金もないし、権限すらないですから・・・』

『どうしたん？お前なんか暗いな、何かあったんか？』

『いえ・・・何も無いですよ。余裕つすよ・・・』

『ほな、飲まなあかんやろ！イツキで飲みや（笑）』

「トクトクトク・・・」

グラスの中のウィスキーは、ほぼストレートになっていた

『行かせて貰います！社長！』

京介は鈴木のこという乗りの良いところが好きだった・

『京ちゃん！久々なんだから・・シャンパン飲みたいなあ』

流れに沿うかのようにママも便乗してきた

『いいよ！鈴木のおごりやし』

『いやあ、社長！勘弁してくださいよお マジ、金で困ってるんで・
』

『嘘つけ！儲かってるくせに！』

鈴木は急に深刻な顔つきになりグラスを置いた

『実は・・・下手打ちまして・・・』

『変わつたらんなあ・・・(笑)』

『ねえ〜いいのドンペリ〜!』

『うるせえなあ・・・カフェドでも飲んどけ!ブス!』

ママは渋々安物のシャンパンを手を取っていた

『鈴木、場合によっては力になってもいいが・・・お前は信用性に欠けるからな・・・』

『・・・』

『お前、そんなにワシが嫌いなんか？』

『社長は・・・恐いんです・・・本気で恐いんです・・・』

『恐い？青山よりか？』

『はい・・・青山さんも恐いですけど、普段居ないんで・・・』

『ふーん・・・』

『社長・・・力を貸してくれませんか？』

『お前の事や、どうせ金やろっ。』

『はい』

『青山は下手だった事、知ってるんか？』

『いやあ・・・言ってますし・・・言えません』

『青山かて・・・怒ったら一応、筋の人間や・・・お前・・・殺されんで・・・』
（笑）

『社長・・・どうしたいでしょう・・・』

『自分で考えるんだな・・・』

『どうしてもお金が足りなくて・・・』

『無人契約機とかから引つ張れば？』

『そこも限度額借りてて駄目なんです・・・助けてもらえないですか・
・社長・・・』

『お前はほんま都合のええやつちなあ・・・ワシにあれだけのこと
しててよつ言つわ』

『いや・・・それは自分の意思では無く・・・青山さんの指示で・・・じ
ゃないと自分が追い込まれる感じでしたので・・・』

『で・・・俺に対して嫌がらせや妨害などを繰り返したという事か？』

『はい・・・すみませんでした』

『認めるんやな?・・・返答次第では・・・助けてもいいぞ・・・ニヤリ』

『はい・・・私がやりました』

いきなり髪を掴みカウンターに叩きつけた

「...ガンデ」

『これで・・・勘弁したるわあ・・・』

『すみませんでした 社長!!』

店内のスタッフも客も硬直状態になった

『よっしゃ、鈴木、即金が入る仕事を紹介したるわ、借りるより稼いだ方がお前も気が楽やろ』

『はあ・・・でも期間もあるんで・・・』

『短いスパンで稼がせたるがな』

『本当ですか？』

『ああホンマや、ワシはお前と違って嘘つきちやうからな（笑）』

『すみません・・・』

『ただし、青山には内緒やで、ワシとお前が繋がっているのがバレたら、青山レベルではなく辻谷が出てくるでな・・・そうなると面倒や・・・』

『約束します!』

『お前、嘘つきやからなあ・・・』

『今度は絶対に裏切りません!』

『次、裏切ったら一週間かけて殺すからな・・・本気やで・・・』

『一週間かけてですか・・・約束します・・・しかし社長・・・そんな即金の仕事あるんですか?』

『当たり前やないか・・・同じムジナやないけ・・・ニヤリ』

『助かったあ、恩にきります』

鈴木は今まで京介へした嫌がらせや妨害工作を全て認めたと京介との契約を結んだ

自分の上には「青山」「辻谷」が居ることも認めた

些細な小銭を使い込み、それを埋めるために用意された仕事は「法に反する」ものだった

まともに頑張ったってたかが知れている・・・危ない橋を渡ってこそ、そこにはそれなりの報酬がある

「ハイリスク、ハイリターン」

この業界、この原理が基本、如何に法の網を潜り抜けるかは「知性」と「運」しかない・・・

鈴木は雇われ人しか経験していない、目先の金の事ばかり考えこの原理を忘れていた・・・

o

「理解者」 4

京介が鈴木に用意した仕事は危険な橋を渡るものであった

危険と言っても命の危険性は左程ないものだった

「ここで死なれてしまつては困る」、これが本音であった

だが、法の隙間を潜り抜ける仕事、故 刑事事件になりかねないものであった

京介自体、出て手間もない故、直接行つのは少し危険と感じていた仕事だったので都合の良い駒であると感じていた

仮に鈴木が逮捕になることがあつたとしても、その後の事は全て手を打つてあつた

鈴木との連絡を取る手段としては携帯電話

この携帯が全てのカギを握る証拠となりえるだろう、その携帯こそ辻谷一派と繋がりのある飛ばしの携帯

用意した人間はまるつきり知らない人間の物、その時に鈴木がいくら証言してもそこには辿り着かないように手筈を整えていた

時給にする1と時間で3万位の報酬の仕事

普通に生活していてこの金額を叩き出すのは不可能、わざと時間を短く設定し数をこなさせる

一日、2〜3軒の場所で仕事をさせる、夜中から朝方までにかけてやり、最低3万から9万をその日のうちに手にすることができようにした

葛巻（黒田）へ返金する分より多めの金額を稼げるように設定していた

それは今後の展開に鈴木にとって必要となる金であるためであった

『社長 本当に助かりました!!』

『そんな事より、埋めなきゃダメな金は埋まったのか?』

『あと少しです、頑張ります!』

『そうか』

この時点で鈴木に渡している金は40万

鈴木は京介の予測通り金に目がくらみ狂言を言い始めていた

葛巻（黒田）から返金を求められている金額より数倍の金額を手にしていた

それから2度ほど仕事をやらせ十分なくらい金を握らせた後鈴木に告げた

『この仕事は打ち切りや、流石のおかみ（警察）も気付くかもしれんしな』

653

『ですよね・・・分かりました。後は自分で何とかします!』

『金、足りてるのか?』

『正直、まだ足りませんね、何かいい手はないですか、社長』

「何に対して金が足りないかは知らないが、まだ必要と言っか・・・
思うつぼだ・・・ニヤリ」

『ギャンブルで増やしたらいいんちゃうか？お前博打の才能あった
やん（笑）』

『パチンコですか？』

『馬や・・・馬ならいい筋・・・知ってんで・・・乗るか？』

『マジすか？？絶対乗りますよ！！』

『よっしゃ次は馬で稼ぐか』

『情報が入るんですよ？』

『ああ』

『楽勝つすね！社長、最初から馬を紹介してくださいよ！』

『アホ、軍資金が必要やろが』

『それもそうですね（笑）』

鈴木は京介の会社に居た頃のような雰囲気を出していた

敢えて、京介はその鈴木の状態に合わせて敷居を下げた

『ほな 今週の週末連絡するわ』

『はい!』

命一杯稼いだ金を次はギャンブルに投資させる・・・

この事で金の重みや恐さをまずは知ってもらおうのがプランの軸となっていた

黒田に指示を出した

『鈴木の手帳に電話をし、金の手帳をみる』

『ブ・ラジャー！（了解）』

黒田は鈴木へ数回電話をしたが出来ることはなく、早く留守番電話に繋がった

黒田は留守電を一度残し、その後はコールのみとした

『京介さん、鈴木の手帳出ませんね』

『金は持っているはずだが、このまま知らぬふりをしようとしているのかもな・・・』

『マジですか（笑）ウケますね』

『では、俺が架けてみるか』

「ぺっぺっぺっぺ」

「プルルル・・・クスズズ・・・ゴ~~~~~~~~」

『もしもし 社長！お疲れ様です！』

鈴木はいとも簡単に電話に出た

やはり人間と言うのは都合の悪い話からは避けたいもの……

以前、鈴木が会社居た頃は、気まずい話こそ先に処理をしろと教えてきていた筈だ……

やはり、コイツには進歩と言うものがない……

『明日の馬情報を話したいんやけど……どこかで会えるか？』

『待つてましたよ！是非 会いましょう！』

『そこで 詳しい打ち合わせするか』

『はい！！』

京介は本当に裏のルートから馬主情報やレースの展開予定などを調べていた

糞田舎の草レースの情報など他愛もなかった

この情報通り当たるとは限らないと情報提供者から念をおさっていた

だが、「その方が良く、毎回当たるのでは面白くない、競馬をやるわけではない」「・・・と思っていた

鈴木と共に勝ち負けを過ごす時間を作り、壁や警戒心を取り除くことが必要である

・

・

・

待ち合わせの日・・・

鈴木は早々に待ち合わせ場所に来ていた

京介の姿を見るとすぐに駆け寄ってきた

『お疲れ様です』

『お疲れさん』

数週間前、半殺しにされた男とは思えないくらいの明るさだった

『社長、お話があります』

『なんや？』

『今回の馬で儲けたら、青山さんと離れて社長に付いていきたいんですけど』

『はあ？何を言つとんねん』

『社長！お願いします！』

『青山と揉めるやんけ・・・普通で考えろアホ・・・』

『あっ・・・そうですね・・・たまに仕事まわして下さい』

『考えておく・・・』

「何と言う図々しさだ・・・何の恥じらいもなく自分の都合しか物事を考えていない」

以前の鈴木はこんなではなかった・・・与えられた自由な時間と地位と小銭にこころも簡単に人間が腐るとはな・・・

裏切りの繰り返し返しの中に、男としての「芯」がなくなったのである。

ならば教えるまでだ・・・」

その後、それぞれの車で競馬場へと向かった

レースが始まると京介の買う馬券は7割がた的中していった、鈴木は京介の買う馬券の確実性に頷きながら同じ馬券を買っていた

『社長！マジ凄いですね！当たり前まくりですよ！』

『次・・・自分で予想して買ってみーや（笑）』

『えっ？・・・自信無いですよ』

『つーか・・・後のレースは情報が信用出来ひん感じやねん・・・もう辞めるか？』

665

『社長はどつするんですか？』

『俺か？ヤルで（笑）』

分厚い財布を見せつけた。鈴木は財布の厚さに喉を鳴らしながら言

った

『社長と同じの買ってもいいですか？』

『好きなようにせーや（笑）』

鈴木がいつまでも同じ馬券を買ったのでは効果が無い・・・そこでワザと来ないような馬に3万円買う事にした

鈴木もそれに便乗し3万円買い、元金を減らしていた

『社長、次は難く行きましょう！』

そう言い次は難いレースに5千円賭け、それが当たり取り大喜びしていた

京介は鈴木と違う馬券を購入しワザと外していた

『流石やな、鈴木・・・次はどれがイイと思う?』

『1-6ですね・・・そう感じます、ニヤリ』

競馬新聞を見ると「と」だった・・・余程の事がない限り必ず来る馬だった

『これは難しいな(笑) よっしゃ20万突っ込むか』

『マジすか?マジすか?』

『おお!当たれば多少は増えるしな、お前幾ら賭けんねん?』

『自分は・・・自分は・・・』

『乗れや(笑)』

だが鈴木はビビッて1万円の馬券しか買えなかった

見事、的中、馬券は当たった、配当金が思ったより高く京介の賭けた金は倍額になっていた

『わああ いいなあ〜社長〜』

『だからゆーたやろ・・・』

次のレースから鈴木は投資金額を大幅UPし始めた・・・

「天国にあなた〜 (京着) 」

着信を見ると「黒田」だった

京介はその場を離れ携帯を取った

『京介さん、どうですか？』

『今から崩れるやるな（笑）』

『連絡お待ちしてます・・・』

鈴木の元へ戻った

『社長？仕事ですか？』

『ああ・・・お前に情報のメモやるわ』

『マジすか？何レースまで情報はあるんですか？』

『最後までや・・・』

鈴木にはデタラメな情報を渡した

『社長は？』

『この通りに馬券買って帰るわ』

『幾らぶつつ買っんですか？』

『そやなく最低5万、最高10万くらいかな・・・負けることは無い
やる（笑）』

『負けることは無い』

この言葉が鈴木の上に拍車がかかるであろう・・・そう考えた

鈴木の前で前売り馬券を買うそぶりをして締め切り時間ギリギリに並んだ

鈴木は次のレースに備え、競馬新聞とデタラメなデータを見比べて首を傾げていた

競馬新聞に夢中な鈴木を確認し、馬券売り場から姿を消した

帰ったと見せかけて鈴木の監視に入った

鈴木は残りのレースに相当な力を入れている様であった

言い残した言葉・・・「最低5万 最高10万・・・」

これが効いたのか・・・高額な投資をしているようだった

レースが進むにつれ、鈴木の色、目線、行動が共同不振になって

きた

相当な焦りを感じている・・・デタラメなデータの通り購入していると確信した

更に拍車を掛ける為に黒田へ「葛巻架電」をするよう指示

「プルル・・・クズ・・・ゴミ・・・」

鈴木は当然のように電話を取らなかった為、何度も電話を架けさせた

鈴木は携帯が鳴るたび、携帯の着信画面を見て、独り言のように文句を言ってるようだった

・

鈴木から電話が入った

京介は同じ競馬場に居るのをばれぬよう、その場は電話に出ずに折り返した

『どうした？』

『社長、あの情報確かなんですか？』

『次は何レースや？』

『6です』

『そのレースに20万ぶつこんだでえ・・・、鈴木、それが本命や!』

『20万ですか??社長が20万と言う事は・・・来ますね!』

鈴木は迷いながらも馬券売り場へと並んでいた・・・

「社長が買う20万馬券は一度も外していない・・・」

o

「理解者」 5

鈴木は馬でなんとか巻き返しをはかろうとしていた・・

使い込んだ金を埋めるはずだったバイト代にも手をつけ、もう二進も三進も行かない状況だった

『社長！自分も乗りますよ！』

『負けても責任とらんで』

『社長も買ったんですよね?』

『買ったたで』

この会話聞いていた黒田は直ぐに帽子を深く被りサングラスをして競馬場の中に走っていた

鈴木は京介との電話が終わると、馬券を買い鼻息を荒げていた

その姿を黒田は実況中継してきた

第6レース・

レースが始まると鈴木は身を乗り出し大声で叫びながら馬券を大事そうに握りしめていた

鈴木の買った馬は出だしこそ良かったが徐々に後続の馬に接近されカーブで追い抜かれ、ストレートで残りの馬にもぶつちぎられ最下位・・・

鈴木は声を荒げ騒いでいた

6レース・・・鈴木の買った馬の順位は8位

6レースが終わると鈴木の様子は青ざめていた

その後は、残りのレースに挽回を図り熱くなり馬券を買い捲っていた

「あのアホ、相当熱くなっていますよ、残りのレースも買っています」

黒田から報告メールが入った

残りのレースも偽の情報の通り買ったのであろう、最終レース以外は全部外れていた

配当金は1000円だった

レースも終わり、皆が帰る最中、一人で顔色悪く立ち尽くす鈴木の姿……

そこへ、ワザとらしく表れる京介……

『おい、どないやった？ 仕事切り上げてきたわ』

『しゃ……しゃ……ちょう……ヤバイっす……マジ……ヤバイっす』

『どないしたん？ 大当たりか?!』

『ドボンすよ……』

『ドボンって……(爆)マジウケる』

『マジかいやあゝ　まあ、しゃーないな、そんなもんやるギャンブルなんて・・・』

鈴木は返答する気力も無く下を俯き独り言を呟いていた・

『飯でも行くか』

『・・・はい・・・』

鈴木を連れて居酒屋へ向かった（ヤミーズ）

『お前、いくら負けたん？』

『もう・・・オケラです・・・』

『オケラ？お前は虫か？』

『金が無いつて事ですよ』

「知ってるつーの！！」と思しながら・・・

『まあ、競馬なんて遊びやん、気にするな俺かて負けたつちゅーの
（笑）』

『いや・・・実は明後日までにお金を渡さないと駄目なお客さんがい
て・・・そのお金を使っちゃったんですよ・・・』

『アホやなあゝ・・・で・・・どうするん？』

『いやあ・・・困りました・・・それ払わないと・・・仕事もパアになる
んですよ・・・』

『払いーやあ・・・』

『金・・・全然無いんですよ・・・』

『お前、バイト代40万くらい渡したやん・・・いくら足りんのよ・・・』

『いや・・・あの・・・その・・・全部競馬で・・・』

『お前、ほんまのアホやな』

『社長・・・助けて下さい・・・』

『無理やなあ・・・俺かて負けたんや・・・』

『・・・うんうん・・・うんうん・・・うんうん・・・』

『金・・・会社に無いんか?』

『いや・・・ありますけど・・・青山さんのお金ですから・・・それは不味いです・・・』

『青山は今おらんのやる？次はいつ来るんや？』

『多分・・・今週末だと・・・』

『まだまだ日にちがあるな・・・青山から借りたらよろしいやん』

『無理ですよ・・・』

『金は金庫か？』

『はい』

『鍵か？番号か？』

『どっちもです、一応・・・開け方は解ります・・・』

『拝借せえや・・・週末までに埋めたらええんやろ？バイト用意したるわあ』

『マジすか？・・・でも・・・いや・・・やるしかねえ・・・』

『先方のお客さんかて、金の事や心配してんねんでえ・・・まさかお前が馬にぶっこんだとは思わんやろからな（笑）』

『今日も何回も電話が来てて・・・』

「10分後に鈴木にTEL・・・」と黒田へ「葛巻架電」を指示

鈴木は尋常ではない目付きをしながらも、ある程度の方向性が決まり

後は行動のみと判断しているようだった

「ピリリリリ・・・アホアホアホ・・・（鈴虫着信）」

鈴木は携帯を見た

『うわぁ・・・葛巻さんだ・・・』

『なんや、例の金の客か？』

『はい』

『出て、明日渡すと言いや・・・金の事は早めにするのが鉄則や・・・』

『はい・・・やるしかないですもんね・・・』

鈴木は着信を取った

『あーもしもしー すいませんでした・・・ちょっと入院してまして・
・はい、はい、ええ 明日 どうでしょう？』

『そうですか、じゃあ明日着いたら電話をくださいよ、では』

『社長・・・明日渡す事にしました・・・』

『ほな、もう今日は帰って下準備した方がイイんちゃうか？』

『そうしますね・・・』

鈴木は目を血走らせながら鼻息を荒くしてその日は直ぐに帰った

鈴木は全く信用がない男なので、帰宅を尾行し深夜まで監視

だが、もう今回は逃げ場を失ったのを理解しているのか早めに就寝したようだった

翌日

鈴木は葛巻（黒田）から連絡が入り、いつものホテルで待ち合わせ

余分に預かった金の返却をした

『仕事は速めに出来ますので、追加もよろしくとの事でした・・・』

『すみませんね、追加は期待してください倍額以上の仕事を依頼しますので』

『お願いしますね』

黒田は早々に鈴木のところを立ち去り連絡をしてきた

この日、黒田が回収してきた金額は「80万」だった

690

『なんや・・・黒ちゃん、多いやんけ?・・・』

『いやあ・・・勿体無いから 一度キャンセルして全額返せと言いま
した(爆)』

『しかし、よくそんな話を飲んだな?』

『夜中に電話して・・・軽く脅しました(爆)』

『ほう・・・どない言ったん?』

『入院してたとは言え、こちらとしては高額を払っているんだから連絡をくれないと困る、信用問題としてそれはまずかったのではないかと?とです』

『ほう』

『鈴虫は何度も謝罪してきましたが、一度お金を全額返して、うちの社長にいい加減な会社ではないと言っのを見せてほしい、そうすれば追加の仕事もまとめてお願いできると言いました(笑)』

『そうか（笑）とんだオプシオンを追加されたんだな、あのアホは』

『勝手にやっつてすみません。面白そうだったので』

『OK（笑）』

「天国にあなた」（京着）「

「ピッ」

電話に出ると直ぐに鈴木はしゃべり始めた

『社長！鈴木です！』

『わかつとるわ、なんや？』

『無事終わりました』

『銭、返したん？』

『いやあく参りましたよ、葛巻の野郎、いったんキャンセルなんて抜かすから全額返してやりましたよ』

『そうなんや、ほんだらお前困るやん』

『いや、こつこつというのが大事ですよ、駆け引きですね』

『そうか、お前もいっぱい駆け引きするようになったんやな』

『社長のお蔭です』

「掌の上の駆け引きにいい気になっているな……」
「イツ……」

『その仕事はもう終わりなんか？』

『いや、お金を全額目の前に出したら、ここまでしてくれるとは思わなかった、一度会社に戻って社長の許可を貰って倍の仕事をくれると言っていましたよ（笑）』

『そうなんか（笑）良かったやん』

『はい・・・それよりも、社長・・・本当にバイト頼みますね・・・』

『おお、任せろ、ちなみに青山の金庫から幾ら持ち出した？』

『140万、あったんで・・・全部です・・・』

『客に全部渡したんか？』

『ほぼ全部です』

「この期に及んでまたピンハネしとるわ・・・コイツ・・・」

『140？お前、来週末までに140は無理やで』

『何とかお願いしますよー！社長・・・』

『お前・・・ピンハネしてないか？』

『えっ？・・・してないですよ・・・』

『お前、意地汚い所あるからな・・・まあ　今回は無いやんな？』

『はい！ある訳ありません』

鈴木はそう言い切った

それから2日過ぎ、鈴木からの電話が鳴り始めた

「プラン再始動・・・」

鈴木を知る京介の飛ばしの携帯を破棄

鈴木は京介に連絡が取れなくなった

黒田に鈴木に連絡するよう指示

「クズズズ・・・バカカカ・・・」

『はい、もしもし』

『鈴木さん、青山さんと連絡取りたいんですけど・・・』

『青山は・・・今、不在でして用件は？』

『仕事の依頼で全額をお支払いして、追加分もまとめてお願いしようかと・・・』

『私でいいですよ葛巻さん!!』

鈴木は目先の飛びついてきた

『いや、今回はうちの社長も一緒に来るので青山さんが居ていただかな美味いんですよ・・・』

『そうでしたか・・・伝えておきます』

鈴木はそう言い電話を切った

鈴木は考えた・・・先方の社長さんが来るのに青山がどうしても必要・・・

これは青山に戻ってきてもらうしかない・・・

数分後、鈴木から黒田の携帯に連絡が入りから翌週の金曜日についてものホテルでと言う事内容だった

電話を切った

『どじいつ事ですかね？』

『飛ぶつもりなんじゃ？』

『青山の銭を持ったままですか？』

『そうやるな（笑）うちから総額で500は持って逃げているからな』

『もしかして、最初からこれが狙いですか？』

『当たり前やないか、ワシだけではなく青山からも狙われる立場になって貰わなつまらんやろ』

『恐いわ〜（笑）』

『アホ・・・これからやないか・・・鈴木には命一杯頑張ってもらおう・・・ニヤリ』

『これで終わりじゃないんですか？』

『鈴木を完全沈黙させた後、次は青山や・・・』

・
金曜日・・・

例のホテルには鈴木の様はなかった

ホテルのカフェには青山が一人居た

京介は黒田と時間差を置き、女を連れカフェへ来店・・・

勿論、変装していた

黒田は青山のもとへ行くと言手をし挨拶をした

『青山社長、遅れてすみません道が混んでまして・・・あとうちの社長の身内に不幸がありまして・・・急に来れなくなっただんですよ。すみません・・・』

『いやいや、気にせんといして下さいな・・・そういう理由であれば致し方ないでしょうから』

『あれ？鈴木さんは今日はおいでではないんですか？』

『あいつ・・・急に連絡取れなくなっただんですわあ・・・逆に知りませんか？』

『実は・・・青山社長の居ない間に・・・こんなやり取りはしたんですよ・・・』

黒田は京介の作り上げたストーリーを語り始めた

『ほんまでっか？葛巻さん？』

『ええ、もしかして・・・社長・・・このお金の件はご存知無かったですか?』

鈴木が個人会社で切った領収書を見せた

『この領収書は?』

『一度、仕事を頼んで多くお金を渡してしまっただんですよ、その分の返金をしてほしいとお願いしてて、本日お約束したんですよ、』

『この金額を今日、いったんお返しすると言う流れですか?』

『はい、その上で後日、本契約をさせていただきたいという感じが
すね』

『鈴木からはそんな話は聞いてなかったんですがね』

『それは困りますよ、社長、それならば本契約は依頼はできません
』』

『今日は本契約の日ではないと言う事ですか？』

『はい』

『ちょっと失礼します』

青山はロビーの方へ行き、鈴木に電話をしている様子だった

『あの糞ガキヤー!』

ロビーに青山の大声が響き渡った・

『繋がりませんわ・申し訳ないですが、返金はちょっと待ってもらってもいいですかね?今、手持ちでは足りないのです』

『わ・・分かりました・・うちの社長の方には私の方で何とか誤魔化しておきますので、こちらに鈴木さんから連絡が入りましたら青山社長に連絡入れますので』

『すみませんね、頼みますわ』

取りあえず黒田は青山の前から退散した

・

・

・

『いやあ・・・ありゃ鈴木も相当ヤバいでしょうね（笑）』

『調度ええやる』

・

・

・

数日後、青山に動きがあった

同業者の人間から京介に連絡が入った

「哀川さん、なんか・・・鈴木って人・・・どえらい事しでかしたみたいですね?・・・青山社長、凄い剣幕で電話が来てさ」

「鈴木？どこのどいつや？」

「ほら、お宅の元従業員の」

「ああ、あのゴミが何かしでかしたん？」

「うん、持ち逃げとかなんとか言ってたよ」

「でっ？ワシに関係ないやんけ」

「そろそつだけど、青山さん、哀川さんと連絡付けたいらしくてね」

「なんでワシなん？」

「元従業員だからじゃないかな」

「だからゆーたのに・・・アホな人やなあ、なんぼ持ち逃げしたん？」

「200万とか言ってたな」

「笑けんなあ、いい気味やあ」

「どうしたらいいかな？番号は教えない方がいいな？」

「ええよ、この番号に電話するよう伝えてな・・・」

同業者に青山へ使い捨て携帯の番号を伝えた

o

「理解者」 6

青山に使い捨て携帯の番号を伝えるよう業者に言い

青山からの連絡を待った

伝えてから数日間は連絡が無く、「あきらめたか?」と思い始めた頃電話が鳴った

「天国にあなた」 (京着)

精神的なプレッシャーを与える意味でその電話は取らず様子見・・・

だが、しつこく青山はコーリング・・・

数十回鳴らしては切る・・・この繰り返し10回程してきた

以前、無視・・・

安っぽいプライドがあるのだろう、留守電は入れてこない・・・

その後、無視を決め続けると、青山からの電話は2日間で合計、着信40回となっていた

「そろそろ出てやるか・・・」

『はい・・・誰?』

『哀川か? 青山や分かるか?』

『知らん』

「ガチャン・・・プーップーッ」

「天国に」

『誰やねん？』

『ワシや哀川・・・分らんか？』

『なんで、この番号知っとんねん？』

『ある奴から聞いた』

『ほう・・・』

「俺は調べれば色々分かる力があるんだと言っアピールしたいのか・
クス、お前は既に手のひらや・・・」

『どうせ アイツでしょ?』 (他業者)

『・・・まあ・・・そんなとこや』

『で・・・何ですの?こっちは青山さんには全然用はありませんけど
?』

『まあ、そう言っな、ちと力貸してほしいねん』

『力？何を言ってますの、うちとお宅は反目ですよん』

『お前のところに居た鈴木がやらかしおってな・・・困ってんねん・・・』

『だから言つたやないですか、信用ならんって』

『今はそんな事言つてもしやーないねん・・・それよりアイツの居所知らんか？』

『あんなゴミの居場所なんか知りませんがな・・・何やらかしましたん？』

『金や・・・持ち逃げしよつたわ・・・』

『ほう、アイツにそんな根性ありますかね?』

『アイツのよく行く飲み屋に行つて聞いたら羽振りよく飲んでたらしいねん、間違いないやろ・・・』

『ほう、一人ですか?』

『いや、誰か分からんけど・・・何人かおつたらしいで・・・』

『恐らくアイツやろな・・・』

『分かるのか?誰や?』

『何でワシが青山さんに協力せなあきませんか?色々嫌がらせ受け』

たり、妨害をされたんですけどね・・・筋違いじゃないまっか？教える理由はありませんがな』

『なんやと？コラ！お前、誰に向かって言ってるんじやコラ？』

『青山さんですわ、自分で探すんやな・・・』

「ピッ」

電話を切った

当然のごとく再度電話が鳴り捲りだした

青山としては鈴木をつるんでいた人間が分かれば、芋ズル式に鈴木に辿り着くと考えているのであろう・・・

一時間ほどコールは鳴っては切れるの繰り返しが行われた

「相当熱くなって貰わなプラン通りにはならない・・・そろそろええやろ・・・」

「ピピ」

『なにですかの？ッッッッピピピ』

『「らあ！哀川！」「己、舐めとんか？』』

『青山さん、普通に話は出来ひんですか？ガキの使いちやいますやん、困って電話してきたのとちやいますの？多少は言われたくない事言われても聞くのが大人と言うものですやん』』

『あー！？ ワシに説教か？「コラア」』』

『筋・・・通すのがこの世界ですよな？』』

『お前が筋の話か？笑わせるな』

『筋道立てるのは常識やと思ってますがね・・・』

『なんやと』

『今までの経緯を踏まえて、言ってきたのか？と聞いてますねん』

『嫌がらせの件か？あれは鈴木や。アイツがお前をいわしたいゆーから気にせずやれと言ったまです』

『ほう、あの時（駐車場事件）鈴木は青山さんの指示でやった
言うてましたけど？』

『アホか？お前、ワシの金、持ち逃げしてんねんで？どっちがホン
マに分かるやるが？』

「糞同士、擦り付け合いか・・・」

『ほな、分かりました、力を貸しましょう。ワシはハッキリ青山さ
んの口から聞きたかったんですわ』

『何をや？』

『ワシを潰そうとしたのは誰か？と言うことをね・・・』

『・・・おお・・・鈴木や・・・アイツや』

「潰されるのはお前や・・・ニヤリ」

『で・・・どうしたいんですの?』

『鈴木や、アイツを捕まえなアカン』

『でしような・・・金はもう使ってんちゃいますの?』

『使っても無理やりでも作らせるがな』

『まあ、当然でしょうな』

『でっ、一緒に飲んできた奴教えてくれるか？』

『一緒に飲んできたのは「畑中」でしょう、アイツらはいつもつるんでますからね』

(真 公開処刑最小の方参照(笑))

『畑中・・・お前の前にパクられた奴か・・・』

『そうです。アイツ等、いつも一緒にパチンコや競馬行ってましたし、飲みも一緒に行っていたはずですよ・・・』

『畑中か・・・あり得るな・・・鈴木、一人でやったとは考えにくいかな・・・』

「アホかお前、実行は鈴木、後押しはワシや、このクズが」

『明日、畑中や鈴木のことを調べて分かる範囲内で連絡しますよ。それでいいですか？』

『おお、やってくれるか？悪いな頼むで哀川！』

『古い仲間じゃないですか・・・ニヤリ・・・先ほどは生意気な態度ですみませんでした・・・我慢出来なくて・・・』

『おーおー、そやろそやろ、分かるわー』

青山は急に上機嫌になった

『すんませんでした』

「いっちは一度下手に出て、青山に立ち位置を与える……」

『そや、お前今日はこっちにおるんかいな?』

『はい、おりますが』

『ほな、飯でも行こつや、鈴木、捕まえたら好きなようにさせたる
さかい』

『ホンマですか?』

『ああ、ホンマや』

『金取るだけ取ったら、殺していいですか?』

『殺さんでもええやろお
』

『いや、殺りますよ・・・アイツなんですよね？ワシをハメようとしたらいい？』

『そ・・・そっせ・・・』

『心配せんでも誰にも分からないように消しますわ・・・』

『恐いのぉ〜（爆）』

「ピッ」

そして青山と直接対話の場を設けることにした

「鈴木、青山、お前らには最高のステージを準備したる・・・」

今までに体感したことのないような素晴らしい惨劇をな・・・

そこにあるはずと想っている意思是、己の物ではなく用意されたものだと思いがいい・・・ニヤリ・・・」

o

青山と京介は落ち合った

場所は繁華街の筋を入り込んだ、隠れ家的な寿司屋だった

『どうも、お久しぶりです』

『久々やのう、元気そうやないか？』

『ええ、身軽な一人もんですさかい、適当にやってみましたので』

『そうか、なんやかんや言っても、所帯が大きくなると面倒なことも多いでな（笑）』

青山は京介に気を使っている様であった

唯一の情報源、ここでへそを曲げられたら困る・・・そう思っていた

『哀川、鈴木的事やねんけどな・・・』

『はい』

『アイツは金をコソ泥するような奴なんか？根性無しだから、どうもそこまでするとは考えずらいような気がしてな』

『そうですねか？うちからは時計やら現金やら500は軽くやられましたぞ』

『ホンマか？』

『ええ』

『それどうしたん？』

『表に出せない金、故、違う方法で対処しました』

『違う方法？』

『ええ・・・暴力ですわ、今回の事に限らず、次に会ったら殺すと伝

えております』

『恐いのお、お前・武闘派には見えんからなあ・・・(笑)』

『前は途中で逃がしましたがね、ジワジワやら面白くないですからね・・・ニヤリ』

『あん時の鈴木はホンマ、お前に殺されるから助けて欲しいゆうとつたで(笑)』

『やはり・・・青山さんの指示やったんですね・・・ギロツ』

『いや・アイツがどうしても言うからな(笑)まあ、もうええやんけ(笑)』

都合の悪い事を時々だし、それを軽く理解してやる・・・。

心理的優位な意図的に、揺らし、再び戻す・・・

『そうですね、それより畑中の住家と実家のリストを持ってきました』

『畑中の・・・そうか、そこに潜伏してる可能性がある・・・』

『どづか分からんですけど、可能性はありますね、ど田舎のなで身を隠すのには調度良いでしょうからね』

『明日、即効行ってくるわ・・・お前も来るか?』

『行きませんかな（笑）社長にお任せいたしますわ』

この業界は証人を欲しがる・・・

何か事を起こす際には、単独行動は極力避ける節がある・・・

特に後ろ盾が大きい組織ほど末端の人間はそうしたがる癖がある・・・

これは非常に危険な癖で、下手を打つと芋づる式になる・・・

基本、臆病な人間の集まりなのだろうと京介はいつも感じていた

畑中への処刑は済んではいたのだが、やはりあれでは生温かったと
考えなおし

青山を再度刺客として送り込む

青山の登場に、自分は辻谷からの的を掛けられたと錯覚してもらった
めでもあった

今後のプランに支障が出ないように雑魚も完全末梢するという構図
だった

くだらない宴はそれから1時間ほどで終了した

3日後

「天国にあなたが一番近い島」

京介の携帯が鳴った、相手は青山だった

『もしもし』

『ワシや畑中、捕まえたぞ』

『そうですか、鈴木は居てました？』

『おらんかったな、知らんと惚けるから、半殺しにて有り金、全部巻き上げてきたわ！わっはっはー』

事実確認もせずに暴力に出る行為、青山の行動は京介の予定通りだった

『そうでした、そこに鈴木がおらん言う事は・・・アイツの実家の可能性がありますね』

『場所は分かるんか？』

『ええ、奴の履歴書がうちにはありますからね・・・ニヤリ・・・』

『そうか、ほんだらワシの事務所へFAXしておいてくれや、番号は・・・や』

『分かりました、2時間以内におきます』

『頼むな』

「ピッ」

京介は鈴木の実家へ履歴書をコンビニから青山の事務所へFAXした

その夜、FAXが届いている青山から連絡が入った

翌日、鈴木の実家へ押しかけるとのことだった

「しかし、たかが200万程度でよく動く奴や・・・（笑）」

翌日、

青山は鈴木の実家へ向かった

だが、肝心の鈴木はたまたま不在だった

青山は鈴木のお前、妹を脅迫し、家の中で大声を出しながら家の中をメチャクチャにした

『お前んとこの息子がワシの会社の金を持ち逃げしたんじゃ！親が知らんで通ると思ってるんか！』

家だけではなく、駐車場にあった、鈴木のお前の車もメチャクチャに

した

『はよ！持ってこんかい！次は物や車では済まさんぞー！』

田舎者の鈴木の高親は青山の恐怖と息子への失望で、それから金融機関へ駆け回り200万を揃えて青山へ渡した

このことを青山は京介へ報告の電話を入れてきた

『……と言う訳で、取りあえず金は回収したわ、ワッハッハ』

『なるほど、しかし、鈴木はとことんツイテいる奴なんですかね…』

』

『今回は親からは集金はしたが、まだこれでは終わらん・・・』

『まあ、そうでしょうな（笑）ほんだら引き続き何か分かったら連絡入れますわ』

『頼む』

『ところで・・・青山さんは今は何処にいます？』

『まだ鈴木の実家付近や、これから戻るわ』

「AM11時30分・・・鈴木が実家不在・・・」

『分かりました、道中気を付けて』

「ピッ」

・ 京介は直ぐに車を走らせた、高速に乗り鈴木の実家のある地区へ・・・

午前中から不在・・・

奴の行きそうな場所はパチンコくらいしかないな・・・

高速を降りると直ぐに数か所のパチンコ屋をしらべた

3軒目のパチンコ屋に辿り着くと鈴木が所有している車を発見した

「・・・やはりな・・・ニヤリ」

店内に入ると鈴木はパチスロに夢中になっているようだった

仕事の金を競馬で使い込み、その後会社の金を持ち逃げ

畑中が鈴木 of せいで金を巻き上げられ

両親が被害にあい、家や車をメチャクチャにされたうえ、200万
もの金を徴収されている

そんな事が起こっているとは思ひもしないだろう・・・

「チャラチャラ・・・ガコン」

呑気にパチスロに文句を言いながらメダルを入れレバーを叩く姿が
みじめに見えた

「ピッピッピッ」

三つのボタンを押し終えた

鈴木は財布をだし、1000円札をだし、メダルサンド（コイン貸
し機 1枚20円）へ投入した

「チャラチャラ・・・」

「あの様子だと負けているな・・・」

京介は鈴木がそれから2000円程使うのを眺めた

「1円でも所持している金は少ない方が良い・・・」

「カツカツ・・・」

「お」

京介は鈴木に声をかけた・・・

o

「理解者」 8

親がどんな目にあつたのかも知らずにパチスロに夢中になる鈴木の肩を叩いた

「ポンツ」

「クルリ」

「社長！酷いつすよー！ 連絡取れなくなるんですもん！！」

「悪かったな、ちと不味いことになってな・・・外で話ししよつや・・・なっ・・・」

「不味いことですか・・・」

鈴木はパチスロを中断し店の外へ出た

『電話の件は悪かったな・・・』

『何があつたんですか？』

鈴木も多少は予測はしていたのだろう、顔が青ざめていた

『青山から電話が入ってな・・・お前、会社のくすねたの140ちや
うやる？』

『いやあ・・・まあ経費を含めて少し多めに取りました』

『・・・めっちゃ切れとるで・・・ワシにも連絡してくるくらいや・・・』

『マジすか？・・・』

『お前・・・金・幾ら残ってんねん?』

『いやあ・・・その・・・10万くらいですかね・・・』

『10万? えらい少ないか?』

『いやあ・・・パチンコと馬で取り返そうとして・・・使っちゃいました・・・』

『お前、究極のアホやな・・・うちの会社辞めてもらって良かったわ・・・』

『そんな事言わないで下さいよ』社長(泣) 青山さん、自分の事探してるんですかね?』

『おお・・・メツチャ探しとるで・・・畑中がお前と競合してると睨んで半殺しにされた上、金まで取られたらしいで・・・』

『畑中さんが?』

『畑中も、お前のこと相当恨んでるぞ。』

『マジすか？やべえ・・・どうしよう・・・』

『それと・・・お前、今日から家に帰らないほうがイイぞ。』

『何ですか？』

『青山がお前のアパートも実家知っているみたいやからな・・・待ち伏せされてる可能性があんで・・・』

『家に電話してみます！！』

『その方がええな』

「自分がパチスロに夢中になっている間の出来事を知ってもらおう事が必要だ・・・」

自分の浅はかな行動が沢山の人間に不幸をまき散らしたという現実と、これが辻谷のやり方であると言ふ事を体感させるためだった

鈴木は数分間、実家にと電話していた

見る見るうちにより顔は青ざめ拳動不審になっているようだった

『社長・・・ヤバイ事になってました・・・』

『どうしたん？』

『青山が実家に来てメチャクチャやってたそうです・・・金も巻き上げて・・・親の車までメチャクチャにしたそうです・・・かなりヤバイですよ・・・殺される・・・』

『かぁー・・・えげつないな（笑）っーか、お前、青山に話しないで
バックレたんやて？そらお前、自業自得や・・・』

『言えませんよ・・・言ったら殺されますよ・・・』

「その辺の感覚は理解しているようだな・・・」

『とにかく凄い剣幕やったで・・・』

『いやぁ いやぁ・・・どっしりどっしり・・・』

鈴木はダラダラと汗を流していた

『取りあえず、何処かに身を隠すべきやな』

『そつすつよね・・・』

『お前、パチスロ打ってる場合ちゃうで、実家に行ったと言つ事は、まだこの近くにおける言つ事やで』

『ですよね』

『ホラ、これがワシの新しい携帯番号や』

『次は急に連絡を取れなくなるってのは無しでお願いしますよ！社長だけが頼りなんですから！』

『分かった、分かった・・・』

鈴木に新たなる飛ばしの携帯番号を伝えた

『はよ 行けや!』

『でも、パチスロが・・・』

『アホかお前?命が関わる問題やねんで!どうせ出て無いやろ』

『いや、大分ぶっこんだんでそろそろ来そつな気配なんですよ』

『そうか、ほんだらパチスロ打っている間に青山に見つかって死ねや』

『社長さん、分かりました、』

『ワシが打つといてやるがな』

『……後で、結果を教えてくださいね』

「何処までパチンコに執着しとんねん……このアホ……」

『分かった分かった、さっさと行け、お前とおるとこ見られたらワシかて不味いやんけ』

『はい』

鈴木は直ぐに車に乗り込み北へ向かって走っていった

「オンボロロロー 貧乏おおおー」

「そちらの方向では不味いやろ・・・鈴木（笑）」

青山の向かっている地域へ鈴木は走り去っていた

実家付近に居ると思われる青山を自分と距離を遠ざけるためである・・・と読んでいた

「身を隠すなら、人口が多い方が有利ではあるがな・・・」

その後、鈴木のやっていたパチスロへ座り1時間で5万程勝った

「まずは5万円回収と言う事やな（笑）」

鈴木は勢いよく逃げ出したのは良かったのだが、行くあてもなく困り果ていた・・・

「取りあえず逃げなきゃ・・・」

所持金10万では余程切り詰めない限り、逃走資金としては苦しいはず・・・

車主体で動く逃走は、ガソリン代がネックとなる

鈴木の車は燃費はあまりよくない方である、飯を抜いてでもガソリンは常に満タンにしておかないと万が一がある・・・

馬鹿でもこれぐらいは考えれるだろう・・・

・
・
・
・

京介は黒田（友人？）へ電話を入れた

『黒ちゃん、次の指示や』

『なんですよ』

『青山に電話し、鈴木に頼んだ仕事の内容と渡してある金について話があると言っんや』

『はい』

『青山は恐らく鈴木がどのような展開で仕事を進めていたのかは分からんやろから、少し遊んでやるんや』

『大丈夫ですかね?』

『心配ない、ワシは既に青山とおつて、話もしている。完全に鈴木を問題視している、まさか、お前が絡んでいるとは思えないやろ』

『取りあえずお前も飛ばしを使え』

『ブ・ラジャー (了解)』

「・・・」

黒田は京介からプランの内容を聞くと、直ぐに青山へ連絡をいれた

「プツプツ・・・プルルル」

数十回コールをすると、低い声で青山は出た

『誰?』

見たことない電話番号には細心の注意払い受ける、若しくは絶対に
出ないのがこの業界のルールだ

『もしもし、青山社長ですか?』

『そつづですが、おまはどなたさん?』

『葛巻です、仕事の件なのですが・・・』

『葛巻さんでしたか！これは失礼しました、見慣れない番号でしたので』

『こちらこそ、突然すみません。あれから鈴木さんとは連絡は取れましたでしょうか？私の方でも何度も電話をしているのですが全然繋がらないんですよ』

『鈴木は退社させました、今後の打ち合わせは私に直接お話し下さい』

『そうでしたか・・・鈴木さんに前金を渡してますけど、その辺は大丈夫ですよね？』

シッカリ全額回収しているのに青山へ吹っかける様指示を出していた

『ああ・・・そうでしたね・・・』

『今回の件が、うちの社長の耳に入り少し心配しているようなんですよ・・・』

『いやあ なんも心配いらんですよ』

『ですが・・・うちの社長が一度、白紙にし再度お願いする方向したいと・・・』

『それは・・・困りますね・・・部品とか発注済みなはずですが・・・』

『鈴木さんとの話しでは仕事の追加の話まで進めてたので、まとめて発注と言う形をお願いしてたはずなんです・・・』

『そうでしたか・・・確認しようもないですからね・・・で・・・どうしたいんですの?』

『弊社としては、一度、前金を返してもらい、うちの社長から再度依頼をします。その時に今の3倍の発注を入れるようにしますので。』

『今の3倍・・・前金も3倍ですよ・・・いいですか？』

『全額、現金で準備しますので、この無理なお願いを聞いてもらえませんか？』

『葛巻さん・・・ホンマに再発注して貰えるんでしょうな？・・・』

『この仕事、青山社長以外に頼めるわけ無いじゃないですか（笑）』

『分かりました・・・仕方ありませんな・・・ただ私も普通の人間じゃありませんから、そこら辺はご理解してくださいよ・・・』

『恐いですね・・・脅しですか？』

『いや・・・世間話ですわ・・・』

流石の青山も疑念感じてくるだろう・・・

だが、3倍の額面の仕事となれば、多少の疑問点など取るに足りない問題ではない

必ず承諾してくると京介は踏んでいた

鈴木 of 行動で不信感が募ってる今、不自然では無い流れで持ちかけていく

相手も被害者なのだから、一度痛み分けをせざるえ終えない、その分、高額収入を得る条件を提示する

「人を信用してはいけないと辻谷から教わらなかったか・・・クツクツク」

青山は一度鈴木が回収されたことを知らずに、再度現金を用意する事になった

一方・・・鈴木・・・

金も少なくなり・・困り果てているようで何度も京介の携帯に電話が来ていた

「天国にあなた」
（京着）

『社長・・鈴木です』

『お疲れ・・お前、どこに潜伏してんねん？』

『毎日、車で生活してました・・』

『車？で、場所は？』

『色々動き回ってましたけど・・お金の都合が・・事務所の近くです。』

『まじなの？』

『青山さんのです・・・動きが分かっていいかな・・・って、夜は移動してますけど』

『危ないやんけ・・・少し、金・・・都合したるか？』

『本当ですか？マジお願いします！！』

鈴木が今、青山に捕獲されてはプランが台無しになる・・・

故に、もう少し鈴木には泳いでいてもらわないと困ると言う構図だった

『じゃあ、明日また連絡する』

一方的に電話を切った

金のない奴は即日金に欲しがらる・・・

だが、本日でなく明日を指定・・・これはプランとは違い ただの
意地悪だった

翌日

鈴木をある展望台のある場所へ呼びつけた

昼の時間も心細く金もないのでしんどいだろうと思ったが敢えてP
M17時を指定

尚且つ、展望台のある場所は上り坂が続き距離も大分走らないとい
けない場所

ガソリンを１リットルでも多く減らしてやるという配慮が組み立て
いた

そこで待ち受ける鈴木 of 運命・

眺めの良い景色とディナー

レストランで交わされる言葉・・・

鈴木はそこで心境をぶちまけて来る・・・

美味しい食事に綺麗な景色・・・

お金を借りれる安堵・・・

色んな意味で心を満してやる・・・

それが地獄の入り口とも知らずに・・・

京介は車に女を乗せ、鈴木の待つ展望台へと向かった

「ブロロロロロロ・・・！」

o

鈴木へ京介が接触を行おうとしている時、同時に黒田（友人？）が青山に接触を図っていた

京介の指示によりと青山とのアポイントを取りつき、青山の処刑の第一歩が始まるうとしていた・・

黒田に万が一があつてはいけないので小型レコーダー（録音機）を持たせ実行

脅しや暴力的な事が起こりえると想定していた、黒田自身、喧嘩は決して弱い方ではないが、ここで反撃出してしまうては、最後の根っこ（辻谷）を引きつり出せないでしまつと言つ予測があつた

故に黒田には絶対的な命令を下していた

そして現場には京介の奴隷と自負する女共を配置、黒田と青山の間に問題が起きたら直ぐに連絡が入るように指令を出していた

いつものホテルにて待ち合わせ、黒田と女を先に配備させ座る位置を限定するよう指示

女と黒田の不自然感を無くすためであった

数分後、青山が現れた

「カチ・・・」

録音スタート・・・。

『どうもどうも、待たせましたな』

『私も今来たところです』

『葛巻さん、例の金の件ですが・・・』

『はい・・・何か？』

『実は・・・うちに居た鈴木が金を持ち逃げしましてね・・・』

『ええ・・・そうなんですか・・・？そんな事をするような方には見えませんでしたよね・・・』

『いやあ・・・失態ですわ・・・葛巻さん、鈴木から受け取った領収書
いうのは今、ありますかね？』

青山は鈴木が持ち逃げした金額を把握しようと領収書を見せると言
ってきた

『これですけど・・・』

『・・・なるほどね・・・これホンマに払ったんですの？』

青山はカマをかけてきた

願わくば払いたくないと言う部分と、もしや、ワシを嵌めようとしているのでないだろうな・・・の意であった

『青山社長・・・私を疑ってるのですか？・・・』

『いやいや・・・違いますがな・・・会社の金、全額持ち逃げしとるんでね・・・更にこの分もか・・・と思ひましてね・・・』

『そうですね……ですが……うちとしては返金の方向で言われて来てますので……』

『でもね……無いものは無いんですわ……』

『それは困りますね……次の仕事の件もあるので……そこは社長……お願いできませんかね……』

『少し……待つてもらえませんか？……考えますわ……』

青山は意表を付いた行動を取ってきた

京介のプランには無い行動であった……

渋る可能性はあるが、鈴木の実家から200万回収している以上、払うであろうと言う読みであったからだ

5分後・・・

『葛巻さん・・・社長さんと話しをさせてもらえんですか？・・・』

「な・・・何？それは不味いだろう・・・だが・・・断る訳にはいかな
い・・・」

『・・・では、少し待ってもらえますか？連絡してみます・・・』

「天国にあなた」

展望台へ向かう途中の京介の携帯が鳴った

「どうした？」

「社長、葛巻です」

黒田が・・・葛巻・・・そして社長と呼び電話をしてきている・・・

直ぐに青山が電話を要請していることに気付いた

「青山か？」

「ええ、金を待ってくれと言って来ているんですよ、その交渉を直接したいと言っ事のようです」

「何でお前で止められへんのや!!お前はガキの使いかコラッ!」

「すみません・・・分かりました・・・何とか誤魔化します・・・」

「アホか?今からお前が止めに入ると、回収できるもんもできんよ
うになるし、今後のプランに支障がでるわ!」

788

「どつすねばいいでしょうか・・・」

「代われ・・・このアホんだら・・・」

「すみません・・・」

致し方なく青山と話をすることにした

声色を変えてはれないようにすれば何とかなるやろ……

黒田は青山の所に戻った

『青山社長……うちの社長です。』

携帯を青山に渡した

『もしもし……』

『初めまして、川村と言います。』

『初めまして、川村社長・・・突然なんですがね・・・こちらも事情が変わりまして・・・少し協力してもらいたいなと・・・』

『どのような協力でしょうか？』

『追加の分ありますね・・・その手付けと言う事で返金の金額を少し減らしてもらいたいと・・・うちも大変でして・・・なんせ従業員に金を持ち逃げされてましてね・・・』

「鈴木の実家から回収した分は出したくないと言う事か・・・相変わらず肝っ玉の小さい男や・・・」

『そうですね・・・担当の方がいい加減な方だったと言う事ですか・・・』

『何とか協力してくださいな・・・追加分・・・安くしますんで・・・』

『・・・そうですね・・・すみませんが、葛巻と変わって貰えますか、指示を出しますので』

『分かりました』

青山は黒田に携帯を返した

黒田は再び席を外した

「はい、葛巻です」

「しゃーない・・・これ以上粘れば、お前が危険に及ぶ可能性がある、奴の要求を飲め、予定変更や」

「分かりました」

「50、回収しろ」

「大丈夫ですか・・・その数字で・・・」

「いいから・・・ぶっける、アイツ金持ってるはずや・・・」

「分かりました・・・」

「ピッ・・・」

「50かよ・・・大丈夫かな・・・」

席に戻ると直ぐに青山は身を乗り出して話しかけてきた

『社長さん、なんて言うてました?』

『青山社長に少しでも協力できる形が理想だと・・・』

『話しの分かる社長さんですなあ（笑）』

『それで・・・金額なんですが・・・片手と言う事をお願いすようにと・・・』

『片手?50ですか?』

『うちも大変でして・・・』

『ほな・・・領収書の金額の半分と言う形で痛みわけでしょうか・・・?』

「領収書の金額は80万、その半分で手を打てと言うのか・・・」

『40ですか・・・』

『頼みますわ』

青山は頼んでいる割にはとても威圧的な口調だった

黒田は考えているふりをしながら数分間の時間を取った

『青山社長・・・分かりました。10は私が補てんしておきますので・
・40でお願いします。その変わりうちの社長には内緒にして貰え
ないでしょうか・・・』

『いやあ悪いですなあ（笑） 葛巻さんは話の分かる方ですなあ・
川村社長の教育が良いんですなあ』

そう言い財布から40万を出し、テーブルにドサツと金を投げつけてきた

貰うときは嬉しいが払うときは嫌なものだ・・・

それをあからさまに態度に出す辺りは小物ぶりの象徴にも見えた

『社長・・・じゃ間違いなく40返金と言う形と、残りの40は追加分の手付けと言う形でお願いしますね』

『はいはい、分かりましたよ』

青山は鞆の中から領収書をだし、40万の手付金としての領収書を書き渡してきた

黒田が領収書を受け取ると、そこには見たことも聞いたこともない会社の領収書だった

「・・・」

『では、確かに・・・』

質問をせずに領収書をしまい込んだ

その後、黒田は鈴木について聞いてもいないに色々と聞かされた・・・

『社長・・・そろそろ新幹線の兼ね合いもありますので・・・帰ります
が・・・宜しいですか？』

『分かりました・・・あとね・・・葛巻さん・・・分かっていますよね？・・・』

『はい？』

『必ず・・・仕事は私に依頼する様に・・・でないと・・・どうなるか分かりませんよ・・・』

『やだなあ・・・社長、うちは手付けを入れてるじゃないですか・・・必ずお願いしますよ！』

『では・・・連絡お待ちしてますね・・・』

『はい』

そう言い残しホテルのロビーを後にした

「しかし、最後に脅しか？言えた立場かあのモアイ野郎・・・」

京介の一連の流れを報告するために電話を入れた

『もしもし、黒田です』

『待つとっただ』

『すみません、50は無理で40になってしまいました・・・』

『別にええよ』

『ええっ！いいんですか？』

『鈴木から80万、青山から40万、合計120万やしな』

『（笑）』

『マジ、恐かったですよ（笑）あの馬鹿、財布に100万以上有るくせにセコク値切るなんて・・・小物ですね（笑）』

『青山はそういう奴や、少し予定よりは金額が少ないが取りあえずプラン通りや』

『ですね』

『お前の携帯破棄しろや・・・もう青山と会う必要は無い』

『今回の役はもう二度とやりたくないですね・・・』(笑)』

『そんな事、言いなやあ・・・』(笑)『もっと面白い目に合わせたるがな』

『京介さん、もしやワシも一緒に処刑ですか』(笑)？』

『当たり前やないか』(笑)』

『冗談きついわ（笑）』

『取りあえず、その金で適当に飲んどけ、後から連絡する』

『ブ・ラジャー』

無事、黒田と青山の密会が終わった頃、京介は展望台に着いた・・・

「ボイスレコーダー意味なかったな・・・」

と呟いた・・・

o

「理解者」 完結

「ブロロロロ・・・」

展望台に京介のアメ車が着いた

向かっている最中、鈴虫から「リーンリーン」と着信あったが、
それどころではなかった為シカトを決めていた

夕方の待ち合わせが、辺りは少し暗くなり辺りの景色はロマンチック
クな感じだった

『京ちゃん、夜景が綺麗ね』

『そやな』

女と会話をしていると運転席（左）に辺りに人影が見えた

『社長！社長！お疲れ様です』

「ウィーン」

パワーウィンドを開け言った

『展望台のレストランで待って』

『・・・はい・・・』

鈴木は女連れの京介を恨めしそうに見ていた

『何？あの人知り合い？』

『コジキだよ』

『コジキが社長って呼ぶのお〜（笑）』

『だな（笑）実はアイツは昔うちにいた従業員でな、どうしても今日少しかけたい言うからここに来い言うたんや、ごめんな』

『いいよ・・・すぐ帰るんでしょ？あのコジキ』

『そう、小銭を渡してすぐ帰す予定や・・・』

『取りあえず、待たせてるから行くつか』

『えっ？私も？』

『夜景の見えるところで食事はしたくないか？』

『したーいー！』

『ロジキは直ぐ追い返すから』

『…っ！』

京介は女を連れてレストランへ入った

鈴木は気を利かせたのかどうかは分からないが、夜景が見える絶好の席に座っていた

『待たせたな』

女連れの京介の姿に鈴木の様子は引きつっていた・

テーブルを見ると、鈴木の手元には水しか置かれてなかった

『なんや？お前、水だけか？』

『いや・・・その・・・待っていたんですよ』

「フッフ・・・」

女は鈴木の返答にクスクスと笑っていた

「ドカッ」

椅子に座り話を始めた

『お前、いつから待ってたん？』

『大分前ですね』

『何で？』

『行くところがなかったんで・・・』

『ふーん・・・』

女は鈴木へ愛想笑いをしていた

金のない時と言うのは、人間の心理は卑屈になりがち

「どうせ・・・俺は・・・」などと思うもの

そして女からの視線も相当嫌なものである・・・

京介と比較対象ではない、身なり、態度、見た目からわかる金の持ち具合・・・

鈴木は今、自分をどん底と思い込んでいるだろう・・・

だが、それは底ではない、まだ浅瀬に居ると言う事をしっかりと刻み込む一つのジャブとして用意された駒であった

『・・・悪かったな・・・腹減ったやろ?』

『社長!!待ちわびました』

『あっそ・・・』

女へも一言

『お前も何か食べたら？』

『うん！』

『鈴木・・・好きなもの食べろ！と馳走してやる』

『はい！』

金の事も気になるが、まずは腹ごしらえしなければ逃げ切れない・・・

鈴木はそう思っていたに違いない

物凄い数の料理を注文していた

「いつには遠慮と言うものがないのか・・・貧乏臭い奴だ・・・」

鈴木のがつつきぶりに女はドン引きしていた・・・

「ねえ、この人いつ帰るの？」

女は隣の席からメールを打ってきた

「飯ぐらい食わせてやってもいいやろ、このコジキはしばらく飯も食ってないくらい貧乏人なんだ」

「はい」

目の前に並ぶ料理に鈴木は笑顔になり、ガツガツと食べ始めた

京介はその姿を見ながら煙草を吸った・

「コインシにはプライドと言つもんは無いんやな・・・」

『ところで・・・お前、金はあといくらあるんやっ?』

『えっと・・・モグモグ・・・2千円です・・・』

『2千円?この間まで10万くらい持つてると言わなかつたか?』

『ええ・・・そうなんですけど・・・増やそうと思つて・・・』

『また・・・パチか?』

『まあ、そんなところですよ』

「コイツは逃走していると言つ自覚がないんやな・・・」

『ほんだら・・・お前に金渡しても、またパチするだけやな・・・』

『今度はしません・・・何とかしてください・・・』

口をモグモグと動かしながらしゃべるのが異常にムカついた

『取りあえず・・・飯、来たのから食べ・・・』

食事の途中に気まずい話しを振る・・・

鈴木の手が止まった・・・

『なんか・・・お腹が空いてるのに・・・喉を通りません・・・』

『頼んだ分は全部食べ、命令や・・・』

『はい』

『俺はコイツと少しそっちで話をしてくる』

そう言い、鈴木の席から離れた

ポツンとした鈴木は京介の方を何度も見ながら急いで食事をしてるようだった

『ねえ、まだなの？』

『うるせえ女やな・・・車に戻っとけ』

『怒らないで・・・京ちゃん・・・』

『てめえ・・・切るぞ・・・』

『しめんなさい・・・車に居ます・・・』

女は店を出て行った・・・

ここで女の役目は終わりと言う事だった

鈴木の所に戻った・・・

『鈴木、青山、相当、頭に来てるようやで・・・』

『見つかったら殺されますかね・・・』

『どつちやるなあ・・・殺すまではせえへんやるけど、近いことはされるやるな（笑）』

『・・・』

『まあ・・・鈴木、身から出た錆やんけ・・・ギャンブルなんか固執してるからアカンねん・・・。』

『・・・』

鈴木は声を出し泣きはじめた

どつちやらよつちやく事の重大さを理解し始めてきたようだった

『泣くな・・・男やる・・・この景色見る・・・綺麗やる？俺はこんな景色すら見れない所に監禁され拳句の果てには拉致られ監禁されたん

やで、分かつとるやろ・・・お前？」

『は・・・はい・・・』

「やはり、あの辻谷に拉致られた時の事知っていたか・・・やはり、こいつが一枚噛んでいたんやな」

『それに比べたらお前なんてまだマシやんけ・・・あん時は、辻谷に殺されるかと思っただわ・・・』

『それはそうですけど・・・』(泣)『自分には耐えられません・・・』(泣)『

『好きな事をやり、相手のことを考えず卑屈に過ごした結末やな・
それかて・お前、自分の力で超えようとせんやろ？まず・それが
アカンねん』

『社長、そんな事言わないで下さいよ・・・(泣)』

『・・・どうしたいんや？』

『どうしたらいいか分かりません・・』

『青山の所に行くか・・・逃げきるか・・・二つの内一つやろなあ・
』

『青山には会いたくありません・・・でも逃げ切る金もありません・・・』

『でっどっちやねん』

『出来れば逃げ切りたいです・・・。』

『分かった・・・』

ここで救いの手を差し伸べる・・・

鈴木は神でも見るような目付きになっていた・・・

京介は財布を出した

「ゴクリ」

鈴木が唾を飲み込む音が聞こえた

『取りあえず・・・時間無かったから金はあまり持ち合わせがない・・・』

そう言い3万円を渡した

鈴木は呆気にとられた顔をしていた

もう少し工面してくれるだろうと期待していたのが丸見えだった

この3万円には理由があった、高額を渡してしまうと、遠くに飛ぶ可能性があると話す事と

またもや、パチンコ等に使い込む可能性があるからである

『あ……ありがとうございます……』

『一週間以内に連絡する・・・その時、また追加したるわ・・・』

『社長・・・自分は社長を誤解してました・・・こんな自分にここまですてくれるのは社長だけです・・・』

「たった3万で改心するとは到底思えないがな・・・」

『俺は・・・昔から友達思いやねんで・・・鈴木・・・』

『社長！色々とすみませんでした！』

鈴木はテーブルに頭を付けながら謝罪してきた

「そんなんで許されると思っているのか・・・」

『もう、ええって・・・』

その後、店を出た

『社長、一週間後、連絡待ってます』

『そうしろ、こちらに青山から連絡がある以上、お前からの連絡は不味いからな』

『はい』

鈴木はやけに素直だった・

京介は車に乗り込み展望台をあとにした・

o

第四章 真 公開処刑 「誤解」

鈴木の運命は完全に京介の手の中に落ちた

青山は、本人の性格を生かしながら、詰めることなくそれなりに効果を効かせるよう勧めていた

青山の面倒なところは、辻谷と繋がっている所・・・

青山の利点は辻谷と繋がっている所・・・

このバランスを見ながら上手い具合に使うのが京介の考えであった

京介は黒田を呼び出し、次の手順について話をした

『……………という具合や……………』

『……嫌な感じですね（笑）……つくづく身内で良かったですよ（笑）』

『黒ちゃん、携帯は抹消したか？』

『青山に繋がる電話ですね？』

『そうじゃ』

『ええ、ハンマーで粉々にしました』

『上出来や、そのくらいやらかな安心はできん』

『これで青山から開放されました』

『青山からはな・・・』

『まだ・・・違うのがあるんですね』

『現段階では無いだけやな』

『根元まで・・・ですか？』

『嫌なん？』

『いえ・・・やらせていただきます』

通常の世界では、組織のTOPやリーダーを表す言葉としては、登りつめる的な表現が使われるが、

この業界のTOPや力のある人間へ辿り着くことは下がると言う・・・

根元まで掘り下がるとは、つまり、最終最後の照準は「辻谷」に合

わせているという意味合いだった

・
・
・
・
・

それから一週間が経った・

鈴木へ電話をした

『鈴木、生きてるか?』

『はい、何とか生きています・・・』

鈴木の声は元気がなく、どこか怯えているような感じがした

逃走資金もなければ、いつ青山と出くわすか分からないと恐怖から
であろう

『金あるか?』

『あと1万円あります・・・』

『お前にしては上出来やないか』

『ガソリン代がきついたので食を節約していました』

『そうか・・・明日、銭、追加したるわ』

『本当ですか！！出来れば少し多めに欲しいんですけど・・・』

『鈴木・・・ワシはお前を助けなければならない理由なんて全然無
いんやで?』

『そ・そんなあ・・・』

『それでも、お前はワシに自分勝手な要求をすると言う事か?』

『すみません、すみません、見捨てないで下さい』

鈴木の心理はもう金だけでは無く

青山に身柄を渡されることに恐れて感じ始めていた・

『お前が今の状況になったのは、ワシがお前を嵌めたなら分かるけど・・お前自分でギャンブル三昧したんやろが・・』

『はい・・その通りです。だから見捨てないで下さい（大泣）』

鈴木は電話越しに大きな声で泣きわめいていた

今まで二十数年間生きてきて、何を学び何をしてきたのか？

歩んだ道が違えども、こうまで墮落し卑怯な奴は見た事がない

温室育ちより達が悪い・・

だが・・そこは敢えて理解してやる・・それがプランだった・

『あんな・・・鈴木、お前みたいな奴は誰も相手してくれへんで・・・頼るのはお前が散々嫌がらせをしたワシしかおらん・・・皮肉やな・・・』

『社長！本当に本当にすみませんでした・・・何でもします！どうか許してください・・・』

『ワシは別に怒っている訳ではない・・・ただ・・・誤解は解いておかないと・・・思っている』

『誤解ですか？』

『そうや・・・お前の狂言（メール、電話、客への嘘、キャバクラでの横暴）で沢山の人が騙されたんやで・・・』

『・・・』

『今、この状況になり、その時の俺の気持ち少しは分かってくれてるのか？』

『自分は・・・自分は・・・』

『もう・・・自己弁護 辞めたらどうや？実際は青山から指示があったかも分らんが、実行に移したのは誰や？』

『自分です・・・』

『今回のギャンブルにせよ、嫌がらせにせよ、お前は普通の人間として最低最悪な行動をとるんや・・・分かるか？』

『・・・はい・・・』

『・・・お前・・・出来る範囲内で構わんから・・・狂言を言った連中に誤解を解いたらどうや・・・？』

『はい』

『実際に今、お前が行動に出るのは難しいが、その辺を踏まえて心に置いておいてくれればええわ』

『すみません・・・いつか、必ず謝罪します』

『鈴木・・・言葉というものは言つのは簡単や、発する言葉に責任をもたなあかん・・・それが男と言つものや・・・』

『はい・・・今後はそうします・・・』

「絶対分かってないな、この馬鹿・・・」

『よく考えろ、自分に甘くするのは誰でもできる・・・』

『はい・・・』

電話を切った

所持金一万円、いつもの鈴木ならば、翌日金が入ると分ければ、直ぐに使っていた

だが、今回、鈴木の本に対する有難みや考えを試す形で、色々な話を伝えたのだった・

少しでも改心するところがあるのならば・・殺すまで行かなくても、その手前で勘弁してやろうと思っていた

・

翌日、鈴木は京介に呼び出され指定の場所へと向かっていた

鈴木を少しでも安心させるために、青山の事務所から離れた地域だった

鈴木はガソリン代を節約するために、早い時間からゆっくり下道を走り、待ち合わせ場所へと到着した

現地に着くと、鈴木は京介の車を見つけると車を降り、90度の礼をしてきた

「ブロロロ・・・」

『辞めや・・・みつともない』

『すみません』

『取りあえず、飯でも行こうか、腹減ったやろ？』

『はい』

・

・

二人は近くのレストランへ入った

鈴木は最後の晩餐のような顔をしていた

『鈴木、よくない知らせがある……』

『な……なんですか……』

『青山が血眼になってお前を探してる……何か言っていないことないか？あれは尋常じゃない……』

精神的な揺さぶりだった

『自分は今回の件以外は何もしてないっすよ!』

『そっか・・・なら良いんだが・・・』

『一体何のことなんでしょっ・・・』

『知るか』

『・・・じつは殺された・・・』

『それで・・・お前はもう少し身を隠していた方がいい・・・』

『はい』

『少しまとまった金を振り込みしたるわ』

『振込みですか？』

『使っていない通帳があるから、それを使え、お前の名前では足が付く可能性がある・・・』

『でも、なんで振り込みなんですか？』

『遠くに飛ぶ必要性があるかもしれんからだ、いつも近くにワシがおるとは限らんやろ、金が尽きたらお前は逃げようがないやろが』

『なるほど・・・そうですね・・・』

『所持金は今幾らや？』

『 8千円です』

『お前にしちや優秀やな』

『はい、あれから沢山の事を考えて節約をしました』

『そうか・・・』

その日は、鈴木に3万円渡し、その場を立ち去った・・・

鈴木は大事そうに3万をしまい込み、京介の車が見えなくなるまで頭を下げていた

それから3日間の間、鈴木には連絡を取らなかった

「プルルル・・・」

四日後

・ ・ ・ ・ ・

『おう、鈴木』

『社長！！』

鈴木は既に鈴虫のようにリーンリーンと泣きそつであつた

『今から、K市へ来い、お前も精神的に相当参つてゐるやろから、今日は少し骨休めさせたるわ』

『マジですか？』

『ああ、K市なら、青山の息の掛かっている地域ではない、お前も十分ゆっくり出来るやろ』

『いいんですか？』

『おう、気にするな』

・ 鈴木は毎日怯え、生きた心地のしない生活から解放されると思った。

『社長・・・なんか・・・すみません・・・こんな自分の為に色々としてもらって・・・』

『気にするな、乗りかかった船や、全てが終わったら死ぬ気で稼いで返してもらおうからな（笑）』

『はい！約束します』

京介と鈴木はK市で落ちあった

鈴木はみすぼらしい姿で現れた・・・

痩せこけ、髪も髭も伸び、毎日同じ服を着てるせいかとても臭った

『鈴木・・・お前、風呂入ってるのか？臭いぞ・・・』

『お金が勿体無くて・・・』

『お前・・・それじゃ、飲み屋で俺が恥じかくやんけ・・・ホテル取つたるから・・・まずはチェックインしてシャワーでも浴びるや』

『は・・・はあ・・・』

『服はホテルの近くの店で適当に買ったから』

『はい』

鈴木は少しにやけていた・・・

『なんやねん？』

『社長・・・今日は飲みですか？』

『嫌か？』

『マジ嬉しいっすー！』

『あっそ』

鈴木は自分の車でホテルに着き駐車場で京介を待った

数分後、鈴木に激安ショップで買った、適当な服を渡した

『これで我慢しろや』

『ありがとうございます!!』

『ワシはコーヒーでも飲んでるから、シャワー10分で浴びて来い・
』

『分かりました!!』

鈴木はチェックインを済ますと、時間を確認し急いで部屋へと向かった

鈴木が泊まる部屋の番号は「510」号室

予め、京介が部屋番号を指定していた

鈴木が準備している間、K市の知り合いのデリバリーヘルスのオーナーへ電話をした

「プルルル・・・」

『はい・・・「触リーマン金太郎」です』

『斉藤社長の携帯でつか？』

『どちらさまですか？』

『哀川ですわ』

『「」無沙汰してます・・・』

『今日、お泊りコースでいける子、いてる?』

『お泊りコースですか、お任せください、哀川さん好みの女の子、
調度入ったとこなんですよ』

『アホ!ワシちゃうねん、お客さんの接待や・・ブスで構わん』

『うちは可愛い娘しかいませんよ(笑)』

『なんでもええわ、深夜2時から次の朝9時には帰る感じで頼みた
いんや・・』

『分かりました、折り返しご連絡します』

『頼む』

電話を切った

「力チャ・・・」

コーヒーを飲み終わった頃、鈴木が登場した

時計を見ると「3分」遅刻していた

『社長、お待たせいたしました。3分遅刻してすみません』

『ええよ、今日は楽しくやろうぜ！お前も大変やるからなあ・・・』

『あとこれな・・・取りあえず5万・・・後は、この口座に振込みしておくわ』

取りあえず手持ちの金を増やしてやり、心に余裕を持たせる・・・

『ほら、これを使え』

そついい、通帳とカードを鈴木に渡した

『この口座は畑中さんのじゃないですか・・大丈夫ですか？』

『大丈夫や、お前がそれを持っているのは、知っているのはワシだけや』

『はあ・・まあ・・そつですね！』

この畑中の口座は以前、京介の会社に勤めていた時に給料振込をし

ていた口座だった

数か月そこに給料を振込をしていたのだが、途中、振込口座を意図的に変えさせ、

通帳、判子、カード類は取り上げたものだった

残金は「0」だった

『取りあえず、5万あったらいいやろ？後は明日銀行に行けばたっぷり入ってるわ』

『社長！（泣）本当に本当にありがとうございます。』

鈴木は本気で京介が自分を救ってくると信じ込んでいた・・・

「こんなに上手い話がある訳ないと何故気付かないんだ・・・人を信用するものではないとあれだけ教え込んだのに・・・愚かな奴だ・・・」

『今日は無礼講や・・・好きなだけ食って、好きなだけ飲め、会計は全部ワシが持ったるがな』

『はい。』

鈴木の満面の笑みはとても憎たらしいものであった・・・

「リンリン」(鈴木的笑顔の音)

o

「誤解」 2

・ 鈴木は逃げ延びるといふ茶番劇を一生懸命、演じていたのだろう・

いや、本気だったのだろう・・・

本人にとっては本気のもりでも、他者から見るとそれはとても都合の良い言い訳劇ではない・・・

本気で「逃げる」という意味を精神に叩きつけてやる

そうしないと、同じような局面に達した時、コイツは過ちを繰り返す・・・

・ 「楽しい時間」は本気で生きている奴にしか、訪れることはない・・・

鈴木なりの本気なのか・・・どうかは知らないが・・・

最後まで演じてもらおうじゃないか・・・

京介はそう思っていた・・・

『鈴木、何か食いたいものはあるか？』

『そうですね・・・寿司・・・いや・・・焼肉がいいですね』

『寿司行つて、焼肉行こうか？』

『いいんですか?』

『ええよ、お前、そんなに食べるのか?』

『大丈夫すつよ、最近まともな物食ってなかったんで』

「質問の内容と答えが違うが、まあいいか・・・本日の主役だからな・・・ニヤリ」

少々、最後の晚餐にしては少し『美』に欠けるが、本人の希望ゆえ叶える事にした

鈴木は寿司屋では、初めて寿司を食べる人間かのように、いちいち「旨いだ」の「幸せ」だのとほざいていた

4人前ぐらい食べると、鈴木はベルトを緩め

『次は焼肉っすね!』と笑顔で言った

『入るん?』

『セーブしましたんで』

何故か偉そうに答えるて来ているかのようでムカついた……

焼肉屋に着くと、早々に注文を入れはじめた

遠慮と言うものはなく、上カルビ、上ハラミなどとにかく、「上」の付くものばかりを頼んだ

ビールを飲み、何やら雄叫びのようなものを叫びながら、自分で肉を焼き、自分で食べるといふ作業を繰り返していた

その食べる姿は、特に美がなく、貧乏臭さがたつぷり出てて、箸を取り上げたくなるほどだった・

京介はそんな鈴木を眺めながらビールを飲んだ・

『社長！食べないんですか？』

『俺は、小食やないか・忘れたか？（笑）』

『そうでした！社長、小食でしたね！じゃあ、自分が残り全部食べ
ていいですか？』

『おう・・・シツカリ食べ・・・』

「つーか、全部お前が注文したやつやんけ・・・」

人間食欲の次は性欲・・・

下等な人間ほど、食と性には貪欲なもの・・・

鈴木は無意識の間に、次のステージへ運ばれていった……

次のプランは「中途半端な性欲」と「解放」であった……

鈴木は焼肉を食べ終わると偉そうにビールをお替りし、煙草を吹かしていた

『ビビっちゃ満足かっ』

『はい、幸せでした』

「食い物ぐらいで幸せを感じれるとは・・・安い幸せ感だ・・・世には飯も食えずに飢え死にしていく人間がいるというのに・・・」

『お前、今まで酒は飲んでいなかったのか？』

『車の生活ですから・・・酒は色々和不味いかなと思い、缶1本くらいでした』

『そうか、さて、次はどうする？帰って休むか・・・キャバクラでも行くか？』

『キャバリたいです!!』

『ほな、行こうか・・・』

『はい！』

鈴木は意気揚々としていた

大して可愛い子は揃ってはいないが、人数だけは一人前のキャバクラへ着いた

それでも鈴木は、入り口にある写真を見て、品定めを始めた

『気に入った女は全て指名しろ、今日はお前が主役や』

『はい！よし！お前等全員指名だー！！』

「全員・・・調子に乗りやがって・・・まあ・・・いいか・・・その方が今後に影響する効果は大きい・・・」

鈴木はとても楽しそうに話をしていた

『お客さんはどんな仕事してるんですか?』

『当ってっく覧?』

くだらない当てっこゲームを開催していた

『はい！コジキ！』

京介がそういうと鈴木は、一瞬嫌な顔をしたが、今後の事も考えたのだろう・・・こう切り返してきた

『社長！正解です！』

「やだあ〜！絶対嘘だあ〜」

『アハハハ！』

鈴木の思惑通りキャバ嬢は反応したようだった

その後、鈴木はキャバ嬢の尻を軽くお触りをしながら飲んでいた

30分後、盛り上がってきた辺りを見計らい・・・

『さて、次の店に行くか』

『いや、あの・・・ここでもいいですけど・・・』

帰りたくなさそだったので・・・

『アホ！こんなブス並べて何がおもろいんや 次！ 次！・・・二
ヤリ』

『ですね！！』

裸の王様のような鈴木は更に調子に乗り出した

その後、2軒ほどキャバリ、3軒目にはシヨボいスナックへと連れ
込んだ・・・

この頃になると鈴木は相当酔いが回っており、とにかく何処でもい
いから座りたいという状態だった

「天国にあなた」

『電話や・・・』

そう言い鈴木を店に残し外へ出た

電話の相手は、デリバリーヘルスのオーナーだった

『哀川さん、少しポツチャリですが朝までOKな娘が用意できました』

『そうか、そいつで頼む、AM2時ちょい前にK市の飲み屋街に連れてきてくれるかい？』

『OKです』

『あんな・オーナー頼みがあんな』

『なんでしょっ?』

『簡単や・・・ニヤリ・・・』

京介はオーナーに簡単な指示を出した

『それだけで良いんですか?』

『おう、1万でやってくれるか?』

『いや、お金はいらないですよ(笑)』

『悪いな(笑)』

「ピッ」

デリのオーナーからの電話が終わり店へ戻った

鈴木が大声で叫んだ

『社長ー！待ってましたあ！』

『喧しいわ』

『やっぱり！社長は違いますねー』

『何がや？』

『理解があるし！お金もあるし！優しいし！最高ですよ〜』

鈴木は指を折りながら上機嫌で語っていた

『おいおい、そんなの当たり前やないか・聞き飽きたわ（笑）』

『ですね!!--!』

鈴木の口癖は「ですね!!--!」であつた

その後、得意の「GLAY」を熱唱・・・

ラルク派の京介には苦痛だつた

カラオケが終わり椅子に座る鈴木に言った

『今日、女、いらんか？』

『女ですか？いいですね』

『知り合いのデリ呼んでおいたで』

『マジすか！！社長！至れり尽くせりですねー！！』

『まあ・・・これからが本番やしな・・・息抜きが必要かと思ってな・・・』

『本番ありですか？ラッキー！！』

「これからがお前の処刑の本番と言う前フリなんだがな・・・」

酔っ払った鈴木は自分に都合の良い方向に勘違いをした

『いやあ！楽しみだな〜！』

鈴木は本番有のデリと思い込みときめいているようだった

AM1時30分過ぎ・・・「天国にあなた〜」

「おう、着いたか、今、外でるわ」

『鈴木、ちよい待っててな・・・ニヤリ』

『はい・・・ニヤリ』

鈴木はデリが到着したと感づいていた

外に出るとオーナーと女の子が待っていた

『今日はありがとうございました』

『ワザワザ悪かったな』

『いえいえ』

『女の子は君?』

『はい、こんばんわ(*、、(*』

『あのさあ・・・大事なお客さんなんやけど、超エロイから気をつけてね・・・』

『はい、分かりました』

『それと・・・朝は必ず時間厳守な・・・早く出るのは全然構わないけど遅いのはNGや・・・OK?』

『はい、分かりました』

『そしたら、ホテルの510室にもう行っててくれるかい？
冷蔵庫とか勝手に開けて好きにしていいいから』

『良いんですか？一緒に行かなくて？流石に不味いですよ・・・』

『そうか・・・ほな、30分だけ一緒に飲もうや』

『そう言い店にオーナーの女とデリ嬢を連れ込んだ』

『鈴木は即座に反応した』

『あれえ〜社長！誰ですか？』

『お前の相手や・・・ニヤリ』

『マジすか!!--うん!おっばい大きいね』

鈴木が盛り上がっているうちに特殊ドラッグを混入させた・・・

「サササッ・・・」

「鈴木はお疲れやるから・・・ぎよつさん寝てもらわな・・・あかんからな・・・」

『そろそろ、出ようか・・・』

『ですね！ニヤリ』

『イツキせえや、鈴木』

『行かせて貰います！！』

4人で店を出た

鈴木は既に女に夢中になりニヤニヤしていた

『鈴木、デリの分もホテルの分も金は清算済みや・・心配するな・・ニヤリ』

『（＊、鈴、＊）ニヤリ』

『じゃあ、いってらっしゃい。また明日な』

『はい！お休みなさい！』

鈴木は直ぐにタクシーを捕まえ、ホテルへと向かった

その後、京介はオーナーと近くのBARに入った

『電話でも軽く話したが、詳しい内容は知らん方がいい、ただ、例の通りに行ってくれればいい』

『本当にそれだけで良いんですか？』

『ああ、それ以上では困る・・・故に時間厳守や・・・』

『分かりました』

2時間後・・・

オーナーの携帯が鳴った

「あれ？どうしたの？まだ早いよ」

「マジ、有り得ないですよ！あの客！部屋に入るなり本番やらせるんだろ？と言いはじめ襲われそうになりました・・・」

「本当に・・・？で・・・どうなったの？」

「シャワー浴びてからって、誤魔化して時間を空けたら爆睡してたんですけど、私の下着を顔に巻き付けて寝てるんですよ！マジムカつきます」

「そうか（笑・・・色んなお客がいるからね・・・タクシーで街に戻っておいで、哀川さんと一緒だから」

「はい」

】510号室

眠りに着く・・・鈴木

翌日は素敵な目覚めが用意されていた・・・

o

熟睡する鈴木はどんな夢を見てるのだろう・・・

一時の幸せを堪能し、さぞやいい夢を見ているのだろう・・・

デリ嬢のパンツを顔に巻きつけ・・・

ショートロケッツ（鈴木 of 陰茎）を勃起させ眠る姿は・・・大馬鹿
野郎そのものだろう・・・

デリ嬢から鈴木 of 行動記録を聞きながら翌日のプランを進行させる
ことにした

・

翌朝 8時30分 デリバリーヘルスのオーナーから電話が入った

901

「天国にあなたへ一番近い島へ (京着)」

『おはようございます。昨日はご馳走様でした。例の件、既に行動済です。』

『おはようさん……で……どんなやつた?』

『最初は意味が分かってないようでしたけど、繰り返し同じことばかり言ったら「分かった」と言い電話を切りました。』

『そうか……予定通りや……ニヤリ。』

「ムシ」

鈴木と別のホテルに泊まっていた・

「さて、準備するか」

京介は変装を始めた、これもプランの進行を確認するためであった

その後 鈴木 of 宿泊先へと向かった

「ブ□□□□□□□□□□」

「キキツ・・・ガチャ・・・」

ホテルに着いた

「鈴木はまだお休みか・・・クツクツク・・・」

ホテルのカフェへと入った

カフェからロビーが見える席へと座った

一時間が経とうとしていた時、動きがった・・・

物凄い勢いでホテルに入ってくる車があった

「ボウオオオオ……ン！」

「キキキ……ッ!！」

「ガチャッ」

鼻息を荒くしながらホテルへ

「役者は揃ったな・・・ニヤリ・・・」

京介はカフェを出てロビーへと向かった

男は変装した京介に気にも止めることなく、フロントの人間に声をかけた

『お客さんに大至急、ここに来るように言われて来たんやけど、まだ、部屋におるかもしれんから呼んでくれんかね？・・・何度も電話をしたが、出ないんや、倒れてるかもしれんから、部屋の鍵を開けてくれ！』

『確認してみます!』

『ええから早ようせんか!客が死んでたら、このホテルに責任とってもらおう事になんてえ!』

男の大声はロビーに響き渡った・・・

『わ・・・分かりました!で・・・ではご一緒に!』

慌てふためきホテルマンと男はエレベーターに乗った

「クツクツク・・・」

京介も後を追うようにエレベーターへ乗った

「ガーツ」

京介がエレベーターを降りると、ホテルマンと男は部屋番号「510」の前に居た

京介はデリオーナーにこう指示をしていた

・
・
・

「この番号に朝一で電話をして、ある言葉を連呼し続ける」

「はい・・・で、なんですか？」

「ホテルの510号室、これを何を聞かれても連呼するんや」

「それだけですか？」

「ああ・・・それで十分や・・・」

この手の電話は業界では要注意なメッセージとして捉えるのが常識
だった

青山は連呼される部屋番号に青山は何かを感じ取ったのだった・・・

o

「誤解」 4

「510」室の部屋の前に行くと青山はホテルマンから鍵を奪い取り言っていた

『何かあったら電話をする！お前は下にさっさと降りんか！』

ホテルマンは青山の大声に驚きエレベーター向かい直ぐにロビーへと向かっていった

915

京介は自販機のコーナーへ行き、姿を隠した（エレベーターすぐ脇に有）

青山は鼻息を荒げながら「510」の鍵をガチャガチャと音を立てて開けようとしていた

「ガチャガチャ・・・カチ・・・」

青山は中に鈴木が居るかどうかは半信半疑だったろうが・・・

息を潜めて室内に入り込んだようだった

「バタン・・・」

部屋のドアが閉まった音を確認し、京介は「510」のドアに近づき耳を潜めた・・・

『コラー！起きんかー！！』

室内から怒鳴り声が聞こえた

『あああ？誰だよ・・・』

『コラッ！鈴木！ようやく捕まえたで！！』

『しゅあああああー』

「クックック・・・ようやく結びついた恋人のようやな・・・」

ヤリ」

どうせ後は聞かなくても、鈴木がどうなるかは分かっていたので、
京介はロビーへ降りた

30分後・・・

顔が血だらけになった鈴木と鼻息が荒い青山がエレベーターを降り
てきた

京介は、笑いを堪えるのに必死だった

「しかし・・・傑作だな・・・アイツら・・・」

血だらけの鈴木に唾然とするホテルの客達・・・

固まるホテルの従業員・・・

笑いを堪える京介・・・

そんなことを気にすることもなく青山は鈴木を外へ連れ出し車のトランクに鈴木をぶち込んでいた

「俺もトランクにぶち込まれたことがあったな・・・辻谷一派に）
笑）」

青山はフロントに走ってきた

『会計は？』

『前金でいただいています・・・あの・・・大丈夫ですか？お連れ様・・・』

『連れは風呂場で転んだらしい、今から病院に連れて行くから心配無いねん』

「まあ・・・少し無理はあるが・・・良い言い訳だ・・・」

『前金で？誰が払った？』

『後藤様と言っ方ですが・・・』

『後藤・・・分かった・・・』

青山は考えていた・・・

「後藤」と言う男に辻谷関連の仲間にはいない・・・

首を横に傾げながらホテルを後にした・・・

「後藤」・・・分かる訳がない・・・

敢えて、後藤を名乗り「510」を取ったの京介・・・

理由は当時、「後藤真紀」が好きだったから、理由はそれだけであつたからだ（断言）

こうして、鈴木のリイトな処刑は終わった・・・

「最後の晩餐」の絵画のように誰しもが心に思うことがある・・・

必ずしも相手が同じ思いであるとは限らないと言う事を無言で教育した

「学べ・・・鈴木、お前が思うほど人というのは、まともな人間などは存在はしない・・・たてまえや、人の目を気にしてばかりの人間はお前のような末路しか待っていないことをな・・・」

次なるターゲットは「青山」

鈴木 of 処刑は京介の導きによって、青山が環椎・・・

全て京介の思惑通りであった・・・

相手の精神や心理をコントロールしてこそ、本物である・・・

この時の思考や考えが未来に作り出す「傀儡」へ繋がるものとは京介自身もまだ、気付いていなかった

京介の狙いは青山のような雑魚ではない・・・

その根元に潜む「辻谷」にある・・・

だが、直接的に辻谷に挑むのは今はまだ早い・・・

行ったところで殺されて終わりであろう・・・

・

昔、辻谷に可愛がられていたころ、つい3日前まで一緒に飲んでいた奴が急にいなくなったことがある・・・

そいつは辻谷を陰で裏切っていた・・・その事が、タレこみされ情報が辻本に入り、抹消されたことある・・・

辻谷と飲んでる席で、京介は聞いた・・・

「あれ、今日は金山さんはいてないんですか？」

「金山？そんな雑魚はしらんわ・・・」

そう言い、新聞を投げつけられたことが・・・

そこには身元不明の死体がなぶり殺しにされたうえダムで発見されたというものだった・・・

「こいつが金山か・・・」京介はそう思った

距離を取りながら青山に接触し、雑魚に本物の恐怖を植えつけてや
った上で処刑をする

更に奥に居る「辻谷」への報復をするのが最大の狙い

そこに繋げるためにも、自分へ怒りの矛先を多少は向けてもらおう必

要がある・・・

まずは雑魚同士（鈴木・青山）に真実を知ってもらおう・・・

全ては「哀川 京介」の描いた構図であると言つ事・・・

だが、つじつまの合わないことばかりが出てくる・・・立証は不可能

929

全てを抱きかかえ飲み込み、嘘を真にする・・・それが京介のプランであった・・・

この考えの根底にあるものは「裏切り」と「理解」であった

事実は消せないが、ねつ造されたものは証拠が必要となる

その証拠は何もない・それが鈴木の一癖の弱みとなる

怒りで冷静さを失う、青山に京介の思考を読むのは不可能

所詮は、馬鹿は馬鹿 と言う理論であった

・

京介の予測通り、青山から連絡が入った

「天国にあなたあゝ」

『・・・はい・・・』

『哀川、ワシや』

『はい、どつさねました？』

『鈴木、捕まえたで・・・』

『ホンマでつか？良かったですよん』

『・・・鈴木が・・・きな臭い事・・・言いよんねん・・・』

『ほう・・・どない言ってますの？』

『お前が一枚噛んだる言いよんねん・・・』

「来た・・・本題にはよ入ってこんかい！このモアイ！」

『・・・また・・・ですか・・・』

『また？どういう意味や？』

『狂言ですわ・・・ホンマあること無い事、よう言いますわ・・・』

『哀川、会って話をしようやないか・・・』

「お前程度ではワシのプランは崩せるわけないやろ・・・」

『いいですよ・・・ところで、鈴木はどないしました？』

『半殺しにして、監禁しとるわ』

『相変わらず温いですな・・・そこに連れて行ってもらえます？』

『あああ？ヌルイだ？ほんだらお前、どうすんねん』

『殺りますがな・・・』

『それは・・・不味いやろ・・・』

『構いませんよ・・あんなの一人いなくなっても、何も変わりしないし誰も気づきませんよ・・』

『恐いのう(笑)』

『何を言ってますの・・この業界の常識ですよ』

『・・・』

「この臆病者のへタレ野郎が・・」

『ところで・明日、時間あるか?』

『大丈夫です』

『じゃあ、例のホテルで19時に・』

『解りました』

電話を切った・・・

その後。幾つものパターンを想定しプランを組みなおした

腐っても「辻谷一派」・・・その先には組織と呼ばれる馬鹿の集合体・・・

慎重に行かないとこちらが嵌められ死と向き合う事になる・・・

「まだ、死ぬのは早いやろ・・・(笑)」

まずは青山と会い。鈴木の狂言を聞き出す

そして鈴木 of 監禁場所へ連れて行ってもらいを再び恐怖を与える・・・

尚且つ、青山に手土産を持参する・・・

手土産とは『儲かる仕事』の事であった

当然、法を反する商材ばかりである

会う時のセキュリティも入念に考えた

黒田（葛巻）は青山と会っているため連れ出す事は不可能・・・

色々考えたが・・・土壇場での場所変更をする段取りで行くことにした

この構図は相手に主導権を持たせないと言う事に意味があった

こちら側で、絵を描き・・・そこに嵌める・・・これが理想である

この世界は常に騙しあい・・・

絵の上塗りばかりで何も信用など出来ないのが本音。

「お前の思い通りになど、何一つ運ばなくなる現実に恐怖を感じる
がいい・・・ゴミ山・・・」

o

「誤解」 5

待ち合わせの当日4時間前・・・

『黒ちゃん・・・例の情報は集めてあるか?』

『バッチリです・・・ニヤリ、』

京介は事前に青山の情報を隈なく調べるよう黒田に指示していた

『今日、青山と会う際に場所を変更かける、そこでお前は近場で待機や・・・』

『万が一ですね(笑)』

『そうや・・・北から仲間を集められてたら具合悪いからな』

『その辺も調べていますが・・・今の所、無さそうですが・・・』

『念には念をや・・・』

『ブ・ラジャー！』

『・・・』

入念な打ち合わせをした

18時40分

「そろそろ始動と行くか・・・ニヤリ」

青山に電話を入れた

「プルルル・・・プルルル・・・」

『はい』

『哀川です』

『おう、どないしたん？』

『ちょっと時間に間に合わないので場所を変更して貰いたいのですが・・・』

『・・・何でやねん』

『いい話もありますがな（笑）何とか頼みますわ』

『なんやいい話って・・・』

『儲け話ですわ・・・手土産ですわ』

『・・・そうか・・・でどこや・・・』

『 駅内にあるカフェでどうぞでしょう』

『分かった・・・19時でええのか？』

『 駅やったら19時で大丈夫ですわ』

『では、後程・・・』

「ピシ」

京介には考えがあつた、駅であれば人が沢山居る

その方が方が一の雲隠れはしやすい・・・

京介は既に駅に居た、先に居る事により 辻谷派、青山派の人間が来た場合の発見が素早く出来る

「顔は知らなくとも雰囲気や顔つき目付きで分かるものだ・・・」

こつちが相手を知らなくとも、相手は自分の事は知っている、それが最大の武器であり、最大のネック

「人間は無意識に反応するもんや・・・」

黒田はカフェでは無く、隣のテナントに女を連れショッピング風な客を装わせる事にした（変装var）

「18時55分」

カフェの中から店内を見ていると、青山の姿が見えた

「来たで、どす黒いモアイ」

黒田メールで伝えた

「一人じゃないですね」

「どうせアクセサリー（小物）やる」

「御指示をお待ちします」

青山はカフェに入ると辺りを見渡していた

『青山さん、いっちなです。』

『待たせたな。』

『いえ、そちらの方は？』

『いっちな。うちの社員や』

『小野寺です。よろしく御願ひします』

『いっちな。哀川です』

「標準語・・・こいつは関東から呼び寄せたと見た・・・辻谷が絡み始めたか・・・」

青山はスタッフと称し、小野寺と言う「芋（IMO）」を準備してきた

これは警戒している意思表示である・・・

突然の場所変更をして正解だったな・・・

『哀川・・・儲け話ってなんや・・・』

青山は、鈴木が発した言葉の意味よりも目の前の金の話に興味津津のようだった

「かかったな・・・ニヤリ・・・」

『仕事ですわ・・・3桁の・・・どうです?』

『面白そうな話やな・・・で・何でワシに?自分でやらんのか?』

『あれ・・・前に青山さん金を持ち逃げされた言つので、気を利かせたつもりやったんですが・・・ほな・・・こつちでやりますわ・・・』

『おっ!・・・待て、待て・・・そうやったなあ。　ほんま・・・鈴木
のガギヤ・・・金使いよってなあ・・・』

『確か高額でしたやんね・・・』

『200万以上やな・・・実際は経費とかなんやら入れたら500は
いっとるやろ』

「嘘つけ、この貧乏人が・・・」

『鈴木を押さえた時に現金持つてるかと思っただけ確認したらな・・・5
万と・・・空の通帳のみやったわ・・・』

『5万円・・・そして空の通帳？と言う事は全額使ってしまったとい
うことですか？』

『らしいな・・・』

『アイツはどこまでいってもアホやな・・・』

『哀川、仕事の話を持ってきて誤魔化そうと思っているかもしれんが、そうはいかんど』

『意味分かりませんな』

『ギャンブルらしいな・・・哀川』

『金の使い道でっか？』

『そっせ……そろそろ……言ったらどうせ……』

『何をですねん』

『ほな……ワシから言おか？』

『……聞きましゅう』

「やはり、こいつもただの馬鹿ではないな・・・モアイ面した、モアイ馬鹿だな・・・」

青山の言う事に偉そうに返答すると、青山と一緒に来た、小野寺が
噛みついてきた

『「うらあ・・・哀川！青山社長に意見か？」この野郎！』

『・・・』

青山は京介の反応を見るかのように・・・沈黙・・・

「ここは一発、「哀川 京介」はどういう男だと言う事を教えてやるか・・・」

『おう・・・お前誰に物言つてねん・・・』

『お前だ!』

『ええ度胸しとるが・・・可哀相に・・・今日で最後やな・・・』

・・・仕込んであったアイスピック（小）を出した・・・

素早く立ち上がり、小野寺の髪を掴み目玉の前に突き立てた

『今日から、片目で過こせや・・・』

『待て！・・・哀川・・・こいつお前の事舐めとつたみたいや・・・』

『このガキには、体で後悔ちゅう言葉を教えたりしますがな・・・』

小野寺は固まりながら青山に助けを求めた

『あっ・・・あの・・・しゃ・・・社長・・・』

この京介達の行動は店内の構造上、柱がある場所で気付いているものはいなかった

『おう、糞寺、仕掛けたのは、お前や・・・だがなお前のような三下が主導権握れると思うなよ・・・』

『辞める・・・分かった・・・信じるがな・・・お前を・・・』

『はあ？疑つとたんですか？・・・やっぱり、このガキで落とし前つけますわ・・・コラこつち来んかい・・・』

『分かった！哀川！・・・その仕事とやら買つわ・・・なっ！それで顔立ててくれや・・・こいつも後からよく言っておくからなっ・・・』

『おい糞寺・・・青山社長に感謝しいやあ・・・次は・・・無いで・・・』

『・・・』

『返事せんかい・・・コラ・・・』

『はい・・・すみませんでした・・・』

取りあえず、事を理解したのように座り、ブラックを飲んだ・・・

「カチヤ・・・」

『青山さん・・・仕事の話はさて置き・・・鈴木・・・何言っていましたか？実はこちらでも色々調べましてね・・・つじつまの合わない話が・・・多々あるもんで・・・お聞きしたいと・・・』

『おお、そやな・・・鈴木が言うにわな・・・』

青山は再び京介が怒り出さないように、要求された鈴木の話をはじめた・・・

o

「誤解」 6

青山は鈴木 of 垂れ込みもまんざら嘘では無いのかもしれない・

そう思っているだろう・・・

「そうでなくては困る・・・お前がそうやってワシを疑心案儀することの意味があるんや・・・ニヤリ」

青山は小野寺を横目で見ながら鈴木の話をし始めた

『鈴木が言うには、全ては哀川が仕組んだ事だとな・・・ギャンプルで偽の情報を流され使い込んでしまった。それを 埋める為に・・・的な事を言っはいたがな・・・』

『ほう・・・そうじゃか（苦笑）』

『会社の金を取ったのも、逃走も全て哀川の指示に従っただけで自分は被害者だとな・・・』

鈴木に対する指示など出しておらず、あくまでも『案』を述べただけで指示などは一切していないのが事実

全ては鈴木個人の判断で行われた行動である

「自己防衛に走る・・・弱者の象徴」

「自己を守りたいが故、つく嘘にも信憑性に欠けている」

『青山さんはその鈴木の発言に対しどう、お考えなんですか？』

『そやな・・嘘は付いてるやろ・・ただ・・お前が絡む・・そこが・
・ありそつで無さそつで・・な。』

『青山さん・・あまりワシを安く見んといて下さいな・・そんな
コミ、ワシが相手する訳無いですよ』

『ギャンブルの偽情報はどつやねん？』

「・・・」

理解を得るフリをしながら本質を聞きだそうとする質問

これはこの業界も警察もよく使う『誘導尋問』の手口だ

『ギャンブル？何のギャンブルですか？』

『パチンコやる』

「ワザと外してきたな・・・」

『パチンコ?』

『馬かもわからんな・・・』

『どちらにせよ、そんな解るわけ無いですよん(笑) 出来るんや
つたら仕事なんぞしませんわ(笑)』

『そやなあ・・・鈴木はお前から情報を得て、馬で会社の金を使い込み
みしてしまった。そして恐くなってお前に相談したら逃げた方が良
いと言われたと言ってるがな』

『知りませんなっ・・・そんな話、大体にして会社の金を使ってギヤ

ンブルに突っ込む事態が間違えて、そこを分かってないんじゃないですか？』

『まあ、どんな理由があれ、そないな事を言っつたわ』

『鈴木・・・言わせなあきませんなあ（半殺しの意味合い）・・・共犯みたいに言われてホンマ迷惑ですわ・・・会わせてくれますね？青山さん』

『・・・それはちょっと待て・・・今、強制労働に出して稼がせてるからのお（笑）』

『ほー・・・っつて言っつとアレですか？・・・責任は取れと言っつ事ですな』

『まあ、そっつ言っつ事になるな（笑）』

ここは誤算だった、本来ここで鈴木の居場所に連れて行ってもらい動けなくなるまで、なぶり殺しにして恐怖を植えつける予定であった

鈴木が強制労働に出されている・

恐らく、外国の絡んだ輸出系の仕事であろう思った

24時間監視体制で、衣食住は完備され、働いた分は全て吸い上げると言うものだ

過去に有本から聞いたことのある口だ・・・

鈴木が強制労働から帰ってきた時が問題だ、時期を知らないでいるととんでもないことに火種が飛ぶ恐れがある・・・

特に、青山の裏に潜んでいる『辻谷』が要注意だ

奴は狂言と分かったうえで、こちらに的を向けることだろう・・・

嘘かどうかなどは問題ではない、キツカケがあればいい・・・そう考えるはずだ・・・

「そうなれば、此方が今度は狙われる番・・・プランの組みなおしが必要だ・・・」

『どの位の期間行かせたんですの？』

『半年くらいじゃうか？』

『いいえ嘛ですな』

恐らく半年と言つのは狂言で4・5ヶ月・・・早ければ3ヶ月である
うと確信した

鈴木の事はもう少し聞きたいが、ここで話を引く張るところからの真
意が読み取られる可能性がある・・・

腐っても同じムジナ・・・用心するに越したことはない・・・

『青山さん・・・そろそろ・・・ビジネスの話と行きますか』

『そつやな・・・』

金に執着心の強い青山はビジネスの話に身を乗り出してきた

だが、これもフェイクの可能性が・・・

仕事の中身は「ハイリスク・ハイリターン」

この仕事を数軒やらせて儲けさせるのが狙いだった

金が儲かる上に、複数の現場を与えることにより、忙しさが追われることになる

幾ら用心していても、金を目の前になると人の気持ちは変わる・

ここを利用しようと思っていた

1軒では何か起きた時（問題）にすぐに対応出来てしまう

同時に、3軒ぐらいの仕事をやらせ時間と実績を作らせる

それが後に『証拠』となるようにする。

当然、最初の仕事では全てが上手くいき、たっぷりと儲けてもらい安堵を与える……

それから、徐々に真綿で首を絞めにかかるというものだった

『仕事の内容はこうです……』

『儲かりそうやな』

『上手くいくと更にランクUPの仕事が取れます』

『そうやな』

『そうしたら、5000万くらいは抜けるんちゃいますか？勿論、全店舗抑えることができればの話ですがね』

『そやな……お前の取分はいらんのか？』

『いいません、うちに居た鈴木がしでかしたことのお詫びですわ』

『悪いのう……ニヤニヤ……』

ここで取分をいただいでしまうと……「共犯」になる……

あくまでも、営業、実行は青山の部隊で構成してもらうのが狙い

人手が足りなくなれば、必然的に辻谷部隊が加勢する……

一気に突破口が出来るかもしれないと考えていた

『それと、仕事の繋ぎ役には人を準備しています、ワシが前面に出たんでは上手くいくのもいかなでしょう……お上の目もありますしね』

『そやな・・お前、最近いったばかりやしな』

『そうなんですわ、今、再びいくわけにはいきませんからな・・・
ニヤリ』

『そやな・・分かった』

青山には後日、案内人と称し仲介役を紹介することにした

『最初の仕事をお伝えします』

『おじ』

『まずは他県から攻めることにしましょう、地元ではワシがいる以上は何かと不味い・・・そう思うからです』

『分かった』

『まずは、広島・・・ここから始まり、次は・・・』

それから、2、3現場の地域を言った

『範囲が広いな・・・万が一の時が難点だな』

『ほんたら辞めますか?』

『いや、やるわ、何とかなるやるさ』

『ええ、ワシが今まで何ともなかったんですから、大丈夫かと思ひますわ』

『そやな・・・』

青山は少し気おくれしているような感じだった

『乗り気じゃなそつですわっ。』

『そんなことないがな』

『もしかして・・・ビビってます?』

『あん?なんて?アホかお前、誰がビビるんじゃ、数を計算しとんねん』

『数?兵隊ですか?』

『そつぜ』

『上に話を通したら、手伝ってくれますぜ』

『その現場の売り上げはパーになるやんけ』

『まあ・・・確かに・・・』

『こっちで何とかするわ』

『あれやったら、言うてくださいいな、時間の調整はするよ』と言いつ
ときですがな』

『頼むな、哀川』

『はい・・・ニヤリ・・・それはまじ・・・』

その日の夜は青山も金になる仕事が入るといふ事で気を良くし

京介を連れて、夜の街に出ることになった

たらふく豪華なものを食べ、飲み、豪遊させてもらった・・・

『ところで、この小野寺とか言うガキは信用できるんですか？』

『ああ、大丈夫や』

『おい、小野寺』

『なんですか哀川さん』

『この仕事を絶対に他言してはいけない・青山社長とワシが初めて一緒の益を交わす仕事や・意味・分かってる?』

『はい、それは分かっているつもりです』

『つもり?・・・つもりじゃ あかんねん・・・』

『は・・・はい、すみません。分かりました!』

『おいおい、哀川、その辺にしてくれへんか、震えとるやないか』

笑)
』

『そうでつか……小野寺、ワシはこう見えても仕事は大真面目な男や……もし……万が一裏切るような事があれば……両目いただくからな……』

『わ……わかりました……絶対に裏切りません!』

『哀川!、辞める』

『社長……お言葉ですが……こういつのは最初が肝心でしてね……何せ……うちの兵隊ちやいますからね……』

『大丈夫や、なつ、哀川』

『社長がそこまで認めていると言うことに免じて・・・この辺にしておきますわ・・・』

話の流れから、青山の対応を見る限り、辻谷部隊ではない・・・そうは感じていたが

小野寺は、完全に青山の舎弟分なのかという事を確かめる意味合いだった

辻谷の兵隊であれば、全て筒抜けになる・・・

仮にそうだとしたら、それはそれで対応するが、そうでない方が面白い流れが作れる・・・

青山、小野寺を纏めて処刑したうえで、奴には照準を合わせたいと思っていた

勢いだけの若造は教育が必要

土壇場での口の固さ、約束やルールを守るといつこの世界の業を学ばせる・・・

「青山・・・お前の教育は相変わらず生温いな・・・」

世の中、金が全てでもなく

信用や信頼がいかにか脆いものか・

地位、名誉などただのお飾りでしかない・

所詮、ただの人間なのだと知ってもらわなければならない・

「人は誰しもが、自分を特別と思っていたがる・・・だが、それは間違
いだ、お前らは普通以外の何ものでもない、特別というのはワシの
ような者をいうのだ・・・思い知るがいい・・・ニヤリ・・・」

o

真 公開処刑 episode・1

真 公開処刑へお付き合いありがとうございます

今回は補足を兼ねて雑談更新です。

1話からご覧になっている方でも、登場人物の把握が大変なのではないでしょうか・・・

そんな事を思い、多少、人物紹介と関連性と補足を書きます。本編は本日更新できたらします

「哀川 京介」

言わずと知れた（笑）主人公ですね、「傀儡」「アコウクロ」「監禁」「楽園」「永遠の奏」に主演

傀儡師の異名を持つ謎の男、この「真 公開処刑」はその京介の過去の物語として描かれています。

「黒田 聡」（原作、友人？）

京介の右腕として当時大活躍した人物

度胸もセンスも抜群で冗談の大好きな男

「小林 真矢」（原作 京子）

京介のコマ

「川島 のり子」

鈴木の元彼女、鈴木のせいで制裁を食らうはめになる

「鈴木」

京介の会社の元従業員、京介に可愛がられるがそれを裏切り青山の配下へ行く

京介へ仕事上、その他で妨害工作を散々するが、後に、その報いは倍返しを食らうはめになる

「畑中」

京介が逮捕になった原因、目の前の金に翻弄され裏稼業を個人的に

請負い、それが警察にばれて御用

罪自体も「不起訴」にし、罰金も、京介に払ってもらいシャバにでるが、その後、鈴木と組み 妨害工作を繰り返す

鈴木の前に処刑を食らう

「栗田」

京介の親友、表社会の会社経営陣、個人的な付き合いがあった

「橋田」

京介の親友、顔が恐く、腕力も恐ろしい程ある男、表社会の経営陣

京介は、こいつとだけは喧嘩をしたくないと思っている人物でもある

「青山」

北を中心として動く、辻谷一派

顔がデカく、色黒でモアイ像みたいな顔をしている。京介が拘束されている間に、辻谷の指示により鈴木を取り込むが……

辻谷からの役付けは、京介と同じ位置に置かれていた人間

「小野寺」

青山を師と仰ぐ ただの馬鹿

「有本」

京介が辻谷一派へ監禁されたときに助けてくれた、京介の恩師

辻谷と対等の位置におり、京介の相談役として位置していた、全ての仕事は有本に報告ののちに行われていた

「辻谷」

人を全く信用しなく、金と裏社会での地位と暴力で全員をまとめ上げてきた男

某組の、業界別TOPの人間、「フライデー」（情報雑誌）などでも何度か取り上げられ取材を受けている

体には、背中には日本刀で切り付けられた跡があり、いつも酔うとその話をする大馬鹿鹿野郎

現段階ではこの程度ですかね（笑）　まだ、ちょいちょい増えますのでよろしくです

前回の記事で、青山が、「上に頼むと売り上げはパー」とありますが

こういう意味合いです。

辻谷は、自分に関わる人間が自分の知らないところで仕事をすることをとても嫌う

ちくいち、どこの現場で幾らの売り上げがあるか？粗利はいくらか？と言う事を知らないと気がすまないのです

辻谷に黙って仕事をして、反抗的な態度を取ると、以前の記事であったように、「死体」になる場合もある

また、報告せずに、辻谷に仕事をしたことをばれると呼び出され、何日間も拘束した上に売上金を全額没収するのです。

故に、一度報告し、辻谷の顔色を伺い、仕事をこなすのが一番安全な方法であった

雑魚みたいな仕事でも（一発 50万程度）一応、報告すると気をよくして、もう少しデカイの取るまで

「運転資金にせえや」と偉そうに語るのがパターンであった

京介はデカイ仕事は自分で動き、契約まで話を済ませてから、有本経由で辻谷へ報告

小銭を稼ぐ仕事は、鈴木、黒田を起用をしていた為、小銭申告はあまりしていなかったのが現状だった

辻谷の恐い所は、恐ろしいくらいの情報網だった

交友範囲が広いのか調べつくしているのかは分からないが、どこで何をしている、また、色んな県に住まいなどを何件所有しているかなど正確に把握していた・・・

当時は、知っている人間は限られているはずなのに、何故・・・と
思う事が多々あった

いづれ、この辻谷に照準を合わせ、ジワジワと処刑者達を陥れた

実際の所、今こうしていること自体、あの時は考えられませんでしたね（笑）

あの出来事が京介&私を変えたのでしよう（笑）

あの時の心境は、「いつ死んでもいい」、「捨てるもの守るものも何もない」と言う心境でした（笑）

今は違いますね（笑）

守るものはあります、貫き通すものもあります

私は、侍のような男です、言葉に責任を持ち、後悔などしないと言
うのがスタンスです

（ 強、。の一言・謎）

「自分のことをもっと学ぶべきである」

人間を知っていると思うものよ、自分のことをよく学ぶべきだ。

では、後程・・・

プラン発動・・・黒田による情報操作が始まった

なるべくしてなる・・・金に目が眩み、足元が見えなくなっている
今が最大のチャンスである・・・

ハイリターンだけを重要視し、そこに潜む危険性を再度認識させなければいけない・・・

当初の予定通り、2、3現場は思い通りの展開を歩ませ、距離を縮める

絶対に青山は追加を要求してくる・・・

再度、追加で仕事を紹介する

裏社会に慣れると、自分は王様にでもなったような口ぶりで話すよ
うな奴が多い

青山の所属する組織の母体が大きいいとはいえ、それは辻谷の組織で
ある

今回は青山は、辻谷への報告はなしに、自分等で行うとの事

「それが、何を意味するか・・・よく考えることだ・・・ニヤリ」

まずは、難なく仕事を2、3軒こなさせ、青山の手元には数百万の
金が転がり込んだ

一発、3ケタの仕事は、青山にとってもよい小遣い稼ぎになったよ

うだった

『哀川、追加で仕事を紹介してくれるか？』

『ええ、いいですとも、その代り・・・気を付けてくださいいね』

『分かつとるがな！大丈夫や』

『では、後から代理人に連絡をさせます』

『ほんまに、お前の取り分、ええのんか？』

『何度も言わせんでくださいな』

『悪いのお・・・ニヤリ』

青山は受話器越しにニヤついているのが分かった

「ピッ」

黒田は早速、青山に出向く地域への同種の連中へ垂れ込み・・・

当然、地元意識の強い連中は、縄張り争いがある

外部の人間が入り込み、大儲けをしていると知れば、当然揉め事に

発展する

正規の仕事ではなく、裏稼業故、報告や面通しと言つのはとても大事である

青山はそれを怠るに決まっている

それは何故かと言つと、辻谷が効いているからである

辻谷は全国の裏稼業の人間にはとても有名である、どこから、情報が漏れるか分からない・・・

その為には、密接に行く必要があるからである、故に情報の漏えいを防ぐためにも面通しや挨拶などは出来ないと言つ事になる

縄張りでの他者への侵入は商売上とは言え揉める原因

友好関係が大事だ

「金が目が眩んだモアイ像にはおあつらい向きな処刑を用意してやる・・・」

青山には、地元の連中とは公約済みとハツタリをかましどんどん動いてもらう

青山は話を通っていると思えば自由にやる、飲み食いなども目立つことだろう・・・

「自分の事は自分でやる」

これを怠ると引き起こる・・・「火種」

このような構想でプランは組まれていた

追っかけ方式で、次々現場を熟す青山部隊・・・

この数が最後は自分の首を絞めるのである・・・

稼いだ金額以上なハイリターンを味わう事になる・・・

現場が4軒目に入りもう少して終わりそうだという時に青山から連絡が入った

「天国に貴方が一番近い島」（京着）」

『はい・・・』

『哀川、ワシや』

『もう終わったんですか？早いですね、追加ですか？』

『現場は・・・間もなく終わんねんけどな・・・実は・・・困ってる事があつてのお・・・』

『儲かりすぎて困ってるんぢやいますの？』

『アホか、ちゃっわ』

『ほんだら・・・なんですか?』

『いやな・・・地元の連中からだいぶチャチャが入ってねん・・・』

『ほう・・・どこの組のもんですか?』

『地元では大きな所らしいわ』

『なんて言ってますの?』

『所場代をよこせとな．．．』

『渡したらいいですよん、小銭で型付けた方がええ時もありまっせ．
』．』

『アホ！危ない橋、渡ってるのこっちやで渡せるか！それに辻谷に
情報が流れるやんけ！』

青山は京介の思いのままだった．．．

完璧に描いた絵図を辿り、言うセリフまでもが想像通りだった．．

「お前は・・・俺の操り人形なんだよ・・・これからもっと激しい試練を準備してあるぞ・・・ニヤリ」

『ほな、どうしますの?』

『止めてくれんか?』

『えっ?ワシが止めるんですか?前に立てと?』

『おお、そつや・・・頼めるか?』

『無理ですわ、ワシは一銭も貰ってないと言う事は、前には立たな

いという意味ですやん。今更、あきませんわ・・・社長・・・ニヤリ』

『そこを何とか頼むわあ・・・』

『方法が無いわけではありませんが・・・少し時間を下さい・・・そして、どうやって止めたか？誰が止めたか？は一切聞かないと言つのが条件です。また、お金はかかると思ってもらえますか？』

ここで「一切 聞かない」これが効果的である

人は謎めくとそこに色々な想像をするものだ・・・

「哀川は自分が思っていたより力があるのかもしれない・・・」

より一層、京介の信用度があがると言う事になる

『おお・・・分かった・・・また 明日連絡するわ』

『1日くらいじゃ無理かも分かりませんよ・・・』

『何とか頼むわ!』

黒田の根回しは効いていた・・・

地方の組織が青山の事をよく思うことなく、脅しをかけ始めていた

「約束は約束やから・・・」

取り合えず問題勃発地域に強い人物に連絡をした

「ピッピッ」

「御無沙汰しております・・・哀川です」

「おう、久しぶりやないか哀川、今どないしてるん？」

雑談を数十分繰り返した・・・

「で・・・本題はなんや？」

「実は岡山（4軒目の現場）の方で、知り合いが地元の連中と揉めてましてね・・・」

「ほう・・・どんな仕事や？」

「こんなんですわ・・・」

仕事の内容と、揉め事の原因を伝えた

「ほんまにお前の知り合いなんか？」

「ええ・・・今回だけは、この哀川に免じて事を納めてもらえませんか？」

「・・・地元の連中から、食っていくのに必死やねんで、それを外のものが現れてちゅうのは、あまりええ話ではないな・・・」

「それ相当の所場代は準備させてもらいます」

「・・・」

「勿論、社長の分も・・・」

「そうか・・・分かった」

岡山での揉め事は、翌日には沈静化した

この事が影響を与える事になった・・

青山には、今回の事件を止めた料金が請求が行われる

「これで今まで掛かった金や黒田の旅費、小遣いまで埋めれる・・・」

青山には支払われる金額を倍額を請求されることになった

翌日・・

青山から電話が入った

『もしもし』

『おう、ワシやどつやった？』

『納めましたわ・・金の準備お願いしますね』

『ほんまか！助かったわ』

『取りあえず、立て替えておきましたんで、今回の現場の売り上げはこちらで集金させていただきます』

『おいおい、なんでやねん！』

『それは聞かん約束ですやん・・・』

『・・・うーん・・・』

『辻谷さんには情報が流れないようににはしておきましたので、それを考えれば今回の件は安いもんちゃいますか?』

『そやな・・・ほんだら追加ガンガン頼むで』

『分かりました・・・』

「ピッ」

取りあえず、黒田に集金を向かわせる

集金が終わり次第、次の現場の導火線に火をつける準備を行わせる。
・
・

『黒ちゃん・・・集金終わり次第・・・GOや・・・ニヤリ』

『ブ・ラジャー！』

青山は現場をこなし、京介に集金の事を頼み次の県へと旅立った

岡山の現場で集金する金額は「現金 600万」そのうち青山に支払われるのは200万

黒田は集金を終わると青山を追うように次の場所へと行った

o

黒田は打ち合わせ通り現地に入り情報操作を行い始めた

この情報操作の部分で一番大事なのは、「タイミング」である

青山の仕事の進行状況を確認しながら進めないといけない

それには理由がある、物的証拠があるようにしなくてはならないからだ

物があるのと無いのでは、全く違う

未遂なのか・・・ガセなのかという部分を取り除くためである

確実に墮とす・・・その為には緻密に計算されたプランは不可欠であった

数日後

京介は次なる地域、三重県へと飛んでいた

「プルルル・・・」

『もしもし』

『黒ちゃん、お疲れさん、どつちやっ？』

『お疲れ様です、順調です』

『ワシも来たで・・三重県に』

『マジすか!』

『おつよ(笑)』

『マジ寂しかったですよ(笑)』

『せやろ(笑)今日は金も持ってきたで』

『助かります、調度底を着くところでした』

この業界、金の振り込みを嫌う

それは足が着くからである、これもまた、物的証拠になりえるからである

金の流れは必ず追われる・・・万が一、青山から火種が飛んだ際に危険となりうる可能性がある

その為には現金は手持ちか宅急便を使うのが原則である

黒田と落ち合った

経費と小遣いを渡しプランの打ち合わせを始めた

『取り合えず・・・青山の仕事は動き始めた・・・工期は3日間・・・その後、集金と言う段取りなハズや』

『はい』

『この現場の最中に次の仕事をこちらで準備する』

『はい』

『一軒目が仕上がり、次の現場に着工したら情報を流せ』

『お上（警察）ですか？』

『あほ、そんなやつたらつまらんやろ、地元の組員の方にだ』

『一難去ってまた一難ですね』

『まあ、そつ言つ事や』

『アホだな、青山（笑）』

『ワシはこの地域の連中には面識は無い・・・今回は止めれるかどうかは分からない・・・』

『マジすか（笑）ウケますね』

『多分、この辺りまで来ると青山はMAXになり始め暴走するであろつ・・・自分の身内の仲間を出す可能性がある・・・』

『辻谷ですか？』

『どうか・・・2度も同じ手を食らい熱くはなるが、辻谷には言えないのが現状であろつ・・・』

『でも、あのおっさんビビリだから辻谷に助けを求めるんじゃない
ですかね?』

『だとしたら少し厄介な問題になる・・・その時は気合を入れて潰し
にかかるまでだ』

『燃えるぜ!』

『多分、なんやかんや言い訳を付けて、小銭で済ませ下の連中でも
引っ張り出すんじゃないか?』

『あり得ますね、あの糞寺がいい例ですね』

『そやな、青山の兵隊やったら楽勝やねんけどな・・・』

『上手く行きますかね・・・』

『まあ、考えはある・・・取り合えず青山の仕事ぶりを拝見と行こうじゃないか』

『ええ・・・ニヤリ』

何も知らずに現地に入る青山達、仕事は難なくこなしているようだった
仕事の完了を終える一日前、青山から連絡が入った

「天国にあなた」
(京着)

『お疲れ様です』

『ワシや・・・明日で終わる予定やねんけどな・・・二二二の連中は
どうや?』

『また、何か言われてますの?』

『いや・・・無いねんけどな・・・万が一や、お前止めれるか?』

『三重県は知り合いがおりませんので・・・自信がありませんね・・・
』。

『そうか・・・話を通しておくほうがベタやな?』

『それは社長の判断ですわ』

「このモアイ少しは学習能力があるようだな・・・」

『そついや、お前の紹介してくれた、アイツは何者や？最初の現場だけ教えてくれて、その後連絡つかんようになったで・・・』

紹介者ががこんなに早く飛ぶのは誤算だった・・・

『小銭で満足したんでしょう、何せ貧乏人ですから』

『そうなんか・・・』

『・・・この仕事を取ってきたのも、奴なんですけどね・・・他でも色々引つかかってましてね・・・死んだんちゃいますか？』

『死んだ？おいおい・・・哀川・・・お前、これヤバイ仕事なんちゃうか？』
『コラ』

『何を言ってますの（笑）うちらはいつでもヤバイ橋ですよん』

『ホンマ大丈夫か？何かあったらすぐに辻谷に言うからな』

「辻谷を使えばこちらが怯むとでも思っているらしいな・・・」

『何を言ってますの、前はたまたまですよ、今回は店さえ口を割らなかつたら大丈夫ですわ』

『店・・・いわしとかなアカン・・・』

「客を脅すつもりか・・・このアホ・・・」

『まあ、何かあったら連絡くださいな、下調べはしておきますので』

『分かった』

『それはそうと・・・次の現場ですが・・・どうします?』

『やるがな』

『次は・・・愛知県ですわ』

『近いやないか』

『ええ』

『工期は5日間後です、現地に入ったら一度連絡をください』

『分かった』

「ピッ」

電話を切った後、即座に黒田に電話を入れた

「ここですぐに問題は起こしては不味い……、警戒している今、問題が起きたら間違いなく辻谷へ繋げるつもりだ……」

『黒ちゃん、今回はスルーや』

『何ですか？』

『辻谷をちらつかせてきよったわ』

『糞モアイめ！』

『まあいい……今回のスルーは大きな効果を生むやろ』

『次の現場で倍返しですね』

『それはどうかな・・・まあ・・・指示をまて』

『ブ・ラジャー！』

『・・・』

「敢え無く・・・この地での仕事はすんなり行くように地元組織に連絡を取り次げ、現金を投げ込んだ」

（金で承諾させるという意味）

無事、青山は仕事もコンプリートし、次なる地へ向った（追加現場）

青山が完全に三重県を離れたのを確認の後、プラン始動・

『黒ちゃん、地元の連中に情報公開しろ』

『マジすか？止めたんじゃないんですか』

『止めたさ・・・一時的にな・・・内容を伝えてないだけだ』

『うわぁ・・・えげつない(笑)』

『あの時あくまでもスルーすると言っただけや』

『確かに（笑）』

・ ・ ・

数日後

簡単に問題はおきた・・・

地元の組織連中は・・・青山ではなく、店へ恐喝が始まった

それに加えて一般客のクレームの嵐が店を行われた

店が責められるように、地元の連中には伝え

一般客には情報操作をして店への不信感を募らせるようにしていた

店は困り果てる・・・

プログラムの事など分かる人間たちはいない

当然、青山に連絡が入る

現地を離れてからの問題は対応しかねるに違いない

辻谷ではなく、必ず最初にこちらに連絡が入るに違いない・・・
そう睨んでいた

読み通り青山から直ぐに連絡が入った

『おい、三重で揉め事が起きたわ・・・』

『止めたはずですけどね・・・』

『店がつめられてるようやねん・・・』

『店が・・・もしかするとパーセンテージを大きくしたんじゃない
ですか?』

『あの糞店長、あれだけ言ってきたのに・・・殺したるか!』

「出来ないくせに・・・」

『なにせよ、今回は店の責任ですな・・・』

『そ・そやな・・・しかし・・・面倒な事になったわ・・・』

『・・・どないしますの?』

『シカトやな・・・それしか無いな・・・』

「それで済むと思つなよ・・・」

『流石！青山さん強気ですね（笑）』

『任しとけ！チヨロイわ』

「（、強、。）オマエガナー」

青山は揉めに揉めている現場を放置し、次の現場をコンプリートさせる方向で進めた

青山は現状の仕事を片付けさっさと集金の段取りを組んでいたようだった

問題が起きる前に金を貰っておく・・・この業界の鉄則ともいえることだ・・・

そついう部分では青山はとても使える男である・・・そこを辻谷に認められたのであろう・・・

京介はそついう青山の安い部分が好きじゃなかった・・・

客よりも辻谷を大事にするあの考えが・・・命取りになる・・・

違法を行う場合は、客も運命共同体と考えるのは常識と考えてから来るものであった

「そうそう上手く行くとも思っなよ・・・クズモアイ・・・」

青山は愛知の現場が完全に完了したが、仕事で納品している商材にトラブルが発生した

これは予定外ではあった、これを逃さない手はないと京介は考えた

不具合の修正に「小野寺」は派遣されていたようだった

事前に不具合について青山はトラブルの原因を確かめる為に京介に連絡を入れてきたことでわかった

『そうか・ほんだらプログラムの数字を「1」に変えて、部品を変えればいいんやな?』

『対外はそれで直ります、もし直らない場合は「IC」を変えてやればいいです。ハンダ出来ます?』

『ハンダ層があるわ』

『ほんだら安心ですな、熱で基盤溶かさないようにと、他の通線を

結合したりしないでくださいね』

『分かった、一応予備一枚持って行かせるわ』

「行くのは糞寺か・・・」

『その方が良いでしょう』

『また連絡するわ』

このような会話が行われていた

三重の現場を放置した挙句、トラブルは人任せ・・・

この無責任さが、大きな仇となる事も考えないのか・・・

『その前に・・・』

『何やねん？』

『次の打ち合わせがしたいんですが、次のはでかいですよ・・・』

『おっしゃ、しよつやないか、どこにおるん？』

『京都ですわ』

『京都か・・・近いな直ぐ行くわ』

『お待ちしております・・・ニヤリ』

少し予定とは違いますが、ここで青山には時間を稼いでもらう必要がある・・・

・ 三重、愛知での起きる問題を未然に防げないようにする為であった。

・ 黒田は京介からの指示通り、次の段階へと進む段取りをしていた・・・

o

京介と黒田はそれぞれのプランの為、別行動を取った

まずは京介が動いた

仕事の進み具合、追加の依頼、鈴木に戻る期日を聞きだす事が目的
ともう一つは

現地に残る「小野寺」と連絡を簡単に取らせないためだった

小野寺の入る現場では時間が必要

無能な小野寺は仕事が終わったり、何か問題が起きれば必ず青山に
連絡を付けつはず

そう簡単に思い通りにさせる訳にはいかない・・・

そう考えていた

青山とおち合い、早速つかの仕事の内容と金額を伝えた

青山は金額の大きさに目の色を変えていた

『しかし・・・ええのか？哀川』

『社長がやらなかったらワシがやります。それだけですわ』

『いや！ワシがやるっつ・・・』

「お前がやって当然だ・・・」出来たら「の話しだがな・・・ニヤ

リ

『ただ、用心しないといけません』

『お上か？』

『ええ、その通りです、金額がでかいですから金の流れを追われると一貫の終わり・・・その辺は大丈夫ですか？』

『全部裏で回せばええんやろ？』

『ええ、そうです、ですが、先方さんも巨額の金額を100%と裏で回し切るといのは難儀なはず・・・そこを何とか理解させるしかないです・・・』

『そやな・・・』

『それと、もう一点、客が裏金を作り出す手段ですが・・・素人の考えではお上に足が着きやすい・・・』

『そつだな・・・客は持つてるんか(金)』

『あることはあるでしょうが・・・表処理の金でしょうな・・・』

『お前やったらどつどつするぞ』

『作らせませんがな・・・「ちびの言つとおり」に動いてもらってね・・・』

』

『どじやるんやっ。』

『まずは、今回の契約の方かに、1000万準備させます、それで、ある商品を購入させる』

『ある商品・・・？』

『それを使い、毎日十数万から100万単位で抜かせるんですわ・・・あの店なら1000万など20日くらいで回収できますわ』

『なるほど・・・その手があったな・・・』

『もし、お上が先に気付いて動くことがあったとしても、その商材
だけであれば大した罪は大きくないし、あれは取り外し可能、回避
も出来る・・・』

『なるほど・・・その手は使えるな・・・』

『もし、客が金を準備できなかった場合ですよ・・・』

『分かった』

『どちらにせよ、こちらに報告ください、その商品はこちらで準備
させていただきます・・・いいですね?』

『・・・あっ・・・ああ・・・分かった』

京介はコーヒーを飲みながら聞いた

『ところで・・・鈴木は何時戻りますの？』

『鈴木？・・・ああの裏切り者か（笑）そやな・・・来週ぐらいちやうか？』

『と言うと・・・3日後ですかね？』

『多分な・・・どないするんや？』

『裏切り者は抹殺ですがな・・・』

『待て待て・・・仕事手伝わせるから、それが終わってからにしてく

ねせ
『・・・』

『・・・この仕事を手伝わせるつもりでっか？』

『ああ、もし万が一の時は、鈴木に行ってもらおう』

「なるほど・・・万が一の捨て駒か・・・」

『まあ・・・いいでしょう・・・ほな・・・青山さんと会った事は黙っておきましよう・・・あのゴミニ警戒しよりますわ・・・』

『おお、分かった、どないするつもりや？』

『全てが終わったら・・・拉致しますがな・・・』

一方 黒田（友人X）

黒田は小野寺の動きを監視していた・・・

現地入りする小野寺は、客先に連絡を入れている所だった

「・・・」

黒田は時計を見た

「ぞっと・・・一時間くらいと言いつところだな・・・」

小野寺が現場に入り出て来るまでの時間を予測した

・ 「小野寺は、青山から現地での探め事等の話を聞いているはずだ・

出入りに相当な用心をしているはずや・・・そこを相手の恐れている通りにしてやるんや・・・」

京介の指示を思い返した

黒田の予測通り、約一時間で小野寺は仕事を終え、裏口の扉から出てきた

「さて・・・期待に伝えてやるか・・・ニヤリ」

辺りを見回しながら恐る恐る出てくる小野寺・・・

地元の組の連中と警察を意識しての事だった

小野寺が数歩、歩くと背後から声が聞こえてきた

『おい・・・』

『・・・』

小野寺は無視をしてそのまま突き進もうとした

「この根性無しが・・・」

黒田は近寄り小野寺の襟元を掴み後ろ膝を蹴り

「ボクウ！」

『テメー！何すんだこの野郎！！』

『貴様・・・誰に向って言うてんだ・・・この野郎・・・』

『誰だ！テメエ！』

『雑魚に語る名などない・・・』

『なんだとー！くらあー！』

『しいて・・・言っなら・・・』「？」だ』

『？・・・だと・・・ふざけるなよー！』

『お前の人生よりはマシだと思っけどな・・・』

『俺に手を出すとえらい事になるぞー！』

『寝言は生きているだけにしろ』

いきなり小野寺の膝を蹴りを転ばし馬乗りになり動けなくなるまで殴打した

小野寺は黒田の膝蹴りと強力な殴打になすがままの状態だった

「た・・・たすけて・・・くだ・・・さい・・・」

『おう・・・お前のバックには誰がついている？』

『それは・・・勘弁してください・・・』

『誰に断り入れて　ここで仕事したんだあ？コラあ？』

更に顔面を強打

「バキイイ」

「うがあああ……」

『おう……誰だ……名前を言え』

『……』

『誰の指示で、いつで仕事をしてるか言え……』

小野寺は貝のように口を閉ざした

「こいつは少しは見どころがあるな・・・青山の舎弟にしておくのは持ったくないな・・・いらないけど・・・」

『おい・・聞こえねえのかよ・・・?』

更に殴打・・・

「ボク」「バキ」

『い・・言い・・まふ・・』

『・・・あ・・青山・・です・・』

『最初から・・・言えよ・・クズ』

「バキッ」

完全に戦意喪失し気絶してしまっている小野寺の腹を蹴り、現場から持って出てきた鞆と、乗ってきた車のチェックする事にした

「レンタカー・・・ね・・・」

「ガチャ・・・ガザガサ・・・」

「あったあった・・・お宝が・・・ニヤリ」

車内にあったセカンドバックからは数十万の現金と、現場に入った時に交換したと思われる部品

その予備などが出てきた

「ここは・・・」

ダッシュボードを開けるとそこには携帯電話が2台入っていた

「飛ばしか・・・（他人名義の携帯電話）」

「バキッ！ゴキッ！」

2台の携帯電話を破壊した

「ヤア・・・」

黒田は小野寺を見た

「ニヤリ」

体をロープで両手を縛り後部座席に放り投げた

「少しドライブするか・・・小野寺・・・」

小野寺は無反応だった

黒田は人気のない所に車を移動させその場を去った

「楽勝だったな・・・」

「京介と青山」

話もまとまり、青山は上機嫌、前祝と称し、京介を連れて豪遊していた

「そろそろ・・・ええころやる・・・」

『社長、トイレ行ってきますわ』

『おっ』

青山は隣に座る公衆便所みたいな女に熱くなりながら軽く返事をしていた

「ピッピッ」

黒田に電話を入れた

『じゃあ？』

『コンプリートです』

『そうか・・・』

『黒ちゃん、公衆電話から青山の携帯に電話をしろ』

『はあ』

『そして、出たらすぐ切れ』

『ブ・ラジャー！！』

指示を出してから20分後・・・

『ジュジュジュ』

青山の電話が鳴った

『社長、電話ちやいます？』

『おう・・・ワシのか（笑）』

『なんや?・・・』

電話は切れた・

『プー　プー』

『・・・』

『おい・・・』

『・・・』

『はい・・・』

「シッ」

『どござれました？』

『公衆電話からでな．．出たら切れよったわ』

『公衆電話．．．怪しいですね．．』

『何でワシの番号が．．．』

『今日は小野寺は？』

『現場に入れてるわ．．』

『その人ちやいますか？』

『携帯電池切れか（笑）？まあ電話してみるわ．．．』

青山はそう言い席を立ち、小野寺の携帯に電話をし始めた・・・

o

「誤解」 完結

青山は店の外へ出て、何度も何度も小野寺へ電話しているようだった

この際に京介はトイレへもう一度行き、黒田へ電話を入れた

「プルルル」

『はい、お疲れ様です』

『短めに用件だけ言う・・・糞寺はどうした？』

『プラン完了して、半殺しにして車に放置してきました』

『指紋は？』

『一切、残していません』

『……もう一度戻って、奴に目隠しをして車をどこか遠くへ放置して来い』

『ええっ……分かりました……』

『こちらの方でもプランを始動している、今繋がると不味いねん』

『携帯は破壊してますよ』

『アホ、誰かに見つかると救出されるやろが』

『……分かりました……山奥に分投げてきます』

『用心せいや』

『はい』

『帰りは時間が掛かってもなるべく人と接触しないようにして戻れ』

『えっ……』

『なんやねん……』

『ブ・ラジャー……（泣）』

切なさそうな返答でしてきたが……シカトした

電話を切りすぐに席に戻った

青山も調度店内へ戻ってきた

青山は首を傾げながら言った

『うちの小野寺・・・連絡取れへんわ・・・』

『電波の届かない・・・ですか？』

『そやねん・・・』

『電波が悪い現場でつか？』

『・・・いや・・・あそこは圏外ちゃうねんけどな・・・』

『またまた物騒な・・・社長、勘弁してくださいよ（笑）』

『お前・・・愛知に知り合っているやろ？』

『まあ・・・居ないことはないですが・・・なんて言ったらよろしいですか？』

『そやな・・・』

『まあ、もう少し連絡待ったらよろしいですよ』

『そうするか・・・』

・

黒田は京介の指示通り小野寺を放置した車へと戻った

「ガチャ・・・」

小野寺は相変わらずグッタリしてうなだれていた

「まだ寝てるのか・・・コイツ・・・使えねえ奴・・・」

腫れ上がってる顔を遠慮無く掴み目隠しをした

「キュルルル・・・ブルン」

1時間以上走り、山の中へどんどん走っていった

山中で小野寺が目を覚まし、多少の会話をしたのち置き去りにしてきた

「しかし・・・京介さん切ないわ・・・」

山中に登る途中・・・折りたたみ自転車が放置してあったため拝借

下山は自転車げんたでと言っ形をとった

路上に出てしばらく走るとガキがコンビニにたむろしていた

ガキ共がコンビニの中に入った際にバイクを拝借し、それで逃走・

「この歳になって、チャリや原付パクると思わなかったわ・・・ク
ックック」

こうして、黒田は無事現場を離れたと後程メールで報告があった

・
・
・
青山は少し不安げな顔をしながら宴を続けていた

「この小心者が・・・」

『・・・そんなに心配なんですか？』

『少しな・・・地元の連中にさらわれた可能性があるかもな・・・』

『無いとも言えませんな・・・』

『明日・・・行ってみるか・・・』

『不味いんちやいますか？もし、地元の連中がおるとしたら飛んで火にいる夏の虫ですわ』

『そやな・・・でも・・・小野寺がおらんと仕事が進まないんよ・・・』

『鈴木がおりますやんか・・・ニヤリ』

『鈴木・・・おお・・・そうか！！・・・そやな・・・』

「再び・・・鈴木を引き出しに成功・・・」

ここで小野寺を完全に封じ込める予定が組まれていた

再度、鈴木をフル活用してもらおう・・・

そして再度、鈴木には鉄槌を下す

容赦は無用ということだった・・・

黒田が帰り際に小野寺へ残した言葉があった……

これが、小野寺を封じ込める小技であった

気絶から目を覚ました小野寺の顔面を再び何度も強打し、本当に今日が最後かもしれないと錯覚をさせる

そして選択を出す

『ここで死ぬか……今後一切青山とは音信不通にするか……どちらか選べ』

『殺さないで下さい・・・もう青山には関わりません・・・』

『・・・嘘を付いたら必ず探し出して・・・殺す・・・』

小野寺はガタガタ震えながら青山との縁を切る事を約束

黒田は小野寺から没収した金(数十万)から1万円を渡した・

『レンタカーはここに放置し、この金で行ける所まで行って逃げろ・
青山とは一切連絡を取るな・・・分かったか?』

『はい!二度と関わりません』

『その方がお前の為だ、俺だって好きで殺しをしたい訳ではない・・
逃げるなら逃げる理由が欲しいだけだ』

『助かりました・・ありがとうございます！必ず約束を守ります』

「こいつ本当に馬鹿だな・・（笑）」

この詳細が小野寺封じの真相であったことは誰も知らない

それから2日後・・

青山から京介に連絡が入った

「天国に貴方〜」

『はい』

『ワシや、小野寺の糞！逃げよつたわあー（怒）』

『逃げた？連絡取れたんですの？』

『レンタカー屋から車が返されないからと連絡が入ってな、その1時間後に山中に乗り捨ててあったのが見付かったんや！』

『ホンマですか？』

『しかも金も払わないで乗り捨てしていきやがったわ！』

『請求きますやん（笑）』

『レンタカー屋にそんな奴は知らんと言って切ったわ（怒）』

「ホンマ・・・無茶苦茶やな・・・」

『どないしますの？』

『見つけ出して殺すわ』

『どつも・・・根性無しが多いようですな・・・社長の教育が甘いんとちやいます？』

『なん・・・まあ・・・言つても仕方ないやろ・・・今後は気を付けるわ』

「なん……の次は何が言いたかったんだ？糞モアイ……？ニヤリ」

『最初からスパルタでいって、ガンガン監視すればいいんですわ』

『それじゃ、お前辻谷方式やんけ』

『ええ……それが一番効き目がいいんで……ワシも奴から学びましたわ』

『そうか……まあ……その事はもうええわ』

不機嫌な口調になり青山は電話を切った

o

真 公開処刑 第五章 『犠牲』

『哀川、小野寺が逃げた可能性があるかもな・・・』

『逃げる？あの根性無しがそんな事出来ますかね？』

『お前の脅しが良くなかったんちゃうか？』

『何を言ってますねん（笑）あれは業界のルールですよ、ワシなんてあの程度では済まされてませんけどね・・・』

『・・・』

『聞いてますよね？辻谷さんから』

『お……お前の話はええわ……』

青山はばつの悪そうな顔をしながら目を反らした

・ 半殺し……いや、殺される寸前までいった話は辻谷が聞いている……

1101

裏を返せば、あのくらいの事を受けておきながらも消えることなく存在し続けている……

『……』

青山は京介に脅威を感じていた

『社長・・・小野寺の件はワシの方で調べておきますがな・・・』

『そうか悪いな、ワシは現場を仕上げてガンガン集金してくわ』

『ええ、そうしてくださいな、小野寺見つけたらどつします?..』

『殺していいぞ』

「デメエでやってみる・・・この根性無しが・・・」

『今回は金の持ち逃げはないんですか？』

『大した金額ちゃうからええわ』

『分かりました、好きにさせてもらいますわ』

『あとな・・・鈴木が明日帰ってくると先程連絡が入った』

『そうですね・・・』

『お前が絡んでいる現場と聞けばアイツ逃げるかも知れんから暫くは電話のみの打ち合わせでええか？』

『はい』

今後の方向性が決まった青山はその場を立ち去った

「自分の舎弟が失踪しているというのに他人任せか・・・所詮、人は自分の事だけと言う事だ・・・」

恐らく、青山は失踪がメインではない、地元の連中との揉め事が一番の懸念点であったのだろう

ここで揉めると次の現場に響く上に、多額の金額を要求されることがある

自分が出るより、小野寺で済むならそれで逃げ延びようという考えであった

小野寺の所在は哀川が調査してくれるという気の利いた展開に本人は「ツイテいる」と思っていた

小野寺が鈴木に代わるだけ・・・この業界、力の無いものは常に犠牲者でしかなかった・・・

その後、京介は万が一の為に「小野寺」の所在を本当に調べることにした

黒田により山中に放置されその後の詳細が分からない

万が一、警察にタレこんだり、どこかの組にでもタレこんでもしたら不味い事になる・・・

黒田の事だから大丈夫ではあるだろうが・・・自分が一度顔を見せることが効果的であると考えていた

「それに奴はまだ使い道がある・・・ニヤリ・・・」

青山から自宅の住所を聞き張り込みを始めた

県外の仕事から戻るのは簡単ではないだろう・・・だが、そのままの逃走はない・・・

一度、自宅に戻り必要なものを取りに来るだろう・・・

張り込みは黒田と交互に行った

始めてから10日間が過ぎようとしていた頃、小野寺らしき人物が
自宅アパートへと現れた

京介の張り込みの日に小野寺は現れた・・・

「ニヤリ」

一方、青山、鈴木、馬鹿コンビは現場を更にこなし、現状で6軒目の現場が終わろうとしていた

「ようやく帰ってきたか・・・しんどかったやろな・・・今日の所はゆ

っくりせえや・・・」

「身を削る思いでようやく戻ってきたのだろう、ゆっくりシャワーを浴び。食事をし、布団で休むがいい・・・」

翌日

京介は小野寺のアパートへ向かった

「ピンポン」

「・・・」

「ピポピポーン」

小野寺は青山、若しくはその手先の人間の可能性がると思い居留守を使った

「ドガン！ガンガン！」

京介はドアを数回蹴った

「ドカドカドカ！」

『コラー！出て来んかい！小野寺！おるのは分かつとるんじゃあ！』

「ドカン！ゴカン！」

数十回ドアを蹴り倒すと中から声が聞こえた

『すみません……すみません……今、開けます……』

ドアがゆっくり開いた

恐る恐る顔を上げる小野寺……

目と目が合うと一瞬動きが止まった

「ニヤニヤ」

『わわわあぁ・・・あぁ・・・哀川さん・・・』

『入るで・・・』

『ム・ムムム・・・ムムムムムムが・・・』

『そんな事よりや、お前が現場から急にいなくなった言っのんで、えらい騒ぎになってんで・・・』

『すみません・・・』

『今日は・・・お前の両目を貰いにきた・・・言つたよな？次は両目を
いただくとな・・・』

『うわわああ・・・勘弁してください！勘弁してください！』

『・・・まずは理由を聞こうやないか・・・それ次第では考えてや
らんこともない・・・』

『本当ですか？』

『ああ・・・』

『実は……』

何も知らないフリをしながら小野寺から何がおきたのかを聞いた

『そうか……やはりワシの思った通りや……』

『えっ？思った通りと言いますと？』

『青山は最初からお前を犠牲にするつもりだったんや……』

『犠牲ですか？』

『そつち』

『どじいつ事ですか？』

『お前は騙されたんや・地元の組織と揉めていたのは知っているか？』

『はい』

『ワシが仲裁に入り何とかしてきたが、青山は一つ前の現場から地元の連中に面通しや和解料を払うのが面倒だと騒いでいたんや』

『それは・・・聞いてました』

『青山は、1つ前の現場から、ワシには頼まず直接自分が話をして事を納めると言い始めたんや、金に執着心のある男の事だ・・・ワシが仲介でピンハネしている・・・若しくは信用できない・・・と言ったところやろ』

『そうですか・・・確かに・・・哀川さんの事を良くは思っていないよかったです』

「・・・やはりそうか・・・」

『お前は捨て駒にされたんや・・・今回の現場の地元の間中は相当ヤバいからな・・・青山もそれを知ってての事だろう』

『そんな・・・何で・・・俺が・・・』

『お前、鈴木と言う人間を知っているか？』

『前に雇っていた人間ですよ？』

『そうや、既に青山は鈴木と組んで次の現場に入っている』

『う・・・嘘だ・・・』

『ほんまや・・・』

『だって、鈴木は社長を裏切って金を持って逃げた男じゃないですか！』

『アホか・・・全部・・・フェイクやったんや・・・』

『フェイク・・・』

『そつや・・・作り話や・・・最初から鈴木は金も盗んでなければ悪さもしていない・・・お前を犠牲者に仕立てる為の物語やったんや・・・』

『でも・・・そんな・・・あれが全部ウソだったなんて・・・』

『 ……人は信用ならんもんや ……特に青山はな ……』

『 ……』

『 青山はお前が逃げたと騒ぎ立て指名手配している』

『 ええっ？ ……嵌めた上に指名手配ですか ……』

『 ……見つけたら殺していい ……そう言ってるで ……』

『殺す……それじゃあ……やっぱり哀川さんは俺を殺しに来たんですか……』

小野寺は相当追いつめられている表情だった……

「……ニヤリ……」

ガタガタ震えながら後ずさりを始めた

『場合に寄っては助けしてくれるって言ったじゃないですか!』

『……』

一步踏み込む京介・

『うわああー！勘弁してくださいー！！！』

部屋の隅まで行き体を小さくなり丸める小野寺・

『小野寺・・・勘違いするな・・・お前など殺す価値など無い・・・』

『えっ・・・じゃあ・・・助けてくれるんですか・・・』

『あああ・・・助けたるがな・・・それにお前もこのままでは気がすまんやろが・・・ニヤリ』

『・・・そつですけど・・・相手が青山さんじゃ・・・どつしどつもないです・・・』

『・・・ワシが良いアイディアがある・・・』

『アイディアですか？』

『そつや・・・完璧なプランや・・・お前が青山に仕返しをするんや・・・』

『自分一人ですか？』

『当たり前やないか・・・このままだといづれお前は殺されて終わるや・・・』

『復讐・・・そつですよね・・・本気で殺されかけたのに・・・見つけたら・・・殺せだなんて・・・』

『なあ・・・そうやるお・・・酷い話やで・・・ワシかて・・・鬼ちやうわ・・・あまりにもお前が気の毒やし青山の横暴ぶりには頭に来とる』

『でも、復讐はしたいですけど、今もその後も命を狙われ続けるんですよね・・・』

『男を見せんかい!』

「ビクッ!」

『……どっせ狙われているんだ……やらなきゃ損ですよ……』

小野寺は思いつめた顔を始めた

『指名手配の方はワシの方で何とかしておく……安心せえ……ただし……お前が復讐をしようと云うならば……』

『本当ですか!』

『男に二言はない』

『是非、そのプランとやらを教えてください・・・』

「ニヤリ」

『ああ・・・青山を地獄の底へ落としたらうやないか・・・』

『はい！』

小野寺は完全に京介を信用した・・・

「人は信用ならないものと」聞いた最中から術中に嵌った

『いいか・・・ワシの指示通りにしたら必ず上手く行く・・・』

『はい・・・』

『ワシを信じる・・・お前が責任追及されないようにする・・・これはとても大掛かりなプランや・・・そして比較的・・・安全や・・・』

『分かりました』

『・・・ワシは辻谷からも逃げないような男や・・・お前らとは頭の出
来が違う・・・』

『はい！自分は青山ではなく哀川さんの舎弟になります』

『アホ・・・ワシは舎弟は取らん主義やあくまでもお前が個人で動く
んや』

『・・・はい・・・』

『そうしないと・・・今回のプランが成功しても、どこかでワシと繋が
っている経緯を辻谷が知ると本気で秒殺されんで・・・せっかく
救った命・・・粗末にするもんやない・・・』

『そこまで・・・考えていただけなんて・・・』

小野寺は涙を浮かべていた

『哀川さん・・・俺、やります・・・青山を地獄の底に落とします』

『そうか・・・では・・・力を貸そうやないか・・・ニヤリ・・・』

o

小野寺は反撃の決意をした

この手の雑魚は忠誠心も強い分・・・

裏切られると猛反撃に転じるタイプが多い

後ろ盾や味方がいると水を得た魚のごとく変貌する

- ・ 鈴木よりはマシな性質ではあるが同種と言って変わりはないだろう。

黒田による半殺しの暴力と京介の後ろ盾で拍車がかかっていた

「踊らされる馬鹿共・・・お前等に主導権など無い、あるのは用意された道だけだ・・・死ぬまで踊り続けるがいい・・・」

早速、小野寺に指示が出た

プラン準備の為にしばらく身を隠してもらったことにした。

勿論、その分の経費は京介が渡した、本来はそこまでする必要はなかったのだが

完追する為には余計な動きをされては困ると言っのが本音だった

その間、青山の行動をリサーチ。

鈴木を連れどんどん仕事をこなしていた

プラン始動・・・

黒田を再度小野寺の関わった最後の現場へ送り込んだ（拉致られた現場）

そこで問題を勃発させることにした

そのやり方は・・・

まずは警察への垂れこみ

地元の組織への情報公開

店を利用するお客への情報公開

この3つに焦点が絞られていた

まず最初にお客のニーズに答えない店への報復から始まった

客は情報公開により店へのクレームが殺到した

困り果てた店は当然青山へ連絡を入れる

青山自体、これ以上大きな問題は困るのが本音、噂が広がれば辻谷の耳にも入り説教どころでは済まない

稼いだ分を全て吸い上げられる事になる・・・相当困り果てていたのは事実であった

青山は京介に連絡を入れた

『不味い事になった・・・哀川、知恵を貸してくれんか?』

『社長、こちらでも電話をしようと思っていた事ですわ』

『そうか、まずはそっちの話から聞こうか』

『はい、その後、小野寺の事が分かりましてね・・・』

『そうか、どこにおるん？』

『不味いですわ・・・地元の連中に監禁されたみたいですよ・・・殺されたかも分かりませんわ・・・』

『ほんまか？．．．そこまでするか？』

「．．．自分でも殺していいと言ってたくせに」

『多分、地元の連中に全部吐いてますね』

『．．．糞っ．．．使えん奴や．．．』

『どちらにせよ、しばらく逃げた方が良いでしょう．．．今何処に居て
ますの？』

『神奈川や・・・』

『そうですか・・・どうやら・・・地元の連中だけじゃなく・・・公務（警察）も動き始めてるといふ情報が入ってます・・・』

『ホンマかあ！・・・ヤバイ・・・ヤバイ・・・』

『取り合えず、この携帯は抹消します・・・繋がらなくなりますからね・・・あと・・・辻谷さんへの連絡はしない事です。履歴から追っかけられると相当面倒で相当危険な事になるのは明確です。連絡は入れないほうが良いかと思われます。』

『そしたら・・・ワシどないしたらええねん（怒）お前・・・責任取らんかい！！』

『何を言ってますの・・・最初からワシは絡んでいませんがな、ヤバイ言っつのは分かりきってましたやん・・・そんな責任

転換するんやったら・・・もう好きにしたらよろしいですわ・・・ニヤリ』

辻谷へバレたらどうなるか・・・

また警察が辻谷を抑える格好の切欠を作る事になる・・・

全ての元凶は自分から始まる恐怖を心底感じていた

『おい．．おい．．悪かった．．教えてくれどないしたらええねん．
・お前、経験者やる教える』

『ワシの場合は状況が違いすぎるし、事がもつと小さかったですからねえ．．ただ．．万が一の場合には口を割らん事ですわ．．それが男と言つもんですわ』

『万が一？．．なんやねん万が一って？』

『逮捕ですわ』

『コラ！何でワシがそんな目にあわなあかんねん！！コラア』

「……ニヤリ……」

青山の口調は焦りそのものだった……

怒鳴り声や口調が荒くてもそこに見える心理は丸見えだった

『ところでそちらの不味い事とはなんですか？』

『もつええわ・・・似たような話しや・・・』

『・・・小野寺が・・・全現場唄った可能性が有りますね・・・』

『どっついたらええねん・・・』

「青山は万が一、逮捕や地元の組織の連中に監禁されたりしたら

自分保護に必ず走るに違いない・・・小野寺の行動として語られているのは己の未来じゃ・・・ボケ・・・」

「誰かに責任をなすりつけてでも自分だけは助かりたいとも思っているのか・・・甘いわ・・・」

『社長・・・ワシは裏切りませんし、万が一、ワシの方に何か向いても口割りませんから心配せんで下さい・・・』

『おお・・・』

『逆も然り・・・ですよ・・・青山さん』

『ああん？・・・なんや・・・脅しか？』

『そうですね・・・当たり前ですよん・・・その分、助けると言う訳で
すかな』

『ホンマか？助けてくれるのか？』

『勿論ですがな・・・ニヤリ・・・突発的なのは難しいですが出来るだけ協力しますかな』

『分かった・取り合えずこの現場を早急に片付けて集金して飛ぶわ』

『鈴木はどないしますの?』

『そやな・・犠牲になってもらうわ』

『まあ・・いい薬でしょうが・・絶対に唄うでしょうがね・・』

『そうかもな・・まあこっちが逃げたらあとの事は知らんわ』

「そんな悠長な事を考えているようでは・・・お前もマダマダやな」

『こちらから連絡を入れます、知らない番号の電話も出るようにな
けておいてください』

『なるべく早く頼むな』

『ええ分かりました。地元組織に強い人間、公務関係に手をまわし
てみます』

『店に客からクレームが殺到もしてるらしいねん』

『完全にネタがばれてますね・・・小野寺・・・全部唄いよってるな・・・』

『あのガキヤ・・・余計な事はかりしよってからに・・・』

『店のへコンタクトも取れるようであれば、しておきます』

『頼むわ』

『約束は出来ませんが最善は尽くします』

電話を切った・

「ニヤリ・・・」

黒田へ更なるプラン進行を告げた

「次は予定通り、地元の連中共に情報を流せ、居場所は神奈川県だ・
・そして深夜にお上に情報を流せ24時間以内だ・・・」

『ブ・ラジャー!!』

『また連絡する』

「ピッ」

電話を切った

次に小野寺へ連絡・

「プルルル」

『はい！小野寺です』

『そろそろ出番やで・・・ニヤリ』

『じいすねばいいんですか？』

『取り合えず言われたとおりにしろ』

『はい』

『神奈川県に行き（前回現場）証言をしてもらおう・・・勿論全て本当』

『の事を言つたぜ』

『はい・・・』

『その際、身柄を拘束されなくなければ、電話による垂れ込みでもいい、どちらにする？』

『電話の方が・・・逮捕は嫌です・・・でも電話なら神奈川まで行かなくてもいいんじゃないですか？』

『アホ、GPSやIPでお前の場所が特定されるやろが、お前の為』

に敢えて神奈川に行け言つとるんやないか』

『はい・・・分かりました・・・すみません』

『まあ、ええわ・・・じゃあ・・・そのプランで組むから50万円準備しろ』

『えっ・・・お金かかるんですか・・・』

『当たり前や無いか・・・嫌ならお前を青山に引き渡すまでや・・・』

『分かりました。何とか掻き集めます・・・』

『小野寺・・・ただより恐いものは無いんや・・・金払うほうが安全と
言うことや・・・分かるな?』

『分かりました・・・』

『分かればええねん・・・』

o

黒田の情報操作と小野寺のプランが動き始めた

地元組織への偽の情報を流した、その内容とは青山という男が辻谷を裏切り独占的に市場を拡大しようとしているというシンプルなものであった

勿論、地元組織もどこの馬の骨の情報か分からない故、大きく動く事は出来ない

そうなるとどう動くのか・・組織に負担が掛からない連中を動かすと言う絵図が京介の頭の中では描かれていた

これは、トカゲのしっぽ、若しくは切り捨て式で行われる方式である、

小銭をアク

セサリー（小物のチンピラ）に渡し確認をさせると言う形である、
下っ端の連中は青山の顔も知る事は無く、青山自体も知ることも無い

何か起きてても、お互い公には出来ない、してしまつと「辻谷」が出てくるからである

この業界、幹部クラスの人間で辻谷を知らないものはいない・・・
誰もが関わりたくない・・・と思っているのは事実だった

「ここを上手く利用しない手はない・・・」そう考えていた

一方、青山は必死に仕事を仕上げる為に鈴木を怒涛の如く動かしていた

本日中に仕上げてこの場を去らないとえらい事になる・・・

どう足掻いても・・・1日で全てを仕上げるのは無理な物量だ・・・

仕上げないと集金出来ない・・・

システムを1軒でも完成させ、現金を掴み飛ばししかない・・・

そう思っていた

・ ・ ・

次のプランの発動は・・・10時間後

公務へのタレこみ始動・・・

この10時間はより青山に現場証拠を残させる為の時間数だった

ある程度、格好がつくのがこの10時間後の作業工程、それから
微調整に入る

この微調整が一番肝心要な所である、青山はそれを怠り、集金をし
て立去ると考えている違いない

現場で逃げれたとしても、何重にも組まれたプランには出口は無か
った・・・

「プルルル・・・」

『神奈川警察署です』

『内部告発をしたいんですが……』

黒田が指示を受け公務へタレこみを開始した

黒田の入電が終わると連絡が入り、すぐさま、小野寺の出番となった

追っかけで情報に肉付けをする……

一度目の電話では、「悪戯」ではないか?と思うが、二度目の電話ではより具体的に固有名詞を出して伝える……

これで信憑性を高める・・・

「プルルル・・・」

『はい、神奈川県警察署』

『すみません、自首じゃないですが・・・自分は青山と言う人間と店側とグルになり〇〇〇〇を店の内部に取り付けました、機械とPCを調べてくれたら証拠として上がります、今日中に見つけないと外されます』

『な・・・何！店の名はどこだ！』

『・・・・・・・・です』

『青山とは誰だ？』

『裏系の仕事をしている人間で、この店以外でも色々な県で仕事をしていきます、全て違法の仕事です』

『君の名前は？』

小野寺は京介の指示にあつた名前を思い出した

『鈴木です』

『鈴木さん、君、今は何処にいるんだい？』

『それは言えません』

『それだと信用できないな・・・』

『大スクープだと思いますがね・・・青山の情報は・・・』

数分間に渡り、小野寺は青山の情報を伝えた

『電話一本でこちらも動く訳にはいかないんだよ、こっちに来てくれないか?』

『行けません、何れにせよ今晚に店に行かないと抑える事は出来ませんよ・・・それじゃ・・・』

「ピッ」

小野寺の心臓は口から飛び出るのではないかと思うほど鼓動していた

「はぁ・・・はぁ・・・お・・・終わった・・・」

足の震えが止まらなかった

京介はここでも考えがあった

令状がないと何も出来ない動きにくいのが現状

所詮マニュアル集団、だが、こうして切欠を作ってやる事により、見周りや職務質問等がしやすくなる

その場所は、駅や繁華街では困る・・・現場付近で行って貰う事に

より、より緊迫感が相手にも伝わると考えていた

「この現場で証拠物件さえ上がればいい・・・ニヤリ・・・」

積みかさる証拠と記録を山積みにしてやり、最後は二進も三進も行かなくなる・・・

これが絵図であった

店の方では、地元の組織と店が揉め事を起こし、店長より「青山」の名前が浮上してきていた

店の人間は所詮、素人、耐えきれず青山の名を語るだろう・・・

全てが面白いくらいに京介のプラン通りの展開に進んでいった

そして数時間後には公務からお尋ねがある・・・

いや、若しくは・・・突入になるかもしれない・・・

「地元の組織、店には犠牲になってもらうしかないな・・・クック
ック」

数時間後、店と組織の揉め事が納まりやまなかった

公務達も最初は見周りレベルで、覆面パトカーが動いていたようだったが、組織の人間の風貌を見てこれはただ事ではないと判断したのだろう、突如、動きを切り替えたようだった

『動くな！そのまま！』

『なんだ！テメエ！』

『警察だ！一歩たりとも動くな、動いたら逮捕だ』

全員、石のように固まった

突然のガサ入れを店は喰らった

現場では組織のものが事情聴取をされ始めた

京介は黒田からのレポートで一部始終を聞いた

『効果覲面やな・・・よう礼状準備で来たな・・・ニヤリ・・・やはり鉄は熱いうちに打てと言うからな・・・クツクツク・・・』

『その後も見てて面白かったですよ』

その後、小野寺の電話の証言の場所を公務は調べた、その結果証拠品の数々が押収されたようだった

『よし、取り合えずこのプランは終了や・・・次は青山や・・・』

京介はワザと公衆電話から青山に電話を入れた

「プルルル……プルル……」

『……誰や……』

『哀川です、社長……不味いですわ……地元の連中店が揉めてますわ……』

『何……クソツ……早いなあいつ等……ここを今晚仕上げて一端移動するわ、また連絡くれ』

『はい、なるべく早めに動いて下さいね・・・』

「ピッ」

・
・
・

ホテルで一人待機する小野寺へ電話をした

小野寺は相当ビビリ気味で拳動不審だった

「ピッピッ・・・」

『はい！小野寺です』

『小野寺・・・ようやった・・・ご苦労さん・・・お前も一人じゃ不安や
る・・・うちの仲間を向わせるわ・・・そいつと今後の打ち合わせをし
る・・・』

『打ち合わせですか・・・自分の知ってる方ですか？』

『どつやろな・・・知ってるかもわからんな・・・』

『嵌めてませんよね（警察の意）・・・少し・・・恐いです・・・』

『アホか・お前嵌めたら、こちらをチンコロされるやないか常識で考えるアホ』

『すみません・わかりました』

『間もなく着くと思つわ、まあ・・・そう言うことで』

『はい』

10分後・・・小野寺の待機する部屋を訪れた人間は・・・

「黒田 聡」（皆の大好きな友人？）

「ピンポーン……ピポピポ……」

『い……今開けます』

室内から蚊の泣くような声で返答する小野寺……

「ガチャ……」

『うわああああ————』

小野寺は腰を抜かしたように床を這いつくばり部屋の奥へと逃げ込んだ

『また、会ったね』

『殺さないでください！殺さないでください！』

「ああ・・・次、会ったら殺すって言ってたな・・・（笑）」

『……殺しはしない……うちのボスに感謝するんだな……ニヤ
リ』

『何でもしますんでー！』

『喧しいわー！』

「バキッ」

思わず頬を殴る黒田……

『ひいひい・・・』

『いいか・・・よく聞けよ、うちのボスはとても優しい・・・お前を完全
に逃がしてくれるそうだ』

『本当ですか!』

『何度も言わせるな!』

小野寺は多少の金と身を隠す場所を教えられた

小野寺には今、出てきてパクられるのも困る、また、辻谷に情報が
流れ抑えられても困る、と言うのが本音だった

手の込んだプラン故、このようなハイリスクは致し方なかった

『しばらくの間、ど田舎で偽名で生活してもらおう・・・絶対に本名を使わない』

『はい、分かりました』

不安そうな顔をする小野寺

『小野寺・・・暫くの辛抱だ・・・』

『暫くとは・・・どの位なんでしょうか・・・』

『暫くだ・・・』

『分かりました・・・』

『じゃあ、最後にもう一仕事な』

『ええっ！まだあるんですか！』

『何・ここで死ぬ？』

『せじっせじりますすー！』

『愛知、三重、神奈川の連中に青山の居場所と仲間は鈴木だと伝える』

『・・・それって・・・相当やばい事になりますよね・・・』

『お前が青山の代わりになるか？』

『かけます!』

どれかにHITするであろう・・・京介はそう考えて指示していた

小野寺は指令通りに電話を架けた

京介・・・

愛知で焦りながらも金に目が眩む「青山」

働き蜂のように稼がせられる「鈴木」

「最後まで踊り続けるよ・・・傀儡達・・・ニヤリ」

「そろそろ・・・連絡してみるか・・・」

再び、公衆電話から青山に電話を入れた

「プルッ」

青山は待ちかまえていたように電話に出た

『哀川！その後、どうなった？』

『どうもどうも無いですわ・・・えらい事になりましたで・・・』

『なんやねん！一体何が起きたんや！』

『地元の連中だけなら何とかかなりそうだったんですけどね・・・』

『他に何があんねん・・・』

『店がですね・・・』

『はよ言えや！！』

『うたった・・・ようですわ・・・』

『はあ？・・・店がか？誰に？』

『警察ですわ・・・』

『おおおお！！何でなん？何で警察に入られるんや！』

『おかしいと思い、調べたら地元の中が乗り込み無茶をしたらしいですわ・・・それで焦った従業員がの警察へ連絡・・・その時に疑いのある店だから言うので・・・調べたところ・・・証拠物件を突きつけられ 店が問い詰められてゲロ吐いたと言う感じらしいですわ・・・』

『……ヤバイな……奴らはワシの名前も上がつとるんか?』

『おそく』

『どないしたらええねん……』

『どづ……言われましてもねえ……すみません 小銭が切れますわ・
また掛けます……』

「ガチャン・・・プー プー・・・」

「自分の事は自分で考えなあかんやろ・・・青山・・・ニヤリ・・・」

o

青山は精神的窮地に追い込まれた

緊急時の唯一の頼みの綱「哀川 京介」と連絡が取れなくなった

公衆電話から連絡方法、故 青山はこちらの連絡が無いと連絡が取れない

実はこれが多少の誤算の元であった

こまめな連絡を取りすぎても良くなり、しなくても動きが分からなくなる

テンパった青山の行動を予測はしていたが京介の予測を反する事態に事は動いた

最初の現地の揉め事では店のチンコロにより証拠物件が上がり青山

は重要参考人となる

地元の組織の連中のお偉いさんも青山の所在を探し始めている

黒田により青山の情報は地元組織に伝えられている

連中は青山の事務所や関連を調べ始めた・・・

組織の連中は青山の事務所の立地条件や状況を調べ始めた

だが青山は鈴木を代表にしていたため調べに困難を要していた

腐っても組織の連中、周りまわって連中の知人というものから京介

へ連絡が入った

「天国にあなた（京着）」

着信は番号通知だった

「未登録・・・」

「ミッ」

『誰?』

『哀川さんの携帯ですね?』

『どじやろな・・・お前は誰や?』

『中部地区の「川村」言います』

『でっ、川村さんが何の様でっか』

『哀川さん「青山」言う人間知っていますか?』

『知ってるぞ』

『実は中部、関東地域でやらかしてくれましてね・・・指名手配なんですよ・・・公務（警察）も動いているので奴等より先に見つけないと落とし前取れなくなるんですわ』

『ほう・・・それは難儀ですなー・・・何をやらかしたんですか・・・』

『実は青山について垂れ込みがありましたね・・・』

「黒田のじつか・・・」

『青山の事務所の地域に来ているんですが見付かりませんねん、哀川さんやったら”元”、こちらの地域の元締めですよね・・・分かるでしょう？つーか知ってるんちやいますか？』

辻谷の一派に居た頃は確かにその地域の元締めではあった・・・その辺を利用してこちらにアクセスしてくるとは予測はしていなかった

「流石やな・・・青山のようにには簡単にいかな・・・しかしこの番号を何処で調べたんや・・・」

だが、その事を聞く訳にはいかない・・・こちらの心理を読んでくるだろう・・・

『なんて？．．人に物を聞く態度ちゃうんやないけ？』

『なんやと？お前一枚噛んどるんちゃうか？』

『アホかうちは青山とは半目や』

『やはりそうでしたか、申し訳ないですが多少調べさせて貰いました．．．すみません』

『．．．まあ．．．ええわあんた等も大変やろしな．．．青山は一体何やらかしてん』

川村は半信半疑な口調で事の全貌を話し始めた、流れはほぼ間違いない、一応は筋を通し元元締めに向いと協力要請してきたと言う事だった

『そらあルール違反やな・・・だが青山らしいやんけ・・・だが、公務が動いているのは不味いな・・・』

『そうなんですわ・・・時間が無いので大至急見つけたいので協力してもらえますか？』

『青山の後ろには辻谷がおる・・・ワシは奴に一度、監禁喰らってるでな・・・あまり深入りしたくないねん』

『辻谷さんですか・・・分かりました、うちの親父に話を通してみます』

不味い・・・川村と言えば中部組織の幹部、辻谷の組織に接触するのは非常に不味い・・・

プランから逸脱してしまっ

『まあ待て・・・わざわざそちらの親父さんが出てくる様な話でも無いやろ・・・こちらで調べてみるわ連絡するから少し待てや』

『すみません・・・じゃ連絡御願いします』

電話を切った

連中は自分のところの親父の名前をだして、強制的に協力要請をかけた
てきた

既に哀川 京介は「辻谷一派」では無い、ここで協力しないのなら
はお前の足元も遠慮なく汚すと言う意味合いだった

「面倒な事になったな・・・」

すぐに青山に連絡はナンセンス・・・念には念を入れる必要がある

逆に罫と言う可能性もある・・・

まずは鈴木 of 状況確認、青山の所在を確認が先決・・・

川村の考えが完全に見えていない今あまり派手な行動は出来ない
というも本音

青山が辻谷への縋り付きも視野に入れないといけないのも然り

「プランを進め始めたら刺し違えてでも突き通してやる・・・」

仕方なく青山へ連絡をすることにした

「プルルル・・・」

青山は電話になかなか出なかった・・・

何度も電話をしたが一向に出ない・・・

恐らく川村からの脅しの電話が入ったのだらう

「青山はビビリだからな・・・こう言う時はホンマ使えない奴や・・・」

仕方が無いので問題地域へ黒田をすぐ向わせた

川村がこちらの地域に居る以上京介が動く訳にはいかなかった

黒田の調査によると鈴木はひたすら現場に入り仕事に没頭しているとの事だった

そこには監視役と見られる一人付いてるようだった

『こんな状況でも金を叩きだそうとしているのか・・・確かに予定と
していた現場はまだあった、鈴木を実行犯として祭り上げるつもり
やな・・・』

『考えられませんね・・・つうか、鈴木は何も知らされていないんですね』

『ほんま、馬鹿コンビやなアイツ等』

『..?』

『・・・指示を待て』

『分かりました』

現場は更に3件目に突入しているようでおそらくもう少しで完了という事だった

「しかし・・・よく潜り抜けて進行をしていたな・・・ある意味度胸があるな・・・」

3件目の現場完了時に青山が現れる可能性がある・・・

いや・・・その前に鈴木を監禁して聞きだす・・・のが最適か・・・

とにかく早く決断をしなければいけない状況下にあった・・・

o

現段階最終現場の監視を黒田は続けていた

プランを何度も考え直した

今回は軽はずみなジョークを交えて進行するのは具合が悪い・・・

「こうなったら・・・全部を抱きかかえて進むしかない・・・」

1210

現場最終日の調整に入る前の日に黒田から連絡が入った

『そろそろ終るようです・・・どうされますか？』

『鈴木から青山の居場所を吐かせるパターンですか？』

『恐らく、それは無理やろ・・・青山は鈴木に居場所は言っていないはずや・・・アイツはビビリや・・・違う手段で青山を探し出す』

青山の居場所は予測はしてたものの確実ではなかった

『・・・公務より先に見つけられますかね・・・』

『公務もそうだが例の組織の連中よりも先に見つけなあかんのや・・・』

時間が無いと判断し、取り合えず組織の連中に鈴木を監禁させる

そこで時間を稼ぎする、組織の連中は鈴木に尋問し青山の居所を言わせようとするだろう

だが、そこでは明確な答えは出ない・・・

青山は鈴木のことを以前の持ち逃げの一件から奴を信用はしてない

もし、鈴木が居場所を知っていたとしてもそれはフェイクであろう

所詮、鈴木は困った時の犠牲にしか思っていない

そして、青山は「辻谷」へ助けを求める可能性がある

「辻谷」が動きだしたら、「こちらも」共倒れ・差し違え」しかねない

「ここは慎重に進めんとな・・・まあ・・・何とかなるか・・・ワシは天才やからな」

何としても、もう一度青山と連絡を取らなければいけない・・・

だが、青山と連絡を付けるのは組織の実行部隊が動いた後の方が良い

「取りあえず、奴らに情報提供をしてやるか・・・ニヤリ・・・」

「プルルル……」

『もしもし……哀川や……』

『どーも、何か分かりました？』

『そっちでも調べは付いてるかもしれんが……青山の下に鈴木という従業員がいるのは知っているか？』

『小野寺じゃないんですか？』

『小野寺は飛んだよ・・・』

『鈴木は初耳ですね・・・』

何処まで調べが付いてるか分からない・・・

手の内は見せないのが業界の鉄則・・・探りあいの会話が続いた

『そうですか・・・それやったら　店（最終現場）に鈴木が今晚入るらしいという情報を得ました、そこで鈴木を監禁し吐かせたらいいんじゃないですか？』

『で・・・その情報筋は？』

『言えませんがな・・・』

『あなた・・・策士らしいね・・・』

『ほう・・・ほんだら信用せんかったらいいですわ』

『まあ・・・ええわ、取り合えず行ってみるわ・・・』

『言つとくが、こちらに何の利益もない話や、あなた等を嵌めても全く意味がないと思つがね』

『上から気をつけると言われてますんで』

『まあ、それは基本やからな・・・まあ、約束は約束やから情報は伝えたで、あとは好きにしろ』

『分かりました・・・』

直ぐに黒田に連絡を取った

『今晚、組織が動く可能性が高い、監視の方怠るなよ』

『タレこみしたんですか？（笑）』

『アホ・・・情報提供や・・・協力を求めてきたんや・・・協力したままでや・・・ニヤリ』

『馬鹿だ（笑）皆、馬鹿だ』

『まあ・・・誰が最後貧乏くじを引くかで本当の馬鹿が決まる・・・お前も気いつけや』

『またまたあ・・・つか・・・マジですか?』

『お前はワシが守るから安心しとけ、軽はずみな行動は気をつける
と言っ事や』

『分かました』

数時間後の黒田からの報告を待つことにした

実行時間は深夜、これはこの業界の常識

「天国にあなた」
（京着）

『もしもし・・・』

『鈴木と奴の監視役と思われる人間がの入店しました』

『引き続き監視を頼む』

黒田の話によると、現場に必要な部材を運ぶために監視役のみ店の外へ・・・

そこに組織の人間と思われる連中が20名近く現れ、監視役を取り
囲み

口を押さえられ、羽交い絞め・・・

殴る蹴るの暴行の末・・・車のトランクへ・・・

とのことだった

その後、監視役を乗せた車は何処かへ走り去った

それでも尚、待機する組織軍団・・・

『15人は残ってますね』

『武闘派の連中は数を集めたがるでな・・・あとは鈴木やな』

『楽しみです（笑）』

数十分後・・・

相方（監視役）が戻らないのを異変を感じ恐る恐る店の裏口に窓から外を覗き込む鈴木・・・

組織軍団は鈴木完全捕獲を考えているため姿を隠していた

「鈴木・・・何度も悪りいな・・・ワシはとてもしつこい男やねん・・・
何度でも地獄を見せたるわ・・・」

それがワシのやり方や・・・殺され無かった分、生きている間は地
獄が続くと思いや・・・ニヤリ・・・」

o

鈴木は監視役（相方）が戻らない事不信に思い恐る恐る店の外に出
てきた

店の裏口付近の電気が点いた途端、組織連中が反応した

警戒しながら相方の名前を呼びながら歩く鈴木・・・

返答が無いため、携帯を取り出し電話をした

だが電話はコールするも出ることもなかった

首を傾げながら車の方へ向かった

「いないな・・・」

だが、どうしようもないのが現実、とにかくこの現場をさっさと片
付けてしまわないといけない・・・

そう思い、相方が持ってくるはずだった部材を運ぶことにした

「ガチャン」

トランクを開けた

PCや部材などを運び出そうとしていたところ……

『おい、鈴木……』

鈴木は相方だと思った

『どっくに…いたんだ…』

そこには見たこともないガラの悪い男たちが数十名…

『うわあああ—』

深夜にもかかわらず鈴木の声は響き渡った・・・

慌てて逃げようとする鈴木・・・

取り囲む男達・・・

車内から長い棒の様なものを振り回し威嚇する鈴木

非情に情けないへっぴり腰（黒田レポの詳細より）

15人相手に絶叫しながら棒を振り回し走りながら・・・逃げ惑っ

たがそれも虚しく取り囲まれ半殺しにされた

店の窓からはその光景を見てる店長らしき人物・

巻き込まれるのは嫌だったのか誰も出てくることもなく、通報されることもなかった

鈴木は羽交い絞めにされ全裸にされトランクへ放り込まれた

鈴木を乗せた車が去ると黒田は電話をよこした

『おう、どないやっ。』

『鈴木は全裸で監禁されました（爆）』

『全裸・・・これで逃げれないと言う事か・・・手口が古いのお・・・』

『店の人間も窓から覗いてたみたいですが・・・出て来ませんね』

『まあ、当たり前やろな』

『次はどうしますか？』

『そこに鈴木が乗ってきた車はあるか？』

『はい』

『周囲の様子を見ながら中を物色』

『ブ・ラジャー！』

黒田は辺りを警戒しながらも電話を繋いだまま車へと近づいた

『車に来ました』

『鍵は開いてるな？』

『はい』

『素手では触るなよ、手袋あるか？』

『無いですが・・・買いに行く時間は無いですよね・・・？』

『靴下穿いてるな？それを両手に嵌めて車を探れ』

『ブ・ラジャー！』

数分間、黒田の調査は行われた

黒田の報告によると、今回の現場に必要な部材が多数の他、PCが3台程が見付かった

『部材には一切、手をつけるな・・・』

『そうなんですか？』

『証拠品や・・何れ、その現場も問題になるやろ・・お上への手土産や・・ニヤリ』

『優しいですね（笑）』

『PCはデスクか？ノートか？』

『ノートです』

『2台、持ってこい解析する』

『ブ・ラジャー』

「ガサゴソ・・・」

『あっ・・・』

『どうした？』

『ダッシュボードに携帯が2台ありますね』

『回収・・・』

誰の携帯でどう使ってたかは分からないが情報の漏えいを防ぐためであった

「・・・ん・・・？」

『・・・店の人間が窓から見てますね・・・』

『・・・気をつける言つたやろが・・・アホ』

『どっしります?』

『威嚇したれ・・・』

『走って、店の裏口に向えばいいですかね?』

『そやな、店に入るフリをして、そのまま離脱』

『ブ・ラジャー』

こうして鈴木、相方（監視役）、現場のプランはコンプリートした

だが、これはあくまでも通り道でしかなかった

その後、黒田より宅配便にて回収された物を京介は受け取った

送り人は「鈴木」、受取は「青山」で行われた

万が一の場合に繋がるようにである

携帯端末・PCの情報解析が行われた

分かりきってる事ばかりだったが、物証的に実際に行ってるか？

それを確実なものにしたかったのだった

携帯の方はメモリーを全抜き

その中には「青山社長」と記載され電話番号が二つほど登録されていた

「やはりな・・・ニヤリ・・・飛ばしを使っても番号を知っている人間がクズだところこういう事になる・・・登録は別の名前にしておくんだったな・・・アホ」

この後、店の方も中途半端な工事状態で困ったのが現状だった

黒田にへ情報操作させ、店にとどめを刺した、物的証拠の数々に店は完全にお手上げ状態になり店長の身柄が拘束されたようだった

数日後・・・組織の人間から連絡が入った

「鈴木」、「監視役」を監禁成功との事だった

鈴木は色々話しているようだったが、連中の欲しい情報は鈴木の御託より、青山の居場所

鈴木は必要以上の尋問と拷問を繰り返された

鈴木も必死になり、分かる情報を全て提示

組織連中も青山の足取りを尋常じゃない勢いで探しまくっていた・・・

「ここからが本番や・・・」

連中よりも公務よりも先に青山を見つけ出さないといけない・・・

今回の現場の金も絶対にあてにしていたに違いない・・・

「金で困っているはずや・・・」

「……さま」

・

o

次なるプランを進行させ事にした

青山は追いつめられている・・・助けてくれるならどんな奴の手も掴む可能性がある

この絶妙なタイミングを作るのが今回のプランの要でもあった

鈴木に乗ってきた車の中から没収してきた携帯電話には「青山」の名が登録してある

その番号は2つとも違う番号であり、今までに見たこともない数字が並んでいた

早いうちに手を打たないと地元組織や公務（警察）の奴等に先を越される

青山は鈴木が連絡が取れないことに、いずれ気付くであろう・・・

地元組織に監禁された情報を誰かに知らされる前に伝えてやることにした

まずは携帯登録、青山社長 1と記載されている番号へ公衆電から架電

「青山電話番号 1」

「プルルルル・・・」

コールは20回ほどしたが出ることはなかった

「一応、警戒しとんねやな・・・関心や・・・」

次に没収してきた携帯電話で電話を登録2の方へ架電した

「青山電話番号 2」

「ブルル・・・」

『お前 何やっとんねん（怒）何度も電話したで！！』

『・・・』

青山はコールの途中で電話に出てきた

相当な焦りを感じている、そして鈴木からの完了報告だと思っているに違いない・・・

『じいめー！！ しゃべらんかい！！』

『社長……哀川ですわ……』

『あーっ????』

まるで、漫画の様なリアクションだった

鈴木が監視役（相方）が所持してる筈の携帯から京介からのコールに驚きは隠せないと同時にこれは「ただ事ではない」と感じていた

『哀川、何でお前がその電話持ってんねん？コラア』

『社長・・なんも知らんのですか？えらい事になりましたで・・社長に何度も公衆電話から電話したんですが・・出てもらえないので現地に行ったんですわ・・』

『公衆電話から地元の連中らしき奴から何度も電話きてな・・出なくしたんよ・・つうか何でお前がその携帯持ってんねん！』

『今、話しますわ、少し落ち着いてください社長。今・・どこ居てますの？』

『それは・・・まあ・・・ええやないか・・・』

「居場所は言わないか・・・警戒している証拠やな・・・合格や・・・」

『鈴木・・・連中に拉致られましたわ・・・助けに向ったんですが・・・
20人位の人数で・・・どうもありませんでしたわ・・・』

『マジでか！！？！？・・・ヤバイな・・・アイツ・・・唄いよるわ・・・』

『まあ、間違いなく唄いますわな・・・』

「唄うとは「業界用語で」「しゃべってしまつ」「の意を表す。

つまり、この場合、鈴木が組織の者に全てを暴露してしまつ意味合
いを表す

『店の方はどうなんや?』

『公務にいかれました・・・公務、地元組織の連中に奪われる前
に
と思ひ、この携帯が車に有ったので持つてきて連絡した・・・と言
う訳ですわ・・・。』

『おおお・・・そら・・・感謝するわあ・・・店が公務に入られたか・・・
ヤバいな・・・』

『どないします?』

鈴木は拉致、店には警察、青山としては二進も三進も行かなくなっていた

『・・・』

『このまま、ただ逃げてても時間の問題ですわ・・・何か手を打たんと・・・』

『辻谷に相談するしかない・・・』

『辻谷さんですか・・・飛び火したらかなりデカイ事件になりまっせ・・・辞めた方がいいんじゃないんですか?』

『じゃあ どないせーゆーねん！！！！！！』

青山は怒りの頂点に達しているまじろであった

青山が辻谷に話を通せば、青山と自分が繋がっている事実を知られることになる

辻谷はセコイが頭のキレる男・・・必ず何らかの違和感を感じ取るに違いない・・・

『もう、辻谷しか方法無いやろ・・・』

『・・・少し考えますか・・・犠牲者が出てますからね・・・』

『犠牲者?』

『店2軒、小野寺・鈴木・・・等です』

『でも、どないせい言うねん・・・』

『この連中が組織に拉致られている以上、何をしても難しいのが現
状』

『辻谷でも止めれん言う事か？』

『事が大きすぎるんですわ、公務が動いているのもネックですわ』

『どうもないせい言うんや！』

『辻谷さんに助け船を出しても内容的に助けてはくれんでしょう、
そして社長からの着信を追われたときに辻谷さんと繋がる事を懸念
するはずですわ』

『繋がる・・・おいコラっまるでワシがパクられるみたいな言い方やんけ!』

『万が一ですわ・・・』

『・・・確かにお前の言う通りかもしれないな・・・辻谷は助けてはくれんかもしれん・・・お前の時も手のひらを返したように人が変わったでな・・・』

「そうか・・・(笑)やはりな・・・」

『地元連中は鈴木、小野寺は用が済めば殺す可能性があります』

『そこまでせんやろ・・・』

『奴らは武闘派です・・・逃げるのが得策ですわ』

『やはり・・・何とか言って辻谷に、匿って貰うのが一番や』

『社長・・・辻谷さんはそんなに優しい方ではないですよ・・・もし匿ってくれたしても後が大変ですよ・・・』

『ワシは今が大変なんじゃああ！！！！！！』

大声で騒ぎ始めた

『何にせよ、力になりますかな・・・一度会いましょうや・・・どこに居てますのっ。』

『・・・黙っとけよ・・・』

青山は居場所を伝えてきた・・・

「ニヤリ・・・」

『勿論ですとも・・・』

追いつめられる青山はワラをも縊る思いで京介の手を掴もうとして
いた・・・

これが処刑第一段階となるのも気付く余裕など全くなかった・・・

o

青山自分の居場所をまんまと吐いてきた

口調、心境から見て偽りはない・・・そう感じた

「ワシなら絶対に言わんけどな・・・やはり小物ちゆうことやな・・・」

『ほな、どうします？・・・そちらに行きましようか？それともどこかで待ち合わせにします？』

『そやな・・・人目につかん場所で会うか』

「馬鹿な奴だ・・・」

こう言う場合は人が多いほうが良い

隠れ蓑になる、また仲間を待機させるには人が多いほうが良い

逆も然りだが、・・・人気の少ない場所は人物を特定しやすいとい
うのがネットクとなるからだ

『分かりました、ではいつ頃にしますか？』

『そやな・・・2日後にしよか・・・それまでに色々調べておけ・・・』

「誰に向かって言うтонじゃ・・・このカス・・・」

『社長・・・逃げるんやったら逃走資金は足りてますか？』

『金か？あつああ・・・少し準備してくれるか？』

『社長が逃げるのであればですよ・・・辻谷さんの所に行くのでは必
要ないですからね・・・』

『まあ、一応、持ってきてくれや・・・話して決めよう』

『分かりました、一応準備だけはしておきます』

電話を切った・・・

金を準備したものを必ず青山は受け取るうとする

そして、辻谷の所には絶対に行かない、と言っであるう・・・

我が身可愛さと金に目に眩んだクズの思考に「誠実」というものはない・・・

2日後・・・青山を誘き出すプランが始動された

「青山には助け舟に見えたに違いない・・・」

いや、ワシを利用し金を引っ張り、辻谷とドッキングしたら自分で絵を描き、こちらに何らかの矛先を向けるに違いない・・・」

そう読んでいた・・・

青山には自分の都合の良いように動いてかのように見える・・・

だが、そこには必然性が必要である。それは何か・・・

・ 「一生懸命」という言葉の意味を精神的に理解させないといけない

人はよく言う・・・

「頑張る、私は一生懸命頑張ってる・・・」

そんなのは当たり前前で、いちいち評価されたがりの馬鹿がいる
仕事ならば頑張って当たり前、プライベートでもそう、何故なら己
が選んだ道だからである・・・

青山は金の比率によって他人の頑張りを評価できない馬鹿

尚且つ、自分はとても一生懸命生きていると豪語するようなクズで
ある・・・

そろそろ言葉の意味と生き方の過ちを正す必要がある・・・

プラン遂行の為・・・多少の犠牲は致し方ない・・・

「精々・・・気張れや・・・青山・・・」

ここまで持つてくるに多大なる時間、金、犠_ヒ牲が注ぎ込まれた

京介の電話が鳴った

「天国にあなた」

着信を見ると鈴木を拉致した、地元組織の連中からだった

『・・・はい・・・』

『すみません、哀川さん・・・鈴木とか言う奴、こいつ意味の分から

ない事をほざいてるんですよ』

『ほう・・・どんなですか？』

『自分は騙されてるだけで何も知らない、全部青山が仕組んだ事で、その裏には哀川さんが糸を引いている・・・ってね』

「鈴木割には良い読みだ・・・」

『ワシが青山とね・・・面白い事言いますやん・・・』

『実際・・・どうなんですの？』

『青山と組んどつたら今回、鈴木がそちらに監禁されるのは出来れば避けたい所とは考えないのか？』

『確かに、それはそうとは思いますがね・・・』

『まさか鈴木狂言・・・真に受けてるんじゃないですか？』

『はあ？何だと』

『・・・鈴木は自分を守りたいと嘘を付きまくるようなゴミやさかい・
自分が助かりたいがための狂言である・・・』

そして解放されたら次は青山や他の組織に狂言を吹き込み、お宅ら
に仕返ししてくるやろな・・・クツクツク

ワシに一度、矛先を向け半殺したっただけだな・・・』

『コイツにそんな根性あるのかね・・・』

『ほんたら、鈴木を信じることですか、うちに矛先を向けたら徹底的
にあんた等を潰す・・・覚悟して物事語れや・・・』

『分かりました、信用しているわけではないが、真実かどうかを見極めたかったので・・・』

『何なら今から行くのか？ただし、鈴木は殺すけどね』

『殺すのは少し・・・不味いな・・・まあいいでしょう・・・分かりましたこちらでキツチリ「けじめ」取りますんで』

ここにきて鈴木がワシの名前を出してくるとは思わなかったが・・・

所詮、馬鹿が馬鹿を拉致したまでの出来事、回避は簡単であった

電話切り、直ぐに黒田と打ち合わせを始めた

『黒ちゃん、プラン発動や・・・』

『ブ・ラジャー！！いよいよファイナルですね・・・ニヤリ』

『予定通りに進めばな・・・ニヤリ』

『では、プラン通りにやらせていただきます』

『ああ・・・頼む・・・これが終わったら派手に行くか・・・』

『青山の客、総取りですね！！』

『そう言いつ事や・・・ニヤリ』

顧客名簿も持ち去ってきたPCにはファイリングされていた

細かい仕事内容、金額、利益等も詳しく書かれていた

「「こういつのを警察に抑えられたら終わりやんけ・・・ほんまにアホな連中や・・・」

「プラン青山 VO1」は確実に動こうとしていた・・・

o

『犠牲』 完結

待ち合わせ当日、青山から連絡が入った

『哀川、金の件だが「300」用意しといてくれるか?』

「準備して貰うにはデカイ金額をいいよるな・・・」

『300ですか?・・・少し多いですね・・・まあ出来るだけ集めておきますわ・・・』

『そない言いなや・・・頼むで・・・』

『社長 金・・・有りますやん・・・』

『色々あんなん・・・頼むわ・・・』

『ほな、逃げ切るつもりなんですか？』

『行けるところまで行くわ・・・』

「行けるとこまで行く」・・・場所では無く出来る範囲以内で逃げ切ると言う意味合い

『何を言ってますの・・・逃げきらなあきませんがな（笑）』

『そない・・・言つたかてな・・・』

「誰がいずれ捕まるようなゴミに金を突っ込む奴おんねん・・・糞モアイ」

『いづれにせよ夕方までに用意しますわ・・・』

『頼む』

既に黒田は青山の居る地域に待機

当日待ち合わせ場所は人気の無い場所

人が居たとしても・・・数名通行人のみ・・・

黒田が用意したものは

通行人（女）4名いつもカモフラージュなどに使う女共

捨て駒1名（男）

全く人気がないのも不自然である・

また人がいることにより多少の警戒心が生まれるようであった

夕方・・・

待ち合わせ場所に青山はなかなか現れなかった

黒田から連絡が入った

『モアイの野郎来ませんね』

『相当、用心してんやろ・・・捨て駒を配備させる』

『ブ・ラジャー』

捨て駒を待ち合わせ場所に待機させた

青山が遠くから見て、誰かが待っているという事を見せる為のアップ
ローチ

その人間が誰かまでは遠目では確認は出来ることはない

待機させる事、数分・・・鈴木から没収した携帯が鳴った

直ぐに黒田に連絡をした

『捨て駒に電話を取るふりをしろ命じる』

『了解』

捨て駒が電話を出るタイミングを見計らい着信を取った

『もしもし』

『悪い・・・遅れてるわ・・・もうおるか?』

『はい・・・いてますが・・・300準備していますよ』

『そうか・・・今向ってた！！待ってる』

『はい』

本当に来ているか？金を準備しているのか？

その確認がしたかったのだろう・・・

「愚かな奴だ・・・」

青山が現場に現れた・・・

捨て駒には現地を離れる事を指示

青山が近づいてくるのに合わせ少しずつ待ち合わせ場所から離れていく（小走り）

どンドン待ち合わせに居た人間が遠ざかるのを見て青山も走り出した

だが、話と違う事が起きていた

待ちあわせ場所に青山は2名で現れていた・・・単独逃走のような雰囲気話していたが実はまだ手下を連れまわしていたのだった

「青山、2名で登場」

黒田からメールが入った

「クズは何人いてもクズだ気にするな」

「ブ・ラジャー」

二人は待ち合わせ場所で辺りを見渡していた

現場から離れた人間の（捨て駒）行った方向へ舎弟らしき人間を向かわせ青山はその場で待機していた

数秒も立たないうちに青山の背後には人影が集まっていた

青山は行き交う人やカモフラージュの人間の通行で自分に迫る人間に気付いていなかった

一人の人間が青山に声をかけた

『青山さん？』

『おおお、待たせたな・・・』

青山は自分が遅れたことを詫びながら振り向いた

途端、青山は数名の人数に囲まれた・・・

その姿を見て舎弟は猛ダツシユで青山の元へ向かっていった

青山は状況的に「不味い」と感じ目の前の男の顔をぶん殴り、そこを突破口に逃げた

『社長！こっちはです！』

舎弟の音が響いた

『止まれー！！青山！！』

必死で逃げ惑う青山と舎弟・

最初に舎弟が数名の男に押しつぶされるようにされ捕獲された

『コラー！放せー！俺は関係ない』

その後、数分もたたないうちに・・・青山も捕獲

4人がかりに抑えられ地べたに這いつくばっていた

その後、尚も抵抗し続けていたが力尽きていった・・・

青山を取り囲んで捕獲した連中は警察だった

青山が起こした事件は全国的なものに発展していた為、彼は指名手配となっていた

「青山捕獲完了」

黒田から連絡が入った

「ご苦労、戻れ」

こうして、辻谷の門番とも言える青山を封じ込めた

青山は取り調べに耐えられるような精神は持っていない・・・恐らく唄
いまくるであろう・・・

「哀川 京介」の名前も出さずである・・・

だが、その辺の根回しは全てしてあるので問題はなかった

警察と言っても下っ端の連中など特に問題などない

青山は作られた道を必死に逃げまどい終結を迎えた・・・

「プラン青山」の第一弾としては大成功を成し遂げた

青山の逮捕により余波が必ず起きる・・・

辻谷の耳にも必ず入るであろう・・・

最初からここが狙いであった

数日後、予測通り辻谷から連絡が入った

「天国にあなた」（京着）

『御無沙汰しております』

『ワシや・・・』

『はい、どうぞおられましたか？』

『青山・・・パクられた様やな・・・お前知つとるやろ？』

『はい……どこかの現場でガサ入れを食らい、そこから指名手配だったようですな』

『実はな……青山から連絡があつてのう……。お前が逃走を手伝ってくれると言つとつたわ……。』

「クソツ……。あの野郎……。やっぱり辻谷に話とつたか……」

『確かに、連絡はありました、逃走資金を準備しろと言われてましてね』

『その金は渡したんか？』

『ええ、渡しましたよ、その後ですね……。パクられたのは』

『お前・・・絵・・・描いたんちゃうか・・・』

「（＊、＊）オオアタリ」

『まさか・・・ワシかて次は長いですから・・・そんな事出来ひんですわ・・・』

『ほんまか？まあ・・・ええわ 一端、関東出て来いや・・・』

『はあ・・・分かりました・・・』

電話を切った

辻谷に刃向かうのはまだ早い・・・

青山の今後の流れを確認したうえでないとその後が大変になる

奴の拘留など短くて22日、長くて一か月半と言つところだろう．．

出てきた後に吹き込まれて不味いことが多い．．．

完全に青山を封じ込めた上で．．辻谷．．

そう考えていた．．．

o

真 公開処刑 第六章 『追求』

辻谷からの接触

何か考えがあつての事だろう・・・

とても用心深い男、故、自分から懐に飛び込ませるような馬鹿な真似はする訳がない

本来であれば、数日間様子を見た後に辻谷に接触が理想のパターンだった

何故ならば「青山」が警察に捕獲され自白をするだろと考えたからだ

お上の動きが分からないで下手に動くのはある意味飛んで火に入る夏の虫

今までの感がそう感じさせてならなかった

だが、ここで辻谷の呼び出しに背くわけにはいかないのが本音だった……

黒田を呼び出し、万が一のプランを伝えることにした

それは自分が拉致られる可能性がある、若しくは殺される可能性があるからであった

相手は「辻谷」……今までの雑魚とは少し違う……

金も権力も兵隊の数も全く違う……

用心して立ち向かわないと泥沼程度では済まない……

『黒ちゃん・・ワシにもしも・・の事があるかも分からん・・』

『マジですか？・・行かない方がいいのでは？』

『そう言う訳にはいかへんねん・・相手が相手やしな・・舐められたらとことん来よるでな・・』

『自分も行きます!』

『いや・・残れ・・ワシに万が一があつた場合 橋田、栗田、に連絡をしてくれ』

『分かりました・・万が一ですか・・ありますかね・・?』

『一度、殺されかけてるからな(笑)無きにしも有らずや・・』

青山が捕獲され恐らく状況は急展開すると睨んでいた……。

辻谷からの自分への矛先が厳しくなるのと公務（警察）の動きも激しくなる……

実際、青山の逮捕の事件はニュースなどでも報じられ業界では大事件として扱われていた

『取りあえず頼むな黒ちゃん、何かあったら連絡するわ』

『自分も行きたいです……危険ですよ』

『まあ……男には渡らなあかん橋もあるやろ……なるようにしかならん……』

『全てバれているんですかね？』

『分からん・・・でも大丈夫ちゃうか・・・それより辻谷が心配しているのは金と公務の事や』

『なるほど・・・』

『まあ・・・そんな感じや』

辻谷に連絡を入れることにした

「プルルルル・・・」

『おっ・・・哀川・・・』

『社長・・・お疲れ様です。明日関東入りますが宜しいですか?』

『何時や?』

『夕方くらいには・・・』

『ほな、東京駅に着く時間分かったら連絡よこせ・・・沢山・・・話あるでな・・・2、3日おれや・・・』

『はい・・・そのつもりです・・・』

電話切った・・・

『黒ちゃん、あのジジイ2、3日で解放してくれるらしいが・・・どうか分からんわ』

『3日過ぎて連絡がないときは動きます』

『いや・・・その時はお終いにしろ』

『嫌です』

『あんな・・・辻谷はお前が思うほど簡単な相手じゃない、お前も殺られるで』

『いいですよ、本望です』

『そういうの今時・・・流行らんで』笑()

『そうですね』笑()

と黒田は言いつつも田は違う言葉を語っていた

翌日、京介は関東へと向う前に辻谷に連絡を入れた

東京駅到着、17時35分辻谷に報告

『もしもし・・・哀川です』

『到着は何時や?』

『18時30分です』

『分かった迎え行かすわ・・・』

早々と電話を切られた・・・

到着時間を一時間遅れで伝えたのには理由があった・・・

予め、予防線を張るためと万が一の逃げ場の確保の為である。

辻谷が何かしらの下準備がされてないかチェックする為でもあった

逃げ場の確保はホテルではばれる可能性がある

東京在中の女に連絡をしてSEXしながら辻谷から隠れるのが良いであろうと考えた

問題は・・・このインターバルの間に辻谷から連絡が入れば到着している事がバレる可能性がある・・・

携帯の応急用の電池を準備

また、数本ある携帯を全てサイレントにし気付かなかったフリでもするしかない

とにかく、こちらの下準備が終わらないうちは辻谷と連絡を取るの
は具合が悪かった

辻谷は・・・警察より疑い深く、感の鋭い男・・・

「まるで、執着心丸出しの彼女みたいな奴やな・・・クツクツク・・・」

一抹の不安はかなりあったのが現状であった

今までに相手にしてきた青山、鈴木、畑中とは一味も二味も違う

「ジジイを何とか上手い事騙してSEXでもして帰ればマシやな
(苦笑)」

新幹線に乗り関東入り17時35分・・・

駅内・見た限りでは辻谷の手下達はまだ現れていない様子だった

女へ連絡を入れた

「プルルル・・・」

『もしもし』

『久しぶりやのう・・・哀川や』

『どうしたん？久しぶりやん！』

この女は関西で可愛がっていた女で水商売をしている女だった

関西から関東へ引越し、水商売を続けていた

女の名前は「奈美」

元々お嬢様で親の金で現在の暮らしをしながら適当に働いていると言うのが現状

『奈美、深夜か明日、連絡するから暫くの間・・・泊めてくれんか?』

『ええー（笑）』

『無理？』

『どっしりしようかな』(笑)』

『・・・あっそう、ほんたら他にも宛があるからええわ』

『嘘、嘘、いいよ』(笑)』

『実はな・・・ちと面倒な事になってな・・・あまり人目に付きたくないねん』

『何日位居るの？』

『分からん・・・最低・・・2、3日や・・・詳しくは行ってから話すわ』

『・・・分かった・・・』

「ピシ」

「さて、次は辻谷や・・・」

東京駅で待っている最中辻谷が知る携帯の電源を切っていたため予め準備した

応急用の電池を出し携帯に装着し万が一の為の言い訳が通る様にだ
った

しかも交換した電池の電源は本当に電池が無い状態しておいた

辻谷は相手を信用しない、電池が切れていると言えは電池を確かめる様な男

予備の電池を装着し、空の電池を見せると言う可能性があるのだ・

数分後・・・辻谷の配下が迎えが来た

定番の真っ黒のベンツ・・・2台・・・

「どんだけやねん・・・あのおっさん・・・こっちは一人やで・・・」

辻谷はこういった見た目の威圧感をとても大事にする男だった

ベンツから数名が降りてきた

『哀川さん、お久しぶりです・・・辻谷社長がお待ちですのでどうぞ』

男はニタニタと笑っていた

「あかん・・・完全に舐められとるわ・・・」

『荷物をどうぞ』

京介の鞆に手をかけてきた

『やめや・・・自分で持つがな・・・』

『フンッ・・・そうですか』

「ボタン・・・」

車に乗り込んだ・・・

o

『追求』 2

辻谷の所までに到着する間に考えた・・

奴は携帯電話の電池等の事を聞いてくる可能性はある・・・

それにはある逸話が存在していた

京介の現場で辻谷部隊を徴収し仕事をさせたときの話だが、たった一晩の事でもありとあらゆる事を聞かれると兵隊は言っていた。

どんな場面で京介がどういう返答したかだけでなく、その日、何を食事し誰が金を払ったか？

また、缶ジュースなどを飲む際にも誰が金をだし、何を飲んでいたか？

までである・・・これ程、小さく臆病な人間は見たことがない・・・

どんな場面でも全てを把握していないと気が済まないのであろう・・・

故に確認事項や事実を追及するのである・・・

用心深い男には用意周到で行くのが得策だ・・・

・

・

・

30分後辻谷の事務所に到着した

事務所の場所は上野、この辺一帯は色んな業界が密集し良い隠れ蓑
になのであるろう・・・

事務所に入ると辻谷とその仲間達が群れをなし、入ってくる京介に
対し狂気の眼差しを向けてきた

「こりゃ・・・ただでは帰えしてもらえんかもな・・・」

辻谷は顔を急に笑顔に変え言ってきた

『急に悪かったのう・・・まあ座れや』

『はい』

『飯、食ってないやろ？寿司でいいか？』

『はい』

「寿司とか嫌いだって知ってるやろが・・・アホ・・・」

辻谷の舎弟は直ぐに車の準備をした

事務所の前には真っ白なベンツが止められてた

「全て辻谷の所有者であるが、名義人は全て別人と言ったところだろ
う」

『哀川、話があるでなワシの隣に座りや』

『はい』

「キュルルル・ブウン」

車は六本木へと向かった

『お前・・・何故電話に出よらんかった？』

『電話ですか？』

『携帯や』

『ああ・・すみません電池がいつの間にか切れてまして・・予備を
持ってきていたので今は大丈夫です。すみませんでした』

『じゃあ、その切れた電池言つのを見せろや』

『はい』

「やはりきたか・・」

バックの中から空の電池を差し出した

『おい、この電池の携帯あるか?』

『あります』

舎弟は複数ある携帯電話の中から京介と同じ電話を差し出してきた

『待てや・・・』

辻谷は電池を差し替えた

「そこまでするか・・・？普通・・・」

「・・・」

『どつちらホンマみたいやな・・・まあ信じたるわ』

辻谷はニヤリと笑った

『はあ・・・』

『哀川・・・青山とは内密に事を運んでいたんやろな？』

『どう言っている意味ですか？仕事の件ですか？』

『仕事の件？・・・』

『あれ・・・聞いてなかったですか？』

『青山はごうもごうもならん・・・言つて連絡してきよった・・・』

『理由は言わなかったのですか？』

『警察に追われているとだけや・・・早い内に言ってくれば対処のしようもあったんがのう・・・』

『そうでしたか・・・これは直径としては問題ですね・・・』

『知っている事話さんかい!!』

今までの青山が行った仕事の件数を数件だけ伝えた

『社長に助けを求めたと聞いたので全部話しているのかと思います
た・・・』

『ほう・・・で？お前はそれに対してどう思い、何を聞いた？』

『自分が思うに青山さんは金に目が眩み仕事を選ばないところがあ
ります』

『・・・』

『警察の件は問題が起きたら本家に飛び火する可能性がある、辻谷社長には連絡をせずに私（京介）がホローする形で進めるのが今は良い、完了の後報告、納金すればよいと言っていました』

『ワシには秘密にしとくと言っ訳かこのガキヤー!!』

胸ぐらを掴まれ、いきなり頭突きを食らった

「ズゴンー！」

辻谷は自分の管轄外で仕事を行ったり金を動かす事を嫌う

全ては自分の配下、稼いだ金は吸い上げて当然

誰のお蔭で安心して仕事が出来ているのだ？

今の地位、金などは誰のお蔭だ？

辻谷は飲んで荒くれるといつも口癖のように言っていた

『すみませんでした・・・ですが社長・・・今回の件は青山さんの采配で行われている事実を知りませんでした』

『舐めとんかコラッ！』

『ワシは社長の所に居れなくなった身分です・・青山が言う事を信用したのが間違いでした』

『・・・』

『でも自分は言いました、もし辻谷社長に報告してないのなら、警察が動き始めてからでは不味いです』

『己が付いって何やらしとんじゃ・・ボケが・・殺すぞ・・!!』

『・・・防波堤は組んで有ります、OB、天下り、大分動かしております。こちらには一切何も無いようにしておきました』

『お前程度で止めれるか・・・ボケ』

その後の会話は続いた・・・

青山から連絡が入った経緯（鈴木的事を含む）

仕事の流れ、一軒の現場で利益

勿論、真実ではなく京介が描く絵図としてだった

『と言う事は、その話が本当だとすれば・・・お前は最後に逃走資金を準備して渡す予定だったんやな？』

『はい』

『なんぼ渡すつもりやった？』

『本人が300と言ってましたので、300は準備してました』

『そうか・・渡していないんやな？』

『はい、その前に逮捕になりましたので』

『ほんだら、その300上納しとけ・・いいな』

『・・・はい』

結果300万と言う現金が動いてしまった

・

・

・

寿司屋に着いた

広い座敷へ通された・・・

いつものパターンだな・・・

大きな場所に人数を入れ威圧する・・・

辻谷は精神的なものを重用していた、それは本人が臆病ゆえ考え付くことなのだろうと思った

宴が始まると辻谷は上機嫌になり寿司を食いながら酒を進めてきた

『今日は飲めや・・・のう・・・せつかくの東京やし・・・ニヤリ・・・』

『はい、いただきます・・・』

『そついやお前・・・青山の事、恨んでなかったか？何で協力した？』

「きたきた・・・」

『過去の事ですか？私はそんな小さな事を気にするような男ちゃ
いまっせ、過去は過去ですがな』

『ほう・・随分と太っ腹な考えやな・・』

『ちと、アホなだけですわ』

『これが・・お前の描いた絵ならば・・かなり手が込んだ策やな・・絶対一人では無理や・・誰かお前の仲間がおるはずやな・・』

「流石は辻谷！、大当たりだ・・次はお前だ覚悟しろ！」

『今のワシに協力をしてくれるような奴、誰がいてますねん・・それに自分かてまたぶち込まれる可能性があるわけですからリスクが大きすぎますよ・・』

『まあ・・・いい・・・もし・・・矛先向けたらホンマに殺るからな・・・
覚えておけよ・・・』

数か月前の監禁を思い出した・・・

「確かにタダではすまんやろな・・・だが・・・バレたらの話や・・・」

『はい・・・その時は遠慮無しに殺っても構いません・・・ですがそんな
な事実はどこにも存在はしません』

「パーン」

辻谷は京介の肩を強く叩いた

『今の若い衆には無い根性をお前は持っている……せやから……信用ならんや……』

辻谷はニヤニヤと笑っていた

その笑顔は疑いと憂いに満ちているような気がした……

o

辻谷はどういうつもりなのだろう・・・

わざわざ関東まで呼び出し、伝えたいことはこれだけなのか・・・

いや、違う・・・絶対に何かを仕掛けられている・・・辻谷を信用したら骨の髄までむしゃぶられるだけ

本音は絶対に言わない・・・奴はそういう男だ・・・

決して頭の悪い男ではない・・・だが、ワシには劣ると言う事や・・・

「ピリリリッ」

辻谷の携帯電話が鳴った

表示するディスプレイを見て立ち上がり部屋を出て行った

「・・・」

辻谷の背中をぼんやりと眺め視線を外すと周り人間たちが自分を鋭い眼差しで見ている事に気付いた

「これは意外と不味い展開かもしれんな・・・」

元々辻谷の組織は武闘派の集団、脳みそが筋肉でできているような

馬鹿が多い

万が一に備え、京介はグラスを置き、セカンドバックから扇子を出した

「コイツで目でも潰してやれば何とか逃げ切れるやろ・・・」

すると一人の雑魚が話しかけてきた

『おい哀川、元気そうやのう・・・』

『お前には関係あらへんがな』

『なんやとコラッ!』

『なんやねん』

『貴様、何様のつもりじゃ? あん? 今日でお前の命終わらせたるか?』

『はあ? 雑魚・・・消えろや・・・ワシは辻谷さんに呼ばれて来てんねん、雑魚の相手はする時間などないわ・・・』

『なんやとあー! コラッ! 糞哀川!』

座っている京介の胸ぐらを掴み持ち上げようとした

『やんのかコラァ・・・』

立ち上がり雑魚の目を睨みつけた・・・

「扇子の角を目にぶち当てたる・・・」

このやり取りを全員が凝視しながら二人を取り囲んだ

「流石にヤバイな・・・これは死ぬかもしれんな・・・まあ・・・ここまで来たらやるしかねーな・・・」

雑魚の手の甲を扇子で力いっぱい叩き、その後顔目掛けて扇子を振り払った

「パーン！」

扇子は目ではなく鼻にぶち当たり雑魚は驚くように後ろへと倒れ込んだ

一瞬、時間が止まったかのように辺りが固まっていた・・・

『テメー！この野郎！！』

複数居る雑魚が吠えた

京介は応戦した・・・

だが、こいつ等は以前、数名で京介を拉致した連中、一対一の戦いなどするはずもない

時間が経つにつれ、後ろから羽交い絞めにされ殴られ続けた

実際は大して時間が経っていないのだからとても長い時間に感じた・・・

『こらあ！辞めんかいいいい！』

室内に辻谷の声が大きく響いた・・・

店主が辻谷に騒ぎを伝えたのだろう、少し驚いているようだった

だが、この揉め事すら、用意されたシナリオであろうと京介は考えた・・・

恐らく、脅しめいた忠告で釘をさしておけと言う指示だったのだろう

今まで、そんな役割を京介は辻谷の指示で行ったことがある・

故に、敢えて反抗的な態度を取ったのだった・

「ワンパターンなんだよ・この時代遅れが・」

辻谷が入ってくると雑魚は京介を放し、席へと戻った

『オドレ等・・哀川は客人やど・・気に入らん言つても勝手な事は許さん』

用意されたセリフかのようににやけながら辻谷は言った

『すまんのう・・・哀川、こいつらも反省しとるで水に流してくれ
な・・・ニヤリ』

『ええ・・・勿論ですとも、雑魚を相手にする価値などありませんか
らね・・・』

すると辻谷は京介の胸ぐらを掴み言った

『随分と威勢がいいな・・・哀川・・・お前、何考えてんねん？』

『生きる事ですわ、社長に取られるなら致し方ありませんが、この雑魚に取られるほど腐っちゃおりません言う事ですわ』

「バキッ！」

いきなり顔を殴られた

『大概にしとかんと・・・お前ほんまにヤバイ事なんで・・・』

『・・・今が・・・その時かと・・・』

『ハッハッハッハ！ほんまおもしろいやっちなお前……』

京介の胸ぐらを放した

「体中痛てえ……帰ってからSEXが出来ないな……」

そんなどつでも良いことが頭を過った

『まあ……ええ、お前……今日大丈夫やる？飲み行くで』

「まだ用心は続くと言つ事か・・・幾つ命があつても足りんわ・・・」

『はい』

顔は徐々に腫れあがり血が衣服に着いたまま、又もや街中に連れ出された

「このパターン好きやな・・・コイツ・・・」

だが、今回はちょっと不味いパターンだ・・・一人で切り抜けるのは困難だ・・・

辻谷の目を見計らい黒田にメールをした

「5」送信・・・

メールの内容は数字の「5」のみだった

予め予測される事を想定し、番号で内容を把握できるようにしていた

「5」有本に連絡をする

内容的は

「辻谷と呼ばれ関東が哀川が向かいました、その前に有本さんと会いたいと言っていました、もう連絡入りませんでしたでしょうか？連絡が取れないもので・・・有本さんへおかけしました・・・」

というものだった

関東入りする前に連絡を取ると、有本の行動が辻谷の動きに過敏になる

つまり不自然なシュチュエーションは避けないといけないからだった

六本木のとあるクラブに着いた

「今日は銀座じゃないんだな・・・」

店の連中も女共も辻谷の職種を把握しているのか・・・息がかかる店なのかは知らないがとてもVIPな待遇をしてきた

「ドカッドカッ」

辻谷と雑魚数名が椅子に座った

『哀川、ここに座れ』

『はい』

自分の隣の席を指差していた

『お前、キャバクラ好きやろ？せやから今回は銀座じゃのうて六本木にしたわ』

『はぁ・・・ありがとうございます・・・』

『好きな女選べや・・・』

『はい・・・』

適当に着いた女と話をすることにした

指名などしたらまたお持ち帰りなどと面倒な事をさせられかねないからである

『初めまして・・・美和と申します・・・』

女は少し普通でない京介の顔と服装に驚きを隠せないでいた

『顔腫れてますけど・・・それに・・・血も・・・』

その声を聞き辻谷が会話に入ってきた

『ワシがやったんや・・・コイツ生意気やからな！ハッハッハ』

『まあ、そんなところですわ、ワッハッハ！』

敢えて笑いに持っていく事にした

『社長、傷口に沁みて痛いですわ・・・』

『そうか・・・そら悪いことしたな・・・ワッハッハッハ!』

『やだぁ社長さんったら・・・社員想いね』

美和も敢えて辻谷に合わせているようであった

くだらない話を繰り返している中、京介は有本からの連絡を待っていた

「連絡来うへんな・・・どないなってやる・・・このままでは何かと不味い・・・」

店に着き数名の雑魚どもがトイレに立ち始めた・・・

この頃合いを見計らって自分もトイレへ向かう事にした

『じゅん、トイレ』

美和にそう告げ席を立った

すぐさま、黒田へ電話をした

『黒ちゃん、どないなってんねん連絡はいらんで・・・』

『さっき繋がりました、後で電話すると言ってました』

報告だけを聞き直ぐに電話を切り席へともどった

急いで出なければならぬ理由があった

それはトイレの滞在時間だった

辻谷は滞在時間が長い。電話をしていると考えるからです

『早かったの〜』

席に戻ると辻谷が時計を見ながらそう言うてきた

『小ですから（笑）』

辻谷は自分の隣の女を避けさせ京介の隣に来た

『ところで・・・青山がパクられた時、お前どこにおったん？』

「そこが聞きたかったんだろ・・・最初から・・・」

『青山さんに逃走資金を渡す為に待ち合わせしていましたが指定の場所に向ってる最中でした、現地に着いたら人が群がっていて数名が走っていたのでこれはヤバイ・・・直感で感じ隠れました』

『もう一度聞く・・・お前が描いた絵ちやうんか？』

『社長・・ワシが何でこんな手の込んだ絵描きますねん・・それに青山さんとの事で三重の揉め事を起こした時、話を付け何とか回避したんですよ、こっちが何でこんな事になったか知りたいくらいですわ』

『・・・ほー・・用意されたような答えやのう・・』

『社長・・私にどうしろと?』

辻谷は顔に顔を近づけ・・

『お前は何かを企んでいる・・・ワシにはそう感じんねん・・・』

『社長・・・考え過ぎですわ・・・』

その時、京介の携帯が鳴った

『天国にあーなた〜一番近い島〜』

携帯電話をさりげなく見るフリをし、そのまま再びポケットへしま
い込んだ

『何で出えへんねん・・・出たら不味い電話か？コラっ・・・』

『いや・・・そうでは無いですが・・・社長と話しているときに電話は失

礼かと・・・』

『ええから出えや・・・』

『切れましたんで・・・あとから掛け直しますわ』

『携帯貸せや・・・』

そう言い京介から携帯を取り上げ着信をチェックし始めた・・・。

o

『追求』 4

辻谷は京介の携帯を取り上げた

食い入るように着信履歴を見始めた

「まるで浮気をした事実を探す彼女のような……」

そんな風にも京介には見えた

着信履歴 「有本社長」と記載されているのじつと眺めていた

『おい・・・何で有本から電話はいつとんねん・・・』

『仕事の件だと思います』

『己、何を考えてとる・・・関東入りする事有本に言ったんか？』

『言っていないですよ、電話は導入済みの現場で不具合が生じたので、その件を伝えたらある部品を交換すれば治る可能性があると言っていましたのでその件だと思います』

『・・・現状の客？どこや』

「やはり知りたがりだな・・・辻谷には行けないようなど田舎現場でも伝えるか・・・」

空港から遠く交通の不便な現場を伝えることにした

『青森の六ヶ所村ですわ・・・』

『・・・3年前の現場か？』

『はっ』

辻谷の記憶力は本当に驚くほど良かった・・・

『それも怪しいのう・・・あの店が上手く使いこなしているとは思えん・・・』

1371

さも、知ったかのような口ぶりで言った

『ワシが今でもコンサルしてますので何とか上手い事使いこなして
ますわ』

『なんぼでや?』

『銭はもろうてません、その代り、ちょいちょい小さなものを購入
してもらってますわ』

『ほづ・・・何売ってんねん?』

その時、タイミングよく携帯電話が再び鳴った

「天国にあなたが一番近い島」（京着）」

辻谷は話を中断し、「天国へ一番近い島」の1フレーズを聞いた後
電話に出た

『もしもし・・・』

有本はまさか辻谷が出るとは思わなかった

『ん？哀川の携帯にかけたつもりやったがな・・・』

『有本・・・ワシや・・・辻谷や・・・今な哀川を東京に呼びつけて尋問
中や・・・ハツハツハ・・・』

『そうか・・・アイツは大人しくしてるやろ』

『有本・・・コイツはしたたかや・・・裏で何をしているか分からん・
・・・』

『そら、考え過ぎやで・・・哀川はようやってくれてる、そいつのお
蔭で客も減つとらんしな』

『・・・まあええわ、今代わるわ』

辻谷は携帯電話を渡してきた

『お疲れ様です・・・哀川です』

『おい、どないなっぺんねん・・・』

場の空気を感じさせる為・・・

『辻谷社長からお話があると言う事でしたので関東入りしておりました・・・それと例の部品の件ですが早急に用意していただきたい』

と思ひまして・・・早急です』

『はあ？早急・・・何の部品やねん』

『今は六本木です・・・はい、ええ・・・ホンマですか？』

有本の話をしカトし何とか伝わるように場所を伝えた

『来て欲しいと言う事か？』

『はい、是非・・・』

『ヤバイ感じなんか？』

『はい、とても先方（客）もお困りのようですので』

『ほな、辻谷に代われや・・・』

『はい』

京介は辻谷電話を差出し言った

『社長、有本さんがもう一度代わって欲しいとの事です』

奪い取るかのように携帯を取り話を始めた

・
・
・

『ほう・・・そうか・・・ほな来たらええやんか、一緒に哀川いわした
ろっやないか・・・』

「思惑通り・・・」

電話を切り携帯を返しながらいって来た

『来るらしいで・・・』

『えっ？ほんまですか・・・あの部品がないと集金でトラブル可能性があるので助かりますわ・・・』

『でっ何の部品やねん？』

『操作の部品であるロムですよ、一台不具合が出てて非常に不味い状況なんですわ・・・』

辻谷はじつと京介を見ていた

恐らく嘘をついているかどうかを判断していたのだろう・・・

目の動き、言葉にぎくしゃくがないか・・・

意識をすればするほど、嘘をつけばつくほど人間は違和感をかもします・・・

「お前程度に見抜かれるほど安くない・・・」

約1時間後・・・有本から辻谷の携帯に電話が入った

「やるな、有本・・・ここはワシではなく辻谷に連絡を入れる辺りは流石だ・・・」

今までに有本を裏切ることなく忠誠に従っていた事が功をそうしたのだろう

事実上は有本の下に位置してるのが京介、

本来、辻谷から直接連絡が来ること自体がおかしい話なのである。

必ず有本を通じ指示が入るのが本来の流れ

一度の逮捕（京介）や青山の逮捕が絡み、その流れは崩れ辻谷に目を付けられてしまったのが現状であった

数分後、有本は現れた

『いやあ、スマンスマン遅くなったわ』

『こっち座れや』

既に腹の読み合いは始まっている・

敢えて隣に座らせ、歓迎をしているふりを装う辻谷・

それに気づかないふりをする有本・

『哀川、久しぶりやのう』

有本は笑みを浮かべ手を伸ばしてきた

『お久しぶりです』

握手をし頭を下げた

辻谷はその姿をじつと見ていた・

『あの・有本社長・例の部品は持ってきてくれました？』

『あれか、来る途中宅配に出してきた、その方がええやろお前暫くおるんやろ？』

『まあ・そんなに長くはおれませんかね・でも助かりましたわ、これで先方さんも納得してくれますわ』

『店の方は頼んだで』

『分かりました・・部品交換後集金という段取りで・・』

『哀川・・有本が来た途端・・随分と嬉しそうやなか・・』

辻谷が会話に割って入ってきた

『そうですか・・久しぶりなのもありますが、やはりお客の事を考えると・・ほんま辻本社長のおかげです。ありがとございませす』

辻谷は京介の言葉に少し気を良くしたのか「そうかそうか」と言い酒を飲み始めた

その後の会話は辻谷と有本のトップ対談のようになった

現在の経済の流れ、政治家の人選、今後の国の動きなど壮大な話が
繰り広げられていた

辻谷は政界へのパイプも多く持っている、日本の裏社会にはとて
も重要な人物であると言置かれているような事を自分で常日頃か
ら言っている・

実際、どうかは分からないが可能性は否定できなかった

辻谷は週刊ゴシップ雑誌などにも数回取り上げられたり、インタビ
ュー記事が掲載されるほどの人物なのは本当だった

そして話は近場の話へと移った・

『辻谷、なんの件で哀川呼んだんや？一応こいつはうちの兵隊や』

『決まり切つとるやなか、青山の件や・こいつ一枚噛んでるよう
な気がしてな・』

『哀川が？』

『どつもきな臭いねん・』

すると有本は立ち上がり京介の胸ぐらを掴んだ

『おい、哀川……どないやねん……コラッ』

『囓んでるわけじゃないですよん、逆に青山さんを救出しようとしてこつちがパクられるところでしたわ、もし、青山さんだけでなくワシまでいかれてたらエライことになってましたわ……』

『ほんまにお前が描いてるワケちゃんねんな？』

『はい、絶対にありません』

すると手を放し座った

『辻谷、コイツは嘘ついとらんで』

『そつかのう……ワシは信用は出来へんな……』

『信用したれや、まだまだコイツは使い道があるで……』

『……かもな……』

二人が何を意味し話していたのかは大体想像がついた……

恩師 有本に真実を告げることなく進行するプラン

人は知っていて隠すのと、本当に知らないのでは追いつめられた時に出す答えが違ってくる・・・

相手が大物であればあるほど、これは重要になってくる

どんな結果が出たとしても

もうこのプランは止めることはできない位置まで来ていた・・・

o

『追求』 5

辻谷に終始疑いの眼差しを受けながら飲みは続いた・・

飲み場が六本木から銀座に移り、そこがラストの宴になった

やはり最後はホームで決めたいと言う事なのだろう・・・

気持ちは分からないでもない（笑）

いつもの辻谷の息の掛かった店

辻谷のいつもの手口で京介の脇には何でもOKのような女が座っていた

「また、持ち帰りをさせようとしているのであろう・・・ここは敢え

て奴の読みに沿って行動したるか・・・」

京介はその女と終始エロトークを交わし、夢中になっているフリをした

ボディータッチをしながらエロスのフェロモン全開で挑んだ

そんな京介の姿を見て、辻谷はニヤニヤとし満足げだった

『哀川、大分気に入ったようやな』（笑）持ち帰ってええで』

『ホンマですか？ニヤリ』

そんな返答をする京介を有本も微笑んでみていた

飲みが終わると辻谷は女といつの間にか現れていた子分共を連れて帰った

有本も早々にタクシーに乗り込んで帰宅

京介は店の女共に無理矢理タクシーに乗せられた

そして先ほどの女も乗車してきた

「ホンマ呆れた女や・・・」

直ぐにタクシーを走らせ、ラブホテル街へと向かわせた

『どこに行くんですか？』

『ラブホに決まっとるやないか』

『泊まっているホテルじゃないんですか？』

『何言ってるの（笑）ここで十分やん・・・お前程度』

目の前には築何十年にもなるボロホテルが目の前にあった

『私、こんなとこ嫌』

『お前の股から出る悪臭はここがお似合いなほど臭いで・・・クックク』

腐っても銀座の女

客の殆どが上流階級の人間たち、そこでの口説きと扱いは高級なものであつたらう・・・

こんなゲスな扱いをされることはないはず・・・

高級扱いに慣れ、自分の価値も上がっていると勘違いがしているものだ

所詮、皆同じただの人間、金があるうが無かるうが飯を食い便所に

行く生き物には変わりはない・・・

くだらない感性をぶち壊してやる・・・

『こんな扱いされたの初めてよ!』

『お奇さんごうじですか・・・?』

タクシートの運転手が聞いてきた

『ドア開けてくれ、降りるよ・・・』

「ガチャ・・・」

自動ドアが開いた

『コイツだけな』

『えっ？』

「ドカッ！」

女の腰を押しすように蹴りタクシーの外へと押し出した

『ドア閉めろ、行け』

『あっ・・・はい・・・』

「ボタン」

「ブーン」

タクシーは銀座の公衆便所をど野外に降ろし立ち去った

辻谷にこの行動が報告されるかどうかは分からない・・・

されても特に害はない、所詮飲み屋の美人局つしもたせのようなものだ

また、本人のプライドにより報告はされない可能性もある・・・

京介にとってはどうでも良いことだった

そしてようやく奈美の部屋へとたどり着いたのである

『来ないかと思った』

『少し面倒な事になってな・・・まあええやないか、取りあえずやらせる』

『それだけの為に来たの（笑）？』

『当たり前やないか（笑）』

奈美は京介のこういうノリが好きだった

本気で言ってるわけではない、そう思っていた

だが、京介は意外と本気でそう思っていた（笑）

翌日

朝早くから行動し東京駅へと向かっていた

すると電話が鳴った

着信を見ると「辻谷」と表示していた

『おはようございます、社長、昨日は大変御馳走になりありがとうございました』

『おうおう、そらええわ、でっ、今何処おんねん？』

『新幹線のチケットを買いに来てました』

『帰るんか？』

『もう少しおりたいのですが、昨日有本さんが部品を客先に送っているので設置に向かわないと不味いんですわ』

『そうか、帰る前に事務所に寄れ』

『分かりました』

タクシーで事務所へ向かった

事務所に着くと、タクシーの後ろに黒いベンツが停まった

「・・・なんや？」

後部座席が開き、辻谷と有本が降りてきた

「二人が朝から一緒・・・」

『おはようございます。辻谷社長、有本社長』

『あがれや（辻谷）』

『おはようさん（有本）』

応接室・・・

『なんや、お前も帰るんか？』

有本が聞いていた

『すみません、客からヤイノヤイノ言われてるもんで（笑）』

『そうか・・・仕方ないな・・・』

『はい』

辻本が京介に言った

『哀川、率直に話すわな・・・』

『何でしょう・・・』

『まずは今回の青山の件の詳細を最初から最後までキッチリ報告を
せえ・・・警察の動きは此方でも見るが・・・お前の方でも予防線を
張れ・・・』

『分かりました』

『あとな金詰めや、取り合えず1000万』

『はっ？何ですか』

『お前は言われた通りにだけしとけばええねやあ』

『無理ですわ・・・そんなにありませんわ・・・』

『ほな、ナンボならイケるんや？』

「何で金を払うことになっているのか全然意味が分からん・・・」

「恐らく納得料として出せと言っているのであらう、そうしたら自由
に今まで通りの生活が送れると言っ事が言いたいのであるう」

『取り合えず、今回の現場が終わると500は入ります。それまで
待っていただけないでしょうか？』

すると、横で聞いていた有本が助け船を出してきた

『例の現場か？』

『はい、昨日の部品が届いて組み上げて動けばあとは集金ですからね』

『500か・・・よし待ったる・・・集金いつや?』

『少し期間がありますが・・・一ヶ月以内に・・・勿論早めに集金はするようになっています』

『・・・長いのう・・・』

阿咩を立ち込める辻谷に有本は言った

『ええやないか待ったろうやなか、コイツはマダマダ金を産む男やさかい詰めたらあかんで（笑）なあ・・・哀川』

『辻谷社長・・・なんとかお時間いただけませんか？』

『ほな、有本、お前がケツ持てな・・・』

『なんでやねん』

『当たり前や無いか・・・お前の舎弟やんか』

「有本もただ呼びつけられただけやったんやな・・・」

『分かった、哀川、打ち合わせが必要だな・・・あとで連絡するわ』

『はい』

「コンコン・・・」

『入れ』

応接室に一人の女がコーヒーを持ち現れた・・・

この女は辻谷の女で、皆が「姉さん」と呼んでいる存在だった

「……」

コーヒーを置き終わると辻谷の所へ行き座った

「お前も金に群がる便所の一人や……」

京介はそう思って女に軽く会釈をした

o

『追求』 6

辻谷の女は京介の事をあざ笑うかのような顔で見ている

辻谷の力には逆らえない、金も辻谷に適わない・・・

これから追い込みを掛けられるであろうと思つてたに違いない・・・

『哀川さん、お久しぶりですね』

『どもつ、姉さん御無沙汰してます』

女は辻谷の耳元でコソコソと耳打ちをした

すると辻谷はニヤニヤしながら京介を見た

これも手口の一つなのである

姑息な手だが、このシュチエーションでこの「耳打ちでニヤリ」は大概の人間には効き目は効果的である

「どうせ、今晚の飯は何にする？程度の話をしているんだろう・・・
ジジイと便所は残飯でも食ってる・・・」

その後、女は立ち上がり、京介の脇を歩きながら見下すような目で見て微笑みながら消えた

「キモイ・・・」

辻谷は女に「じゃあ、例の通りに頼むな」と声を掛けていた

「はいはい」

それから2時間ほど辻谷と有本の話は続いた・・・

実際、この長い対話の時間、自分がその場に居る必要はあったのかどうかは分からないが

現時点、それすら必要な行動ではあるのは間違いなかった

事を穩便に進ませ、プランを進行する……

「歯車は回された……鉄槌は下される……覚悟してもらつて……辻谷」

『おつ……もうこんな時間か……辻谷、ワシは哀川連れて帰んで……』

有本が時計を見てそう言った

『おつ……ほな　またな』

辻谷はあっさり京介を引き渡した

『では社長、集金の方早めに行いましてご連絡します』

『そうする』

『ほな行くぞ』

『はい』

事務所を出て辻谷一派の車に乗せられ東京駅へ・

「車内での会話も気をつけないといけないな・・・」

『哀川・・・一ヶ月後・・・金、大丈夫やんな？』

『はい、勿論です・・・辻谷社長の命令は絶対ですからね何とかします』

『分かっているならええねん・・・』

その後の会話は一切行われず駅に着いた

駅に着くと有本は言った・

『お前・・ほんまは切符買って無いやろ?』

辻谷には新幹線の切符を購入済みと伝えてあった

『ええ・・まあ・・ばれてました? (笑)』

『辻谷は買ってないやろ・・とゆうとっただで・・』

『辻谷社長を待たせる訳にはいけないと判断したんですわ・・・それで・・・』

『でっ・・・今日はどないすんねん?』

『まあ・・・特に戻らないといけない理由は無いんですが・・・関東は避けたいですね・・・』

『そやな・・・でも・・・06・07はアカンで・・・網張つとるさかい・・・』

「06」「07」とは市外局番を示し、大阪、京都の事

『ん〜・・・どこに行こうかな（笑）・・・』

『時間あるならワシと01へ行こうやないか・・・』

「01」北海道

『1日だけならば・・・その後は色々ありますんで・・・』

この時点で有本を信用し着いて行くのは多少危険である・・・

辻谷とどのような話をしていたか分からないからである

だが、今の立場上、恩師＋命の恩人の有本の要求を断る訳にはいかないのが現状であった

それが、この世界の「仁義」と言うものである

『ほな決まりな、チケット代金はワシが出したるで心配するな』

『はい（笑）お願いします。辻谷社長から沢山の請求書が来てますので・・・』

『そやな（笑）』

東京駅から成田へ向かいその後「01」へ・・・

・ 有本は仕事で「01」に向いたかったらしく、打ち合わせがある・・・

その打ち合わせの現場での事をお前も知っておいた方が良くとも言った

『 哀川、その他にも色々話があるでな・・・ 』

『 はい 』

有本は真実を聞きたいのだろう・・・

だが・・・言うわけにはいかない・・・

下手したら有本まで嵌める事になってしまう・・・

「有本とて辻谷の分家・・・100%の信用は厳禁である・・・」

飛行機は01へ・・・到着した

空港に着くと有本を待ち構えている人間が居た

有本は小さな声で言ってきた

『哀川・今からワシは「川村」だ、お前は「高橋」だ』

『分かりました』

「偽名を使わないといけない相手か・・・これは大きな金が動きそう
だ・・・」

『川村社長、お待ちしておりました』

『わざわざわざわざ出迎えしてくれんでも良かったのに』

有本は比較的低位姿勢であった

『「こちらの方は？」』

『コイツはワシの右腕の「高橋」言います、信用できる男ですから
「ご安心ください」』

『分かりました、では早速移動しましょう』

出迎えの車は国産のワゴン車であった

夜の街を走り、数十分経つと煌びやかな繁華街のネオンが見えてきた

「ススキノか・・・久しぶりやな・・・」

あるクラブへ入った・・・

出迎えに来た男の名は「清水」

話の流れを聞いていると聞き覚えのある現場の名前が出てきた

それは以前、京介が逮捕になる前に取引のあった顧客の店舗名で担当は鈴木にしておいた所だった

予測は次ぐ付いた、京介の元を離れた鈴木が食いつぶした現場である

鈴木は青山に認めて貰うために北海道へ足を伸ばし契約を結んだの
だろう・・・

確かに、この地域の客は遠方な故、京介は出てきた後接触はしてい
なかつた

『高橋、この清水さんは青山から現場を見るよう指示されていた人
や』

有本は言ってきた

『青山さん・・・ああ・・・あの青山さんですか』

『高橋さんもご存じなんですか?』

清水は聞いてきた

『私は詳しくは知りませんが・・まあやり手な方だと伺っています』

『あの青山とか言う男は適当で集金するときだけ威圧的で・・仕事はやることはやるんだけど売りっ放しでアフターもしない。高額な金を取るくせになんなんですかね?アイツは・・』

突然、青山に対しての不満を言い始めた

京介の知らない所でも青山はやりたい放題やっていたことが分かった

有本はニヤニヤしながら口裏を合わせをしながら清水の話に頷いていた

『そうでしたか・青山は私達に取ってはただの売り子です。顧客からのクレームが多いので、今回直販体制に切り替えたんですよ。もっと早めにお会いすれば良かったですね・すみません。』

話が進むにつれ・顧客が警察の取り調べまで受けた経緯を話してきた

『なるほど・実は青山は下手を打ちましてね・今、警察に取られてるんですわ』

『そうなんですか・・・うちの顧客も青山さんの名前を出したと聞いてます』

『なるほど・・・それで青山はパクられたんですね・・・』

『仕事は適当だし、金だけ取ってドロンされるところでしたよ・・・私としてはいい気味ですよ』

『そうでしたか（笑）確かにお客の身になり、清水さんの立場となればそう思いますわな・・・ただ用心しないとイケない』

『のは警察の動きですな・・・手は打ってありますか？』

『ええ、青山さんが連絡取れなくなった時点で、元に戻していたんで何とか回避は出来ました』

『清水さん、警察は素人が思うほど馬鹿でない・舐めてると痛い目を見ますので暫くは大人しくするようにお客にも指導願いますね』

『分かりました』

『おい、高橋・・・これが真実や・・・なあ・・・安心したやろ・・・』

有本はこの事実を京介に伝える為に北海道へと誘ったのだった

知らない所で上手い具合に物事が運んだ・・・

数をこなし荒稼ぎをしていた青山はどこの現場が火を噴いてもおかしくない状況であったと言う事か・・・

有本は北海道の青山の現場の話をしていたのだ・・・

事実確認のためにも直接自身が現場に入り内容を確認する事を話し合っていた

『追求』 7

有本は清水の話の聞き、京介を完全に信用した

確固たる証拠を掴んだそう思っていた

自分の舎弟分の疑いが晴れる・・・

有本にとって京介は息子のような存在でもあった故、自分が京介を信用しているという事を行動で示したかった

「有本さん・・・ありがとう・・・だがそれは偶然が重なったラッキーな事実でしかない・・・ここまで来たらプランは止める訳にはいかない・・・辻谷からの金の要求や今までの犠牲を無駄にするわけにはないんだ・・・」

その後、有本は終始、顔の表情が明るくなったようにも感じた

そんな表情を見て、清水も安心して有本に新たなる現場の話をしてきていた

京介はそんな二人をぼんやりと眺めた・・

「俺は一体何をやっているんだ・・」

突然、そんな言葉が頭の中に浮かんだ・・

「……素になつてはダメだ……悪の元凶「辻谷」を潰すまでは……奴のせいで死んだ人間もいる……」

「その苦しみを自分で味わつて貰うまでは……」

それだけではない「青山」この存在が拍車をかけて事を大きくする可能性が……

青山は根性がない、鈴木と共通する部分である

己が助かりたいが為、中で全部唄う可能性は拭い切れない……

必ず、「哀川 京介」の名を出さるう……

警察も数年前の逮捕にその話を信じる事だろう・・

だが、そこまでは想定済み、下っ端の熱血刑事どもは飛び回るだろうが、そんなコバエはどうにでもなる・・

大事なものは、自分自身が下手を打ち捕獲されない事だった

「青山が出てきた時が本当の処刑の始まりだ・・・」

有本と清水の話の聞きながら京介は外の景色を眺めた

元は言えば「青山」を「辻谷」にドッキングさせたのは自分だった事を思い出した

青山は元々北海道を取り仕切っていた

京介は自分の顧客を増やすために「辻谷」を利用し、青山に接触し北海道地区へ進出した

思えば、その頃から回りだしていた運命だったのかもしれない・・・

「金しか見えていなかったな・・・」

若き頃の考えの甘さを痛感した

やがて、宴は仕事の話が終わり、それぞれが自由に話を始めた

清水は安心したのかホステスと楽しそうに話をしていた

『哀川・・・ワシは最初からお前を信用しとったわ・・・』

有本はニコニコしながらグラスを差し出した

『おおきに・・・』

「チン・・・」

グラスを交わす乾杯が少し申し訳なくも感じた

『有本さん・・・ワシ・・・やっておかないとならない事があります・・・明日早急に戻りますわ・・・』

『例の現場か？』

有本は部品が必要だと言っていた現場の事を聞いていた

『最初から現場など無いですわ（笑）・・・』

『そんな事やろと思ったわ・・・ほな金どうすんねん・・・』

『何とかしますわ・・・一ヶ月あればその程度何とかかなりますやろ・
もし用意出来ん時は・・・』

『立て替えるか？（笑）』

『はい・・・*、*』

『ほんまお前と言つやつがよう分からんわ（笑）まあええわ、分かつた。けどなお前、そんなんやから辻谷に睨まれるんやで』

『奴は銭さえ投げ込めばどうにでもなります・・・』

辻谷を「奴」呼ばわりした京介に少し驚いていた・・・

『お前・・・何か考えているやる?』

『今は言われた通りに行動します、何れそつする訳にはいかない時
が来る可能性があると思うんですわ・・・』

『何でや?言ってみ』

『青山ですわ・・・奴はきつとワシだけでなく辻谷の名前も出すで
しょう・・・携帯の履歴や奴の行動記録など調べれば奴が歌わなくと
も辿り着くのは間違いない・・・と思うんですわ・・・ワシはその時に
共倒れするのはごめんなんですわ』

『なるほどな・・・でも・・・青山はそんなに根性ないか？初犯やる？あの程度ならせいぜい22日やで・・・』

『何も出来ない22日間は長い・・・本人の精神が強くない限り崩れます・・・』

『・・・何が言いたいんや？お前・・・』

『最悪・・・逃げる準備をしておいてください・・・』

『逃げる？そんなにヤバイんか？』

『・・・』

『・・・あくまでもワシの予想なもんで・・・根拠は正直ありませんが・・・』

『万が一と言つことか？』

『はい・・・それもかなり高い確率で・・・』

『辻谷には？』

『言つてませんがな・・・また疑われるだけですわ・・・お前が描いてるとね・・・』

『言つてもええのか？』

『有本さん次第ですわ・・関わる人間が多ければ多いほど隙間は出ます。相手を信用しないほうが得策かと・・万が一があります・・』

『具体的に言わんかい』

『昨日までは仲の良い友人が次の日には命を狙う可能性があると言
う事です』

『まるでお前やな（笑）』

京介が監禁された事を指す

『はぁ（笑）・・逃げる場合は出来るだけ最小限の奴等だけを使う・
・とワシは考えます・・』

『そろそろちな・・・』

『青山が中で唄い、そして警察はその裏を取るために調べることでしょう、そして逮捕者が数名でる、その被害者は耐え切れず唄う・・・』

『・・・』

『所詮他人事です、体を張って守ってくれするなどそろそろ有りえませんが、人は己が一番可愛いものです』

『・・・そうかもな・・・』

『警察は逮捕まで行かなくとも任意と称し、取り調べを要求をしてくることでしょう・・・間違いなくワシのところにもくると言う事ですから・・・』

『・・・どうすんねん?』

『ワシは慣れてますんで回避方法を知っていますし、既にそれなりの手は打っております』

『そうか・・・それを聞いて安心したわ・・・何にせよ・・・用心しとくには越した事が無いと言うことっちな?』

『そう言う事ですわ・・・あと飛ばし（携帯）・・・幾つか有りますよね？』

飛ばしの携帯とは他人名義の携帯電話の事をさす

『あんで、これや』

『一番遠くてバレにくい奴の番号を教えてください・・・ワシのは』
『しです・・・』

互いに飛ばし番号を交換した

『その番号は辻谷さんは知ってるんですか？』

『知らんな』

『では二人の秘密と言っことばで・・・』

『分かった』

数時間後、ススキノでの宴は終わった・・・

有本は清水をタクシーで送ると言い二人でタクシーに乗って消えた

京介は懐かしむようにネオンを眺めた

今後、想定外の事が音を立てて起こることは思いもしなかった・

有本、京介・・・この二人の運命は知らず知らずのうちに闇へと向かっていた

o

『追求』 8

翌日、京介は北海道を早々に立ち去った

事が自分の知らない所で良いように動いている・・・

上手く事が運んでいる時こそ用心が必要だと判断しての事だった

地元に戻り、黒田を呼び出した

黒田は有本との北海道の話を聞くと京介の思惑通りと感心していたが、やはり何らかの違和感とを感じてるようであった

『今までの青山の行動から今回の結果（逮捕）にいづれなったのか
もしれないですね・・・』

『・・・それはどうか・・・北海道からの警察の動きはまるで感じなかったのが本音や・・・つまり偶然、青山の逮捕と現場が一致してしまっただのやろう・・・中では北海道の件も追及されるのは間違いない・・・ただ、物的証拠が上がらなければ立証は難しいだろうがな・・・』

『警察としてはラッキー逮捕な分、形にするのが難しいと言う事ですかね？』

『そう言う事だ、今回の逮捕にワシらは証拠も意図的に残し、青山の所在まで知らせている、逮捕できて当然と言う事だ、これで逮捕できないとしたら警察が無能と言うえるだろう』

『そうですね・・・解答用紙のあるテストを出しているようなものですよね』

『そう言う事だ・・黒ちゃん次の指示だ警察の動きを出来るだけ情報収集しておいてくれるか？ワシの方でも調べてはみる』

『分かりました』

二人はそれぞれ動き始めた

「青山にそろそろ助け舟を出しておくか・・中で好き勝手騒がれては困る・・・」

京介は青山への助け舟として弁護士を投入した

弁護士も色々ある・・・どの系統の事件に強いのか・・・

世に言う敏腕弁護士とは金を高額で要求する分、それだけのコネクションや、こちらの要求をどれだけ飲むかである

京介は比較的融通が利き、言いなりになる弁護士を選んでいた

「余計な詮索をされてはプランが台無しになる・・・そして狙いは青山を出すことでない・・・」

弁護士にはその事は伝えず、中での青山の精神状態や取り調べの状況をこちらに伝えるよう指示

そして、こちらの指示を青山へ伝えさせ中でプランを遂行させる・

この辺には自信があった・

中で頼れるものは弁護士だけ、地方で逮捕される青山は未だ接見禁止状態である

逮捕され、48時間が過ぎ、とても精神的な不安に押しつぶされそうなタイミングであると睨んでいた

弁護士に伝えた

『「外の事は安心して良い、全て上手く回しておく」とまずは伝えてくれ』

『分かりました』

『それと、適当な本でも買って弁護士さんから差し入れたってくださいな』

そう言い、1万円渡した

『分かりました』

早速弁護士は差し入れの本を準備し面会へ向かった

青山は意地になっていたのだろう、弁護士を付けていなかった・

身内のものからと言う名目で外からの弁護士の派遣にとても喜んだ

青山はこの弁護士は辻谷からの要請で来ている。そう確信していた

「先生助かりました、えらい事になりましたわ・・・」

そう言い聞きもしないのに、取り調べの状況や中での苦痛を訴えてきた

弁護士は京介の指示の通り、細目に面会へ向かった

「少しの変化も見逃さないように・・・特に精神状態を見逃すな」

この指示があったからである。

青山が警察の尋問に耐え切れなくなる時が来る・・・それを待っていた

そして、ある言葉が用意されていた

「これ以上無理そうな時は仕方が無い」

色んな意味に取れる言葉である・・・

中での青山はきつとこの意味合いを錯覚するであろう・・・

まして・・・これが辻谷の言葉思い込んでいるのだから・・・

そして、更に外の社会での情報操作を行った

まだ上がっていない青山の現場の情報をたれ込み・・・

「どんどん警察に追いつめて貰わないとあかんからな・・・クック
ック」

情報操作が始まると青山の調べは相当きついものになり始めたらしい

- ・ 48時間+20日間ではもう完全に出るのは不可能なぐらいの案件・

青山は罰金刑ではなく起訴され1か月半は中で過ごして貰うのが得策と言う事だった

青山は自分が20間を越え起訴が確定した

精神的なダメージは大きく、「我等の業界の掟」を破り、予測通り
唄い始めた

いや、唄わせた形なのであった

ここも思い通りの展開に進んだ・・・

辻谷を予先を完全に向ける時、青山の行動が鍵となる・・・

全ての責任は青山にある

そして、青山の証言により逮捕者が続出するであろう・・・

取引客、関わりのある人間、そして・・・辻谷一派の連中・・・

この時、守らなければいけないのは、「有本」「辻谷」「清水」「自分」である・・・

『京介さん、どうして青山なんかには弁護士を付けたんですか？』

黒田が突然聞いてきた

『簡単な事やないけ、奴に今必要なのは理解と優しさだ』

『なるほど・・・プランとしては何かあると思ってから指示通り動きました、青山の側に立つのは今までの苦労が水の泡的に感じたんですよね・・・』

『奴には味方が居ると言う精神的な安定を与えるのが目的や、そして心の重荷を取り除く事や』

『ほー・・・まるで医者ですね（笑）』

『フッ・・・ワシは精神の弱いものを食いつぶし遊ぶのが好きな男や・・・』

『弱者を笑いながら食い尽くす強者と言うところですね』

『べつかしらんな・・・』

青山も弁護士の甘い誘惑に乗らずに己の意思を貫くことが出来れば
上等の精神の持ち主である

だが、それはあり得ない・・・

そう出来ない様に仕向けているのだから・・・

黒田の情報操作により青山の調べはきつくなり、官房の中から弁護
士の要請がほぼ毎日来る状況となった

それだけ、精神的に追い詰められていると言う事だ・・・

弁護士から連絡が入った

「天国にあなた」

『もしもし・・・』

『高橋さん、弁護士の朝田です』

『はい、どうしました』

弁護士にも偽名を使用

『青山被告は「もう無理だ全部バレている・・・もう終わりだ・・・」と嘆いています』

『情けない男ですな・・・全く・・・』

『例の言葉は伝えてくれましたか？』

『無理な時には仕方がない・・・と言う事は伝えてあります』

『ニヤリ・・・そうですね・・・では、裁判までは取りあえず定期的
に会いに行ってください、今までのように行く必要はありません』

『分かりました、このままで行くと余罪次第では実刑の可能性もありますね・・・』

『そこはこちらの方でも根回しはします、貴方は本人の反省と社会的な復帰を目指している意思を裁判官に伝え、執行猶予を勝ち取るんや』

『分かりました』

『本人の自白による反省の意図を汲んで欲しいとね・・・クッククック・・・』

『・・・はい・・・』

『それでも実刑になるのなら、それもまた奴の運命でしょう・・・』

『出来る限りの努力をします』

『当たり前や、その為にあんたに高額な金を払ってるんや、こちらの意図とそぐわない時はお前もそれなりの処置をする』

『脅しですか？』

『・・・どうかね・・・あんたもえげつない商売仰山しとるやないか・・・ここは持ちつ持たれず上手くやれと言う事や・・・あんたに取って

はビジネスやる？最大限でやって当たり前言う тоннねん』

『分かりました』

弁護士は反論をせずに京介の指示を飲み込んだ

青山は出口の見えないゴールに不安を抱きながら震えていた

o

青山は留置所の中で不安に押しつぶされていた

次々に上がる現場にもう逃げる事は出来ないと観念し起訴を受け入れ裁判を迎える事に弁護士に勧められ言われた通りにした・・・

弁護士や、中で聞く外での言葉（弁護士の言伝）に少しの希望を持つていた

「楽になれ・・・」

警察の温情じみた言葉に逃げ

「どっしりよう無い時は仕方がない」

と言う言葉に身をゆだねた結末の代償はその後、本人に降りかかるものとの時は気付いていなかった

弁護士の報告によると「仕方ない」の言葉に青山はある程度の現場や仕入れ先関係などを警察に話したと聞かされている・・・

当然、その中には「辻谷・哀川」の名も挙がっている事だろう・・・

だが、捜査官レベルでは、その域まで調べる事が出来てたとしても令状を取るのは無理・・・

本来であれば、裁判所の執行命令があれば出来るのだが、検察の要求が行われなかったのである

付着する粘り気のある黒い網は、国民の見えないところで張り巡らされている・・・

金と権力が渦巻く腐った日本の姿・・・

「何でも思い通りに行くと思うなよ・・・歯車どもが・・・」

青山は裁判の日まで留置され、その後判決待ちで拘置所へと移送されたようだった

検察側の求刑は意外と軽いもので、「懲役2年6か月」の求刑を言い渡されていたようだった

初犯、故、執行猶予の可能性が高いが3年が近いためとても微妙な裁判となっていた

青山は裁判では反省の意を必死に述べていたらしい

だが、これは出来レース・・・青山が心配しなくとも執行猶予で出るのは明確であった

その為の金と弁護士であった・・・

安堵を決して与えず、中で震え眠る毎日を通じて貰う・・・

それが京介のプランの一つでもあった

だが、実際の所、求刑が一年多いため、根回しの金を多めにまわしたのが現状であった

「しかし・・・余計な金が飛び過ぎたな・・・この金はキッチリ青山から集金せなあかな・・・」

社会的制裁を受け、数週間後に青山に待ち構えるものは・・・

「言葉と言つものには責任がある・・・青山・・・法廷で語つた言葉・・・しっかり守れや・・・もう・・・お前はこちら側の人間ではないのだから・・・ニヤリ・・・」

o

青山の自供はとても今後の流れに重要なポイントだった

中で全てを話してくれないとこのプランは完了しないと言っのが京介のプランの流れ

裁判へ向けて色々な手段を取っていた

青山は罪を認め、自分の罪状が軽くなる事を意識し複数の人間の名を唄った

それに伴い、警察は水を得た魚のように動き数名の逮捕者が出た

逮捕に至った人間は、部品の卸業者と辻谷一派の使いパシリであった

「辻谷の舎弟どもは頭は悪いが親を売るような真似は絶対にしない・

・だが何かを仕掛ける可能性がある・・・」

頭の片隅に阿吽だけが残っていた

裁判当日

青山は出来レースとも知らずに執行猶予の判決に涙し喜んでいた

弁護士に感謝し、検察官に一礼をしたと聞いた

中で抜かれた牙を今後どのように修復するのか・・・

それとも改心し、カタギの世界へ戻るのか・・・

色々と考えている事だろう・・・

だが・・・そんな青山の意思はどつでも良かった

何故ならば、それすら京介は読んでいるからだった

「同じ経験をしてこそ、分かることがある・・・もっとも青山はワシに比べると根性が足りん・・・どちらを選ぼうがお前に用意されている道は処刑のみ・・・」

青山が釈放になってからも警察の勢いは留まることはなかった

芋ズル式に挙げられる事件、続出する逮捕者・

情報操作によりある程度の防波堤を組んではいたが、危ないものがあつた

「おしゃべりが過ぎたようやな・・・青山・・・」

実際、辻谷部隊がどんどん捕獲され始めると・・・事態は急変しはじめた・・・。

青山に辻谷からの脅迫が入ったようだった・・・

その情報は弁護士から流れてきた

「天国にあなた」 (京着)

『なんや?』

『高橋さん、弁護士の朝田です。青山さん見えまして、しばらくの間潜る、殺される可能性がある・・・と・・・』

弁護士には偽名を伝えている)「追求」8 参照)

「まあ・・・普通やろな・・・」

『ほう・・・でっ?』

『哀川さんと言う方と連絡をしたいと言っていましたかご存知ですか?』

『ええ、知ってますがな・・・男前で知的な奴ですわ(笑)』

『連絡先を教えるから連絡して欲しいとのことでした、それに対しては即答せず番号だけ預かりましたが・・・』

『連絡先はワシの方でも分かる、青山の意思は必ず伝える、その前に青山にどこに潜伏しているか、するのか、を聞き出しておいでくださいな』

『はあ・・・』

『恐らく金の話やと思うんですわ、逃走や潜りには金が必要や・・・恐らくパクられる前の仲間でしょう・・・振込では足が着く、故に会って話をせなあかんと言う事ですわ』

『分かりました、では、金の話には触れずに、青山さんの元へその方が行くと言う形で伝えておきましょうか』

『指示は「こちらです、勝手な事をするな」』

『・・・はい・・・』

「ピッ」

電話を切った

・
・
・
・

・
数日後

警察の動きは失速し始めた、これから逮捕者の尋問が始まる

その中でもそれぞれがどんな役目をして誰が指示をだし

何処から物が出ているか？また誰が作っているか？

こう言う構図で進むだろうと予測した・・・

辻谷の描く絵図が捕まった舎弟達が行う・・・

親父を守る為ならば誰が犠牲にあっても、死んでしまっても構わない・・・

奴等の思考はこつであるう・・・

「ワシの絵図と辻谷の絵図の騙し合いになりそうやな・・・」

・
・
・

それから数日後、急に警察の動きが激化し始めた

黒田の情報門に警察の情報が飛び込んできた・・・

『京介さん！えらい事になりましたで！！』

血相を変えた黒田が京介の元に来た

『どないしたん？』

『有本さんの自宅にガサが入りました』

『何！、でっ有本さんは？』

『たまたま外出していたようで難は逃れたようですが・完全に指名手配らしいですわ』

『そうか・・・』

「何故・・・ワシに連絡してこない・・・被害を広げない為か・・・それとも何か考えての事か・・・」

『青山ですかね・・・それとも舎弟どもですかね・・・』

『分からん・・・恐らく舎弟共が辻谷の絵図を実行したんやろ・・・若

しくは青山が逃れる為に唄ったのかもしれん・・・」

続いて翌日早朝に、有本の女の家、他人名義で所有していた隠れ家までガサ入れが行われた

「三ヶ所のガサは尋常じゃない・・・警察の家宅捜査は裁判所の許可がないと出来ない・・・つまり・・・確固たる革新と完全なる逮捕できると思われる立証に自信があったと言う事になる・・・」

「・・・辻谷か青山か知らんが・・・一枚食わされたな・・・その絵
図・・・反対に地獄にしてやる・・・」

「天国にあなた」

京介の携帯が鳴った、着信は有本からだった

『大丈夫ですか!』

京介はまずはそれから確認した

『えらい事なつてきたで・・・辻谷部隊も三分の二がパクられた・・・うちにもガサ入れや・・・どないなつとるんや・・・』

「辻谷部隊三分の二逮捕・・・青山や・・・アイツが絵を描いてるちゆうことか・・・？」

『青山かもしれませんな・・・アイツ・・・自分の刑を軽くする為にうたったんですわ・・・逮捕連中の事に関してはですね・・・ガサはその後かもしれません・・・』

『その後？』

『青山が唄った証言に肉付けをした可能性があります・・・そして黒幕を有本さんであると・・・』

『辻谷か・・・？』

『他に誰がいてますの・・・』

『やりかねんな・・・あいつなら・・・お前は大丈夫なんか？』

『ワシは万が一に備えて、既に全てを違う場所に移してましたので・
・足は着いていません・・・無論ですが多少の余波は出ているよう
すがね・・・』

『実はな辻谷からさっき連絡があつてな、奴も逃げ回ってるらしい
わ・・・これは・・・大事件になるで・・・』

「本当なのか・・・では・・・やはり青山が仕掛けたと言っのか・・・？」

『・・・まあ・・・仕方ないでしょうね・・・青山捕まえて吐かせましようか？』

『こっちはそれどころじゃうねん・・・青山の始末はお前に任せる・・・それより先にこっちに協力してくれんか？』

『ええ・・・勿論ですとも・・・ニヤリ』

『今、麻布十番におるんや、来てくれへんか？』

『分かりました・・調度・・関東に居てますのですぐ行きますわ』

『助かった・・頼むな』

直ぐに有本の潜伏先へと向かった

「・・・これは罠か・・・いや・・・有本がワシを嵌めるとは思えん・・・

」

色々な事が頭を駆け巡った・・・

有本の声色、心理的表現法・・・どれを取っても違和感には繋がらなかつた・・・

「・・・まあ・・・そこでもしワシもパクられるとしたら・・・それはそれじゃあないな・・・」

麻布十番に到着・

有本に正確な場所を聞き、隠れ家へと向かった

マンションの一室・

オートロック等のセキュリティが施されている・

入り口、通路、エレベーターなどは全て監視カメラが作動している
だろう……

まともに行つたんでは、飛んで火に居る夏の虫……となり得る……

有本は指名手配者、少しでの接触でもそれが致命傷ともなり得る……

京介は軽く変装を施し、入り口のインターホンを呼んだ

「プー・・・プー・・・」

『おつ来たか』

『「高橋」です』

北海道で付けられた偽名を名乗った

『一人か？』

『はい』

『今、開けるわ』

「ジューツ」

入り口の開閉式ドアが鍵が開いた・

京介は一度振り返り背後を確認した

「・・・」

ドアを開け中に入り鍵が閉まるのを確認した

京介の手元には「アイスピック」が持たれていた

万が一、有本が自分を嵌めるとしたら、刺し違えてでも逃げる必要がある・・・

警察が居た場合は・・・凶器準備として取り扱われる・・・

「まあ・・・殺人よりはマシやる・・・」

エレベーターを降りた

「ピンポン」

「ガチャ」

細い隙間から覗くように有本の目が見えた

『今開ける入れ』

『はい』

有本は本当に一人で潜伏していた・

正直、心なしかホツとした

『危ないところよう来てくれたわ、ありがとうな』

『何を言ってますの(笑)・・・ワシらは師弟関係ですよん』

『そやな・・・そやな・・・』

『前に一度、命救って貰ってますしね・・・これぐらいは』

『義理堅いやっちゃんお前（笑）』

有本は本当に嬉しそうな顔をしていた

『ところで・・・この場所は辻谷さんは知っています？』

『何度か来た事あるな・・・』

『ほな・・・ここも時間の問題でしょう・・・』

『何でや?』

『ガサ入れ何で他人名義のどこまでいかれ取るんですか・・・よく考えるべきです』

『そこまで・・・分かれておるんか?』

『こちらで入れた弁護士の話によると・・・青山が全貌を話して保釈にたどり着いたようです・・・』

『あのガキヤ・・・絶対に殺す・・・』

『取りあえず辻谷さんに連絡し今の状況を知らせてください・・・そしてこの携帯の番号は絶対に教えない事・・・それがワシが出来る最大の守りに繋がりますんで』

新たなる携帯電話を差し出した

1513

『守じ?』

『いずれ捜査は名前が上がっている以上・・・最後は辻谷さんまでいく可能性は無きにしても非ず』

『そつちな』

『もし辻谷さんが逮捕になれば必ず有本さんのせいにして出てきます……』

『そりゃ無いやろ……』

『では辻谷さんの組織の最高幹部……言えますか？……彼は責任は擦り付けます……絶対に……』

『まあ・・・分かったわ・・・言つとおりにするわ・・・』

『必ず・・・ワシが守ります・・・心配要りません・・・』

京介はこの段階で、辻谷の用意周到な絵図を読み切れていなかった

o

有本はその後、京介と話し合い相手の状態を知るためにも自分のためにも辻谷に連絡をすることにした

電話は指示通り旧電（辻谷の知る番号）から連絡を入れた

それを少し離れたところで京介は煙草を吸いながら眺めていた

有本の話によると辻谷は半切れ状態だった

自分の身内が捕まり始め、自分へも矛先が向いている事に恐怖感があるようだった

辻谷は有本と協力し合いながら警察から逃げ延びると言う事を提案

してきていた

「こういう時こそ連携が大事だ、ワシらが力を合わせればこれもど
うにか出来る、金の事は心配ない」

』と、言う事や哀川・・・』

「まるで、政治家や警察が問題を起こし記者会見で幼稚な言い訳を
並べているようだな・・・」

』そつですか・・・』

『何にせよ、辻谷の動向も気になる、一度会ってくるわ』

『・・・』

『…っしっ細しっ』

『辞めるべきですね・・・それは罠です』

『罠？』

『辻谷は有本社長をだしに使い、警察へ突き出しますね』

『お前・・・疑いすぎちゃって・・・』

『いや・・・違いますよ・・・辻谷はとても用心深い男です・・・こんな状況下の中で会うなどとは絶対に考えるはずがない・・・奴には狙いがあるんですよ・・・』

『狙い？』

『落とし所ですわ・・・』

『何に対してや？』

『警察ですがな、奴等にもメンツ言うもんがあるんです、一度大きく動いたら何もありませんでしたはすまんのですよ、辻谷、有本、どちらかは必ず逮捕するまではですね』

『・・・』

『取りあえず、こちらが準備した場所にヤサ（隠れ家）を変えましょ』

『・・・ここでは不味いと言う事なんだな』

『ええ、私的には辻谷も敵として見るべきと判断しています』

『考え過ぎやと思うがな・・・』

『まあ、どちらにせよ移動はしてもらいます、ここでもし警察が踏み込んで来たら、有本社長だけでなくワシまでアウトですからね・・・障害は全て排除しておくのが私のやり方ですので』

『一理あるな、分かった』

直ぐに必要な物だけを持ち、二人は部屋を出た

京介は移動している最中、その他に話した内容を聞いた

『ほう・・・現在位置を聞いてきましたか』

『そうや、そこにおるんやろ？ってな感じにな』

『それでどう答えんでっか？』

『そうや。とだけな』

『実に簡単な手口ですな（失笑）、まあそれだけ彼も焦りがると言う事でしょうな』

『・・・』

有本は首を傾げていた・

長い付き合い（辻谷と有本）の中でこんな場面は一度もない・・・

辻谷とて修羅場は何度も越えているのが実情、こういう時こそ辻谷の考えは正しいものである

そう考えていたのだろう・・・

プラン進行とは違う枝分かれに進んでいる出来事が京介には今一つ腑に落ちない所があった

青山の自供で有本まで捜査のメスが入り込むのは予想外であった・

これは絶対に新たなる歯車が追加されたと・・そう感じていた

翌日、有本と京介は新たなる隠れ家に居た、すると有本の携帯が鳴った

着信は「辻谷」と表示されていた

『END』

『いや、出ないください、一度外に出て場所を変えてこちらから連絡をする方がいいです』

『何でそない面倒な事を？』

『GPSですわ、もし着信をそこで取ると、いずれここも警察にバレてしまいます』

『・・・分かった』

『これを使ってください』

京介は原付バイクの鍵を渡した

『なんやこれ？』

『原付バイクですわ、少し離れた場所で掛けなおしてください、そして終わったら速攻戻ってきてください』

『分かった』

有本は指示通り行動した・

「プルルル・・・」

『ワシや電話もらったのう、悪いなシャワー浴びったわ』

『電話に出えへんから心配したで、今は例の隠れ家かいな？』

『そつち』

『今からそつちに行くさかい待ってな』

『・・・分かった・・・』

電話が終わると有本は急いで戻ってきた

『あの部屋に今向かってるらしいわ』

『彼がですか？』

『他に誰がおんねん』

『向かっているのは違う連中かもしれないよ・・・』

『どついつの意味や』

『何れにせよ、ワシが見てきます、社長はここから一歩も出んでく
ださい』

『・・・分かった・・・』

『それと、電話は一切取らない事です』

『分かった』

京介は有本と別れ例の隠れ家付近をリサーチしに行った

「天国に貴方々
（京着）」

『どづした？』

『お疲れ様です、黒田です動きがありました』

『姉さん（有本の女）ここにまたガサが入りました』

『またか？』

『ええ・・相当な人数でしたよ』

有本の女の住まい近辺で張り込みをさせていた黒田からの現場報告
だった

『有本のガラを何としても抑えようと言ったことやな・・・』

『有本さんは大丈夫なんですか？』

『大丈夫や場所移動してもらったでな』

『なら安心ですね』

『後から指示を出す、引き続き監視を頼む』

『ブ・ラジャー』

「ピッ」

「姉さんの所に2度目のガサ・・・あり得るな・・・」

「警察の本気度が現れている・・・やはり警察を舐めてかかると痛い目を見る事になりそうや・・・」

麻布十番の隠れ家が近づいてきたときに京介の予測が的中した光景が映った

マンションの下には数台の覆面パトカーとパトカーが止められ大勢

の警察が居た

京介は身を隠し現場を監視した

既に部屋には入ったらしく段ボールが数個運び出されていた

ものけの空の部屋に警察の方も困惑しているようだった

姉さんの部屋と同時刻でのガサ入れ・

警察が独自の調べでここまで辿り着くとは考えきれない・・・

辻谷の電話は有本の所在確認だったんや・・・

奴は有本を警察に売ったと判断して間違いない・・

有本の悲しむ顔を目に浮かんだ・・

京介は現場を離れ、有本に渡した携帯へ電話を入れた

すると女から電話が入ったと言っていた

電話には出なかったが留守電が入っているようだと言っていた

だが、こうなるとその留守電を聞くのすら困難な事である

京介が部屋に戻るまで待つてもらおう事にした

部屋に戻り、麻布十番、姉さんの部屋へガサ入れが行われたことを伝えた

『ワシが留守電聞いて録音してきますわ、それとこの電話はその後抹消します』

『そしたら、恵（女）にどうやって連絡付けたらええねん』

『何とかしますさかい、言つとおりにしてください』

『分かった・・・しかし・・・辻谷め・・・ワシを売りやがるとは・・・』

怒りで煮えくり返っているようだった

『取りあえず行ってきます』

京介は有本の携帯を持ちバイクで移動した

留守電を確認すると、涙を堪えながら有本の名を呼ぶ姉さんの声・・・

話の流れ的に、有本が今回の事件の黒幕と言う感じに警察は捉え、身柄確保の為に家宅捜査を行ったと言う事だった

「姉さんの家まで情報として流すとは・・・辻谷も本気と言う事やな」

苦しい時こそ耐えるのだ・・・

楽な道を進めばそこには大きな落とし穴が仕掛けられている・・・

1540

考える・・・必ず・・・隙間はある・・・

部屋に戻り、ボイスレコーダーに入れた留守電を有本に聞かせた

涙声を聞き、有本は居ても立ってもいられない表情になっていた

『クソッ・・・辻谷め・・・どうにかして恵と連絡付けれるように出来んか？』

『出来ますとも・・・ただし、絶対に裏切らん事が条件です』

『裏切る訳ないやろ』

『これは、貴方の教えです。人を信じるなど・・・だから約束して欲しいんです』

『・・・約束する』

京介は奈美（東京在中、関西の女）へ連絡を取った

奈美に飛ばし（他人名義の携帯電話）を2台預ける、「飛ばし？」から姉さんへで連絡し場所指定で呼び出す

その際に、警察の尾行があるかもしれないので、何度も乗り継ぎを行わせ他県で出る

指定場所にはある仕掛けをしており、その手順を熟すと「飛ばし2」が姉さんに渡ると言うものだった

姉さんは、奈美の言葉を信じ京介の思惑通り動いた

そして「飛ばし2」を手にいれたら一番最初に架ける番号が知らせてあった

「プルルル・・・」

『あの・・・もしもし・・・』

『姉さんでっか？哀川です』

『哀川・・・あなた無事なん？』

『ええ・・・まあ・・・何とか・・・』

『有本が・・・』

『知ってます、姉さん、今後その電話からワシに連絡ください、それと・・・有本さんは無事です。ワシの方でかくまっています』

『今、そこにおるん？』

『はい・・・代わりますわ・・・』

有本は恵に謝っていた・・

「恐い思いをさせてすまない・・」と・・

そんな姿を見て京介は羨ましさ感じた・・

「ワシは犠牲にしてしまった女にあんな風に泣きながら謝ったりなど出来なかった・・」

年齢なのか・・・性格なのか・・・

相手の言葉すら聞くことがなかった・・・

もしかしたら、あの様に泣いてくれてた人もいたのかもしれないな・

見た事のない有本の姿に自分を照らし合わせていた

「まあ・・・終わってしまったことは変えようがないな・・・」

電話が終わると有本の顔には少しの安堵を感じさせた

自分も恵の声を聞き、安心をしたのだろう・・・

『電話はなるべく控えてください・・・万が一が有ります』

『分かった』

可哀想だが、全部を守るにはある程度の制限化の中で過して貰うしかない・・・

それを有本は理解してくれいた

『有本さん・必ず貴方を逃がします・そして青山、辻谷への報復は私が降します』

『まさか・最初からお前が描いた絵図と言う事やないやろな・』

『まさか・そうだとしたら金と時間が掛かり過ぎます・ただ恩師を守るのは舎弟の勤めです・それだけですわ（笑）』

『そ・・そうか・頼むな・』

京介は部屋を出た

・ ・ ・ ・

その後、警察の天下りからの情報によると、辻谷一派の逮捕された連中が「この事件の黒幕は有本である」と証言している事が分かった

辻谷の指示で舎弟共はそう証言しているのであろう・・・

「実に忠実な犬どもだ・・・」

黒田と打ち合わせを始めた

『辻谷の情報門を探れ、どんな小さなことでも良い』

『はい・・・でも難しいですね・・・』

『出来る限りや、どうにもならない時は・・・こちらから仕掛けるまでだ』

『・・・ついにファイナルですか・・・』

『アホ・・・ここからが正念場や・・・下手したら殺されるぞ(笑)』

『殺される・・・もしそうなりそうな時は?』

『道づねぢや・・・ニヤリ』

「どつせ守るものも捨てるものもない・・・」

その後、情報の網を張り巡らしたが中々尻尾を掴むことが出来なかつた

「こうなったら・・・一つ仕掛けてみるか・・・」

「有本と同じ思いをしてもらおうやないか・・・辻谷・・・ニヤリ」

京介は辻谷自身ではなく、辻谷の息の掛かった女共の部屋に警察を動かした

勿論、そこには有本は居ない・・・女たちも全員が有本を知る訳ではない・・・

ガサ入れとまでは行かないが、捜査協力として任意同行を複数の間が受けた

直接的ではないこの攻めは精神的に焦りを呼ぶ・・・

逃げ場をどんどん縮小させ動きを封じ込める・・・

この二つが狙いだった・・

「動きが鈍くなればなるほど見えてくる・・お前は既にこちらの術中に嵌っているんだ・・辻谷・・」

それと同時に弁護士には青山と会う約束を進行させていた

「プルルル」

『弁護士の清水です』

『どうも、どうですか？』

『青山さんと会う約束が出来ました』

『ほう・・・そうですね・・・で・・・何時、何処ですかね？』

・
・
・

完全処刑射程距離に青山が入った・・・

「口は災いの元と言う事を教えてやらなあかな・・・」

o

色々な歯車が揃い回り始めた・・

最初の予定ではここまで危険なものになるとは正直思っ
てはいなかったが

ここまで来てしまえば後戻りはできない・・

最終最後まで突き進むのが一番安全とも言える・・

そこには普通では考え付かない道筋を考えないといけない

青山には本当の意味で「後悔」と言うものを教えてやる、二度と刃
向かえない様に精神に深く爪痕を残してやる

辻谷は優位な立場に居ると錯覚させながら鉄槌を降す・

こちら側の問題は「有本」だ、有本が辻谷や警察に見つかる訳には
いかない・

そこある意味とは、有本の逮捕で出る余波ではない・

有本が逮捕になる＝辻谷の思惑通りに全てが進む、これを阻止した
いのだ

「お前が全てと思うなよ・・本当の策士というものを教えてやる・

」

黒田の監視の元で有本の保護を実行する、生活に必要な物の購入な
どは全て黒田に運ばせることにした

「とにかく、今は外に出してはダメだ・・・」

相手は辻谷と警察・・・

辻谷一派は同じムジナ、仮に揉め事に発展したとしても対処のしようがある、だが、警察は別だ

法律と国家権力の制圧がある、これを振りかざされると、こちらでは「出来ない事」が増えてくる・・・

何にせよ、有本を差し出すわけにはいかない・・・

これが京介の考えであった

まずは、飛び火の根源である青山に組織とは何たるものか、男はどうあるべきかを教えてやらなければならない

「青山・・・お前には恐怖を教えてやる・・・死ぬまで脅えて眠らなければいけない程のな・・・」

その時、ふと辻谷の言っていた言葉が頭に浮かんだ・・・

「人間は死んだらホンマに天国に行けるんや・・・生きている間は・・・地獄と思え・・・」

「フン・・・それはお前が言う言葉ではない・・・お前にその地獄とやらをお見舞いしてやる・・・」

青山は弁護士にこう言っていた

「哀川がいれば何とかしてくれる・・・あいつは俺の舎弟だから・・・」

「ワシがアイツの舎弟？いつ・・・盃を交わしたかのう・・・（笑）」

弁護士には、青山と指定の場所で待つように、後から「哀川 京介」を連れてそちらに行くと伝えた

指定の場所とは・・・鉄板焼きのステーキ店だ

青山の潜伏する地域を調べ上げ、京介が予約を入れていた

「青山、お前は肉が大好きやったよな・・・これが最後の晩餐になる・・・
・楽しみにしておけ」

待ち合わせの日、予約した店へと向かった

行く途中考えた・・・

青山

は今後もどうにか上手く立ち回り、今までと変わらない立場、変わ
りない収入を望んでいるのだろう・・・

万が一、辻谷側から通達が出たとしても、哀川 京介と組み裏社会
で生きていく・・・そう思っているのではないか・・・

それと、もう一つ思っているのは、出所したばかりの自分に今日の
所は責任追及などあり得ない・・・とだ

当然、責任追及などしない・・・

そこに待つものは責任と言うほど軽いものではない・・・用意されて
いるのは鉄槌のみだからだ・・・

「見誤るなよ・・・青山、ワシはお前が扱えるほど軟弱で優しい人間
ではない・・・」

鉄板焼き屋の前に着くと店内からは青山の大きな声が聞こえてきた

「酒を飲むと気持ちが大きくなり大威張りする癖はなおってないよ
うだな・・現在の自分の立場を理解していないからこそ、そう振舞
うのだろうか・・・」

店に入ると予約席へ案内された

予約した部屋は個室、何人たりも邪魔はさせないように・・目撃者
は少しでも少ない方が良好とはんだんしてのことだった

『お連れ様はもうお着きです』

『そつか』

部屋の前まで行くと店員はバックルームへと戻った

部屋の中からは声が聞こえてきた

『そろそろ哀川さんが見える時間です、お酒は控えたほうが・・・』

弁護士は浴びるように酒を飲む青山に酒を控えるように促していた

『コラ・・弁護士、何でワシがあんなガキに気を使わなあかんのや？来て当たり前や！』

「・・・なるほどね・・・そう言う考えか・・・その意地最後まで通せや・・・」

静かに襖を開けた・・・

「スーッ・・・」

襖を背に青山は弁護士に説教を繰り返したままであった・

京介の姿に気付くこともなく、悠長な持論を繰り返す姿は実に愚かであった

弁護士は下を俯き、「すみません」と連呼しながら開いた襖に視線をよこし、一瞬で固まった・

『追求』 完結

陽気に宴を楽しんでる青山・・・

何勘違いをしているのであろう・・・

肉を頬張りワインを片手に大威張り・・・

「実に滑稽で哀れな男だ・・・」

責任を取れずに他者を売り・・・

自由の身になり、尚且つ自分だけは前のように羽振りの良い生活をしようと思論む考えは許すわけにはいかない・・・

『高橋さん……』

弁護士は京介の偽名を呟いた

『ん？高橋？』

青山が振り返ろうとした瞬間……

京介は青山の少ない髪を掴み鉄板へ押し付けた

『ギヤ—!—!』

その声は室内・・・いや店内にも響き渡った・・・

数秒で鉄板から解放し声を掛けた・・・

『おい……何調子いといとんねん……』

『うわあああ……』

青山は鉄板に押し付けられた顔を両手で覆っていた

『その手……邪魔や』

テーブルに置かれていた赤ワインのボトルを持ち青山の両手を強打した

「バリーーン」

『うわぁぁぁー！』

赤ワインは青山の全身にかかり、飛び跳ねたワインが鉄板の上でジ

ユウジユウ音を立てて蒸発していた

弁護士は圧倒されつつも後ずさりしながら言った

『たたた・・・高橋さん・・・ちちち・・・ちりすぎですよ・・・』

『フシが・・・哀川や・・・ニヤシ』

弁護士絶句

青山は怒りに震え吠え始めた

『哀川！この野郎・誰に向かってやっ……』

「バキイ！」

青山の顔面には京介の裏拳が入った

言いたいことを全て言わさない・・・

これは人間にとって精神的ストレスと強制的な威圧に繋がる・・・

『おい、誰に向かって言うどんねん・・・・・・・・』

更に青山が言おうとしたセリフを言いかえした

髪を掴み・

『己・・・中で唄ったやろ？辻谷だけの事ならまだしもその一連の絡み、「有本」やワシの名前まで言うとうやないけ・・・コラ・・・』

「バガン！」

そのまま熱く焼かれる鉄板へと顔を強打させた

『すんません！すんません！調べがきつくて……つい……』

1579

青山の態度が急変した……

これは辻谷の差し金だ……そう感じていた

『ほうう……あの地域の警察は緩い方や……止める事が出来たはずやな……』

『……いや……厳しかったです……』

『ワシはパクられた時、中で誰一人唄わんかったで……お前を含め 辻谷、有本、鈴木、全員守り 一人で被ってきたんやけどのう……』

年下のワシに出来て……お前に出来ないワケないやんなあ？

ワシはお前より格下扱いをされとるな？．．．ならば．．．器の大きい
お前に出来て当たり前や』

『そんな．．．でも．．．ホンマに厳しくて．．．』

目の前には熱い鉄板がじゅっじゅっとうと音を立てていた．．．

いらなく反抗するとまた鉄板に押し付けられる．．．

そういつた恐怖感が青山を襲っていた

無論、いつでも青山が怯えた状態にいる訳がない……

隙を見計らい反撃に出てくる可能性もあると予測をしていた・

『おい……何故唄った……』

『弁護士が……』

『弁護士が中で唄ったんか？しゃべったのはお前やる、どんな情況でも唄った本人が悪いんや……ケジメ……大事やでえ……』

『でも、あの状況じゃどうやったって無理や！』

『ほう……それで良いわけね？後悔しなや……』

『いや……そう言う訳じゃないねんけど……』

『青山さん……人のせいにしたら……アカンやろ……己の言葉には責任ちゆうもんがあるんや……』

『……はい……』

青山はしおらしくなった・・・

恐らく様子を見ているのだろう・・・

少しの安堵を与えてやることにした

『まあ　せつかくの鉄板屋や出所祝いを兼ねて食事でもするか・・・
なあ・・・青山さん』

『
・
・
・
』

「ドカッ」

青山のすぐ隣に京介は座った

「ピンポーン」

テーブルの呼び鈴を呼び、肉とワインを追加をした

『青山さん、今日はぎょうさん食べて飲みなはれ・・・』

『はい・・・』

「失礼します・・・」

「ガラッ・・・」

「！！！！」

鉄板屋の従業員が品を持って来ると青山の姿を見てぎょつとしていた

顔を鉄板に押し付けられた事で赤くなり、Yシャツがワインで赤く染まる青山を見ていた

飛び散っているガラスの破片に慌てて視線を変え

『あ・・・あの危ないのでガラスの破片掃除しますね・・・』

従業員の声が震えていた

『ええって ええってそのままです』

『いや・・・でも・・・』

『そんな事よりワインを注いでくれるかい？』

『はい・・・』

『・・・彼はワイン好きでな・・・』

青山を指差した

従業員にワインを持たせた

『そのワイン頭からぶっかけて飲みたいそうや・・・やってくれるか』？

『いやあ・・・それはちょっとお・・・不味いですねえ・・・』

『何を言ってるんねん・・・お客様が喜ぶもてなし方を教えてんやないか・・・やれや・・・なあ・・・青山さんワイン好きでしょうっ?』

『・・・』

青山は拳を握り怒りに震えていた・

『しゃーないのう・・』

従業員の手からワインを奪い取った

『見とけ、こつちゃんねん』

「キュポン」

ワインのコルクを抜き

青山の脳天からワイン注いだ

「ドボドボ・・・」

体を硬直させながら怒りを抑える青山・・・

『ほら、美味しそうに飲んでるやないか、わかったやろ？ほな頼む』

わ・・・
』

ワインを従業員に手渡した

『む・・・無理です・・・』

『そうか・・・残念やね、青山さん・・・ジロリ』

覗き込むように青山の顔を見た

青山は口を一文字にし、目を合わさないようにしていた

『おい従業員』

『はい・・・』

『ここで見た事はワシらが帰るまで黙っときや・・・』

そう言い三万円渡した

『は・・・はい・・・』

店員は何も見なかった事になりその場から消えた

『弁護士、肉焼け』

『は・・・はい・・・』

弁護士は慌てるようにステーキ用の肉を鉄板に乗せた

「ジュジュュー・・・」

室内は肉の焼ける美味しそうな香りが漂ってきた

京介はその肉に敢えてフォークを突き刺し

鉄板に押し付け更に加熱・・・

肉汁が音を立てて出てきた

『青山さん……肉……美味しかったですか……』

鉄板だけを見ながら京介は聞いた

『・・・はい・・・美味しかったです・・・』

『そうか・・・ほな・・・おかわりしたらよろしいですわ・・・』

「カライン……ガバッ！」

フォークを放り投げ青山の頭を掴み鉄板へ押し付けた

『ギヤーン……』

o

第七章 真 公開処刑 『権化』

辻谷との電話を切った

そして京介はセカンドバックから現金を取り出した

『辻谷社長にこの金持って行け、今の話の流れ聞いてたやる？猿でも出来る仕事や』

「バサッ」

現金をテーブルの上に無造作に置いた（帯付5束）

吉田は直ぐに現金を手にした

『おい、お前ポケットにでも入れて持っていく気か？最初から金と分かってたやろが・・・この能無しが・・・』

『うるせえよ！俺のポケットには入るんだよ！！』

こつこつ馬鹿が使いだから武闘派の連中とは疲れるものだ・・・

常識的に考えて現金500を運ぶのにポケットに入れてとはあまりにも不用心すぎる・・・

『お前の頭は飾りか？』

『急いで出てきたから用意できなかっただけだ！』

『常識で考えろ、普通の金じゃないねんで……一枚でも欠けていたら……えらい事になんで……ええの？』

『内ポケットに入れば大丈夫だろ！』

『しゃーないのう……ほら、これに入れて持っていけ』

LVと書かれているブランドメーカーの手提げ袋を差し出した

『この袋ならブランド品を買ったんだ、と他の人間には映るやろ。故に大事そうに抱えてても不自然は無いと言うことだ・・分かったかハゲ』

『ハゲだあー？ハゲてねーぞー！』

『そんなのどうでもええやないかハゲ、これに入れてサッサと消えろ』

『テメエ・・・覚えてろよ・・・次会ったら殺すからな・・・』

『お前程度にやられるか！猿』

子供のような挑発だが、知能の低い人間にはこの子供のケンカのよ
うなものの方が伝わりやすい・・・

『今ただぞ、そうして居れるのもな！お前なんか辻谷社長にかか
れば一瞬だ』

『ほう・・・ハゲの癖におもしろい事言っちゃないか・・・それはどういう意味や?』

どうせ考えなしに言っているのではと思うたが、面白そうなので聞いてみた

『何れ分かるよ・・・ヘッヘッヘ・・・辻谷社長からの連絡を待ってる

』!

『あっそう・・・まあ・・・お前じゃ話にならんかな・・・』

『なんだと!』

吉田は大声を出した

『何や?』

『クッ・・』

吉田はドアに向かって歩いて行った

吉田が行動を起こさなかったのは・・

恐らく、辻谷から哀川と揉める事を禁じられていたのだろう・・・

「ガチャ・・・ボタン・・・」

直ぐに奈美に連絡を入れた

「プルルル・・・」

『もしまし・・・』

『今、男が降りた、男の名は「吉田」や、LVの袋を持った百姓丸出しの男だ・・・気づかれないように頼む』

『マジで（笑）あっ・・・来た来た（笑）かなり怖い顔してるけど・・・』

『挑発しておいたからな（笑）お前服装は？』

『ミニスカート』

『友達は来てるか？』

『うん、私入れて3人だよ』

『他二人にも指示だしておいたか？』

『勿論！1人はミニで1人はショートパンツ』

『よっしゃ 開始や！！』

最初に目を引く格好をさせておいたほうが変装した際に気づかれにくい・・・

脚にインパクトを与え、スカートからパンツに変えた時には別人を装う・・・

基本男など、顔より体のパーツを見るものだと言う所を利用した心

理作戦であつた

「あのハゲもまさか女複数で尾行されているとは思わんやろ・・・二
ヤリ・・・」

吉田は鼻息を荒くしながらホテルのロビーにいる人達に肩をぶつけ
ながら出口へと向かった

その姿は見るから「やくざ」そのものだった

ロビーで待機する、奈美と友人1

ホテルの外で電話をしながら待機する友人2

尾行開始された・・・

そして京介も変装をし尾行の尾行をし始めた

吉田は数分すると携帯を取り出し電話をし始めた

電話の内容は分からないが、相場的に現金を回収した報告であろうと感じた

随時、エリアが変わるたびに奈美から報告メールが来た

奈美にはすぐ後ろに居ると伝えずに、お前が見えるところに居るとだけ伝えていた

吉田は何度も関東をグルグル周りながらの移動していた

辻谷の指示で万が一の尾行を警戒しているのだろう・・・

「ブルブルブル・・・」

京介の携帯のバイブが鳴った

「辻谷・・・尾行の確認か・・・」

奈美のエリア報告で追跡は可能・・・

ここは静かな場所へ移動し電話に出た方が良い・・・そう判断した

「ピッ」

『お疲れ様です、銭はあの吉田とか言う猿に持たせましたが・・・』

『お前いつまで関東におるんや?』

『社長と連絡が取れたんでもう戻りますわ』

『・・・気をつけて帰りや・・・また連絡するわ・・・』

『ありがとうございます・・・』

「ミン」

用件はそれだけであった・

「これは何かあるな・・・恐らく帰るとは思っていないんやろ・・・」

万が一の為に一度チェックアウトするか、別の者の名前で部屋を取り直すかな・・・

一方は吉田はようやく目的地に向かい始めたようであった

何度も電話を繰り返しながら移動だったと報告があった

先程の辻谷からの電話もこれに関連するものであろうと感じた

奈美の報告によると、京介が滞在していたホテルの直ぐ近くのホテルに吉田は入っていた・・

「なるほど・・やるやんけ・・辻谷・・」

「プルルル・・」

奈美に電話を入れた

『もしもし・・・』

『そろそろお色直しをせなあかんやろ、取りあえず、友人1を先程のホテルのロビーに来るように言ってくれ』

『ええっ？何で？こちらでも色々と準備している・・・言つとおりにしてくれ』

『えー・・・』

奈美は超ふてくされていた・・・

『後でたっぷり可愛がってやるさかい・・・』

『約束だよ!』

『おお・・・任せてけ・・・』

『うん・・・』

『取りあえずお前は、吉田がその後ホテルから出て来るか出てこな

いか、もし出てきた際は袋を手に行っているかしていないか、そこを
確認しておいてくれ』

『分かった・・・一人じゃ少し恐いんだけど・・・』

『友人2と合流し、離れた場所で監視しておけ』

『はい』

「ピッ」

吉田の動向を見る為に、京介ガール隊は監視活動に入った

そして、友人1は京介の元へと向かった・・・

o

奈美から終始状況がメールにて送られてきた

吉田の行動記録の詳細はこうだった

目的地の前付近になるとキョロキョロし周りを確認、尾行がない事を確認するかのよう

そしてホテルに入る前に電話を誰かに掛けていたとの事だった

奈美に指示が送られた

「吉田がホテルに入ったら何階で降りるかチェック」

「大丈夫なの？」

「大丈夫や、取りあえず新規の客としてチェックインしろ、名前は適当な名で書くように」

「はい」

ホテルのロビーで電話をしている吉田を素通りし奈美はチェックインを始めた

これは一つのプランである

ホテルへの出入りを怪しまれぬようにするためである

万が一長期戦になった場合、ホテルの利用者でもない人間がそこに何度も訪れるのは不自然であると考えていた

「終わったよ」

奈美からメールが来た

「そのまま適当に誰かを待つふりをしながらロビーで茶でも飲め」

「はい」

「田舎者はどっしりしている？」（吉田）

「まだ電話中」

恐らく辻谷の指示が出ているのだろう・・・

このホテルはフェイクかもしれない・・・

だが、チェックインは無駄にはならない、他人名義しかも女であれば京介がそこを利用して発見しづらいであろうという風に考えていた

「田舎者がエレベーターに乗るとき、一緒に乗り何回を押すかをエックするんだ」

「出来るかな・・・」

「大丈夫や・・・でなければ何階ですかと聞けばいい」

「多分そうする（笑）」

「次の指示を待て」

「はい」

奈美の友人1が京介の潜伏先のホテルへ着いた

『あの・・・哀川さんですか？』

『奈美の・・・』

『はい』

『ここでは不味いから部屋に行こう・・・だが一緒ではなく別々に行く感じだ』

『そう・・・なんですか・・・』

『面倒かもしれないが・・・これもあんた等を守る為や理解してくれ』

『はい』

友人1は数分後、京介の指示通り一度8階まで行き、その後3階でおり、再度指定した階数へと行き部屋へ辿り着いた

「コンコン・・・」

「ガチャ・・・」

『面倒掛けて悪いな・・・』

『いえいえ』

それから現場での吉田の行動を聞くことにした

奈美から報告はあるのだが、細かい部分を聞き出すためであった

『君・・・名前は？』

『里恵です』

『では、里恵ちゃんあの田舎者の行動で変な事はなかったかな？』

『特にはないですけど・・・』

『些細な事でいい・・・何かないかな？』

『あつ・・・そういえば・・・途中何回か電話してた感じでしたよ。それとコンビニのWCに入って数分間入っていましたね・・・うーん・・・あつ・・・何も買わないで出てきましたね・・・そりてくらいかな・・・』

『そうか・・・』

WCで金の確認をしていたのだろうか・・・

その場で現金を数えるのが鉄則・・・受け取りの際吉田を挑発したのもここを疎かにさせるためでもあった

人間、人前で金を数えると言う事をあまりしたがらない・・・

大事な事だが、見た目を気にするのが人間である・・・

まして、あの馬鹿にされた状況下の中、そんな事はしたくない・・・そこを付いているプランであった

そして金への細工に気付くだろう・・・

500万円あるはずの金額が1万円少ない事を知る・・・

それを辻谷に報告するであろう・・・たかが一万円でガタガタ言う辻谷ではないが、

500枚数えると言う面倒な作業を何度も繰り返すと言う事と、一万程度であれば吉田がピンハネしても左程問われる問題でもないと言うところからのものである

ここから先の責任は金を運ぶ吉田にある・・・

そう辻谷に告げた言葉がここに効いてくる・・・

一種の吉田への嫌がらせと時間稼ぎであった

恐らく吉田がホテルに入らずに電話をしていたのはそこを辻谷に報告していたのだろうと考えた・・・

「貴方私の元から突然消えたりしないでね（京介メール着信音）」

奈美からメールが来た

「あの田舎者、私の脚をジロジロ見てるキモイ！」

「見せ付けてやれ、お前の脚は最高だ！」

「うーん・・・複雑なんですけど・・・今エレベーターです回数は7階です」

「ご苦労、後は部屋で待機」

「私の部屋は802よ」*、*」

「指示を待て」

「こうして」辻谷 吉田「が滞在しているであろう階を特定した

『さて、次のプランや・・里恵ちゃん変装タイムやな』

『はい、着替えてすぐ奈美の所に向かいますね』

『すぐじゃなくてもいい・取りあえず目の前で着替えてくれるかい?』

『えっ? 二二二ですか?』

『そう・・・お小遣いやるからさ・・・ニヤリ』

『えーでもお・・・恥ずかしいですよ』

『ホラっ』

現金五万程度をテーブルの上に置いた

『えーマジですかあ（笑）奈美ちゃんにバレたら大変ですよ（笑）』

『大丈夫やって・・・ニヤリ』

『うーん・・・奈美ちゃんごめん（笑）』

里恵は現金を鞆にしまい込んだ

「女の友情とは安いものだ・・・」

『下半身から行くところか・・・』

『えーっ・・・はい・・・』

ショートパンツに手を掛け、尻を振り乱しながら着替え始めた・・・

次第に下着だけの姿となった

ブラ・パンツ・・・共に上下セット・・・色は・・・ピンクと黒のコンビ
ネーションの下着だった

「合格やな・・・下着をどんな時でも上下セットで装着しているのは
女の基本や・・・」

『里恵ちゃん、ゆっくり着替えてくれ・・・ニヤリ』

『もお・・・分かりました・・・でも・・・あんまり見ないでください恥ずかしいです・・・』

『里恵ちゃん・・・もう少しいちおいでや・・・ニヤリ』

『えっ・・・でもお・・・着替えしづらいし・・・』

『大丈夫やって・・・さあ・・・こっちおいでや・・・』

里恵は着替えるはずの服を持ち京介の前へと来て着替えを始めた

上着を着ようとし始めたときに言った

『ストップ!』

『えっ?』

里恵は下着姿のまま動きを止めた・

里恵に背後に近寄り・

ブラジャー越しに乳を揉みはじめた・

『ちよっとお!』哀川さん!ダメだってばあゝもつゝ』

『ええやないか・・・ニヤリ』

『奈美に言いますよ!』

そんな言葉をシカトし下半身へと手を伸ばした・・・

恥じらいからくるものだろう・・・クロツチは既に湿っぽくなっていた

『んじゅうん・・・』

クロツチの中心を縦に押し込むように線を描いた・・・

性的な秘密に現ナマ投入・・・

これは女の友情と金と性のテストであった・・・

人は口ほどに相手を思いやる事は出来ない・・・

・ 思考が現実的だと言われる女なら、この状況下とどう乗り越えるか

また、辻谷にも然りだが、金の力で人間はどこまでするのであろう
と言ったことであつた

嫌がりながらも感じる里恵・・・

時計を見ると里恵と合流してから15分・・・

「そろそろ現場に戻らせないと不味いな・・・」

辻谷と吉田が別々に行動を取るかもしれない・・・

「だが・・・今は辞められない(爆)」

そう思っていた

京介は財布を取り出し更に3万を出した

『里恵ちゃん、これあげるから・・・しゃぶって』

『えっ・・・それは本当に不味いですよ・・・』

『喧しい・・・はよしゃぶらんかい』

里恵の髪を掴みフェラを強要した

そして現金を握らせた

里恵は3万円を握りつぶしながら必死にしゃぶりついてきた・・・

次第に鼻息も荒くなり興奮し始めていた・・・

京介は時間の配分を計算した・・・

しゃぶらせてから5分経過・・・

「あまり時間がないな・・・」

「ズボッ」

里恵からブツを抜き取り背後に回った

体を抑えバックスタイルにさせ・

パンティを一気に足首まで下げ、両手で股間を広げてやった・

『いやん！ちよつとお！やだあ！やだあ！見ないでえー！』

『小遣い追加したるわ・・・』

『えっ？』

「ズコン！」

勿論お構い無しに・・・合体

色々考えながらピストンをしていると更に5分が過ぎていた・・・

「遊びはこの辺にしておくか・・・」

『………じゅぽじゅぽ………』

里恵のタイミングに合わせて、中にたっぷりと射精した・

『はあ、はあ・・・凄い・・・はあ・・・はあ・・・』

『ほら、はよ着替えて里恵の所に行くで・・・』

『えっ・・・あっ・・・はい・・・』

里恵はいきなり冷たい態度を取られ焦るようにティッシュで股間を拭こうとした

『あかん、そのままパンティーを穿け』

『ええ・・・汚れちゃう・・・』

『ええから・・・ニヤリ・・・』

プラスの小遣いを差し出した

『・・・』

里恵は現金を受け取りそのまま下着を身に着けた・・・

『うづーん・・・気持ち悪い・・・』

「ニヤリ・・・」

そして奈美にメール・・・

「今、里恵さんをそちらに向かわせている。お前はロビーの喫茶店かなんかで官能小説でも読みながら見張れ」

「えー・・・そんなの持って無いし（笑）・・・分かった見張りしてる」

里恵は股間から体液を垂れ流しながらパンティを穿き急いで着替えをした

ショートパンツからスーツへのチェンジ

髪型も変更させ眼鏡を掛けさせた（京介準備品）

直ぐにホテルへと向かわせた

すると急に里恵から電話が掛かってきた

『京介ちゃん、あのねあの田舎者と色黒のジジイが今降りてきたん

だけど・・・じじいだけ・・・」

「色黒のジジイ・・・辻谷や・・・」

『全部で何人いる？』

『二人だよ田舎者とジジイだけ』

『今、里恵さんがそちらに着く入れ替わりでお前も直ぐに変装しろ』

『はい。』

里恵はベストタイミングで到着した

里恵へ連絡・・・

『里恵ちゃん・・・どう垂れ流れてる?』

『股がヌルヌルして気持ち悪いですよ』(笑)』

『そうか・・・そのまま話を聞いてくれ・・・ホテルに着いたな?』

『目の前です・・・あっ・・・』

『どうした？』

『田舎者です・・・』

『二人やる？』

『はい』

『そのまま電話をしながら尾行してくれ・・・後から俺も合流する』

『一人でですか・・・少し怖い・・・』

『頼むわもう一回SEXしてやるから(笑)あとなんでも買ったるかな』

『本当！マジ頑張ります』

『ヨシ・・・行け！里恵！』

『はい！』

「何てちよろい女なんだ・・・」

更なる尾行が始まった・・・

o

『権化』 3

今後の尾行に人数が多いのは少し面倒である・・

奈美に言い、友人2を帰すように指示をした

『じつじつ』

『お前と里恵さんだけで十分や・・』

『でも・・』

『彼女にも一緒にへやに来るように言ってくれバイト代を渡す』

『えっ？バイト代？』

『当たり前やないか、お前の大事な友達の間をワシが買った形や』

『いいよ、そこまでしなくて・・・』

「里恵は体まで差し出したというのに・・・アホな奴・・・」

『お前の顔も立つやろし、なっ』

『・・・っ』

奈美と友人2はホテルへ向かった

里恵は股間を又メリを拭い去ることなく尾行を開始・

報告によると辻谷はタクシーに乗りどこかへ向かい始めたとの事だった

里恵は移動しての以降は不安で恐いとの事だった

『取りあえずタクシーに乗り行先だけを探るだけで良い、追いかける直ぐに後をワシが追うから安心しろ』

と電話で伝えた

里恵は「必ず来てくださいね」と言いタクシーに乗り込んだ・・・

奈美が部屋に到着し、友人2にバイト代を渡しさっさと消えてもらい・・・現状を伝えた

『里恵ちゃんヤバいじゃん』

『辻谷に接触させるわけではないから大丈夫あ、だが・・・折角辻谷を見つけたのにここで逃すわけにはいかないんや』

『そんなに重要な人なの？』

『重要や・・・』

『ワシは直ぐに里恵さんを追う、お前は場所が確定したら連絡するからそこに来い』

『何か恐くなってきた・・・』

『心配ないよ・・・お前達を危険な目には絶対に合わせないから安心しいや・・・ニコッ』

『う……うん……信用してるからね……』

『おう……』

交通費として奈美に現金を少し多めに渡し、直ぐにタクシーに乗り
里恵の行先を追った

「プルルル……」

『もしまし』

『待たせたな』

『どつやら麻布十番方面のようですよ』

「となると・・・いつもの寿司屋に確定やな・・・」

『恐らく寿司屋に入ると思っわ、近くに喫茶店あるやろ？そこで待つてくれるかい』

『分かりました』

数分後、里恵と合流・・・そして数分後、奈美到着・・・

『どしどしするの？』

『今考えている・・・』

この二人を寿司屋に導入するのは簡単だが・・・その後の行動で使えなくなる・・・

恐らく、この寿司屋の後は銀座へ行き酒を飲むのであろう

歳よりの行動パターンはワンパターン、大抵はいつも通りにいつもの店に行くのであろう

この業界には秘密が多い・・・

行く場所やそこに集まる客がとても関係する、そして店の対応が一番の重要な点である

辻谷を知り、会ってはいけない人間を把握していないといけない

急遽のバッティングの対応などが出来るのはいつも行く店なのである・・・

あって不味い客とは警察関連の人間・・・そして同業者が基本である

辻谷の場合は同業者は全く問題はないが、現状、有本の件がある以上派手な行動は気をつけないければならない・・・

『寿司を食べさせてやりたいところだが・・・今は我慢してくれ次回な・・・』

『うん・・・』

『行動は次や・・・取りあえずここで何か食べ』

『うん』

奈美はメニューを取り眺めていた

里恵は少し気まずそうに奈美と話をしながら時折京介を横目で見ていた・・・

『ねえ、哀川さんってカッコいいね・・・』

里恵が奈美に言った

『駄目だよ！私の京介ちゃんなんだから・・・』

少し顔を膨れさせながら会話をしていた

「ワシは誰のものでもない・・・」

そう思いながらブラックを飲みながら寿司屋の監視を続けた

・

・

・

寿司屋 滞在1時間半・・・

「長い夜になりそうやな・・・」

そつごうしている内に辻谷と吉田が店を出てきた

『行くぞ・・・』

『はい』

タクシーをつかまえ乗り込み走り出した

京介達も追うようにタクシーに乗り込んだ、方向的も銀座が濃厚である・・

恐らく行く場所はいつもクラブ・・

変装をしているとは言え、二人連れで新規の客としてあの店に行くのは不自然である

また、逆に目立ってしまう可能性がある・・

「さてどうするか・・」

そうこうする間に銀座のクラブ付近まで来ていた

『少しベタなプランではあるが・・次の指示はこつや』

『ええ・・大丈夫なの？』

『大丈夫や・・奴らは酔っ払いや・・いちいち人の顔など覚えておらんわ』

『何かあったら助けに来てくれんでしょっ？』

『あぁ、そっせ』

『分かった』

『これが最後や終わったら一人にはバイト代はずんでおくわ』

『何かワクワクしてきた』

里恵がそんな事を言ってきた

『里恵さん・・・君は良い素質があるよっやな・・・ニヤリ』

『私だってワクワクだもん！』

奈美が対抗していた

「金が貰えると言うところから来るワクワク感やろが・・・アホ」

『これを持って行け』

盗聴器を渡した

『これは？』

『盗聴器やお前らの危険を直ぐに察するようにワシが内容を聞いておく』

『分かった』

『くれぐれも現金投入には気をつける・・・』

『現金？』

『ああそつや、奴らは金もないくせに金をやるからと言い女を無理矢理抱き、金も払わないような連中や・・・』

狂言を吹き込んだ・・・実際は辻谷の方が大金持ちである（笑）

『最低だね』

『・・・』

・
里恵は金を受け取り抱かれたことを思い出したのだろう無言だった。

『よう、GO・・・』

『はい』

o

タクシーを降り、次なるプランを進行した 吉田が奈美の顔を覚えて
いる可能性がある・・・

正直そこはいがめない点ではあるが 脚しか見ていなかった・・・

酒を飲んでいるところから奈美に気付くことはない・・・

まして変装済である・・・

奈美と里恵の変装後はまるで別人の様である・・・

「まあ・・・イケるやる・・・」

辻谷、吉田が飲み屋の入るビルへ向かわせた・・・

これで最終局面への入り口のスタートになった

『すみませ〜ん』

女の声に振り向く、辻谷と吉田・・・

そこにはミニスカート・ショーパンツのGALのような女ではなく

少し落ち着いた大人な井出達の奈美と里恵の姿だった

吉田は奈美の顔や体をじろじろと眺めた

「まるで気付いていないな・・・女の体しか見てない馬鹿な証拠だ・・・」

1684

『何？お姉さん達どこの店？』

吉田はここぞとばかりに聞いてきた、その後ろで辻谷はニコニコしながら奈美たちを舐めまわすように見ていた

『えー働いてないですよ（笑）お店を探しているんですけど・・・知
っているかな？って』

『なんちゅう店や？』

辻谷が一步踏み出して奈美たちに話しかけてきた

『ルノワールって言う店なんですけど分かります？』

『分かるで、クラブやる』

『はい』

最初から辻谷の行く店を分かったうえで奈美たちは伝えている・・・

「この偶然を作られたものだど気付けるか？辻谷・・・ニヤリ」

人は「偶然」と言うものを「運命」と勘違いしたがるものだ・・・

偶然など他愛もないもの・・・大事なのは必然である・・・

『クラブに女の子二人が何の用なん？』

辻谷は特に疑っている節は無いように見えた

『評判のいい店なので視察に行こうかなって（笑）』

『働きたいんか？』

『うーん・・・見てからって思ってた・・・』

『ワシ等も今そこに行くところやねんけど一緒にどうや？』

その言葉に吉田が直ぐに反応した

『いいですね社長！』

ここで全部金を出させる為に指示しておいたことがある．．

「社長」と言う言葉に反応する事だった．．

この業界、「社長」と言うのは表向きな表現ではあるが．．

呼ばれて嫌なものではないものなのだ

『えっ！！社長さんなんですか凄いです！どおりで紳士的なはずですよ
ね』

『いやいや社長なんてのはあだ名みたいなものや（笑）ほな行くところ
か』

『でも・・・悪いですから・・・』

「敢えて一度引く、昭和世代にはこういう女の控えめさが効き目が
る・・・」

吉田は奈美と里恵に近づき腕を掴み

『社長がいろいろ言ってるんだから！さあさあ』

『いいですか？社長さん？』

『御嬢さん方が迷惑でなければね・・・二カッ』

『じゃあ・・・お願いします』

四人でエレベーターに乗った・・・

京介は店に入ることには出来ない・・・

辻谷の息の掛かった店、しかも何度か辻谷と来店したことがある

変装しているとは言え、このママは感が鋭い故、ばれる可能性が
ある・・・

そうでなくとも、一元さんは色々と聞かれ名刺の提示を求められる
のである

盗聴器とメールを使う展開で進めるしかなかった

『さて、ここまで来たら次のプランや・・・』

「プルルル・・・」

『お疲れ様です』

『黒ちゃん、関東に戻っておいでや』

『一人でですか？』

『有本さんはそのまま滞在してもらって、その代り姉さんと呼んでも良いと伝えてくれ・・・ただし三日間』

『三日間？と言つ事は三日後には何らかの問題が解決すると言つ事ですか？』

『解決はせえへんやろ・・・だが、有本さんの容疑は軽減できるやろ』

『そうですか・・・』

『姉さんと呼ぶならば以前のように数か所の場所を移動したうえで落ち合う事、またその費用は全部こちらで出すと伝える』

『分かりました、今本人に代わりますね』

『もしもし・・・有本だが』

『事を動かします、辻谷をぶっ潰します・・・その為には黒田が必要なんです・・・有本さん・・・協力願います』

『分かった、どんな協力をしたらいい？』

『取りあえず、その場に滞在してください・・・あと三日の辛抱です・・・その三日の間に姉さんをお呼んでも構いませんので』

『恵をお呼んでいんか？』

『ええ・・・一人じゃ辛いでしょうからね・・・その代り前回同様の移

動手段で来てもらうようにしてください』

『分かった』

『費用は黒田からもらってください』

『何から何まで悪いのう・・・』

『何を言っていますか・・・出来る事を出来るほづがする・・・これが真の友情ですわ』

『ありがとう・・・哀川』

『ほな、黒田に代わってもらえますか』

その後、黒田にプランの予定を伝えた・

『分かりました、直ぐに移動を始めます』

『頼む・・・』

「ピッ」

以前、京介が逮捕になった時に有本は体を張って守ってくれた・

額につけられた拳銃で全てが終わる・・・そう思っていた時に有本は救ってくれた・

その他にも、出てきて間もない京介に「ご苦労さん」と言い200万程の金を送金してくれていた

「有本さんを守りきるのがワシの役目や・・・」

恩を仇で返す事は決してしてはならない事である・・・

口先ばかりで何も出来ない馬鹿と偽善者が多いこの世の中・・・失われてはならないものだとは強く感じていた

黒田が合流してしまえば、京介ガールズ（奈美・里恵）の役目は終了である

それまでの間、少しでも情報を引き出す事が大事である・・・

奈美に指示を下した（メール）

奈美と里恵のプランはスタートした

店内に入ると直ぐにママらしき女が近寄りVIPルームへと通され
数名の女が席に着いた

その後、辻谷は友人と言う事で奈美と里恵を紹介した

勿論、名前は偽名で伝えるように指示している

奈美は「真希」

里恵は「さゆり」であった・・・

どうでも良い話だが、偽名にはこういう理由がある

当時、「後藤真希」と「杏さゆり」が大好きだったのだ・・・そう
言う事である（断言）

『どじやっ?』

辻谷は奈美と里恵に店の感想を聞いてきた

『素敵な店ですね』

『二人とも働きたいんやったら、ワシが言えば直ぐに雇ってもらえるで』

『本当ですか？』

『ああ、ここもワシの店みたいなもんやしな・・・』

『えー！凄いやー！』

『いやいや・・・』

『ところで・・・社長さんはどんな仕事をしてるんですか？』

『ワシか・・・まあ・・・世直し・・・ってとこやな・・・』

『世直し？何か秘密がありそうですね』

『まあまあ・・・大人の社会と言うものはワシのような人間も必要枠である・・・と言う事やな・・・』

『なんか・・・カッコいいですね』

『日が出れば・・・必ず影が出来る・・・それは社会でもあり・・・人間でもある・・・』

『難しいですね（苦笑）』

『まあ、時としては暴力も必要な時もある・・・』

『えっ・・・』

『この間も1人、しょうも無い関西のクソガキを言わしたところや
笑（』

『言わした？』

『社会の厳しさを体で教えてやったちゆうことや』

『体で？ホモですか？』

『ワツハツハ・・・痛めつけたと言う意味や・・・分からんか（笑）』

『もしかして・・・恐い関係の社長さん？』

『そんなことないで・・・ただ・・・人に寄っては天国も地獄も見せる
時もある・・・ちゆうことや』

『そうなんだ・・・いい子にしておかないと（笑）』

「ワツハツハ・・・」

盗聴器から聞こえる馬鹿な会話・・・

京介を舐め腐った見方をしているのがあからさまに分かった・・・

「有本に罪を擦り付け、ワシをコケにした代償は払ってもらおうで・・・」

「最後の晚餐を十分に楽しんでおくがいい・・・」

過去に処刑を行った、「鈴木」「青山」も最後の晩餐后、地獄を見ている・・・

辻本、吉田に用意された地獄・・・

最終決戦の終わりを意味する・・・

「長いプランやったな・・・」

そして次の指示メール

「辻谷の電話番号を聞き出せ」

複数携帯を所有する辻谷の新たな番号をGETする為である

『社長さんって本当に魅力的ですね！また一緒に飲みたいなあ〜』

『お嬢ちゃん・・・年寄りをからかうもんやないで（笑）それとも本気か？』

『ご迷惑ですよね・・・ごめんなさい聞けなかつた事にしてください・・・』

すると、吉田がごごぞとばかりに言った

『社長の番号は簡単に教える訳にはいかないんだ、その代り俺の番号を教えるよ俺は秘書みたいなものだから・・・良いですよ社長』

「実に頭の悪く品のない秘書だな・・・」

『そうやな・・・そうしておいてくれ』

『この方に電話したら社長さんと会えるんですね』

『まあ・・・ワシは仕事柄番号はあまり教えられへんのや堪忍な・・・』

『芸能人みたいですね』

『大きな声では言えないけど　うちの社長は雑誌の取材を受けたりするからね』

吉田は自慢げに言った

『ええっ！超有名人じゃないですか！』

『コラコラ吉田・・・口が過ぎるで（笑）』

「スクープ雑誌やるがボケ・・・」

宴は閉店まで続き店を出た後、奈美、里恵はお腹がすいたといい食事二人を付きあわせ

その後、後の期待を裏切るようにあっさり帰った

辻谷、吉田は突然の出会いに終始笑顔だった・

どこで何を考え、どのようにしたいのか？するのか？は分からなかったが

取りあえず、辻谷の金で奈美、里恵は美味しい酒を飲み、美味しいものを食べさせることに成功した（笑）

o

奈美、里恵の潜入で奴らがあまり警戒をしてないのが確認できた

何に対しての警戒かというと、警察に関してだ

有本の場合は発見されると身柄を拘束されるが、奴らはそんな状況ではないという余裕があのような行動を取るのである。

有本ととは天と地の位の差がある

有本に罪を被せ自分は上手い事切り抜けている・・・そう思っている
のである・・・

実際、辻谷のブレーンは警察内部にも居る、そして政治家のOBな
ども辻谷の恩恵を受けているものも多い

この男こそ黒幕であることを知りながらもそこに辿り着けない様になっている・・・

その分、青山、舎弟達、そして有本を出して、相手の面子を保つのである・・・

「そつは問屋が卸すと思うなよ・・・」

翌日・・・

黒田が関東入りをした

黒田は辻谷に面が割れていないのが強みである、勿論吉田にもである

そして何よりも忠実で度胸があるのでどうしても必要な人間であった

セキュリティティーさえしっかりしておけば黒田が危険な目にある恐れは少ない・・・

仮に黒田に危険が及んだとしても、状況的に黒田へ刺客を向けられる状況ではなくなっている・・・

と言っ予定でいた・・・

黒田と合流し辻谷の潜伏しているホテルの監視を行った・・・

前日の疲れ（宴）があるのか午前中は全く動きがなかった

『京介さん、遂に追い込みですね（笑）』

『まあ、上手く事が進めばの話だがな・・・』

『妙に興奮してきましたよ』

『そうか・・・指示通り頼むな』

数時間が立ち夕方を迎えた

京介と黒田はホテルの部屋の窓から交互に監視を続行していた時京介の携帯電話が鳴った

「天国にあなたへ一番近い島（京介着信音）」

電話の相手は辻谷だった

この電話も予定通りであった、ここまで絵に描いたように行動してくる辻谷に可笑しくなってきた・・・

吉田に渡した金が一万足りなかったという事と様子伺いである・・・
そう思い電話に出た

『お疲れ様です』

『お疲れさん・・・哀川』

『社長どうされました?』

『お前・・・金、足りひんやないか?』

「ほら来た・・・」

『間違いなく500渡してますよ』

『受け取った金は499や1足りんかったぞ』

『吉田とか言うあの猿が抜いたんちやいますか?ワシがたった一万円を抜いてどないしますの(笑)』

『吉田は抜いて無い言つとんねん』

『人は信用なりませんからね・・・』

『お前が一番信用ならんがな・・・まあ一万の件はいいわ・・・』

『あれやったら送金しましよか？』

『ええわ・・・それよりもお前、今関東か？』

『大当たりや・・・ジジイ・・・』

『地元ですわ・・・これから青山を再度押さえて更に金を引っ張るつもりです』

『おお・・・そうか・・・ほんだら青山によく言つといてや・・・追加金、準備出来んかったら殺すとな、ワッハッハ』

「口だけ番長が・・・」

『ところでワシが何故関東に？何かまだ行わないといけない事がありましたか？』

『いや・・・ないがな・・・この辺一带にお前の臭いがすんねん・・・』

『臭いですか・・・？』

『そうや・・・臭いや・・・』

『と・・・言われましても・・・地元ですが・・・関東入りした方がええ』

ですか？何にしても青山から集金を完了させ次第再度上がりませんが・
』

『いつ追加、持ってくるねん？』

『青山は01（北海道）に居ますので一度01へ飛ばなあきません
から・・5日間後くらいちやいますか・・青山が逃げよったら・・
もう少し掛かりますが・・社長はずつと関東ですか？』

さり気無く今後の所在確認を試してみた・・

『さあな・・準備できたら電話せえ』

『分かりました、足りない1万円はハゲから回収してくださいね社
長』

『吉田の事か？』

『はいそうです』

『あいつハゲてないやろ』

『では猿で・・・』

『おかしな奴やお前（笑）』

軽く吉田を馬鹿にしているというアピールを試みたが、辻谷は左程気にしている様子もなく笑っていた

『ほんだら・・・また連絡します』

『そつしる』

「ピュン・・・」

「5日間は関東に拘束できるやる・・・奴は金の亡者だからな・・・」

時間に余裕を持ってこそプランは成功を成し遂げる・・・

スピードも大事だが時間を無駄にしないのも大事である・・・

相手の心理に刷り込む 『時間と金・・・』

ただで手に入る金と思えば待つに決まっている・・・

辻谷クラスになればはした金ならば相手にしないのが普通ではあるが、奴の場合は違う・・・

抜ける相手であれば最後の1円まで抜き倒すのが奴のやり口だ・・・

闇金も手掛けている辻谷のせこさがこういう時に見えてくるのである・・・

奴のせいで人生を狂わせたもの自殺の道へと進んだもの沢山いたのが現実であった

だが・・・そんな人生しか歩めない人間に問題があるのであろう・・・と京介は思っていた

『どつでした？』

『500万のうち1万抜き499を奴に渡したんよ、その確認やつたわ』

『ぶっ！ウケル本当に面白い事を考え付きますね』

『500万と言う金額をただで手に入ると思うと1万でも少ないと不満に思つもんや・・・ワシならあまり気にせんが・・・辻谷はどうやらケツ穴の小さい奴の様だ・・・』

『しかし・・・チャレンジャーですね(笑)』

『まあな・・・』

『次の指示は?』

『次はな・・・』

京介はプランの説明を始めた・

『・・・』

辻谷、吉田が離れたところを狙う、使い物にならないような馬鹿でも居れば邪魔である・

別々で地獄を見せてこそ、この処刑に意味がある・

『なるほど面白いですね！』

『上手く行けばな・・・』

『では開始や』

『ブ・ラジャー！』

『・・・』

京介は昔世話になった警察に電話をした・・・

この処刑に必要な駒は警察でもある・・・

京介は噂と称し状況提供をし始めた・・・

『何故、そんな事を俺に教えてくれるんだ？哀川』

『前にあんた・・・捜査に協力して欲しい言うて電話よこしたやろが・
』

『そうか、助かる』

『ただ・・・噂やで・・・それはほんまかどうかは・・・わからん・・・』

『分かった』

用件だけを伝え直ぐに電話を切った

この伝えた内容とは「でっちあげ」である、警察の18番でもあるでっちあげをこちらでも利用し、それを真実にしてしまつたというものであった

黒田は京介の指示通り情報进行操作し始めた・・・

法の網目は意外と大きい・・・そこをついたものであった

警察は何でもいいから切っ掛けが欲しいものである・・・

それは、立小便でもとにかく理由さえあれば良いのである・・・

「ここから本番や・・・辻谷・・・ニヤリ・・・」

翌日・・・

吉田がホテルから出てきた、どつやら煙草の自販機へ向かっている
ようであった

「チャンスやな・・・」

奈美に電話をした

「プルルル」

『はい』

『奈美、吉田に電話をして適当に時間を稼いでくれ』

『うん！それよりさ今日泊まりに来て！』

『まずは自分の役目を全うしろ・・・そうしたら行ってやる』

『了解！簡単 簡単（＊、艸、）』

まずは最初に吉田を鉄槌は振り下ろされる事になった・・・

o

辻谷に日数を伝え、その間に黒田を使うプランが発動された

黒田には関東圏内でのある仕事が用意された、この仕事とは違法であり実に危険なものであった

勿論、黒田の身にも起きぬよう最大限のセキュリティで根回して行われた

その仕事は無事終わった、この仕事こそが今回の処刑に繋がるものであった

この仕事は全て吉田の名前で受けており、その背後には辻谷が居ると言つのが戦法に伝わっていたのである

この業界、疑いはしても辿る事がなかなかできない・・・まして辻谷のような存在になると現場クラス、中規模クラスの社長程度では雲

の上の存在なのである・・・そこを上手く利用していたのである

吉田や辻谷の名前は知っていたとしても、あつた事がある人間は実に少ない・・・

吉田を名乗る黒田が現場から辻谷に電話をすと言い京介が辻谷を演出する・・・

この安い手口で関東圏の現場を熟したのである

もし、辻谷、吉田がこの身に覚えのない現場で検察に追及されたとしてもしらばっくれるのは想定済みである

だが、大事なはこの事件ではない、身柄の確保が大事なのである

それが立小便でもなんでもいい・・・つまり捕獲する切っ掛けを作

ることでこのプランは大きく動くのである

『京介さん・・・今回のプラン難しいですね』

『そやな・・・下手だったら・・・お前がパクられるしな・・・』

黒田は数年前に逮捕の経験がある、故にセキュリティは最大で行われた

ここで黒田を抑えられると面倒な事になる、口を割ることはないにせよ駒が減るのは痛いと言う事であった

『万が一は飛べ・・・ワシが何とかしたるがな・・・』

『自分は・・・いいですよ、どうせ数ヶ月したら出て来れますもん（笑）ただ飯（無料）食ってきますよ』

『そう言う訳にいかんのや、万が一の為にガールズプランも用意してはいるが・・・どんな形にせよ必ず辻谷を葬る・・・』

『今後の流れは？』

『まずは吉田の捕獲・・・その後、辻谷へと進む』

『腕が鳴りますね！吉田とか言うゴキンは武闘式で良いんですよ？』

『勿論や・・・あのガキには社会のルール言つもんを教えなあかんから』

『多少、ガールズを手伝わせ吉田を誘き出す、そこで奴を拉致るんや』

『ニヤリ・・・得意分野ですのでお任せください』

『殺すなよ・・・それはそれで後々処理が面倒や』

『殺りませんよ、俺が可愛そうじゃないですか！（笑）』

『言っている意味がよう分からんが・・・半殺し程度で頼む』

『分かりました』

『辻谷はどんなプランで？』

『今は聞くな・・・流れによって指示を出す』

『分かりました』

ターゲットを吉田に絞り、拉致監禁を実行する・・・

その後、辻谷へ起こる悲劇と繋がるのか・・・それは本当に実践してみないと分からないというのが本音だった

物事がうまく運びすぎるの程・・・怖いものはない・・・

京介はそう感じていた・・・

o

プランは早速進められた・・・

辻谷のパシリで煙草を買い出た吉田へ着信・・・

奈美から吉田へコールである・・・その電話はこの様な内容で進められた・・・

「プルルル・・・」

『もしもし』

『吉田さんの携帯ですか？私のこと分かりますか真希ですけど（奈美の偽名）』

『分かるよ！あの可愛らしい真希ちゃんだね』

吉田は奈美の電話に食いついてきた・・・

そこで奈美にはこの間のお礼を兼ねて世間話をさせ、その後工口い方向へと話を進めるように指示を出していた

吉田は多少鼻息を荒くしながら、奈美の話を面白がり乗ってきている様であった

『真希は吉田さんみたいな人タイプなんですよ。吉田さんは真希みたいな子は・・・嫌ですか？』

『大好きだよ！フーかタイプだよ』

『本当ですか？』

『おっ』

『真希・・・2番目でも3番目でもいいから・・・吉田さんみたいな人に抱かれない・・・』

『マジで言っているの？』

『女の子に何度も言わせないでください・・・』

『ああ・・・ごめん・・・その願いなら叶えてあげれるよ』

『本当・・・会いたい・・・』

『いつ会う？いつでもいいぞ』

吉田は出来過ぎた話に何の疑念も持たずに乗ってきた・・・

一目惚れ、一番じゃなくてもいい・・・このキーワードが効き目があつたのだろうか・・・

話をリアルにするために用意した会話があつた・・・

『吉田さんはどんな下着が好みですか？真希・・・少しでも吉田さんに好かれないから・・・』

『うーん！いいね！真希ちゃん俺はね！バツクだよ！』

『持つてるよ？・・・色は？』

『色はね・・・そつだな派手なのがいいね』

『赤とか？』

『いいね』

『じゃあ・・・赤のTバックで会いに行く・・・』

『嬉しいね!』

『どんな体位が得意ですか?』

『体位?真希ちゃんとならどんなのでもOKだよ』

『真希・・・後ろから乱暴にされたい・・・』

『いいね!犯すみたいに?』

『うん・・・吉田さんの太い腕で無理矢理抱かれるようにされたい・・・』

『やっであげるよ!』

『なんか・・・吉田さんと話をしてるだけで・・・濡れてきちゃう・・・』

『俺も我慢できなくなってきたな!』

『今から行く・・・何処に行けばいいの?』

『そうだな・・・ホテルの部屋は不味いから・・・場所を変えよう』

『どうして不味いの？女の人がいるの？』

『違うよ、ほら・・・社長が同じホテルだからさ』

『あ・・・そっか・・・ならホテルまで行くから、それからどこかに連れて行って』

『・・・真希ちゃんはどこに居るんだい？』

『真希は今五反田』

『そっか、じゃあ近いな・・・すぐに ホテルの近くに来てよ、近くまで来たらまた電話をくれ』

『さっし』

『その間にうちの社長に上手い事言っってもらえるようにしてあげよう』

『楽しみ！』

『俺もな』

「ッピ。」

奈美からOKの指示が出た

吉田がこの誘いに乗るとは限らないが、通常の男ならばこんなに美味しい話に乗らない奴はいない・

奈美の容姿は、昔一世を風靡した「キョンキョン」にクリソツである。

・ 大概の男は奈美みたいな女をただなら抱きたいと思うものである・

そんな安い理論に食いつかない訳はない・・そういうプランであった

吉田は電話が終わると急いで煙草を購入して電話をし始めた・

恐らく煙草を購入した後、用事があるとか辻谷に連絡をしているの
だろう……

ホテルへ近寄らずその場でウロウロしながら電話をする吉田……

その間に黒田はホテルへと向かった……吉田の捕獲を実行するため
である……

予め、黒田とは打ち合わせをして互いの名前を違う呼び名で呼ぶよ
うにした

それもプランなのである

京介を「小野寺」

黒田を「山口」

一応、変装をしてターゲット吉田に近づくのである・・・そして呼び合う事がある可能性も含めて偽名を用意しておく、これが大事なのである・・・

目の前に辻谷が居るわけでも無いのにぺこぺこ頭を下げながら電話をする吉田・・・

目の前の言い女をどうしてもモノにしたい・・・吉田レベルの顔にはありつけないような美女・・・

親が危篤でも女を取りそうな勢いを感じた・・・

「」の田舎者が・・・」

ようやく電話を切りホテルへ向かう吉田

そこで密かに隠れ待ち構える・・・黒田

ホテル近辺で待機・監視を続ける・・・京介

それと同時に動く警察・・・

京介のタレこみ情報に警察が動き出していた・・・

先日行われた、黒田の関東の仕事の話吉田、辻谷に濡れ衣を着せ

た事件についてである・・・

警察の方では京介の情報通り、物的証拠があたり事件として動き始めていた・・・

また、その容疑者として「吉田」「辻谷」が浮上してきた

辻谷は捕獲すること自体が困難、現場に踏み込んで抑えたいのが警察の本音である・・・

そこを上手く利用したものであった

何も知らずにホテルへ戻る・・・吉田

ホテルは大きな通りから少し筋道へ入った場所にある・・・

その筋道は人気が少なく奥まった場所であつた・・・

「行け・・・黒ちゃん・・・」

京介から指示のメールが届いた

「ブ・ラジャー」

黒田は吉田に気付かれないように背後にまわり背中に突起物を付きつけた・・

『吉田だな？少し大人しくしてもらおうか・・』

吉田は言葉を発する事無くただ上下に頭を動かした

『いいか・・少しでも勝手な行動を取ったら大変な事になるぞ・・分かるな？』

「コクン・・」

吉田は頷いた

『携帯を出せ』

「・・・」

『早くしろ・・・』

更に背中に当てている突起物を強く押し当てた

吉田はポケットから一台の携帯を差し出してきた

『全部だ・・知らないとも思っているのか?』

更にもう一台携帯が出てきた

『よし、こっちに来い・・』

そう言い、暗かがりへゆっくり連れて行った・・

『手首を後ろに回せ』

「・・・」

『早くしろー！』

吉田は隙を見て逃げようとしている様であった・・・

馬鹿でもこの状況は普通ではないと感じるのである・・・

だが、そんなに黒田は甘くなかった・・・

言う事を聞かない吉田の膝裏に蹴りを浴びせ地面に膝を着かせ、その後背中を蹴り地面に押し付け腕を取り手錠を嵌めた・・・

手錠を嵌められたことで、吉田の顔つきは一気に変わった・・・

『警察だ・・・辻谷を囲っているな？どこに居る？』

『……』

吉田は口を割ることなく無言だった

「流石、辻谷の舎弟頭、そうでなくては困る・・・」

黒田は携帯を出した

『警部、山口です。吉田の身柄押さえました』

吉田の顔はどんと青ざめていくようであった

そして、一分も立たないうちに現れる、刑事 小野寺（哀川）（変装Var）

吉田は地面に顔を伏せるようにし顔を上げていなかった・

『こいつが吉田か、辻谷の場所は吐いたか？』

『まだです』

『吉田、しゃべらないとお前の罪が重くなるぞ』

そう言い、靴のつま先で肛門目掛けて思いっきり蹴りを食らわした

『ぎゃあああー』

バックスタイルのまま上に伸びそうになる吉田・・・

『辻谷の居場所を話せばお前の罪は軽くしてやる・・・言え、吉田！』

1759

そして吉田の、太腿 腹 にトーキック（つま先）を数回喰らわせた

黒田はそれ見て、吉田の髪を掴み地面に何度も叩きつけていた

『山口、どんな手を使ってもいい吐かせる』

『はい警部！吉田、そろそろ吐かないと大変な事になるぞ・・・』

『警察が・・・こんな事して・・・いいとおもっ・・・』

「バキッ！」

黒田の蹴りが吉田の顔面をとらえた・・・

『お前が口にしていいのは辻谷の居場所だけだ・余計な事は語るな・・・』

「・・・」

『そう言えば警部、吉田の携帯を押収しておきました』

『よし本部に伝える・一斉検挙だ・・』

『やめろー!!』

京介は吉田の携帯から警察に連絡をした

『五反田のとある・・ホテルの付近で吉田を捕獲。物的証拠もあり
(関東での仕事)早く来ないと死んじゃうよ(笑)』

『君は誰なんだ?』

『名乗るほどの物でもない・・・』

「ピシ」

そして黒田の元へ戻り言った

『山口警部、その電信柱に吉田を括り付けろ、今応援が来る』

『はい警部!』

吉田の顔の原型を留めていないほど酷い不細工面になっていた・

「やり過ぎやろ・・・これでは誰か分からんで・・・」

吉田を柱に立つように括り付けられたあと黒田はサンドバックの様に何度も乱れ撃ち始めた・

そしてうな垂れる吉田の元に行き言った・

『吉田・・・もう逃げられると思うなよ、社会にはルールってものがあるんだよ・・・』

そして、辻谷の部屋番号、関東での仕事の証拠物件、携帯電話をポケット吉田のジャケットのポケットに入れた・

珍しいタバコは没収した（辻谷のお使い品）

タバコを買いに出たと言う裏づけを取らせないようにするためである

こう言った些細な仕込が時間を稼ぐのも大事なのである

グッタリする吉田を放置し警察の到着を待ちながら

京介は昔世話になった刑事へ連絡し始めた・・

『辻谷の潜伏先を知らせる、すぐに迎えデカイ魚だ』

『本当か？』

『ただし、ワシからの情報提供だとは言わない事や・・もし言った
らお前の職務も失う事になる・・』

『脅迫か？』

『取引やないけ、もう既に辻谷の舎弟吉田は取り押さえられている頃じゃないか・・・早く行かないとな・・・（笑）』

『分かった』

その後、明確とまでは行かないが場所を伝えた・・・

「ピッ」

最初の電話では場所を明確に伝えていない為身柄の発見には時間が

掛かるだろう・・・

だが、この刑事には分かるようなニュアンスで場所を知らせた・・・
あとは警察の活躍を待つばかりであった

監視しながら何気にホテルのロビーを見てみると姉さんの姿が見えた・・・

「なんや・・・姉さんも一緒やったんか・・・」

姉さんとは辻谷の女の事である・・・

「吉田の帰りが遅いので様子を身に来たというところやな・・・」

『京介さん、あの女は・・・』

『辻谷の女や・・・』

年齢、20代後半　容姿はお世辞ではないが綺麗な方である・・・

姉さんはホテルの玄関を出て辺りを見回し歩き始めた・・・その方向の先には吉田が電信柱に括り付けられている方向であった

『ヤバイですね・・・警察より先に見つけられると・・・どうします？』

『うん・・・仕方無い・・・拉致れ』

『ブ・ラジャー』

再び、現場へ黒田が向かった・・・

o

辻谷の女、「通称 姉さん」の登場は予想外であった・

だが、確かにいつも金魚の糞のように辻谷にくっついて歩き、金を使いたい放題にしている・・・

ここで、女が一人増えたところでプランとしては特に支障はない・
・取りあえず拉致る事を指示した

姉さんは吉田の事を探してホテル周辺を歩き回り始めた、そして吉田の居る方向へ歩き出した

電信柱に括り付けられ血だらけの吉田の姿・・・

姉さんは慌てふためきながらも括り付けた紐を外そうとし始めた

舎弟、吉田は武闘派の人間、腕っぷしも弱い方ではない・

そんな吉田がここまでボロ雑巾のようにされている事に恐怖を感じていた・

『どないしたん？吉田！誰に誰にやられたん？』

『・・・』

吉田の口の中にはガムテープを団子状に丸め固めたものをぶち込んでいるので聞かれても思うように話せないのである

『直ぐに辻ちゃんに言つてあげるわ』

姉さんは携帯電話を取り出そうとした

『今や行け・・・』

『ブ・ラジャー』

黒田は背後から姉さんの口を押さえつけ羽交い絞めにした・・・

『警察だ！静かにしろ！』と黒田は言った

そして、帽子を被った京介が現れ・・・

『コイツも共犯だな・・・吉田、ご苦労さん』

『私が何したって言うのよ！！』

暴れはじめの姉さん・・・

『はい、公務執行妨害ね・・・』

そう言い、姉さんの腹目掛けて拳を振るった

「ドスツウ・・・」

『あがつ・・・』

その後、吉田に対してももう一発食らわし、その場を立ち去った

意識が落ちている姉さんを黒田が移動で使ってきた黒塗りのワゴン車へと連れ込んだ・・・

「予定外故仕方がない・・・」

人目に見られない様に車を急いで移動し後ろの席へと放り込んだ

吉田は気を失い、その一連の行動に気付くことはなかった

『どつしますか警部』

黒田は万が一を考えてだろう、未だ警察になりきっていた

『よし、山口・・・こいつ・・・寝てるみたいやから起こしてやれ、お前は寝ている女を起こすのが得意だろう』

『はい、得意であります。お任せください』

そう言うと黒田は姉さんのスカートをまくり上げた

姉さんは真つ赤なTバックを装着してた

『赤のTバックか・・・この中身が怪しいですね』

『そうだな・・・似合っていないな、身分不相応の刑の疑いがある調べ上げる』

『ブ・ラジャー』

黒田はガムテープを出し、姉さんの両手首を縛りあげ、その後口に貼りつけていた

逃走、暴言を回避するためであると判断した・・・（謎）

黒田は姉さんの体をすっかり調べ上げる為に上半身を裸にひん剥き
豊富な乳房を揉み調べ・・・

舐め調べを始めた・・・

その間、京介はホテルの監視をしていた・・・

辻谷が帰りの遅い二人にそろそろ気づくころである・・・

「プルルル・・・」

姉電が鳴った・・・

着信は辻谷であった、恐らく括り付けられている吉田の携帯も鳴っているであろう・・・

車内で振り返り、黒田の調べの状況を確認すると、既に上半身の調べは終わり下半身の調べへと移り始めていた

Tバックを脱がせ臭いを嗅ぐ黒田・

『やはり臭いですね、こいつは辻谷一派と断定します』

『・・・』

「なり切りもここまでくれば役者だな・・・」

黒田は徐にズボンを脱ぎ始め、自分の陰部に唾液をたっぷりつけた

『いつもすんません、警部 ニッコリ』

そう言い姉さんの中へと入り込んだ・・・

突然の挿入に姉さんは意識を取り戻し始めた・・・が・・・

「ボクウ！」

黒田は顔を殴りつけ、目にガムテープを貼りつけていた

今までに辻谷の腰ぎんちゃくのように着いて歩き、いつでも何処で

も良い待遇を受け、

生意気な発言、生意気な行動で辻谷一派の連中を我子分のようにしてきた・・姉さん

「暴力を与えられ、自由を奪われ、性的な虐待を虐げられる気持ちはどうだ・・・？これが今までのお前たちの罪の報いだ・・・」

過去に辻谷の指示より、家族をメチャクチャにされたもの・・・

命を奪われたもの・・・沢山いるのが事実・・・

やる方はいいが、やられた方は今後の人生に大きく左右し、深く傷つき嘆き悲しむ・・・

だが、相手が辻谷と分かれば、手も足も出ない・・・反撃をすれば逆に倍返しを喰らい、それこそ「死」を目の前に用意される・・・

『Tバック口に放り込んでやれ』

『はい!』

「己の汚物を味わう屈辱を味わうがいい・・・」

黒田は一度、陰部から自分の物を抜き、Tバックで姉さんの股間をぬぐいだした

そして口に貼っているテープを剥がし無理矢理、口の中へと放り込

み再びテープを貼った

『フィニッシュは・・・中で・・・すよね』

『そつだな、中を徹底的に調べる必要がある』

『ブ・ラジャー！...！』

『じゃあ、後は指示通り頼んだぞ』

『はい』

そう言いながら激しく腰を振る黒田……いや、山口警部補……
笑)

京介は姉さんの下着や衣類を持ち出し車から出た……

「女は衣類が無いと行動範囲が狭まる……実に簡単だ、男の世界に首を突っ込み過ぎるのが敗因やったな……姉さん……ニヤリ」

辻谷は連絡の取れない二人に何かを感じ、必ず次の行動に出る

恐らく、逃走を企てるだろう・・・ホテルのロビーを見ている限り
辻谷の姿はない・・・

また、吉田の呼び出し役で配備している奈美はホテルのロビーに張り付かせたままである

奈美から動きの連絡が入らない以上、辻谷はまだ部屋に居ると考えても良い・・・

「さて、辻谷・・・今回はお前の番や・・・」

o

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1394x/>

『真 公開処刑』

2011年10月28日11時12分発行